

---

# 迷宮経営マッチポンプ!!

よせ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

迷宮経営マツチポンプ！！

### 【Nコード】

N6042X

### 【作者名】

よせ

### 【あらすじ】

【蹂躪ファンタジー異世界ダンジョン系】。この作品は、“迷宮経営”を題材にしたストーリー物（多分）です。

つまり話の中心は主人公と彼に関わる【迷宮】の存在です。

・迷宮経営とか書いてるけど、実際そこそこしかしいです。寧ろ戦闘表現とかの方が描写が有るかも。というよりこの作品“経営”ではないような気がします。

・どちらかというと某“勇者が生意気だと思っちゃうようなポータルゲーム”の感覚に近いかもです。

- ・主人公がモテます。ちょっと登場人物が女性過多になりそうです。
- ・物語は主人公中心（の筈）ですが、別視点が多くなります。
- ・しかし蹂躪は有ります。 ・ 奴隷の存在が有ります。
- ・ヒロインの（ここ重要）寝取られは有り得ませんです。
- ・この作品は Arcadia にも掲載されています。 ・ 感想と一言でももらえると嬉しいです。

## 序章「01（前書き）」

この作品を見る時は、鶏の卵から雛が孵る瞬間を目撃するような感じでお読み下さい。

中から出てくるのは、ピヨノとか鳴きながら毛が生え揃っている雛ではありません。

なんかこう、分かっていたんだけど、期待してたのとは違う。そんな残念な気持ちになってしまう、そんな感じですよ。

注意！！

この作品には“地震”の表現が含まれています。それでもOKだという人だけがお読み下さい。

尚、津波などの表現、地震による落石や倒壊、またそれによる死者等の表現は一切ありません。あくまで迷宮を造る際に必要な表現です。

## 序章「01」

《ファンタジア》、と呼ばれる世界がある。

其処は近代科学の影等見え、代わりに魔術という奇跡が飛び交う世界。

緑が生い茂る大地に、広がる海の水平線。

澄みきった蒼の空に飛ぶのは巨大な翼を持った竜の群れ。

しかし、一見美しく見えるその世界にも、争いや悲しみは存在する。

動植物を傷付けるモンスター達。友や恋人との別れ。

そして“勇者”と“魔王”の存在。

《ファンタジア》に存在する大陸を縦に二つに分けた、その左側  
通称【魔界】と呼ばれる大地、その最西端に、とある魔王が統治する国が存在した。

その国の名は アリュテミス。

其処は数々の実力者達を屍に変える事となり、『禁断の境地』『混沌の巣窟』と呼ばれるようになる。

その名前は人間界の最東端にまで轟く事となり、人々の興味と関心を惹き付けた。

そして、その国の姿を知る者達はその国をこう呼ぶのだ。

地獄の入り口 【地下国家】と。

《造】の 値が一定量を超過したので  
が解放されます。 『カテゴリ 類』が “ 界人兼 ” から “ ” へ  
変 れました。 ルアキの により 『 の 約』が破棄され  
ました》

最後に聞いた声は、自身の肉親でもなく、自分の愛した人でも  
なく、無機質なもので。

( ん )

ゴトゴト、と言う音と共に、震動が身体中を伝わってくる。そん  
な床の揺れる刺激で、彼のぼやけた意識は覚醒した。

( …………… 此処は？ )

数度瞬き、周りを見ようと目を開く。

目を閉じていたのに対して、視界はかなり暗い。彼は無意識に周りを見ようと身を起こし、その動作で自身が床に伏していた事を認識する。

やけに、首辺りが重い。

彼は頭を掻こうと片手を持ち上げる。

直後、ガチャリ、という冷たい金属音がただけで腕は持ち上げられなかった。

何処かで聞いた覚えがある音だな。そう彼は思いながら、次に右腕に力を入れて持ち上げてみる。すると今度はジャラリ、という音と共に、もう片方の手も持ち上がった。

「……………?」

なんだ、これ。

段々と鮮明になってくる思考に乗せて、彼は自分の手首に詰められた物を認識する。そしてぞわり、と身体中に針を刺したような悪感が走り、全身に鳥肌がたった。

薄く輪郭が見える手首に付いているのは角を削った四角い金属に、そのまま穴を開けた様な無骨な枷。

両手の枷の内側には、それを繋いでいる鎖が付いており、暗闇の中 薄く蒼い光がたまに入る。周りが暗いので、恐らく今は夜天井にある、小さな格子窓から自身を照らす月明かりに反射して薄い光沢を見せる。

重たい腕を上下に揺らすと、それに合わせてチャリチャリと鎖が跳ねて音を出す。

手に付けられているのは紛れもなく、“手錠”。  
カチリ、と何かが填った感触。

「……………うあつ、  
！！」

これは、これは駄目だ。

何故だか分からない、けれど本能からの叫びに応えるように、彼は鎖を千切るために、腕を何度も左右に開いた。

見た目通りの重さがする枷は、自身の腕にかなりの負担を掛けるがそんな事は考えられない。今、彼の意識は、自身の手首に付いた手錠を外すことだけに向けられている。

( 外れるツ！ 外れるツ！！ )

無意識に今は夜だという認識から、なんとなく、こう、叫んではいけない様な気がして、それでも手枷の感覚から離れたくて。

しかし、そんな彼自身さえ分からない、混乱している彼の心を嘲笑うかの様に、手錠の鎖はチャリチャリ、チャリチャリと揺れるだけ。

どうやっても、外せない。

そんな諦めに似た確信が、彼の脳裏に浮かんでくる。

彼は堪らず腕を大きく振ると、今度はがくと首まで持っていたが、先程迄の首の重さは、手枷の鎖に繋がっている首輪だったのか、思考の中の冷静な部分が囁いた。

( うわっ、うわっ                      ツくそ！！ )

混乱しながらも彼は手枷を壊そうと、床に叩き付けようと腕を振り上げる。

直前。ガタンッ、と床が跳ねた。

「うわっわっ」

一瞬尻が持ち上がり、ガシャンと比較的大きな音を立てて、着地



する。

「あいてっ！ ハアツ、ハツ……ふうー」

ここで彼は比較的自分を取り戻し、自分が何処にいるのだろうか、という結論に帰結する事になる。

さて、此処は何処だろう。

ガタゴト。

跳ねる床に合わせるように、景色が前から後ろへと流れていく。耳を済ませば前方から誰かの話し声と、蹄の音が絶え間無く聞こえてくる、彼は恐らくこれは馬車だと結論付けた。

時は夜、というのは間違い無さそうなのだが、どうやら周りが暗いのは夜だけが原因ではないようで、自分達が一種の箱の様な空間の中にいるからだと分かった。

箱の造りは簡単に、立体の長方形の箱の天井に幾つかの格子窓が付いているくらいで、出口は不明。

箱の材質は壁の部分は分からないが、床は爪で引つ掻いた所、力リカリという感触を得たので多分木材、これは適当な憶測なので余り気にしない。

箱は比較的広く、歩く事が出来るならば、うろつろと大きく円を画いて歩き回れるくらいだ。

まあ歩ければ、の話だが。

(ちっちゃい子、一杯いるなあ……。てか皆子供か。大人何処だよー)

そう、彼が閉じ込められている箱の中には薄ぼんやりとしか見えないが、体格的にはかなり小さい、もしくはそれなりの子供達がいる。つまり、記憶を間違えていなければ十九辺りの彼より、かなり年下である子供達が、所狭しと座っていたり、体を横にして寝ているのだ。

しかも彼の隣に寝ていた子を見ると、自身と同じ様に手枷に首輪が填められていた。先程、振り回していた彼の手枷が当たらなかったのは不幸中の幸いだろう。

にしても、と彼は腕を組……。もうとして出来なかつたので膝に置いた。

馬車、箱、というよりは檻、沢山の子供、手枷に首輪、これはもう確定的だ。

( “ 奴隷”、ねえ…… )

そう、奴隷である。

しかも、現在進行形で何処かに直送中の。

ハルアキはふわぁ、と大きく欠伸を一つ。

彼の知る一般人ならばここで混乱や狼狽する筈なのだろうが、生憎彼は先程の手枷と首輪の方が何故だか衝撃的だった。

先程から、どうも感覚が麻痺している気がするな、と彼は思う。まあ、この際彼には興味の無い話だ。

カチリ、と頭の中で何かが填った。

(しかし、何でまたこんな所に……。そもそも、俺って……。えーと)

冷静になって、彼は自分自身の事を思い出す。

自分で自分を思い出す、というのも変な響きだが、実際にそうなのだから、仕方が無い。

名前、年、性別、趣味。

根本的な事を少しずつ思い出す内に、自身を確認する打って付けの方法があつたのを、彼　ハルアキは思い出した。

それは、自身の“証明書”。

「『ステータス』」

ハルアキがそう呟くと、彼の目の前に、半透明のディスプレイが現れ、同じ様に白い半透明の文字がその画面の上に展開されていく。彼が住んでいた世界の現代人ならばこのSFじみた光景に仰天したかも知れないが、生憎、彼は既にこの光景には慣れていたのでそこまで驚きはしない。

ただ、ああ、まだ使えたか、良かった、という安堵と、書かれている内容に対する不安、それくらいのものだ。

《『ステータス』

カテゴリー  
『分類』

“異世界人”

『称号』

『スキル』

【】

「……全く分からん」

自身のステータスを見て、一人ごちる。

けれども、目の前にあるそれは何も応えずに、無機質な文字を晒すだけ。

叩こうと手を突き出すと、その腕は半透明の画面を突き抜け、空を切る。

隠しコマンドはないかと思ったが、そもそも操作の仕方が分からない。

自分で出した癖に使用方法が分からずに放置され、それでも自身の目の前に表示されているステータスを見て、ハルアキはあれ、と呟いた。

（何で俺、こんな事を知っているんだろうか？）

そう、実はハルアキ自身、こんな機能を使った覚えがなかったのである。

しかし、使ったと言うことは使い方やその存在を知っていたわけであり。しかも、思い出したと言うよりは、感覚的に分かったという無意識なもので。

あれあれあれ、ハルアキの思考が疑問符で埋め尽される。カチリ、又一つ。

おかしい。前の世界ではこんな機能は無かったし。

（　　んん？　前の世界？）

前の世界、前の世界、前の世界。

不思議な響きで、その言葉が何処か思考に引っ掛かる。その詳細を思い出す為に、馬車に揺られながら、ハルアキは記憶を辿り寄せ始めた。

ハルアキ、人間。所謂ヒューマン。

太陽系第三惑星地球、日本生まれの十九歳。オス。  
趣味。読書、但し漫画等も含む。

学生。

ふう、とハルアキは息を吐き、手の指でトントンと膝の上を軽く叩く。

その目は自身のステータス画面から放れていない。

何かが有った筈。根拠は無いが、ハルアキはそう確信している。  
淡く発光する画面と睨み合いながら暫く記憶を辿り、これまでの少ない情報と合わせ、新たに分かった事は三つ。

一つ。どうやら自分は所謂記憶喪失らしい。

昨日自分が何をしていたかとか、最近日本で何が起きたか等が、思い出せないからだ。

二つ。ここはどうやら、異世界だという事。

格子窓から見えた、夜空に浮かんだ白い月。本来の姿を半分程間に飲まれたその数は、二つ。白い月と、蒼い月。

地球では有り得ない光景は、つまるところ、今ハルアキは地球とは別に存在する世界にいるという事を示している。

そして、操作や意味が分かっていない、この半透明の画面。

これに書いてある『分類』<sup>カテゴリ</sup>とは、要は種族を示すものなのではないのだろうか。

であるならば、ハルアキ自身が異世界から来たという事は、自身の『分類』<sup>カテゴリ</sup>が“異世界人”となっている筈であり、事実、彼のステータス画面にはそう表示されていた。

三つ。恐らく自分　ハルアキは、異世界に訪れた事がある筈だ。確証は、ある。

今はいつで、此処は何処で、何が起きたかは知らないが。先程の証明書や二つの月を見て、自分が感じた違和感が無さすぎるのだ。だがしかし、今この現状に繋がる事に関しては全く身に覚えがな

く、記憶にも無い。

つまり、自身はエピソード記憶を丸々失っている。と考えるのが妥当。

そうハルアキは判断する。

馬車に寝ている子供に聞いてもいいのだが、はつきり言って、涙が月明かりに反射して、泣きながら寝ている子供を起こす気にはならなかったし、腕に浮かんでいる痣や火傷等の傷を見ると、どうしても気が引けてしまう。

それに、自分を含めた彼等は奴隷になる身なのだ。高確率で暗い過去を背負っているのは間違い無さそうだし、今は間違ってもそれを聞く訳にいかなかったのである。

他にも理由はあるが、結果的にハルアキが馬車の中で、情報の塊である彼等に話し掛けることは無かった。

「んんー……………」

ハルアキが今唸っているのは、自身の『スキル』欄に対する疑問である。

自分の事が思い出せないなら、今分かっている事を掻き集めて、答えを導き出せばよい。

そうしてハルアキは考えた。

もし自分が、誰もが一度は夢見るファンタジーな世界に訪れたらどうするだろうか。

ハルアキが召喚された世界は、モンスターが蔓延るお花畑な世界だと仮定して、魔法や魔術とかもあったでしょう。

きっと自分は、その世界で戦闘をするかも知れぬ。なにより、異世界に来たのだから、何処かで読んだ小説の様に、何かしら特別な能力が有るのではないかという期待がないわけでもない。

ところが、ハルアキは自身の体内、外から魔力という非科学的なものは感じないし、身体能力も上がった気もしない。腕力等の身体能力は残念な事に、手錠を外せない事で既に証明されているし、寧ろ力が弱くなっている様な気がする位だ。

魔術が使えない？

身体能力は変わらない？

ならば、残る可能性はこれだろう。

そう、特殊能力である。

という訳で、ハルアキは自身の非力さを感じさせる哀しくも虚しい消去法を経て、大した根拠もないのに半確信に近い自信を胸に、自分は何かしらの『スキル』を持っていると考えたのだ。

因みに、この確信を構成するのに半分程、現実逃避や超能力等に対する期待が混じっていた事は秘密である。

しかし結局答えを絞っても、脳内に霧が掛っているようで何も思いつけなかった。ハルアキは口を尖らせながらうんうん唸るが、霧は当然の如く晴れない。正直言って、お手上げである。

(……………そういえば、眠る前は何してたんだろう)

ふ、とそんな事を思う。

同時、脳内に少しだけ掛っていた霧が晴れて、ハルアキは何か、分からないけど何かが思い出せる気がした。

自分が最後に見た光景はなんだっただろうか。何か、きっと大切な事をした筈なのに。

(……………何か、繋がりがあるのか?)

駄目だ、どうしても思い出せない。

ハルアキは大きいため息を吐いて、深呼吸。吐いた量に劣らない空気を口から肺に送り込む。

限界まで息を吸い込んだ後、口を閉じ少しの間呼吸を止めて、もう一度息を　今度はため息ではないものを　吐いた。思い出そう。

その一心で、ハルアキは必死に自身の記憶を探ろうとして

ガタンッ。

一度跳ねて、馬車が、止まった。

「起きろ、奴隷共」

そうハルアキ達に言い放ち、腹の出た中年男性に数珠繋ぎで連れて行かれた先は、先程と広さは然程変わらないものの、火が灯されている燭台が付いた明るい部屋だった。

霞んだ白の色をした壁には窓一つ無く、しかし廊下に接している面の壁は鉄格子。唯一の出入口である扉は、外側から鍵が掛けられ



ている。

その先、つまり通路を挟んだ向かい側には同じ様に鉄格子の壁が幾つもあり、燭台の光で照らされた其所には、ハルアキ達とは別に手錠が掛けられている人の姿。

ハルアキ達がいる場所は、果たして牢屋であった。

「……ない。これはない」

ハルアキ達を連れてきた奴隷商人は今頃、自分達の代金とやらを受け取っている頃だろうか。

そんな比較的どうでもいい事を思いながら、ハルアキは思わずため息を付いた。

彼の耳に入ってくる声は、同じ牢屋の中にいる子供達の、すんすん、やら、ぐすぐす、という泣き声ばかり。中には姉妹だろうか、抱き合う様に寄り添って、ポツポツと言葉を交していたり、十四五歳の少年が、同年代かそれより下の少年を励ましていたりという光景が視界に入る。そしてどう見ても、彼等の表情は暗く沈んでいた。

まあ、これから誰とも知らない人間に売られてしまうのだから、寧ろ恐怖や嫌悪を受けずに暗くならない方がおかしい話だ。

しかし、そんなおかしい人が、彼等の中に一人いる。

(思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ　　！！)

当然、それはハルアキの事である。

今彼を支配している感情は、己が奴隷になる恐怖や悲嘆等はなく、思い出したい事が思い出せない焦燥感と、このまま売られて奴隷人

生を歩むかもしれない不安。

馬車が止まるまで、正確には馬車が止まって現在に至るまで、ハルアキは自身の『スキル』や記憶を思い出そうとしているのだが、結果は見ての通り。まるで探し物が見付からなくて、当てもなく探した場所をもう一度探す様な感じで、ハルアキは悪循環に嵌っていた。正にど壺。

ハルアキ自身、人生は何事も上手くはいかないという事は分かっているつもりのだが、それ以前に知性を持った人である。

こんな今すぐ売られそうな状況から誰かが助けに来たり、地震等の災害が起こって檻から出られたり、一時的でも自身に秘められた能力（本人予想）が覚醒するなりのご都合主義が発生して欲しい。そんな事を心の片隅で密かに願わずにはいられない。

詰まる所、彼は所謂、下剋上コースに入りたいのだ。

（時間が……………時間が欲しい！）

せめてちゃんとした時間が取れば、何かしら妙案を思い付けられるかもしれないのに。と一旦思い出せない記憶を掘り返す事を止め、ハルアキは眉間に皺をよせて歯噛みする。  
が、その思いを裏切るように。

ガシヤァン。

遠くの方から、音が聞こえた。

「……………来たあ……………」

ハルアキはうんざりだ、という思いを込めて呟いた。

その原因は廊下の奥から近付いてくる足音と、ガシヤン、ガシヤンという重い金属が跳ねる音。

現実是非情である。

三角形の列を組んで、牢に近付いて来たのは三人の人影。

蠟燭の光で照らされた、先頭に立つ男の容姿は見た目なら、三十代程の年齢だろうか。ハルアキ達を連れてきた中年男性の様な肥満体型では無く、見るからに身体能力が高そうな体つき。両耳にはピアス、太い眉と額に走る横一文字の傷は、彼の敵めしい顔を際立てている。

腰には両刃の剣をさして、体には皮をなめした丈夫そうな防具を装備。そしてその下にあるチェインメールがジャラリと鳴った。

残りの二人、彼の後ろで肩で何かを担ぎながら沈黙し、佇んでいるのは見るからに護衛役だと分かる二人の男。

前屈みになっている全身は筋肉で覆われており、百八十は有りそうな中央の男性よりも、二回り程大きく見える。

顔には丸が二つ、四角が一つ、計三つの穴が空いている白い仮面を付けていて、首には外側に鋭利な棘を生やした太い首輪。片手に持った人の首より幅の広い円月刀が、蠟燭の光を反射して鈍い光を放つ。

「止まれ」

ガシャン。何も持っていない男の指示により、護衛役の二人に担がれていたそれはハルアキ達の牢の前に降ろされた。

それは金属製の巨大な鳥籠。

中身が見えやすい様に籠は縦の柵のみで仕切られていて、柵は天辺に近づく程アーチを描く。それが天辺で一つにまとまった鐘楼型のその檻には巨大な門が三つ、縦一列に掛けられている。

そして鳥籠は牢屋とは反対　つまり廊下側に音を立てて置かれ、上から順に堅固な門が外される。

「っし、次は……」

仮面をつけていない男性は、格子戸に取り付けられた錠を開け、門を外す。

そして乱暴に開け、衝撃が残る格子戸に腕を掛け、ハルアキ達を見周しながら、彼は見た目相応の低い声を出した。

「 “三番” 」

「 ……はい 」

ハルアキ達の視線が、一点に集う。

肩まで伸びた灰色の髪、蒼色の目。乏しい食事に困って細くなつた子供の体躯を持つ “三番” のプレートをつけた少年は、膝を抱えて座っていた状態から弱々しく立ち、男が待つ出口へ向かう。

正確には、彼の奥で口を開いて待っている、銀色の腹の中へ。

足の踏み場など殆ど無い牢屋で、灰色の髪の少年以外の子供達は出来る限り身を寄せて、彼が進む出口への道を開ける。

足に着いた鎖と、石の床の擦れる音。足を引きずるように三番の少年は歩き、ボソボソと掠れた呟きと共に牢から出て、護衛達が担いできた檻の中に入れられる。

その小さな後ろ姿には影が差し、全身で己の絶望を表していた。

「 運べ 」

少年を己の中へと入れた鳥籠が、二人の護衛に持ち上げられて動き出す。

牢屋の門が閉まり、再び錠が掛けられた。それにつられて牢屋の子供達も視線を落とし、暗く沈んだ空気が部屋の中に戻ってくる。

ぐずぐず、すんすん。子供達の嘆く様な、訴える様な泣き声の中、その中で唯一人　ハルアキだけが、彼等に連れて行かれて去っていく少年の背中を見えなくなるまで、静かに見つめていた。

どうやら、この奴隷売買はオークション形式らしい。

先程少年が運ばれた先、その奥の方から「　　貨でました！」や「三十二番様、千三百金　と　　銀　す！」と司会と思われる人物の声が薄く小さく、牢屋内に響く様に聞こえてくる。

「千五百金貨出ました！千五百金貨です！他に誰か　　！！」

悩んでいる内に、どうやら先の競売が終わりに近付いたのか、先程の男性が同じ様に護衛を引き連れてハルアキ達の牢屋にやって来た。

「六番、か……」

ハルアキの左胸についたプレートの表面を、カリ、と爪で軽く引っ掻いた。

プレートは金属を薄く延ばしたような物で、見た限りではきれいな円の形をしている。中心部分に大きく数字彫られており、その番号は六番。因みに学生の頃の出席番号は十五番である。が、はつきり言っってそんな事はどうでもいい。

どうでも良くない事は、プレートに彫られた数字を表す文字が、ハルアキの知っている文字だった事である。当然、彫られた文字は

英語や仏語、ましてや日本語でも無い全く別の体系のもので。

つまり、この世界はハルアキが来た事がある“異世界”の可能性が限りなく高いという事だ。

まあ、だからと言って何かしら行動を起こせる事は無く、結論としては何も状況に変化は無いのであるのだが。

(…………あれ？ これも今は然程重要じゃなくないか？)

焦りが、募り出した。

「次」

都合四回目、籠は再び、ハルアキ達の牢屋の前に降ろされた。

先程の子供の番号は“三”。自分が呼ばれるにはまだ時間がある。それまでになんとか名案を……。と考えていたハルアキに、ここで予想外の事が起きた。

「“四番”と“五番”。出てこい」

「……………おおう？」

ハルアキの口から、思わず変な声が出る。

どついう事だろう。いきなりの二人呼びである。

ハルアキが一人混乱する中、しかし誰も立つ者はいない。

「……………おいっ、早く出てこいー!!」

番号を呼んだのに出てこないのに焦れたのか、男性は苛立ったように怒鳴る。牢屋に居る少年少女達はビクリツ、と肩を震わせて身を縮込ませた。因みにハルアキも類に洩れずに、肩を震わす。

「あ、あの」

檻の中から少女が一人だけ立ち上がる。

彼女は先程まで抱き合う様に寄り添っていた少女の一人　恐らく、姉の方だ。

恐らく十四、五歳。背中まで伸びている薄汚れた金髪を持ち、肌が生氣を感じられない程青白い。彼女の緋色の瞳は美しく、思わず見とれる。しかしハルアキは見た。彼女の瞳に宿っている、諦観の意志を、絶望の色を。

「……す、すみませんが」

「黙れ。お前は五番だな？　四番はどこだ？」

姉、五番が男性に何か伝えようと口を開くが、男性の命令により思わず口を閉じる。

「早く出てこい。殴りたいのか？」

「ッ」

びくり、と彼女の肩が跳ね、彼女の双眸は怯える様に綴じられた。が、すぐに目を開き、力強く握り締めた両手を解くと、彼女は真横に三角座りしている幼い少女の肩を叩く。

「エル、立って。お願いだから……」

「……………うん」

姉妹が連れていかれ、数分が経った頃だろうか。

未だに記憶を思い出せないハルアキは、情けないが自分の頭では妙案は生まれてこないと諦めて、身の回りの情報収集をする事にした。

幸い、一回の間隔につき、十分程の時間がある。

足掻けるだけ、足掻こう。

ハルアキは立ち上がる。

鉄格子の間隔は、ハルアキの腕だけならば、優に通り抜けられたのだが如何せん、手首に詰められている錠によりそれは封じられている。足首も同様であり、頭部はそもそも入らない。

ガンガンツ、と二回程思い切って手錠を鉄格子に叩き付けるが、結果はどちらもほんの少しも凹まずに、ハルアキの腕が痺れるだけに終わる。

(腕がジンジンする……)

腕に詰められた手錠はそこまで大きくなく、精々三センチ程の幅を持った枷の様なものだ。鍵穴や繋ぎ目は見付からない。果たして一体どうやって填めたのが気になる。

鎖は精々十五センチ程度で殆ど開かず、しかも首輪にまで鎖がY字状に繋がっている。そしてそれがそこまで長くないので、腕が背中にまでやれないのが辛い所だ。



足にも枷が付いていて、此方は然程短くも無いがやはり制限されると中々辛い。

さてどうするかと考えて、ハルアキは一つ違和感に気が付いた。

(……………?)

妙に、静かだ。

いや、殆ど喋っている子供などいなかったのだが今はそう、その代わりに存在していた音が無い。  
何か違和感を感じて振り返ると。

無数の瞳が、ハルアキの事を見つめている。

ハルアキは、気付いた。

牢屋の中に泣き声や、鼻をすすする音などが、していなかった事に。

「……………す、すみません」

思わず謝ってしまうのは、元日本人の性なのだろうか。

二十四以上の瞳の重圧に耐えられずに、ハルアキは腰が引ける。

「お、おまえ……………な、に……………やってんだよ……………」

ずり、とハルアキを見る子供達の一人が、足を引きずり幽鬼の様に近付いて来る。

蠟燭の火に照らされた顔は、表情が失われていた。

「……………さい……………めん……………なさい、ごめんなさいごめんなさい、ごめんなさい」

何人かの少年少女が、体を丸めるように縮こまり、全身をガタガ

夕と震えさせて、齒の音混じりに謝り始める。

「え……。え、何これ」

「なっ、にやっつてんだよお前ッ!!」

ハルアキに近付いて来た子供　赤色の短髪の少年が、何が起きたか分からず混乱しているハルアキに掴み掛る。

その表情は、先程の無表情ではなく、怒りを露にしている様で。

一体何が、と呆然として立ち尽くしていたハルアキは、その力に何の抵抗も無く、そのまま押され、ガツンと頭を鉄格子に頭をぶつけてしまう。

ハルアキの目の奥が、チカリと光る。

後頭部にはしった痛みと衝撃に「ッてえ！」とハルアキは声を出す。

「ひっ」という恐怖を含んだ声が、誰かの口から漏れ出した。

掴み掛った少年はその手を放し、ハルアキはずるりと鉄格子の壁に崩れ落ちる。

「お前はッ！　お前はッ!!」

怒りで顔を歪めながら赤髪の少年は、痛みが走った後頭部に手を当てようとするハルアキ目掛け、手錠がされた両手を組んで振り下ろした。

「ッくぬ!!」

瞬間、ハルアキは両手を頭上に突き出し、自身の頭部を狙った暴力を掌で受けて防ぎ、その腕をしっかりと握る。

少年の両腕の肉に、ハルアキの余り伸びていない爪が食い込み、頭部に当たる寸前に、振り下ろした腕の勢いが止められた。

「ラアア!!」

即座に赤髪の少年は掴まれた両腕を振り回し、ハルアキの両手を払おうとする。が、ハルアキは勿論両手を放さないで、少年を抑えるために力を込める。

力と力の鏝競合い。

しかしたとえ運動が出来なくとも、ハルアキは十九歳。ならば見た目十四、五歳位のこの少年を抑える事など容易いもの。

「んぎぎっ……!!」

「はな、放せッ!」

の、筈なのだがこの少年、華奢な体をしているくせに見た目以上に力が強い。ハルアキが力を込めて掴んでいるのに、少年の腕がハルアキの手をほどこうと動かしている事がその証拠だ。

右へ、左へ、四本の腕が振り回されて、それでも放さないハルアキに、その腕ごとぶつけようしたり、鉄格子の壁に打ち付けようと暴れまわり、ジャラジャラジャラと、二人の腕輪の鎖と鎖がぶつかり合って激しいダンスが宙を舞う。

「このッ!!」

ぐい、と少年が腕を引き、自分の元へと近付けた。  
瞬間、ハルアキの両手が彼から放される。

「っ!?!」

“放れた”ではなく“放された”。

全力を込めて腕を引いたせいで、少年は軽くバランスを崩し、数

瞬の間がつくられる。

それをハルアキは見逃さない。

自身の両手の指と指とを組み、小さく固めて握り締める。そして組んだ拳は下から上へ、全力を込めて引き上げた。

ハルアキの狙いはバランスを崩して無防備になった、彼の顎を打ち抜くアツパー！。

ではなく、その手前。

ハルアキは少年の腕と腕の間に拳を通し、組んだ拳を鉤状に、力を込めて引き寄せる。

当然、少年の腕に填められた腕輪同士を繋ぐ鉄の鎖に引っ掛かり、そこでハルアキの腕は一瞬止まる。

が。

「オおりやあア！！！」

ハルアキはそこで止まらず、全力を込めて右回転。

足首に填められた鎖が張るまで足を開き、十の指に力を込めて。

腹に力を入れて声を出し、腰を捻って勢いを付けて腕に食い込んだ鎖を引っ張って。

結果、少年の華奢な体は引き摺られる様に投げ飛ばされた。

鈍い音を出して、少年はハルアキが背にしていた鉄格子に背中からぶつかり、「ぐうッ」と唸る。

そして倒れた彼にハルアキは跨り、両手で襟を掴んで彼の頭を持ち上げた。

「……ふうー。……えっ……と」

「放せよッ！ 重い、降りやがれッ！」

「そ、それは、ムリ」

息も切れ切れに、ハルアキは答えた。

ハルアキは身を退かして殴られるのは嫌である。自分はM属性では決して無いのだ。

乱れた息を整えて、少年を掴んだ両手を放さないままゆっくり下げる。

顔を上げて周りを見ると、先程の混乱は未だ収まっておらず、何人かは頭を抱えて脅えていた。

「……………」

それにしても、何でこんな事になっているか、やはり分からない。ではどうするべきか。答えは至極簡単である。

考えても分からないなら、事情を知っている者に聞けばいい話だ。と言うわけで早速、ハルアキは下を向いた。

「ねえ君」

「……………何だよ」

「何でこうなってるのか、教えて欲しい」

「……………はあ？」

変な目で見られた。

けれどもしょうがない。ハルアキ的にはここで致命的な何かをやらかしてしまったのならば、それはそれで対策を練らねばならないし、錯乱していた子供達にもちゃんとした謝罪をしたいのだ。

故に、原因を知らなければならぬし、その際に発生する年上層下に関する矜持など有って無いようなもの。多少口が上から目線なのは、理由も分からぬ内に暴力を振られたからとかでは決して無いのである。

赤髪の少年は暫し“何言ってるんだコイツ”みたいな言葉がただ漏れの視線で、腹の上を陣取っているハルアキの顔を見つめた後。

「……………え、はあ？」

やっぱり信じられないのか、再び奇怪な声を洩らした。彼の視線がハルアキの心に突き刺さる。

「だから、何で君が殴り掛って来て、他の皆は阿鼻叫喚してるのか。その理由を教えてって言うてるんだけど」

「……………まさかお前、何も聞いてなかったのか？」

「……………えっと？」

ハルアキは何かあったつけ。と脳内を探り、そういえば、と該当してそうな記憶を思い出した。

(……………確か豚野郎の奴が何か言ってたつけ？)

豚野郎とは、ハルアキ達を連れてきた中年肥満の奴隷商人の事、ではなくて、ハルアキ達をそいつから引き取った、もう一人の肥満体型の男の事だ。

出来物で膨れた顔。脂ぎっていた肌。豚のような鼻に、顎が沈む程の贅肉。奴隷商人と共に牢屋に連れていかれる最中に何も無い場所で転び、その腹癒せにハルアキ達の一人を殴った彼は、内面も外見に変わらず酷いものであった。

そんな彼は眉間に寄せて、豚のような鼻をヒクヒクと動かしてハルアキ達、及び他の 牢屋に入れられた人達に大声で何かを言っていたのを思い出す。

確か

『 いいか屑共！ もしも此処から出ようとしたら八つ裂きにして他の者達にも地獄を見せるぞ！！ 煩くしても同じだッ！！ いか、決して人間様に盾突くんじゃねえ塵共が！！』

ハルアキの記憶に因れば、こんな感じの事だった筈だ。そういえば、手に持っていた鞭でベシーンと壁を叩いていた様な

ハルアキは自分が何をしたかを考えて、今思い出した事を照らし合わせてみる。

(……………あれ？ あれこれ俺悪くね？)

さあ、とハルアキの額に冷や汗が吹き出て、顔から血が引き青ざめた。

ハルアキ達は一応商品の筈なので恐らくは単なる脅しだとは思うが、本当に八つ裂きにされるのならば終わりである。何せ自分のせいで此処の全員に罰を掛けてしまうのだ。ハルアキの心はそういうのに堪えられる様な造りはしていない。

考え事していて忘れていましたは言い訳にしかないし、実際、これは凄くまずい状況なのではないかとハルアキは焦り、思考を出来る限り回転させる。

しかし、この少年が殴り掛って来たのは確かにしようがないかもしれないが、それでもさらに騒ぎを大きくして受ける罰とやらが酷いものになるんじゃないか、という言葉は、心の内に仕舞って置く事にしといた。

とりあえず、謝ろう。

ハルアキは未だ組伏せている赤髪の少年と目を合わせて、頭を下げる。

「ごめんなさい。俺が悪かったです」

「……………ああ？ 分かったから退けよッ！」

「殴らない？」

「ふざッ……………分かった。殴らない」

「本当に？」

「殴らないって言ってるんだろ！！ この裏切り者が」

少年はむぎーとか言いながら、ハルアキに悪態をついた。

まあ、見方に困っては馬鹿とも裏切りとも取れる行動を取ったのでそんなに否定できないし、子供の言う事だからとハルアキは多目に見る事にする。

とりあえず彼の言葉を信用し、少年の腹から少し腰浮かし。

「おい、デイルクッ！ “四番”と“五番”を後にするように彼奴に言っとけッ！！ 先に“六番”を出す！！」

ガシャァン。

廊下の奥から、先程聞いたばかりの声と、金属音が聞こえた。

銀色の鳥籠の中に入れられ、幾つかの部屋を素通りし、ハルアキが連れていかれたのは競売ホールの舞台裏。そこは客席からは見えないように幕が下ろされ、何人かの男性が部屋をうろついている。

舞台裏の中心にハルアキが入っている鳥籠が置かれ、入れられた



本人はあぐらを掻いて座っていた。

「二千八百金貨！ 二千八百金貨と二百銀貨！！ 他に誰かいませんか！」

壇上に立つ、丸眼鏡をかけた細身の男性。指に填めた指輪が青く光り、その手に掴んでいる物は、杖にも見える細くて長い棒。

司会者だと思われる彼は、声を張り上げ客席へ呼び掛けていた。複数の声が飛び交い、それに合わせて彼の値段も吊り上がる。金額を告げる声は太い声や高い声など、男性に限らず女性もいるようだ。

「へっへ、あのガキはそろそろだな。もう少しで出番だぜ？」

舞台裏、ハルアキの後方から声が掛る。

上半身を捻って振り向くと、二人の男性がにやにやと嫌な笑みを浮かべて、檻の中で座るハルアキの事を見下すように覗いていた。

スキンヘッドと、濃い赤色の短髪。

身長はどちらも同じ位で、年齢はスキンヘッドの方が老けてみえる。ガタイはよく、どちらも腰に剣を差し、胸には鉄の鎧を装着していた。

舞台裏にいる人影は、ハルアキを除いて全部で五人。客の反応を見ている人が一人。舞台裏を片付けたり小道具を整理している人が一人。舞台裏に入る扉の前に木で出来た簡易な椅子に座っている人が一人。そしてハルアキの檻の周りに立つこの二人である。そしてへらへらと笑うこの二人を注意する者はいなく、またそれを止める者もない。

スキンヘッドは茶色の顎髭に片手で触りながらハルアキを観察し、にやりと笑う。そして此方から視線を外さないハルアキに、とある話を持ち出した。

「なあガキ」

「……………なんでしようか」

「お前、何で此処にいるんだ？」

ハルアキは一瞬きよんとし、スキンヘッドのにやついた笑みを見てすぐに顔を無表情に変えた。

成程、悪趣味だ。

要は暇だから、不幸話を聞かせろという事である。

触れたくない過去や噂、素性等は誰にでもある。その殆どが良い話ではなく、大抵は悪い方向の話に近い。そしてそれらが奴隷なら尚更で、しかし彼はそういう話を求めている。

他人の不幸は蜜の味。

対岸の火事を肴に、自分は晒う。

これを悪趣味と言わずに、何をいう。

檻の外側で此方を見るスキンヘッドの表情は、ハルアキが昔よく見た表情によく似ていた。

さてどうするか、とハルアキは考える。

どういふ話をすれば、彼等からより多くの情報を得られるか、という事を。

情報は得たい。これはハルアキが牢屋から出ても変わらない。寧ろ相手は大人なので、より正確な情報を持つている可能性が高いのである。

しかし単に話し掛けても相手にされないだろうし、可能性は低いが暴力が振られるかもしれない。故に、向こうから話し掛けるという行為は、ハルアキにとっては会話を繋げる数少ないチャンスなのであった。

このチャンスを逃さない為にハルアキは彼等が提示した話を繋げ、会話を弾ませる。その為には、今まで彼が聞いた事の無いような話

を話さなければならぬのだ。

しかし、今までに聞いた事の無い話とはなんだろうか。  
自らを売った。

親から売られた。  
友に裏切られた。  
拉致されてしまった。

こんなものは恐らく五万と聞いているのだろう。では何が  
。

知るか。ハルアキは思考を放棄する。元々こういう駆け  
引きは得意ではないし、喜ばせる事も癪に障る。

時間も無いし、どうせ一時の出会いだ。ハルアキは口を開いた。

「なんで、こんな事をするんですか？」

「んお？ 何言ってるんだお前」

スキンヘッドが殆ど無い眉毛をハの字に曲げて、隣で腕を組んで  
笑っていた赤髪は、吊り上げていた口の端を下げて顔をしかめた。  
だが、ハルアキは気に止めない。

「だから……」

「あー？ 聞こえねえぞ」

「ッだからなんで、人を売ったりするんだって聞いてるんだよ  
ッ」

ハルアキは多少自棄になって彼等に問うた。

今まで感情の表に出て来なかっただけで、いきなり自分が置かれ  
たこの状況に、憤りを感じなかった訳では決してないのだ。

だが、そんな事は彼等は知らないし、関係も無い。故に、反抗的な態度をとった“もの”に対する対応は一つである。

思ったより大きな声が自身の口から放たれた後、ハルアキは殴られる事を後出しながら気付く。しかし、予想された暴力は降っていない。

代わりに、ハルアキの頭の上に片手をぼん、と置かれただけ。

「はっ、そりやおめえ」

もう片方の手は赤髪の方に向けて制止を促し、スキンヘッドがハルアキの上に乗せた手を動かし撫でる。

気味が悪い感触。

ハルアキが頭を振り、放そうとした瞬間。彼は力を込めて、ハルアキの頭を掴んだ。

「ミシリ、という音が直接響いた。」

「あぐううう　　！！」

「お前等が　　」

頭蓋が圧迫され、骨が軋む。

神経が痛みを告げて、腕は無意識に頭を掴む彼の腕に。

彼は先程とは違う獰猛な笑みを見せて、ハルアキの頭を掴んだまま引き寄せる。

「　　高く売れる“物”だからだ、よ！」

そして、突き出す。

ガシャァン、と音をたててハルアキは檻の柵にぶつかった。背中と後頭部を強く打ち「かふっ」と肺に取り込んだ空気が抜け、咳き

込んだ。

「生意気なガキが。商品は黙って言う事聞けば良いんだよ。分かるか？」

よっ、とスキンヘッドは腰を上げ、両手を軽く叩いて払う。

そして咳き込むハルアキを見て「へっ」と鼻で笑う赤髪の方に振り向き、もう興味が無いとばかりに喋り始めた。

「まったく気分が悪い」

「ま、所詮ガキだからな。身の上が分からないっていうのはご愛敬ってヤツだな」

「ハッ、よく言っぜ。お前だって俺が止めなきゃ殴っていたくせによ」

「おいおい だっ」

彼等は振り向かない。

檻の方を見ずに、普段通りに二言三言。他愛の無い話で盛り上がり、そして話は自らの商売について。

舞台上立つ司会者の声は、最早指で数えられる人数しか番号を呼ばずに、競りは終局を迎えている。

商品番号“三”の売値を聞いて、思わずスキンヘッドは口を吊り上げた。

「こんなボロい商売が始められたのも、“勇者”様々だぜ。なあ？」  
「全くだ」

だから彼等は気付かなかった。

その言葉を聞いて、ハルアキの目が見開いた事を。

大陸の中心のから見て、中央に近く、西に位置する小国、リシユカ王国。

この世界で俗に言う魔界 否、“元”魔界側に存在しているその国の南方。バリアロロの森と呼ばれる森とは王都を挟んで逆に位置する平原で、第三回目となる奴隷競売、イスリッショ通称が開催されていた。

半年に一度行われる国内で最大規模の奴隷売買の催し。それは奴隷を国自体で公認しているリシユカ王国で瞬く間にを反響を呼び、周囲にまでその評判は広まる事となった。そして今回、ウルのみ第二週目の終わりに開いた《イスリッショ》では、王国でも有力な貴族の他、他国の貴族や有名人等が参加し、第一回、第二回目を上回る膨大な通貨の動きが予想されている。

そして今。《イスリッショ》の一つの特徴である、魔族の競売が行われていた。

「三千四百五十金貨と八百二十銀貨！ 商品番号“三”、魔族、魔族のオス」は二十三番様の落札で決定致しました！！」

ガンガン！

木と木を叩く音が、魔術を掛けたシャンデリアに照らされる会場内に大きく響いた。

プロセニアムアーチに縁取られた円形劇場。貴族達が座る階段状の客席からの視線を一齐に浴びたのは舞台上の上、正面から見て左寄りに立つ小振りの木槌を右手に持った細身の男性。

衿に銀色の小さな記章を付けた黒いスーツを身に纏い、白が混じった淡黒色の頭髪。目には丸眼鏡を掛けた彼は、外見に身合う若い声を出して、舞台上を歩く。

丸眼鏡を掛けた彼　司会者が進む先にあるものは、舞台中央に置かれた銀色の鳥籠。

ゲージの中には、子供が一人。敷かれたクッションの上に崩れる様に座っている。

商品番号三、と呼ばれた彼は先程、牢屋に入っていた時とは大分違う。

肩まで伸びている砂と土で汚れていた灰色の髪は水で洗われ少し輝いている様にも見え、同じく汚れていた顔には泥等付いていない。頬は未だ窪んでいたが、牢からここまでの間に水でも飲まされたのか、その唇は潤いを取り戻していた。

そして何より、その服装。

今彼の肌を隠しているのは、上下共に襤褸だった服ではなく、黒を基調とした大きめのドレス。赤いリボンに、白いフリル。そこかしこに付けられたそれは、その服のポリウムを一回り程倍増させていた。登頂部には黒のカチューシャ。これまた小さめのフリルで飾られている。両手には肘まで届く白い手袋を着けており、汚れが大分落ちた白磁の肌によく似合っていた。

蒼色の瞳は光を失い、伏せられた髪より濃い灰色の耳と垂れた尻尾はピクリとも動いていない。

しかしどうやら、彼を巡る競売は決まった様だ。

放射状に並んだ客席から、二人の人物が立ち上がる。

一人は女性。顔を隠せる婦人帽子に、豪華な飾りを付けたフレアスカートドレス。

一人は男性。光沢を見せる銀の鎧に、肩で止めた紅のマント。金色の糸で細かい刺繍がされている。

彼女達は舞台の上上がり、三番の少年が入っている鳥籠と共に客席から見て左側の舞台裏へと消えて行った。

そして、壇上から彼女達がいなくなり、残った司会者らしき男性が身を翻す。

「さあ、次の商品にいきましょう!!」

そう言った所で彼は一度口を閉じた。

そして、表情を変える。眉を八の字にして、目を閉じ、所謂「残念だ」と言いた気なものに。

「とりたい所なのですが、皆様申し訳ございません。商品番号“四”の『魔族姉妹』は此方の不手際で、少々時間が掛りますので、少々後ろの方に送らせて頂きます。どうか御理解して頂けるようお願い致します」

ざわ、と客席からどよめきが洩れたが、それもすぐに止む。中には「ふざけるな!」やら「いいから早く出せ!!」と文句を挙げたものがいたが、周囲の者達に抑え込まれていた。

《イースリッション》は未だ始まったばかり。ここで騒ぎ立てても興が削がれ、増々催しが遅れるだけであり、それすらも分からない馬鹿は当然、周りから排除される事となるのだ。

響動きが止むと「ありがとうございます」司会者は深く礼をした。そして勢いよく顔を上げ、大袈裟に腕を大きく開き、客席からは見



えない、舞台裏の方に顔を向ける。

それを合図に商品を入れた檻は、坊主頭の男と赤色の短髪の男に運ばれ、舞台の上に登場する。

運ばれて来たのは先程とは違う、黒髪の少年。

年は十五、六歳だろうか。身に着ている七分丈の黒ズボンと半袖のシャツから出ている肌は、特別に白くも無く、又痩せてもいない、いたって健康そうな体。

頬も窪んでいおらず、しかし彼の唇は、何かをボソボソと呟いている。

「商品番号“四”飛んで“五”！！ 『若い人間族、オス』！ 見た目もそこそこ悪くなく、五体満足、健康体！ 黒髪が多いヒノ国でも中々お目にかかれない純粋な黒髪黒目！」

檻が舞台の中央に降ろされる。それを確認した司会者が、魔族ではない少年の簡単な紹介をし、彼をかけた競売の開始を宣言する。

「それでは三百銀貨！ 三百銀貨から始めます！！」

ガンガン！

司会者が、手に持った木槌を叩いた。

と、同時。

かたん。

「……………？」

「……………お、おい、何か……………」

客席が、静まる。

かたかた、カタカタ。

配られたグラスの中身が、波打ち始める。

天井にぶら下げられたシャンデリアが、鳴る。

どよめきが、大きく。

「ゆ、ゆれてる……………?!」

誰かが、言う。

呟きだったその言葉は、百人以上は優に越える会場内に、恐ろしい程よく響いた。

混乱の捌け口を見つけた彼等は、確信も得られないまま、誰からも答えを返されないうまま、自身の不安を吐き出していく。

「ま、魔術なのか……………?」

「まさかそんな!!」

「誰だ! 誰の仕業だ!」

ガタガタ、ガタガタ。

揺れが大きくなる。

グラスが倒れ、注がれた葡萄酒が溢れた。

地に落ちた杯は高い音をたてて割れる。中身が敷かれた絨毯にぶちまけられた。甲高い悲鳴が何処かから上がり、又つられる様に複数の箇所から悲鳴が響く。

ギィッ、ギィッ。

鎖や縄でぶら下げられたシャンデリアが、振り子と化した。

「と、とと、とまれえ、止まれエ!!」

誰かが震えた声で叫ぶ。

だが、そんなものは無力に等しく。

徐々に、徐々に、揺れが、大きく。

既に何かに捕まらないとまともに立つ事さえ不可能。

誰かが、叫んだ。

「これは、“地震”だ!!!」

大地が、爆発した。

《ファンタジア》、と呼ばれる世界がある。

其処は近代科学の影等見えず、代わりに魔術という奇跡が飛び交う世界。

緑が生い茂る大地に、広がる海の水平線。

澄みきった蒼の空に飛ぶのは巨大な翼を持った竜の群れ。

そんな世界に、《異界大戦》と呼ばれる様になる、巨大な戦争が起きた。

【魔界】と【人間界】、自らの領土と国の存亡を賭けた戦争は“魔王”、“勇者”そして“異世界人”の存在が運命を分ける事となった。

《ファンタジア》に存在する大陸を縦に二つに分けた、その左側通称【魔界】と呼ばれる大地、その最西端には、とある魔王が統治する国が存在した。

その国の名は アリュテミス。

其処は数々の実力者達を屍に変える事となり、『禁断の境地』『混沌の巣窟』と呼ばれるようになる。

その国は人間界の最東端にまで轟く事となり、人々の興味と関心を惹き付けた。

そして、その国の姿を知る者達はその国をこう呼ぶのだ。

地獄の入り口 【地下国家】と。

それも、今は終えた話だ。

アルラ暦七〇四年。魔界に存在した最後の国 アリュテミス が無くなり、数多の国が潰えた《異界大戦》は、人間界の勝利で終結する。

それから三年後、アルラ暦七〇七年。

「うう………」

「……ああ………」

大陸のほぼ中央にあるリシユカ王国　そこで開かれた《イー  
スリツシヨン》の会場内に、呻き声が響く。

会場内は崩れていないが、先程の大地が破れたかに思われた震動  
は、荒事等に慣れている筈である護衛ですら肝を冷やし、また気分  
を酔わせる程であった。

それは当然、荒事を慣れない貴族達にとっては一層強烈なもので、  
中には泡を吹いて失神している者や、外聞を気にする余裕もなく、  
床に手をついて嘔吐している者まで見える。

「ぐううう………」

リシユカ王国の低級貴族の彼もその類に洩れず腰を抜かして、絨  
毯の上に倒れていた。

履いているズボンには股間を中心に染みを作り、それは絨毯にま  
で広がっている。

護衛の声が、耳のすぐそばから聞こえるが、右から左。気にする  
余裕など彼には存在していない。

「ひ、ひい……………」

震える腕で、自らが座っていた椅子に手を掛け、身を起こす。

ガクガクと、痙攣するかの様に、産まれたばかりの小鹿の様に力が入らない脚を使い、無理矢理体を持ち上げ、弱々しくも己の両足で、立つ。

そして、辺りを見渡した。求めるのは、出口の扉。

右へ、左へ。焦点が少しづつ合い始め、ぼやけた視界が回復する。

あつた、あそこだ！

それを見つけたと同時に、彼の足は動き始める。

ふらふらになりながらも、ブルブルと震えながらも、恥じも外見も気にせずに、何か叫びながら彼は走った。

後ろから誰かが何かを叫ぶ。彼の耳には入らなかった。

足の下から悲鳴が聞こえる。彼はそれを踏み抜いていった。

そうして、つんのめりになりながらも扉に向かい走って、走って着く。

すぐるように彼は扉にもたれ、体全体でぶつける様にした。

簡単に扉は開く、そして駆け出そうと一歩踏み出し 不  
思議な感触に、足を止める。

そして、気付く。

土の中から鋭利な牙など、生えていただろうか。

松明の光で照らされた外は、こんなにも暗かっただろうか。

まだ暖かくなってきたばかりだというのに、てらてらと光る赤黒い闇の奥から、生温い風が吹いているのは何故なのだろうか。

足で土を踏んだ感触はこんな、グニ、という、柔らかくも芯があるものだっただろうか。

そう、これはまるで先程の 。

「  
」

暗転。

大地の爆発の直後。

《イスリツション》の会場自体は先程の揺れでも大丈夫であった。が、しかし、天井のシャンデリアは幾つか地に落ちており、その際に護衛によって砕かれたのか、その破片が絨毯の上に散乱していた。

「  
皆様方!! 大丈夫ですか?!」

舞台上から、司会者の声が響き渡る。

四つん這いになった彼はしかし、右手に持った巨大な円柱テープの様な楯で、上から落ちてきた物を防いでいた。

幾つかの呻き声上がり、中には立っている者が出始める中。

「  
あああ! うわあああああ!」

と、一人の男性がおぼつかない足取りで、護衛役の者を振り切り

ながら、客席の最奥　　出口への扉に向かい始めた。

「ま、まで！！　おれを、私を置いてくなあ！！」

倒れている彼等の中から、悲鳴の様な声上がり、その人物もまた、出口に向かって走り始める。

理性による境界線が、決壊した。

一人、また一人と、次々と出口に向かう者が増えていく。気を失い倒れている者達など踏み潰し、木造の扉へとなだれ込んでいく彼等は宛ら、くもの糸に群がる亡者の様であった。

「ヒイツ、ヒイツ」

亡者の先頭に行く貴族が出口へ着き、もたれかかりながらも、扉を開ける。否、開けた筈なのだ。

ならば当然、その扉から見える景色は　　。

「……………は？」

呆けた声が、何処からか漏れる。

扉の奥には、外の景色など欠片も無かった。

それは、牙が生えていた。

それは、舌が伸びていた。

それは、涎を垂らしていた。

それは、異形の口だった　　！

「……………あ」

ばくん、と口が綴じられた代わりに、扉を開いた貴族の体が、片足だけを残して消えた。



パキバキ、ゴリ、グチュ、クチパキヨ、ガリコリ

。

一拍、静寂。

直後、爆発。

「ま、魔物だあああー！ー！ー！ー！ー！」

混乱が、会場内を埋め尽し。

「『<sup>オープン</sup>展開』」

舞台上、転がった銀色の檻の中で、小さく声が紡がれた。

ウル月の第二週目の終わりの日、ハルアキは都合三度目の生を迎える。

序章「01（後書き）」

奴隷 反抗。

要はたったこれだけです。わお。

初めにに浮かんだ事は、ああ、そうだった、という納得で、次に浮かんだ事は、どうしようという迷いだっただ。

確かに、ここで己の力を使えば、自分の命のみならず、自分と同じ境遇の彼等をこの場から救い出せるかもしれない。或いは、残虐非道な、主の下に使わせなくて済むかもしれない。“奴隷”という区切りから、脱却させる事が可能かもしれない。

だがしかし、その逆だつて有り得るのだ。

良い買い主に恵まれれば、その子は無事平穏な人生を歩めるといふ可能性。

己が直接手を出さなくとも、幸せになれるかもしれないという可能性。

それを自分の手で勝手に摘んでいいのだろうか。

それを自分の行動で変えて良いのだろうか。

解らない。分からない。

それに、彼等だつてそうだ。

中には悪い人だつている。どうしようもない屑だつている。けれど、善人がいる事には変わりはない。

悪人だけならば良い。しかし現状はそうでは決してないのだ。

自分の中途半端な力が恨めしい。

何故もつと、単純なものにしてくれなかったのか。

何故こんな、自分に選択肢を与えようとするのか。

自分の行動によって、先程見た子供達やそれ以外の命運が左右され、掌握される。それは則ち、彼等の命が自分の肩に乗るといふ事に他ならない。

誰かを見捨て、誰かを救い、誰かに頼られ、依存される。その重みを、少なからず自分は知っている筈だ。

けれど、だからこそ。

「 私は、誰もが笑い合える世間を作りたい。人間も、魔族も、手を取り合って、協力しあう、そんな国を。それが出来たら、世界でだって、きつと夢では無くなるから」

ふ、と思い出す。

頬を撫でる優しい風。

蒼と紅が混じりあった水平線。

元居た世界に劣らぬ太陽が輝くあの景色。

ああ、そうだ。

あの人は、ああ笑うんだっけ。

《『特定条件：失われた記憶』を満たした事により、スキル【迷宮創造】 モード：ファジー が解放されました。『条件：【迷宮創造】』を満たした事により、三年間分の魔力が追加されます』》

頭の中に直接響いた無機質な声。

空いた拳を握り締め。

唾は飲み込む。

顔を上げ、視線は前に。

そして 決断しろ。

「【迷宮

エゴでいい。

馬鹿でいい。

自分勝手でいい。

何を言われようとも構わない。  
自分は背負う道を選び、そして決めたのだ。

「 創造」

再び命を背負う、覚悟を。

《『モンスター生成区域』×4を選択しました。使用コスト250000p×4に加え、コマンド【クイック】によりコストが10倍されます。消費コストは100000000pです。》

【残P：305136888 295136888】です《

《『元イースリッシュ会場』をHPの指定オブジェクトからダンジョンオブジェクトに再設定します。魔力持続コストが0になります》  
《『特定条件：初回時に敵性反応が百以上+“称号付き”が一定数以上』を満たした事により、ユニークモンスター ゲルアトウル 蛇竜蜥蜴 が発生します。使用コストは0です。》

【残P：295136891 295136891】です《

《敵性反応設定を変更しました》

《『人間』スコア：518p』が加算されます。

【残P：295136891 295137419】です《

《『人間』スコア：188020p』が加算されます。

【残P：295137419 295325439】です《

ポーン。ポーン。ポーン。ポーン。

地震で倒れ、舞台の奥の方に転がった檻の中に、ハルアキはいた。自身の背中と銀色の柵の間に、元々底に敷かれていた薄いクツシヨンを挟み、仰向けになりながら目を動かして、目の前に表示されたものを必死に読み上げていく。

それとは別に、直接脳内に直接伝えられるのは、無機質な、というよりは感情が込められてない人の声。

淡々と状況を報告するそれは、人の命の終りを告げるには余りにも軽い。

スキル、【迷宮創造】。

これぞハルアキだけが持つ、唯一無二の能力だ。

このスキル、その名前の通り地球で言う【迷宮】を造り、その時に使う“コスト”によるが、それが十二分に足りるならば“個”で持つ能力として規格外の稀少性を持っている。

しかし言ってしまうえばそれだけの能力であり、ハルアキ自身の戦闘力にはたいして変わらないので、正直なところ余り戦闘面では役に立たない。然るが故に【迷宮創造】とは、前衛型でもなければ支援型でもない、籠城や耐久に関して言えば他の者より群を抜く、言わばその他タイプ 特殊型に分類される能力なのである。

生前からこのスキルのお世話になりっぱなしのハルアキだったが、今回使用する際に、多少混乱する事柄が発生した。

( 仕組みが、変わってる……？ )

そう、それは【迷宮創造】の能力の変化である。

【迷宮創造】は基本的に、ハルアキだけが見えるメニューウィンドウから項目を選び、その選択した項目から目的の物を指定する事により、その結果を現実反映させる、ある意味ゲームの様な操作方法である。

ざっと見たところ、この仕組み系統は前と変わっていないのだが、幾つか機能が増えていたり、選択項目が減っていたりと、メニューウィンドウの項目に目につく点が多い。

特に『ユニークモンスター』為る存在や、敵性個体の識別の操作がやりやすくなっている事、新しい項目が追加されている等が目立つ点か。だがしかし、ハルアキは沸き上がる疑問を棚上げし、それについて考えるのを止めた。

なぜならば、ハルアキにとってそれらの変化は、今はプラス側で占められていたからだ。

( これが モード：ファジー ってヤツの恩恵なのかねっ )

“変化”というよりは“進化”。

まるでハードが次世代になった様に、ハルアキのスキルは変貌を遂げていたのだ。

ハルアキは自分だけが見える、蒼白く発光する、大型テーブル並のインターフェースに目を向けた。

画面の上には様々なアイコンとウィンドウが乱立し、各々がかなりの速度で上へ下へとスクロール。画面表示を切り換えている。

( 『モンスター生成』 )

ハルアキがそう念ずると、画面の中央に新たな画面が表示された。白く発光するそれにあるのは、日本語で書かれた短い文章と、その下段にあるキーボード。

長方形のそれには『1』から『9』まで書かれたものと、『0』と『00』の二つを加えた十一のキーに『Enter』と英語で書かれたキー。計十二個で示されている。

《<sup>ポイント</sup>使用Pは？》

画面が表示されると同時に、キーボードより上段に書いてある文字を、感情の無い声を読み上げた。

それにハルアキは深く考えずに 即答。

( 五百万ッ！ )

《『モンスター生成』に5000000p投入します。四ヶ所に配置された『モンスター生成区域』にポイントがランダムに配分されます。》

【残P：295325443 290325443】です《

ポーン、という軽快な効果音に続いて、即座に音声が入力が状況を報告する。

と同時に、画面全体の右上に表示されている『ポイント残量』と書かれた、横に細長いウィンドウの示す数字の量が減る。

【294325443p】から【289325443p】へ。

ハルアキのスキル【迷宮創造】は、この数字 『ポイント』と呼ばれるそれを消費する事により、その効果を表すのだ。

つまりこれが無くなる事態が引き起こされれば、ハルアキは暫く何も出来ない唯の人間に戻ってしまうのだが、今あるポイントの量は十分過ぎる程。今この場で心配する必要など何処にもない。



《『人間』スコア：42463p』が加算されます。【残P  
《『人間』スコア：612p』が加算され 《『人間』ス  
コア：9135p』が 《『人間』スコア：3》

奥から聞こえる断末魔の叫びと共に、次々と暗唱される死亡通知  
それにハルアキは、ぐわあ、と胸を掴まれる感覚を覚えた。

罪悪感か、嫌悪感かは知らないが、心の底から沸き上がってくる  
それは、心臓の鼓動を強くする。

胸が苦しい。息が辛い。

心の中で誰かが叫ぶ。今読み上げられた彼等は、お前のせいで死  
んでいる 否、お前が彼等を殺している。

「……………つあ」

ひゅう、と口から息が漏れ、胸を掴んでいる腕の力が無意識の内  
に強くなる。

確かに、ハルアキは間接的に、又は直接、同じ知恵を持つ者や、  
同郷の者に手を下した経験は、ある。

だがそれは、全て追い詰められてやった行為であり、言うなれば  
自衛の為の行為。

しかし今この時この状況。ハルアキは本当の意味で自らの意思で  
動き、人をこの手で殺めている。

自分の意思で、相手を殺す。人が死ぬ。

己の願望の為の、犠牲者となって。

胃から、酸っぱい何かが込み上がる。

されど。

（その覚悟は 出来ていた筈だ！！）

ごくん、とハルアキは口にまで出かかっていた物を飲み込んだ。そうだ、自分は覚悟をした筈だ。

自分は、“正義の味方”や“勇者”何て大層な者ではない。唯の地球から来た一学生 “異世界人”である。

ハルアキは気を取り直し、腕で口元を拭う。

そして再びスキルを行使しようとして

「いや、だあああああああああ！！！！」

舞台裏の方から、悲鳴が上がった。

その声は男の様に野太くもなく、高くもない。そう、それはまるで子供のもの。

「 つ！？ 」

ハルアキは思わず動作を中断し、顔を上げる。

ハルアキが出てきた方とは逆の方向。

先程の鳥籠が並べられた舞台裏とは違い、片付けられたその場所は、魔術の光で照らされていたが誰の姿も見えない。が、しかし舞台裏の扉が外れて見えた廊下の奥。その曲がり角から一瞬だけ、白い何かが見えた 瞬間。

飛び出して来たのは、黒と赤。

ドゴンツ、と大きな音を立て、廊下の壁、曲がり角から飛び出してきた黒の塊が、赤の塊に叩き付けられた。

そしてずるりと黒の塊は床に崩れ、赤い塊は二、三步下がる。

よく見れば、黒の塊は洋服で、先の白い何かは手袋で。赤の塊は、

刺繍がされてある風に靡いた赤マント。

黒の洋服を着た子供の灰色の髪は赤く滲み、一方の赤いマントを肩に付けた銀色の剣士の腕には、キラリと輝く細身のサーベル。

あの二人は、先程の。

「あ  
！！」

そう認識した直後、凄まじい衝撃が、ハルアキの背中に走った。

《イーシリツション》開場に蛇の竜 ゲルアトゥル 蛇竜蜥蜴 が出現すると同時に、開場を中心とし、線で結べば巨大な正方形を画く様にしてそれは現れた。

ずっと、と何の変哲もない草原の大地が盛り上がり、まるで太古からそこに存在していた様な荘厳な雰囲気を持つは、縦横三百メートル超、幅十数センチ程の巨大な一枚つづりの白石の床。次いで平

面には何処にも凹凸がなく、裂目や輝が一つもないが、かといって加工された大理石の様な滑らかさもないその無垢な表面に、その枠一杯まで届く模様が、烙印の様に描かれる。

それは真円の魔法陣。幾何学的な紋様が数多にも刻まれ、不可思議な文字が円の枠に沿って内側に彫られている。空間が余った四隅にも同じ様な陣が現れ、それは石坂が現れてから数秒も経たずに完成した。

《『モンスター生成場×4』が完成しました》

《モンスター生成場『1』『2』『3』『4』に50000000pがランダムに配布されました。モンスター生成を行います》

誰にも聞こえない音声 flowed 直後、石の床に刻まれた魔法陣は自身に込められた機能を発揮する。

ぼう、と小さく発光。

上空から俯瞰出来たらさぞ美しいだろうというそれは、しかしすぐに不気味なものへと変わった。

淡く、蒼く発光する芸術が、ぽつぽつと何かに侵食され始める。大きいもの、小さいもの、形や大きさは様々で、それは蠢き、瞬間に魔法陣を埋め尽し、遂には白石の額から食み出した。

“その何か”は巨大な人の形をして。

別の“その何か”は小さな鳥の形をして。

とある“その何か”はドロドロとした液体で。

その何かは棍を手に持ち、短剣を持ち。

その何か全部、ハルアキの【迷宮創造】で作った『モンスター生成場』から這い出てきていた。

500pを使い、3000pを使い、8000pを使い、13000pを使い。

『モンスター生成場』は、自身に割り振られた【P】ポイントという糧を不規則的に消費し、次々にその陣から魔物を産み出し続けているのだ。

産み出されたモンスターはほぼ既存の生命体と変わらず、高度、とは一概には言えないが、ちゃんと独立した意思や思考を持ち一つの生物として産まれてくる。但し、彼等は各々が各々の容姿と特徴を持ち、生成される際に“侵入者の排除”を本能に刷り込まれ、その本能に従い行動を開始し始めるのだ。

故に、彼等はハルアキが無意識的にも“敵”と見なした者達にとり、生成されたモンスター達は牙を剥くのである。

魔法陣から沸き出てきたのは、人とは違う異形の軍団。魔物達は皆産声を上げて、獲物を探して石の床から去って行く。

そして既に産まれたばかりの彼等の中の一つの集団が遠く離れた獲物を見つけ、群れを成してとある一ヶ所を目指して疾走していた。

力強く四肢で地を蹴る彼等が見つけたのものは、獲物の臭いと血の臭い。

肉を千切る牙の間から涎を垂らし、血走る目を目的地に向けて彼等は駆ける。

目的地はそう、四方に現れた『モンスター生成場』の中心 別名、《イースリッション》開場へ。

「……………つうう」

「ひぐつ……、ひぐつ……」

《イースリツション》会場内、競売ホールの奥。其処にあるのは幾つもの牢屋が並ぶ『商品置き場』。先程まで悲痛や嘆きの泣き声で埋め尽されていた其処は、今は子供らしい純粋な恐怖や不安に染まった泣き声に変わっている。

「パドツッ！」

ハルアキが入られた牢。その中に震えた声で、されど己以外の者を心配する言葉を吐いたのは、ハルアキが連れていかれる寸前で組伏されていた赤髪の少年だ。

彼は牢屋の中で一早く先程の揺れの余韻から脱して、しかし鉄格子を掴んだままで振り向いて、皆の現状を確認する。

建物の作りが丈夫だったのか、幸い瓦礫等は降っていない。彼以外の誰も彼もが頭を抱え、震えるのを見、その中にいる自身の身内の姿を確認して少年は安堵の息を吐いた。

「おいパド、大丈夫か？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……  
ゼル兄？」

目尻から涙が溢れ、頬を濡らしながら赤髪の少年　ゼルの方を向いたのは、彼より濃い赤色をした髪を持つ少年だ。

煤けた頬に、クシャクシャな髪。頭頂部には、ゼルと同じ赤い耳狼の様な彼等のそれは、不安そうに垂れながらゆらゆらと揺れている。見た目ゼルより幼い、パドと呼ばれた子供は、不安そうな瞳で己の兄を見つめ、先程の揺れの恐怖からか再び涙が溢れ始めた。

「ああパド、俺だ」

「ゼル兄っ、ゼル兄……！」

もう一度、パドはゼルの存在を確かめる様に抱きついた。と言っても、二人には手枷が詰められているので、二人で寄り添う様にしただなのだが。

ゼルは一度、パドの両肩を掴んで引き離す。次に目線を弟の目と合わせて、真剣に話を切り出そうとした瞬間

「キシャアアアアアアアア！！！」

人外による咆哮が、廊下の奥から牢屋に届いた。

「ッ！！？」

その咆哮に、ゼルは思わず振り向いた。

しかし其処には何一つも無いただの廊下。

残念な事にゼルだけの幻聴ではないようで、向こう岸の牢屋側も同じく何人かが振り向いている。

疲れのせいで聴力が落ちた自身の耳に集中すると、微かにだが、檻に入れられた黒髪のあいつが連れて行かれた方から、何人もの悲鳴が聴こえてくる。

誰かの咆哮。叫び声。

硝子が割れた様な音に、連続した爆発音。

戦闘の激しさを物語る様に、僅かに地面が揺れている。

「ゼル兄っ……………この音っ!？」

「ああもう何だっただちくしょう!！」

ゼルは叫んだ。

自身の不安を吐き出す為に。

突然の揺れ、響き渡る悲鳴、怪物の雄叫び。

齡十四のゼルにとつて、この状況は余りにも不可思議過ぎた。

一体何が起こっているのか。弟の身の安全の心配と、未だ音が聞こえてくる戦闘への不安と、自分はどうすればいいかなんて疑問だけが大きくなって。

「に、ル兄さんっ！」

ぐるぐる、ぐるぐる。

確りと立っている筈なのに視界が、いや足元だろうか、とにかくふらつき、力が抜ける。

目に写る景色が回る。これは何だと認識出来ない。

ああ、ああ。

「ゼル兄さんっ！！！」

「うおおっ!？」

ガクンガクン、とパドに肩を掴まれ揺さぶられ、ゼルの揺らいだ意識が覚醒した。

あれ、何をしていたのだろう。と考えて、耳に入った悲鳴によって、そんな事はどうでもいい。と意識を戻す。

気付けば、ずん、と体が重い。

どうやら先程のせいで、今まで張り詰めていた体の緊張が解けてしまった様である。

カタ、カタカタ。と小刻みに揺れる小石や燭台を傍目に、ゼルは不安そうに眉を寄せるパドに視線をやった。

「すまん、ぼうっとしてた。で、何だパド」



泣きそうな声で兄を起こした弟は、今度は震えた声で兄に問掛け  
る。

「……兄さん、聞こえない？」

「何が」

、  
。

「……………？」

聞こえるんだ、とは続けなかった。

何故ならば、ゼルも気付いたからだ。

廊下の右側。其所からの戦闘音とは違うその音に。

、  
。

それはまるで、小さな地鳴り。

合わせる様に、小石や、燭台もカタカタと揺れる、揺れている。

まさか、とゼルは気付いた。

これはもしかして、とゼルは思った。

先程からの震動は先程の大地の爆発の余韻ではなく、聞こえてく  
る戦闘のせいでもなく、全部、これのせいなのではないか  
！？

で、あるならば 結論を求めて、ゼルは混乱する。

一体、これは何だ？

近付いてくる、これは何だ？！

「パドッ！！」

「兄さんっ！！？」



グチ、ガリゴリゴリボリ。

静寂の中に、固い物を噛み砕く音が、強く綴じられた牙の間から洩れ出した。

巨大な口が綴じられた事により、会場内にいた彼等は、牙を閉じて食べた物を咀嚼する化け物の顔を拝む事となる。

それは、蛇や蜥蜴を足して二で割り、ギザギザした、鋸のような竜の鶏冠を付けた生き物だ。

鈍く青色に光る爬虫類の鱗。

獰猛な紅を宿した野獣の双眸。

怪物は、その顔だけで人が何人も並んで入れる扉という額縁を埋め尽す。それは化物の全長が、正しく怪物級の巨体を誇る事を示していた。

「フシユルルルル……」

グチャア。

蛇の様な、蜥蜴の様な怪物 否、魔物は、醜悪な顔を歪ませ、まるで混乱の極地に突き落とされた彼等を笑う様に口を開ける。

閉じた口内に届まっていた息は、生臭い息に加えて、濃厚な鉄、死の香り。

魔物の紅い瞳が、ギョロリ、と動く。

上へ、下へ、右へ、左へ。ギョロギョロ、ギョロギョロと。

その目は、獲物を探しているのか、それとも何かを確認しているのか。

もつと別の

そして、吐き出された息を嗅いだ幾人かが、一拍の静寂を打ち破り、叫んだ。

「ま、魔物だあああー！ー！！！」

会場内の止まった時間が、再び時を刻み始める。

訪れたのは混乱の境地。

腰を抜かし悲鳴をあげ、尻から倒れ後退る。

自身の護衛にしがみつき、私を助けると泣き喚く。

阿鼻叫喚。この状況は、正にその言葉が当て填っていた。

だが、そんな場所にも動く者はいる。

「リシユカ国ザルバダ男爵一番隊騎士団隊長、ルクス・ハマーティア。参る！！！」

自身の存在を主張する為の咆哮。

混乱する人の群れから飛び出したのは一人の騎士。

腕と足を鎧で纏い、胸には模様が彫られた胸甲を。

肩まで届く金色の髪を腕で掻き上げ、気障な笑みを振り撒いて。

主に向かう脅威を払う為　というよりは、自分自身への恐怖と脅威を取り除き、自身の評価を上げる為に、彼は名乗りを上げたのだ。

「ハアツ！！！」

ドンッ、と足を強く踏み出し身を低く。

踏み出した衝撃により、ルクスの周囲の椅子が幾つか壊れ、その



扉の奥に隠されていた魔物の胴体は、頭部より細く長いものであり、言わば蛇の様な形をしていたのだ。

そして、その体を餌に向かって伸ばした。それだけのこと。結果、彼は宙から消えた。

否、消えたのではなく消されたのだ。

扉から顔を覗かせていた魔物の牙に噛み砕かれて。

ゴリ、パキメキコリ、グチュグチャ

ゴクン。

魔物の首が、口に含んだ物を嚥下しようとして上下に動く。

シユルリ、と口から這い出る蛇の様な 先端が二分されている舌が、物欲しそうに宙をさま迷い始める。

そしてガパリと口を開けて、たった今呑み込んだばかりの人間の鮮血を巻き散らしながら、蛇竜は吠えた。

「 キシャアアアアアアアアアア!!! 」

蛇竜の胴体が、ズルリ。動き始める。

「 うわあああああつ 」

「 !!! 」

「 助けてくれ、金なら幾等でも払うから、助けて 」



蛇竜の蹂躪を止める為、逃げ惑う群衆の中、一人が剣を抜く。

「ウエアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
ア　　！！！！」

それは己の心を昂ぶらせる為の咆哮。

手にサーベルを持った銀戦士。

腰に短刀をさして、腕に赤いバンダナを巻いて。

先程のルクスと違う点は、胸甲鎧の装飾と、肩に着けたマントの刺繍。そして、右手に装着してある小さな丸盾と、サーベルを持つ手が、利き手が左だという事だ。

この世界《ファンタジア》は利き手が右腕の場合が多く、比較的左利きは珍しいと見なされている。という訳で、彼と対峙する場合は、所謂左利きの戦い方のセオリーを学んで置かなければ、意外と苦戦する事は少なく無い。

つまり、左利きの戦士はそれだけで、一種のアドバンテージを得る事になるのである。

更には右手の鐙に付けた、所謂“バックラー”と呼ばれる小盾には、小石程の、赤く輝く石が中心に埋められており、それを強調するかの様に線模様で装飾された小盾は、並の物ではないという事を暗に語っている。

そしてサーベルにも、塚の部分に赤い石が埋め込まれていた。

『マジックウェポン  
魔術武器』。

《ファンタジア》では魔力を含んだ稀少性が高い『魔石』や、魔術を埋め込んだ武器等の総称であり、当たり前のように馬鹿高い。

勿論、唯単に高いだけではなく　まあ、ものにも寄るが、相当の恩恵を齎してくれるそんな武器を一つでも持っているという事は、その人物がかなりの資産を持つ、則ち強者であること示す一種の象





野性感覚と本能で、吠えながら近付いてくる餌を感知。

どうやら、針に等しい刃を振るってくる様だ、と推測し、瞬間的に行動を起こす。

蛇竜は振り下ろされたそれに対し、己の太く長い胴体を、数千数万を越える脊椎骨独特の動きを使い、餌が飛び掛つて来る部分だけを器用にくの字に曲げる。勿論、餌の方など見ずに。

当然彼の剣は空を切り、完璧に当たると思っていたのか体制を崩し、隙だらけ。

故に、反撃。

曲げたくの字から>の字に変える、向かって来た餌を弾き飛ばす為。

大きく撓らせた大木を解放した様に動いた胴体は、その実強靱さと柔剛性を兼ね備えた筋繊維で構成されており、やわな武器では鱗の下の皮一枚すら傷付かない。そして刺の様に尖っている。大蛇にとつての。小鱗は、己の体自身を凶器と進化させていた。

然るに、そんなものが隙だらけの体に直撃した後の末路は、推して知るべし。

「バグゆ」

蛙が潰れた様な音を放ち、ぐちゃりと蛇の鞭に打たれた餌はボールの様に吹き飛び、壁の方へと突っ込んでいく。

蛇の回避からの一撃、この間僅か一秒足らずの出来事であった。

蛇竜は飛んだ餌の後を追おうと首の向きを変えて、振り返り。

ソル・ザ・ジャベリ  
「『太陽の鎧』」  
ルク・ゴテアム  
「『変質：巨大化』」

直後、蛇竜の感覚器が魔力の反応を示す。

蛇竜の真後ろ、先程までの死角から、悲鳴でもなければ咆哮でもない、落ち着いた声が聞こえた。

「  
『ソル・サ・ジャベリ  
太陽の鎗』  
」

蛇竜が耳にした声の片方。

それは一ヶ所に避難した貴族達の集団の前に立つ、指揮棒の様な杖を振るう女性。

赤が混じった橙色の髪。鋭い目つきをした朱色の瞳。艶やかな紅い色のローブをその身に羽織り、走る事に適した皮のブーツを履いている。

女らしさを強調する体のラインに、可愛いというよりは強めの印象を受ける麗しき美貌。

リシユカ王国の祭典、《イスリツション》で働く一人　ベル  
ディック・パラニティアの詠唱の終りを告げる声に呼応して、彼女の手に持った杖『遮光輝紅』は強く輝き、その魔術を発動させる。

突如宙に現れた火が収束し、現れたのは炎の鎗。  
肌を撫でる熱を纏う鎗の色は、燃える赤。

全長二メートルと三十センチ、最大幅八十センチ。前方と後方に馬鎗のような形状をとり、底面が大きい方の尖端を、蛇竜の方に向いている。

彼女の周囲にそれが四本、宙に固定されて浮かんでいる。

「　　っいつきなあ！！」

声を張り上げ、同時に鎗が放たれた。  
ヒュポツ、と炎を巻き散らし、回転しながら突き進み、鎗は弓に  
射られた矢の様に飛翔する。

蛇竜はそれを身を動かし回避しようとして巨体を動かして　。

彼女の隣に立つ男の声が、遅れて届いた。

「『ルク・ゴテアム変質：巨大化』」

突如、鎗が変貌を遂げる。

炎の鎗だったそれは、蛇竜の胴にも負けぬ支柱の様に成り、目標  
をうがつ。

そのいきなりの巨大化に、蛇竜は身を捻る様に回転、動めく。

一本目　回避、胴体の下を通りすぎる。

二本目　回避、胴のアーチをくぐり抜けた。

三本目　かする程度の接触、蛇竜の表面のぬめりが蒸発、鱗が  
少し焙られる。

そして最後の四本目　　直撃。

「　　シイイイイイイイイイイイイイ！！」

刺さった所は目標のの頭部に近い脇腹。

擦れた悲鳴が蛇竜の口から飛び出して、空気が震う。

正確に彼の胴を射ぬいた炎の支柱は、その尖端を、目標の肉の中  
に打ち込まれ、自身の真価を発揮する。

ツ、ポツ！！

まるで深呼吸をするかのように周りの空気を吸い込んで、爆散。

標的の肉を穿ち、命を抉る為に使命を果たした炎鎗は、虚空に溶けた。

強靱と言えども、蛇竜の筋肉は内側からの衝撃に耐えられず、その幾らかが弾け飛ぶ。

そして体内で発せられた衝撃が向かう場所は当然　外。

「ギイイイイイイイイイイイイイイイ　　！！！」

化物の血は、人間のそれと同じ赤い色。

蛇竜の胴体が弾け、爆風により吹き飛んだ肉片がグシャリベチャリと地に落ちる。

抉れた肉から鮮血が降り、それを顔を上げ、目を開けて見ていた貴族達の幾人かがその反撃に歓声をあげる。

そんな中。

「あ、顔に……」

ぴちやり。

顔に掛った貴族の一人、腹が出ている男が突然、悲鳴をあげた。

「……ん………あつ、熱っ?!　　え、あつ。ああ、あああ

ああ　　！！？」

「どっし　ひいっ!!」

「きゃあああああああ！　服が、服が!!」

悲鳴に驚き振り向いた別の貴族の男が見たのは、悲鳴をあげた貴族の顔。触れるか触れないかで宙をさ迷う両手に向けられているのは左頬に異様に目立つ白い肌。

否、肌ではなかった。

白い肌の周りには、その男の赤い肉。何本も線が入った様に見える

るそれは、彼の苦しみの表情を描く為の横紋筋。

人体構造上、皮膚に覆われていて見えない筈のそれは、今や眼輪筋や口輪筋、咬筋までその姿を外気に晒している。

だが、彼には無い。

頬にある筈の頬骨筋が、彼の手に翳された左頬の上に、無い。

代わりにあるのは白い何か。

それはつまり。

「血に触れるなア！ 溶けるぞおおおおおおおおおお！！」

彼の、頬骨であった。

しかしそれすらも穴が空き、出来た小さな虫食いから覗かせたのはてらてらと光るピンク、彼の舌。

焼け爛れた皮膚。

焼け爛れた肉。

シユウシユウと肉が焼ける音と共に、何とも言えない脂っこい臭いが広がってゆく。

「あがあああああ！！ あ、あ、あつい、あついいいい！！」

蛇竜の血は、人間と同じ色をしていた。が、中身は違った。

化物と人間。通う血が同じ色でも、その質すらも同じである筈が、無かった。

一時の歓声から再び、阿鼻叫喚の地獄が舞い戻る。

そんな混乱の中、蛇竜の血が降る、降る、降ってくる。

会場の一ヶ所に固まる彼等が、このままでは血の雨に見舞われるのは間違い無い。

が、当然そんな事を見過ごさず筈がなく。

「『ウグルク・シールド  
形質変容：盾』」



血によって潤された喉から、擦り切れた  
まるで次はお前  
だ、とでも言っているかの様な声。

眼鏡の男には持っている盾を棒に、ましてや他の物に変える為の  
魔術を詠唱する時間の余裕など、無い。せめて出来る事はといえば、  
魔力の量に任じた身体強化による回避。そしてそれを使えば後ろの  
人間達は無惨な死を、餌としての死を遂げる事になる。

しかし、丸眼鏡の男にとってそんな事はどうでも良かった。彼は  
もし、後ろにいる貴族やその護衛達、彼等全員が死ぬ事になっても、  
別段気にはしない。

その結果はただ、彼等の国での信頼を失うだけで、残念だと思っ  
ただけである。

どうでもよくない事は彼　グリニア・パラニティアが愛する、  
唯一彼と血の繋がりを持った家族である姉、ベルディック・パラニ  
ティアに被害が及ぶ事である。

家族の繋がり、それは彼、そして同時に彼女にとって大切なもの  
である。

グリニアが今、後ろにいる人々まで防ぐ事が出来た盾の呪文を  
唱えたのも、貴族達の中にある護衛を使い、自分達に相対する魔物  
の勝率を上げる為にそうしたまでであり、この脅威が姉と彼等が別  
々に、そして同時に襲われたのなら彼は迷わず姉の方を選んだだ  
ろう。

だがそれはあくまで仮定の話であり、現在今この状況に於ては、  
姉が後ろにいるからにして。

つまり防がなければ、又は回避しなければならぬという訳なの  
で。ならば彼はどうすればいいのかという点。





「『身体強化』…… 『奥技：飛剣』！！」  
「『エアリアル・マレット』  
『衝風の大槌』」

それは先程とは別で、複数の声。

ポポポ、と蛇の周りに浮いた火の華が爆発する。

床から生えてきた木々が、蛇竜の体を拘束する。

斬撃が直線を書いて宙を飛び、強靱な筋肉を切り付ける。

空気で練られた巨大な風の塊が、蛇竜の頭部に振り降るされ、鎌首は地に沈んだ。

グリニアが振り向くと、先ず目に入れたのは姉であるベルディック。そして彼女の後ろには、幾人もの武装した戦士達。

ゴツイ鎧を着た巨漢、身なりが高級そうな女性、見た目騎士の男、三角帽子を深く被る少女、etc etc……。そして彼等の中の一人、ゴツイ鎧を身に纏う男がグリニアとベルディックを見て、後頭部に羽毛の装飾がされたがヘルムの隙間からにやりと笑う表情を見せ、口を開いた。

「ちよいと遅れたが、俺も手伝わせてもらっぜ」

「そうか。頼む」

グリニアは頷いて、それを肯定。

別にこだわる訳も無し。あの蛇竜相手には対抗する為の戦力は、大きければ大きい程いい。

「わ、わたしもよっ！」

「俺もだ、あの怪物はまだ死んでないだろうしな。それにアイツは俺の主を食いやがった、首を切つてやらなければ気が済まん」

「私も加えさせて欲しいのですが。【嵐風魔道】、称号付きです。足手まといにはなりませんので」

私も、俺も、と貴族達の団体から何人もの人が立ち上がる。大分精神が落ち着いてきまのか、彼等に大きな混乱の色は見られない。

「それに」と、初めに声を賭けた男が、ちらりと顔を横へ向けた。

視線の先は会場の二階。いくつかの席だけを中央部分に置いている。そして周りに控えているのはその護衛達。

彼等が画く円形の陣の中心、其処に座っているのは。

「国王に認められさえすりゃあ、大金星だからな」

男が笑い、それに幾人かが肩で反応する。

どうやら彼等もその考えであり、ちらちらと二階に目を向けていた。

リシユカ国国王、バースルダイグ・グリッドバルム・ゲッテ・ライル・セルグリウッド。国の王の仕事か、彼の趣味か、はたまたその両方かどうか知らないが、彼は《イースリツション》に参加をしている。

当然、今 蛇竜蜥蜴ノゲルアトウル に巻き込まれている人々の一人なのだが、何故か護衛達、近衛師団は動く様子がない。

それは恐怖で立ち竦んでいるからなのか、それとも。

「馬鹿息子」 だけには目を付けられないようにな」

「おーそりゃ嫌だ。そっちはお断り願いたいね」

グリーンアはヘルムの男に口を開く。

会話とは、熱くなり過ぎた思考をほどよく冷やすいい冷却材になる故に。

ヘルムの下でガハハ、と強く笑う彼を横目に、グリニアは二階に佇む近衛師団に視線をやった。

視線の先には、目立つ人物が二人。

「まあ、「異世界人」がいるから近衛師団に入るのは難しいんじゃないか？」

「ああ？そんなことア無いと思うぜ。逆にあいつらに目を付けられればこっちのモンだ。なんせ王のお気に入りだからな」

ヘルム男が地面に刺さったハルバードを両手で持ち上げ、重心を前に置くように腰を深くし、前傾体勢で構える。

「じゃ。先いつてる、ゼエ！！」

ゴシャアッ！！ という重い音を放ち、ヘルムの男は、全身を鎧で覆った巨漢とは思えぬ速さで蛇竜へと向かった。

グリニアはそれを見届ける、精々役に立ってくれと思いつつながら。

彼は再び後ろに振り向いた。

「グリア」

「姉さん」

其所には、最後の家族である姉の姿。

ベルディックはその目を震わし、ローブで包んだ腕を向かえる様に開いて自分より背の高い弟に近付き

抱擁。

肩の後ろに手を回し、顔を鼻先まで近付ける。グリニアも彼女を拒む事無く、片手を背中にやり抱き締め返す。

残る片手は姉の頬にやり、その柔肌を愛撫して。

さらさらと抵抗の無い滑らかな感触が、彼の堅く、分厚い皮を持

つ手に伝わった。

【陽光魔道】の使い手の姉と【変幻魔道】の使い手の弟。

【魔道】とは平たく言えば、それは魔術の道である。

必要最低限の魔力と才能があれば唱えられる基礎属性の“火”“水”“風”“土”<sup>スデージ</sup>や、それよりかは努力等がある身体強化の基本魔術の上にある段階、それが【魔道】。

【魔道】には様々な種類があり、各々が各々の特徴を持っている。例えばベルディック・パラニティアの【陽光魔道】。

この【陽光魔道】は、自身に火の耐性が付与され、基礎属性の他に“熱”や“光”等の新たな属性が加えられた“火”の魔術に特化された【魔道】の一つなのだ。

【魔道】と言うものは、その魔術を極めれば極める程、新しい魔術や属性の発現や、進化等の開拓が進み、それに伴い術者の実力も備わっていく。故に、大抵の【魔道】は基礎魔術とは比較にならない程にバリエーションが増えて、強力な存在なのである。

そして、【魔道】に選ばれ、魔術を習得できたり鍛練することを魔術師達は“魔道を歩む”と言い、魔道を歩まない者は、どんなに言い繕っても“魔術師”とは認められない。

“魔術師”は、基礎魔術が使えるればいいのではない。【魔道】を歩み初めてからが、一人前なのだ。

では、【魔道】とは自らの意思で選べるものではないのか？

答えは否だ。

【魔道】は己の道を歩む者を選別する。

つまり、どんな人物でも【魔道】に認められなければ、その【魔道】を歩む権利は無いし、歩む事は不可能なのだ。

これだけは、努力でも才能でも覆せない一つの事実として存在し

ている。

「 グリア 」

名前を呼ばれる。

見ると彼女はぶくう、と頬を少し膨らまし、表情が緩みながらも不満そう。

彼女の言葉の受け、自らの失態を悟ったグリニアは苦笑し、鼻先まで近付いた顔を更に近付ける。

その情景は傍から見ると、同胞はらからの家族の抱擁ではなく、まるで男女のそれであり 事実、正に彼等はそうだった。

「ごめんね、ベル」

「んっ」

唇と唇の距離が零になり、互いのそれが重なり合う。

一瞬、ベルディックは目を見開くが、それもすぐに恍惚としたものに変わり、合わされた口唇を、もつと、もつと、と強く求めて、自らの口を動かし始める

数秒だったろうか、それとも数十秒だったろうか。まるで離れぬ磁石の様に合わさっていた唇が放され、出来た空間に互いの唾液という蜜が混じりあつた糸が引く。

顔、いや、グリニアから見える胸元から頭の天辺まで全部がベルディックの髪と目と同じ様な、赤よりの橙色に染まり、彼女はそれを隠す為に愛する男の胸に自身の体を預け、彼はそれを確り支えた。

「……………ふはあ……………はあ……………。グリアは、ずるい。こんな事、されたら、許す、しか、ないじゃない。ううう……………」

顔を伏せながら、しかし背中に回した腕の力を更に強めてもごごと喋る。

グリニータは家族として 何より異性として愛するベルデ  
イックの頭を優しく撫でた。

「愛してるよ。ベル姉」

グリニータは優しく微笑む。

親が小さい頃に彼等を残して失踪し、泥水を啜りながらこの世界のスラム街で生きて来た。生き残ってBクラスの実力者まで上り詰めたパラニティア姉弟にとって、家族である繋がりには、大切なものなだけから。

混乱から抜け出してきた者達による反撃が、今から始まる。

蛇竜が出現した直後。

「おいおい……。どーすんだよあれ」

投げ出す様な、慌てる様な声はその空間に弱く響いた。

一匹の蛇竜により見る影を無くした《イースリッション》の会場の舞台裏。舞台に出す商品を待機するそこに、彼等はいた。

人影は全部で五人。そこには先程までハルアキと話していたスキンヘッドと赤髪の姿も存在している。

一、二、三……全部で五人の人影が、今や戦場と化している客席をこそりと見付からない様に除き見て、顔を見合わせ自分達がどう行動するかを悩んでいる真っ最中である。

当然だ。あんな化物に、自分達が叶う訳が無い。自分達の二倍の体格を持った魔物に相対して、逃げ出した経験がある彼等にとっては当然の思考の帰結としか言えないだろう。

と、言うより、既に彼等には答えが出ている。

彼等は本音を言えば、今すぐ背中を向けて逃げ出したい。勿論、あの魔物と武器を持って戦う事など持ったの他だ。

しかし、ならば何故逃げ出さずに彼等はいるのか。

それは、逃げ出したとしても、彼等の問題はその後であるからだ。もし、そう、もしも彼等の上役である『<sup>フェアバード</sup>赫炎の戦斧』のベルディック、『幻影』のグリニア　パラニティア姉弟や、《イースリッション》総取締役であるゴコルブが生き残った場合、果たして彼等は逃げた自分達の事を許すだろうか。

決まっている。答えは否だ。

彼等には即答出来る自信がある。何故なら、上司が“あの”ゴコロブだからである。

ゴコロブ・バルネ・アガルゴニッシュ。

見た目通りの金に貪欲な性格に、見た目からは想像不可能な商人



としての手腕。神は二物を与え無いとは言つが、彼の様になるのだつたならば、いつその事手腕を合わせて良い顔を与えて欲しいと言われる程の人物である。まあ、彼が奴隷というものに目覚めたから、今の彼等達がいるかい訳なのだが、そこは棚に上げておく。

#### 閑話休題。

パラニティア姉弟やゴコロブが生き残った場合。というのはつまり、パラニティア姉弟達があの蛇竜に勝利した場合である。

パラニティア姉弟は、自らの家族に危害が無いと判断すれば、許される可能性は高い。

しかし何度も言うが、問題は更にその上役ゴコロブの存在なのである。

彼は、自分を裏切った者を容赦無く罰する。それも、一思いに殺すのではなく、徐々に毒を盛る様に、裏切者の土地や財産等を全て奪い、絶望させた後に奴隷へと仕立て上げるのだ。

様々な商会にも太いパイプを持ち、それを使ってとある貴族を滅ぼした事件《ガルド侯爵の転落》はリシュカ国内外関係無く、余りにも有名な話である。

そして彼が今いる場所は、国王のいる二階中央。近衛師団の軍の内側。

それは、近衛師団に守られているのとはほぼ同義であり、舞台裏の彼等にとって、ゴコロブさん蛇竜に巻き込まれて食われてくれないかなー というある種最低な期待から限り無く遠い場所だ。

というより、彼は生き残るだろう。

これは直感ではなく、また状況を分析した結果でもなく、彼等の常識としての決定事項だからであった。

ゴコロブが死ぬという事は、つまりは国王も死ぬことである。しかしそれは彼らにとって有り得ない話だ。何せ一応は日常を送って

きた彼等にとって、一国の王が死ぬ事など有り得ぬ話であり、想像が不可能な話だからである。

王とは老衰や病等でしか死ぬ筈がない。それが彼等の常識で、また近衛師団にいる“異世界人”達の存在が、その証拠の無いそのの地盤をより強く固めていた。

以上を踏まえて考えれば、残念ながら答えが導き出されるのだが。

「やっぱり、あの蛇の所にいくしか……」

五人の人影の中の一人。

手に両手剣を持って震える男が声を漏らす。

が、彼の右隣にいる赤髪の男が、それに横槍を入れた。

「おいつ、ふざけんなつ。んな事すりゃあ俺達まであの魔物に気付かれるだろ！」

「はあつ？ んだよちくしょう、俺だけなのかよ。ああどうすんだよもつ……」

両手剣を持つ男が乗り出した身を、すぐすごと戻す。

次に口を開いたのは、赤髪の男の右隣にいる、槍を持った男性だ。

「……逃げるか？」

が、これにも赤髪の男が横槍を。

「いやいやいやいや、そんな事をすればゴゴロブの旦那に睨まれるだろ。逃げるなら勝手に逃げてくれよ」

ピク、と赤髪の男の言い様に、槍の男が皺を眉に寄せる。

「……………ジユダン、テメエさっきから否定ばっかしてるけどお前はどうかんだよ」

「は？　んなの時が来たら行動するに決まってるんだろ？　お前はどうかんだよ」

「……………っ」

行けば殉職、退けば野垂れ死。

どちらも早いか遅いかだけで、彼等は終わる。

正しく前門の虎、後門の狼　いや前門の蛇、後門のゴコロブだ。

「……………っじゃあ、どうすんだよ！！」

「俺に分かるかってんだ馬鹿野郎ツ！！」

二人が身を持ち上げ、睨み合う。

それをスキンヘッドの男が止めようと動いた所で。

「あ」

我関せずが如く蛇竜の事を観察していた最後の一人が呟いた。

直後。

どんっ！　ガシャガチガシャァン、ゴロゴロゴロ……………ころ

……………。

それは言い争いが殴り合いに変わろうとした寸前、舞台裏のすぐ横に凄い勢いで何かがどんっ、と着弾する。

比較的重量がありそうで、金属がぶつかり合う音を立てながら、それは赤髪の男と槍の男の間に到着した。

「なん　　っひ！？」

「あ……………ああ？」

それを目に納めた赤髪は息を飲み、槍の男からは怪訝な声が。

「……………う、うで？」

それは腕。柄の根本に赤の魔石を詰め込んだ剣を手に掴んだ左腕。輝が隙間無く入り、既に防具という役割が果たせない手甲に覆われた左腕は二の腕からの先が無く、まるで千切られたかのような断面からは、紅い水が流れ落ち、其所に小さな水溜まりを作り始める。しかしそんな光景はすぐに頭から弾き出される事となる。

「ヤバイツ、此方来るっ！！」

焦燥の叫び。

何が来るといつのか。

そんな事、決まっていた。

彼を含めた五人に戦慄が走り、逃げる為、生き残る為に行動を起す。

直ぐ様彼等は翻し、商品用の奴隷置き場へと繋がる扉へと急ぐ。赤髪が先頭に、しかし牢屋を開ける鍵束を片手に持って、ノブを掴み 回す直前、彼に天恵が舞い降りた。

「お、俺、いいこと思い付いたぜ？」

「おいイツ?! 早く開けるよテメエ!!!」

怒号が飛ぶ。

しかし赤髪は誇らしげに胸を張り、ふふんと鼻を鳴らすだけ。幸いな事に、未だ蛇竜は来ていない。

そして爆発音をBGMに、彼はにやりと笑った。

「お前等、忘れていないか？」

「ああっ!? なんだよッ?! 早くしろよ!!!」

殴る時間すら惜しい。

彼の後ろに並んでいた一人が、いいから扉を早く開ける、という苛立ちを隠さずに答えた。

だが彼はそれを無視。しかも諭す様に話始めた。

今は、それどころでは無いというのに。

「俺達はあの“用心棒”、呼んでくればいいんだ」

赤髪の彼は自信満々に言う。

“用心棒”、それは《イースリッション》に所属する人物の一人の呼び名である。

太い眉と額に走る横一文字の傷。厳めしい顔をした両刃の剣の使い手は、ゴコロブのグループに於て特別な位置に立っている。

ギルドランク“B+”彼の实力は折紙付きで、彼等が逃げ出した魔物と自らの得物が無い状態で対峙し、見事徒手格闘で決を下した事がある程である。

更には、彼の両脇に立つ二人の奴隷。彼等は“用心棒”の命令以外、何事も聞かない殺戮人形だ。

“用心棒”と二名の戦闘奴隷。この三人の増援をすれば、確かに罰は与えられないかもしれない。

しかも都合が良い事に、この扉の奥には彼がいる。

つまり彼の考えは、前門と後門の間に現れた第三の門。彼等に、光明が見えた。

「……と言うわけで、あの野郎を探すんだっ!!!」

「分かったから早くしろよおッ!!!」

「見付けて呼べばいいんだよな……？」  
「はやっ、早く扉を……！！」

既に涙目が一人、拳を握るのが二人、鼻を高くしているのが一人、  
そして呆れているのが一人。

とりあえず彼等の方針は決まった様で、彼は掴んだノブを回し、  
静かに掴んだ腕を引いて                   そして、扉が開いた。

バァンと、勢いよく、扉が開いた。

同時、風切り音。

「かひゅ                   ？」

ブチィ、と彼の首から、衝撃が走った。

そして驚きの声を叫ぼうとして、しかしひゅっひゅっとうと空気の内  
しかししない事に気付く。

視線を下に向ければ、そこには赤い噴水。そして、噴射口は己の  
首元。

「いぶっ………あえ？」

口に溢れた血を吐き、ふらあ、と視界が揺れる。

腕や膝に力など入らず、彼は操り糸が切れた人形が如く崩れ落ち  
た。

どしゃあ、と己の血で染まった床の一部に倒れ、先程の左腕と同  
様に水溜りが広がっていく。広がる波紋は、生暖かい。

痛い、痛い、痛い、何が、痛い、イタイ、いた                   何が、起  
きた？

ひゅうー……ひゅうー……ひゅ……う……。

呼吸が弱くなり、意識が遠のき視界が暗く。

フェードアウトしていく意識と視界でジユダンに届いたのは、仲間の悲鳴と、彼等に襲い掛る獣達の姿。

そして最後に、牙が並んだ獣の口が近付いてきて

「ガアルルアアアアアアアアツツツ！！！」

バキ、グチユ、ゴリン。

『いただきます』。

先程の咆哮が、彼にはそう聞こえた。

茶色の顎髭、スキンヘッドの男      バルベルト・ガッツチアーニ  
ーは狼狽していた。

実の所を言うと、彼は赤髪の男とは違う、しかし罰から逃れられる方法を思い付いていたのだ。

それは至極単純なものであり、また彼にとって安全性の高いもの。要は、同じ舞台裏にいた知り合い達が逃げ出した際に捕え、生きのままゴコロブに渡す、という、ただ単純に裏切った者を捕える、それだけのもの。

これならば、五人の中で実力が一番高いバルベルトで可能な策であり、それは簡単に来る事であった。ギルドランク“D+”、“

用心棒”の足元にすら及ばないものの、それでもバルベルトは彼らの中では一番強い。

それは、簡単。簡単だった筈なのだ。

しかし今、現実には彼の想像の範疇を越えて、言葉通りに牙を剥けている。

ガツ、ガツ、ボリュ、ブシュ、クチャ、クチャ。

止まぬ地鳴りの中、いやにはつきりと耳に入るのは肉を貪る咀嚼音。生暖かな空気と、鉄の臭いが立ち上り、一瞬で獣臭くなった舞台裏を満たしていく。

バルベルトがちらと横に視線をやると、そこには獣。

茶褐色の体毛に、項うなじから肩まで生えている立派な鬣。隆起した筋肉に覆われた四肢に、臀部に生えた三本の尻尾。どちらも先端に近付く程黒くなり、しかし指の爪は上質の刃物を思わせる程白く輝いていた。

しかしそれらは今、先程までバルベルトが捕える筈だった者の一人。赤髪の男だった人間の血の色に染まっている。

鉤爪が生えた足に押さえられているのは彼の胸。胸から先が獣によって見えないが、既にもう、彼はこの世にはいない事は確かである。

「く、くるなあ！ 来るんじゃないやねエ！！」

少し離れた所から怯える声。

おそらくは最初に蛇竜が来る時に声をあげた男のものだと思わせるそれは、しかしバルベルトが確かめる前に途切れ、代わりに新たな方向から肉が千切れる音が聞こえる事となる。

獣が赤髪の彼の喉笛を噛み千切ってから数秒、未だバルベルトを



覗いた二人の悲鳴が聞こえる事から、彼等は一応は生きてい  
う事が分かる。

しかし、バルベルトは彼等を助ける余裕等無い。

何故ならばバルベルトの目の前、彼の瞳が写すのは一匹の獣  
の口内。

凶悪な牙が乱立し、その間からはザラザラしてそうな見た目をし  
た赤い舌を覗かせる。中でも目立つ犬歯は、大きさが十五センチを  
越えていた。

そう、今彼は、扉の奥から現出した猛獣達の一匹に、組伏されて  
いる体制なのだ。

「グルル……ガアツ……！」

「おお、らあああ………！！！」

ギ、ガギ、ギ、ギ………！！

牙と刃の鏝迫り合い。

目と鼻の先に近付いた牙から垂れた涎が、バルベルトの頬を濡ら  
す。

バルベルトの命を繋いでいるのは、一本の短刀。

獣がバルベルトに飛び掛って来た瞬間に“己が持つ武器の中で、  
どれが一番早く抜けるか”、という無意識下で行われた咄嗟の判断  
による行動で、彼は獣の突進に被害を受ける事無く防いだのだ。

だが、それはバルベルトが一番後ろに並んでいたから可能だった  
事であり、それより前にいて、尚且つ彼よりも実力が無い四人は当  
然反応出来た筈がなく。バルベルトが獣に押し倒される前に見た光  
景は、お互い違う種類の獣に、バードの腕と、ベードの太い片足を、  
宙に飛ばされていたものだった。

「い、い、か、げん………！！！」

「ガアアアアツ!!!」

ギ、ギ、ギ、ギ、ギ……!!!

バルベルトが獣の牙を押し返し始める。

カチカチャカチカチ、柄と短刀の背にやった腕に全力が込もり、それを受けて短刀は牙と擦れ始める。

「しやがれエツ!!!」

腹筋で腰を浮かし、獣の腹に苛立ちを込めた蹴り。

その威力で獣の体が浮き、喉の奥から苦痛の声を涎と共に外へと漏らす。

一瞬の硬直。

それを逃がさずに、バルベルトは短刀から片手を放し、側に落ちていた物を拾い、振りかぶった。

「オ、ラアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

ドズツ、と手に伝わるのは肉を突き破る衝撃、感触。

口の中から根元まで刺さったそれは、確かに獣の体の半分以上を貫いていた。

人間ならば致命傷、いや即死の一撃。

だが、それでも。

しかし、それでも。

「……………ガアアツ……………!!!」

獣は死なない。

最早致命傷なる傷だとしても、彼にとっては即死ではなかった。

怨みを込めた瞳で見据え、一矢報いようと、獣は鉤爪の生えた腕



力尽きた獣は、バルベルトの上に被さる様に倒れ込み、その首から吹き出る鮮血が、バルベルトの頭を含めた上半身を濡らしていく。

「……………ハアツ……………ハアツ……………邪魔……………だ」

バルベルトは既に骸と化した獣をゆつくりとどける。というか、ゆつくりとしか体が動かせないのだ。

全身に掛っていた緊張が緩み、当てられていた殺気が虚空に霧散。忘れられていた疲れや痛みが、じわじわと身体中に広がり始める。

正に、満身創痍。

暫くは立ち上がれない程疲弊した彼は、落ちそうになる瞼を上げる。

ああ、静かだ。

バルベルトは、ほう、と息をついて、自身が生きている事を実感する。

今、彼の頭には、蛇竜の事やゴコロブの事等欠片も無く、唯々今の攻防で生き残った事に対する安堵で埋め尽されていた。

だから、彼は気付かなかったのだらう。

「……………ん？」

薄れた意識の中、耳に何かが入ってくる。

それを確認する為に顔を横にごろりと向けて

そこで数匹の魔獣が此方を見ているのを視界に入れた。

「……………ああ？」

獣達の周りを見れば、そこにはバラバラになった、腕、脚、胴。それはきつと、元は人だった四つの肉塊。槍は二つに折られ、所有者の血で濡れた両手剣は、肘から千切れて床に転がっている。

そうか、途中から悲鳴が消えていたのか。

バルベルトは今頃気付いた。とはいっても、すぐに気付けたとして、何が出来たのかというのか。

「……………はっ」

グルル、グルルル、ガルルルル。

バルベルトを見て、牙の間から涎を垂らしているのは全部で三匹。他はおそらく、舞台から客席に雪崩れ込んでいるのだろう。

「グルルルルルル……………」

彼等の目には仲間を殺された恨みや憎しみ等の感情は見えず、まるで自身を餌だという様な、楽な相手を見つけた様な、捕食者の目。

「畜生が」

その言葉は、誰に向けたものだったのだろうか。

獣達の跳躍。



## 序章「02」(後書き)

【295136888 295136891】の変化はミスではないです。

「……………っは、っは、……………っ！　くっ、はぁ、はぁ……………！」

足を動かし息を吸う。

後ろを見ないでひた走る。

立ち止まったら終わり、少年はそれを理解しているから。

「　ら、　　ない！！」

立てた狼の耳に、風を切る音に混じって背後から聞こえてくるのは女性の声。

逃げた自分を捕まえる、おそらくはそう叫んでいるのだろう。

チャリチャリ、と首輪に付いた鎖が鳴る。一方は首に繋がっているそのもう片方は、手に取る者無く宙を舞う。

（　　つかまって、たまるもんか！！）

少年は心でそう決意しながら強く地を蹴る。

ダンッ、と反動。より速い速度で景色が流れる。

彼は服は競売に出される前に着せられた、少々動くのには向いていない、フリルなどが付いた　所謂ゴスロリ衣装のままだったが、腕と脚には、彼の自由を奪う為の手枷と足枷がついていない。

檻から出され、奴隷としての烙印を押される直前に起きた大地震。それにより起きた混乱に乗じて『《イースリツション》商品受取り部屋』から脱け出し、先程までいた舞台会場までを繋ぐ道をプレート番号“三番”灰色の髪の少年　ジゼル・ライツァウィルトは走っていた。



“傷が残ると男娼としての価値が下がる”、という落札者の希望によって外された枷。それによって全力で走る事が出来た。が、しかし。

「 はあっ！ はあっ！ くう、ぺっ」

商品置き場から脱け出して僅か数十メートル。ジゼルの走る速度が瞬く間に減速する。

今やその速度は子供の早歩き程度、しかしそれが今の彼にとっては全力の速度。

ダダダダッ、と力強く動いていた足は既にトボトボと弱々しいものになり、痩せこけていてもまだ良かった顔の色は、真っ青になりつつあった。

上手く呼吸が出来ず、足が上手く動かない。口の中に痰とも唾とも分からぬものが溜まり、ジゼルはそれを廊下の脇に吐き出した。

当然だろう。此処に運ばれる前、碌に食事も満足に与えられず、長時間に渡って腕と脚に枷を付けられた肉体。そんな体で全力で走るうというものなら、すぐに体力は底を尽きる。

うぶ、と食道から胃液が込み上がる。

思わず目に涙が溜まり、動かす足が更に遅くなる。

そして、立ち止まる寸前。

（ いやだ！ ）

しかし、ジゼルはそれでも足を前へ。ぐつ、と地面を踏み締め、体を前へ。

“男娼”の意味なんて知らない、誰かの持ち主になる感覚何て知らない。

けれど、たとえ捕まってしまうと分かっていたようにと、あんな奴の奴隷にはなりたくない。それが彼の、本能からの叫びだった。故に。

ジゼルは下を向いて床を這っていた視線を上げる。その先には二つに分かれた丁字路が。

左に曲がれば先程の客席ホール。

右に曲がれば何処に繋がっているか不明の道で。

左に行った所で未来は無い、ならば行くのは当然

「お嬢様が、“止まれ”と言った筈だが」

掛けられた声は先程の、婦人帽子をかぶった女性の隣にいた男性のもの。

同時に、ピタ、とサーベルの刃がジゼルの頬に触れて、止まる。

ひゅ、とあれだけ乱れていた呼吸が止まり、心臓が一瞬停止した様な感覚に陥る。走って熱くなった体温が冷めてゆき、代わりに背後から当てられる“死”という恐怖で震え始めた。

その感触は地震の際に感じたものよりはつきりと分かる、分かっ  
てしまう。ジゼルが感じているのは 即ち、殺気。それも、濃厚  
な、達人が産み出すもので。

それはたとえ彼がジゼルを殺す事などせずとも、僅か十歳の子供  
にとつて、恐怖を与えるには十分過ぎて。

ガチガチガチ、ガチガチガチガチガチ。

歯が、上手く噛み合わない。

真っ白に染まった思考の中、顔は動かせず、体は震えながらも固  
まってる。

足先から、指先から、感覚が徐々に冷める様に無くなり、凍結し

ていく。

両者が動かないまま数秒　ジゼルにとっては数十倍に感じたが少年が着ていたフリルの付いた黒い服のが濡れ始める。股間部分を中心にして染みは広がり、周囲に立ち込めるのは軽いアンモニアの臭い。

「　　はあ、臆したか。情けない」

「！！！」

ため息と共に漏れた嘲笑は、ジゼルの真っ白に染まった思考に衝撃を与え、彼を屈辱と恥辱のどん底に叩き付ける。

「　　そんなに臆病だと、貴様はこれから先、地獄を見るだけじゃ済みそうにないな」

すう、と刃が頬に当たったまま、滑る様にゆっくりと動き、それに合わせて刃はゆっくりと、そして正確にジゼルの頬の皮一枚だけを切り、つつ、と赤い血が頬に垂れる。

不思議と、それに痛みは感じなかった。  
感覚という機能など、疾うに役割を失っていた。

視界すらも真っ白に成りつつあったジゼルを現実に繋ぎ止めたのは　　矢張り、背後からの声。

「ま、覚悟しておけ。“好きにしろ”と言われているんでな」

くくくっ、という不気味な感情が込もった冷笑。

それを耳にし、ぞわり、とジゼルは全身が震え上がる。ドレスの下に隠された尻尾が萎縮し丸まり、黒の力チューシャの横に生えた狼の耳は、濃い灰色の毛を毛を逆立てながらピンと天を指す。

駄目だ。此処には絶対駄目だ。

ジゼルは察した、ここで彼に捕まれば、死ぬより恐ろしい事になる、と。

ごくり、とジゼルは息を飲み、しかし前を見据える。丁字路まではあと十メートル有るか無いが、全力で走れば何とか行けるかもしれない。

それは別に、そこまで行けば助かる確証などない。寧ろ捕えられるのが関の山だ。ただ、もし、『万が一』。そう『万が一』の可能性が有るかもしれない、未だ夢から抜け出せない子供にとって、それは最後の希望なのだから。

ジゼルの右頬を伝うサーベルが、彼の揉み上げにまで差し掛かるうとした瞬間。

「お

ジゼルの背後から、男が驚いた様な声を出す。その理由は単純

ジゼルは、駆け出したのだ。

恐怖から逃げる為に、当てられた“死”という恐怖を脱け出して。

「……………おお、おおお

正に茫然、と言った体で、男は声を口から漏らす。

ジゼルが自身の当てた殺気から逃げ出すのを見て、一瞬右手に持ったサーベルを落としかけ　しかし確りと握り締める。その力は、先程よりも強く、ぎゅう、という音が柄から漏れた。

「……………い……………！」

男は左手を顔にやり、表情を隠すように肌を掴む。

ぶるぶる、ぶるぶる、と体が震え始めた。

左手の間から垣間見えるそれ。ジゼルの紡ぐ、タタ、タタ、タ、と弱々しくも懸命な逃走。いや“逃争”と言うべき行動は。

「……………く、くくくつ……………くくくくつ……………いい。いい。お前、すごく、凄くいいぞ……………!!」

しかし彼の嗜虐心を昇らせるだけで。

ぶるぶる、ぶるぶる、と彼の体は震える、それを表す感情は感喜、歡喜、驚喜、狂喜。

欣喜雀躍、狂喜乱舞　それを文字通りに再現したい体を抑え、リュシカ王国侯爵、ウリアネール・ツエル・エスナステインクの護衛、アズスルー・ダン・ガズドウロノフは、表情を隠している左手から、喜悦の笑みを覗かせた。

どくん、と全身に熱くなった血が巡る。

視界に捕えて放さないのは、よろよると走るか弱き背中。されど懸命に、必死に生きようともがく、小さな命。

いい、良いぞ、素晴らしい。

最高だ。アズスルーは笑う、これから自分がする事に対する楽しみで、晒う。

「……………よくぞ私の殺気から脱け出した、三番ンツツ！」

興奮により焦点が合わない視界の中、アズスルーはジゼルを見つめる。

あの少年は、生きようとしているのだ。

懸命に、力を振り絞って、全力で。

それはつまり、輝いているという事である。つまりは美しい、そ

ういう事である。

ああ、何て素晴らしい光景だろう。

ああ、何て勇気のある行動だろう。

しかし、お前が逃げられる事など決してないのに。

お前は夢を、見てはいけないというのに。

貴様が良い、今までに出会った事が無い最高品質の“臆病者”だと、彼は前を走る弱者に告げる。

生命が輝き、そして己が最も美しいと思えるその瞬間、アズスルーは最高の快楽を得る為に、それを完膚無きまで叩き潰す、その、宣告を。

「貴様で“楽しんで”やろう」

どれ、先ずは何をしよう。

背中から何十と刻んであげようか。

純白の手袋を赤に染めてあげようか。

その無垢な顔を恐怖と絶望で削ぎ切ってあげようか。

いやいや、あの素晴らしい足を細切れにしてあげようか。

いやいや、いやいや。

しかし、まあ先ずはとりあえず。

アズスルーは、腰にさした二本目のサーベルを、すらりと抜いた。地震で落ちた燭台から広がり始めた火を浴びた刀身は、キラリと輝く。

「けいこくは、したぞ？」

楽しみが抑え切れない歪んだ顔で、彼は足を踏み出した。

【狂気魔道】を歩みますか

『Yes/No?』

答えは

『Yes』。

「もう、何だというのかしらっつ！」

地震の後、護衛のアズスルーがいない『《イスリツシヨン》商品受取り部屋』で、リュシカ王国の貴族の一人、アズスルーが護衛している彼女、ウリアネール・ツエル・エスナスティンクは声を荒げて文句を垂らす。

幾つかに分けた金色の縦ロールに、白粉や口紅等の化粧した顔。恐ろしく美人、という訳でも無いが、そこまで可愛く無い、という訳でも無い。一番近い表現は優美な女性、と言った所だろうか。

そんな侯爵である彼女がご立腹なのは、自らが一枚と入っても彼女の家全体で見れば雀の涙程なのだが、はたいて競り勝った商品、奴隷番号“三番”が、地震が起きた際に逃げ出した事

ではなく、その時にウリアネールの着ていたフレアスカートのドレスを汚し、その上《イスリツシヨン》の職員から奪った焼き印

を入れる鉄の棒を使い、その一部を焦がした事である。

貴族にとつて服装とは、一種のステータスシンボルだ。どんな服を着、自身を高貴に美しく、又勇ましく見せる事は、己の家に対する誇りであり矜恃であり、大切な物なのである。しかもそれが女性ならば尚更の事で。

そしてそれを汚すという事は、自分だけではなく家に対しても泥を塗った事と同義に等しく、故にそれをした者　しかも自身が主である奴隷　に対する彼女の怒りは凄まじいものであった。

更に言えば癩癩持ちなので、ウリアネールの怒りは一瞬にして有頂天に達している。で、なければ彼女の連れてきた唯一の護衛である彼を、捕えに出すと言う指示などする筈が無い。

そういう訳で彼女は婦人帽子を床に叩き付ける程激怒していたのだが、

「アズスルー、遅いですわねえ……………！」

タンタンタンタン、足で苛立ちを表現し、持った羽扇子を口の前にもやりながら、金髪の彼女はぽつりと言う。

先程彼が部屋を出てから暫く　と言っても未だ一、二分程しか経ってはいない。

だけでも彼ならばすぐにでも回収して戻れる筈なのに、今だ帰って来る気配が無く、どうにも遅い。

まったく、何時まで遊んでいるのかしら、と頬に手を当てため息混じりに呟いて、じゃあ何して暇を潰そうかしら、と考えている途中、ひよこ、と視界に入ってきたのは《イースリッション》で働いている男だ。

名前は　何と言ったかしら？　と彼女は考えて、すぐにそれを止める。

（　ま、唯の猿一匹。憶えるだけで無駄ですわね）



でも、まあ、一応は聞いてあげましょうか。

そんな事をつらつらと思いながら、ウリアネールは彼の方を向く。

「何でしょうか？」

「え、あ、あのー」

彼は彼女の機嫌を伺う様にチラチラ見ながら、恐る恐ると口を開く。

「あのですね、さつき出てった旦那、もしかして……やられち」

「有り得ないですわね」

「え、いやでも、先程から向こう、舞台が騒がしいじゃないですか、それに」

「だから、有り得ませんわ」

一蹴。

この男は何も分かっていませんわね、と内心ため息をつき、これだから貧相な猿は、ともう一度ため息をつく。勿論、二度目も心内である。

彼女の護衛　アズスルー・ダン・ガズドウロノフが、たかが一端の魔族の子供に負ける？

残念も何も無いが、そんな事は『万が一』にも有り得はしない。

多少人間より身体能力が高いだけの者では、彼に指一本触れる事すら叶わないだろう。そしてそれは、例え何人もの敵を相手にしたとしても、結果は同じである。

彼女は彼の实力を知っている、その確固たる、純然たる理由を知っている。

さてどうしましょう、と考えて。

「丁度いい暇潰しです。説明して差し上げますわ」  
「……は、はあ、どうもありがとうございます」

へこへこと男は頭を何度も下げる、それを見て彼女はふん、と鼻を鳴らした。

「まずは、そうですわね、『エテロ・フォーマー旋風の纏人』。これが彼の特徴ですわ」

「し、『称号付き』……」

男の表情に驚きと納得の色が走る。

まあ、これぐらいの事は流石に知っているか、とは思いながら、ウリアネールは一度息を吸い込んだ。

“称号付き”。

《ファンタジア》に住む全生物に共通している『ステータス』。それに表示される『分類/カテゴリ』、『称号』、『魔道』の中の一つ、『称号』を天から授かり、手にしている者達の総称だ。

『分類/カテゴリ』、『称号』、『魔道』。

この三つの項目は、決して自分の意思だけでは変えられない。“天からの”贈り物の様な存在である。

例えばある人が、自身の『称号』を『豪傑の戦士』とでも豪語したとしよう。確かに、それで名前は広がるが、結果としてはただそれだけであり、決して己の『ステータス』の方の『称号』は変動しないのだ。そしてもし、その彼が『称号』を授けられたとしても、それはほぼ『豪傑の戦士』なんて、自分が考えたものにはなる事はない。『ステータス』とは、自身が歩んだ人生や、経験、才能、そして“天の上に住む者”で左右される。そういうものとされているのである。

そして勿論、この「ちゃんとした『ステータス』」の方の“称号付き”は、唯の通り名として轟くだけではなく、確かな恩恵をもたらしてくれるのだが、彼「アズスルー」にはまだ、四人組みのパティー相手に単独で勝利を収めた強さの秘密が存在する。それは。

「そして彼の『分類／カテゴリ』は“魔道剣士”ですわ」

ウリアネールはそこそこの起伏がある胸を少し張る様にして、その言葉を口に出した。

そもそも『分類／カテゴリ』とは、その人物の種族を示す項目ではない。

それよりもっと純粹な「己の中心。そう、その人物の“個”の原点、それにどれ程登りつめたか、どれ程近付いたかを示す物なのだ。

『分類／カテゴリ』が変わることを、人々は《存在昇格》<sup>ランクアップ</sup>と名称し、またその殆んどが素晴らしい物である。と、ある所は提唱しているのだが、それは何故か。

理由は《ファンタジア》ではその昔、神達が海を創り、大陸を創り、又生命を創造した、という神話がある事が原因だ。それが本当であるならば、《存在昇格》<sup>ランクアップ</sup>するという事は、自身の創造主「即ち、神に近付く」という事である。神に近付く、それは即ち成長するという事であり、そのどこが悪いというのか。

そしてその証拠を示す様に、《存在昇格》<sup>ランクアップ</sup>が起きた者は、己の原点に近付けば近づく程強くなり、体はそれに見合う物に変質していく。

とは言え、《存在昇格》<sup>ランクアップ</sup>をすれば飛躍的に強くなるのは間違い無いのだが、それを自発的に覚醒させるのは並大抵の苦勞ではないし、

非常に巨大な才能格差もある。

幾十年も一心に修行したのに、『カテゴリ分類』が『ランクアップ存在昇格』せず“人間”のままだったり、逆に一回の死闘で『ランクアップ存在昇格』する者もいる。その良い例が“魔王”や“勇者”だ。どちらも産まれてから『ランクアップ分類ノカテゴリ』が『ランクアップ存在昇格』するのではなく、殆ど、と言って良いほど先天的なもので決まる。後天的の“魔王”や“勇者”もいるにはいるが、それも極僅かである。

なので、『ランクアップ存在昇格』した彼の实力は素晴らしい人物という事が分かり、それを知ったともなれば驚愕する筈である。

「……………?」

……………のだが、おかしい。

目の前の男からは、全く驚きの色が見えず、“だから何?”みたいな表情をしている。

そして彼の何が悪かったかを思考して、ああ、とすぐに理由が判明した。

「貴方もしかして……………知らないのですね? これだから無知は……………」

「……………あ、はあ、何か、すいませ……………いやごめんなせえ貴族様」

やれやれ、という蔑む目線を彼に送り、もう興味が無いとばかりに彼女は視線を外す。しかし男の話は終わっていない様で、手を摺り合わせたままに口を聞いた。

「あ、あとう、貴族様……………」

「何か?」

「じ、じゃあさっきのガキの悲鳴は一体なんでしょう……………?」

「ああ、あれはですね」

「

先程の「いやだ」という悲鳴。おそらくはあの逃げた子供のものだろう、とウリアネールには予測がついていた。

可哀想に、と苦笑しながら思いつつも、指示したのは私ですが、実行しているのはアズスルーですし、ドレスを汚した報いですわと、溜飲が下がるのを感じながら、彼女は男に事実を再び視界に入れた男に教える。

「ミスタは、弱い者を“いじめる”のが趣味なんですよ」

「けいこくは、したぞ？」

その言葉が耳に入った瞬間、ジゼルは即、己の本能の警告に従い前に跳んだ。

直後、肌を撫でる様な風が吹く。

身を投げ出す様にして全力を出した彼は、髪がさんっ、と抵抗無く斬られた感触を得た後、そのまま受け身もとれずに腹から地面に強打する。

どんつ、と鈍い衝撃が腹を中心に広がり、思わず何も溶けていない胃液が込み上げ、それを少し吐いてしまう。が、ジゼルの判断は正しかった。

うつ伏せになった状態で、後方から禍々と感じるのは、先程の殺気ではなく、もっとドロドロとした、気持ちが悪くなる様な何か。

それを確認する為に腕を起こし振り向いて、ジゼルが視界に収めた光景は。

「ひいつ?!」

ジゼルは悲鳴を上げる。

彼の目の前に広がった光景は、背後の男。己の灰色の髪が舞う中、アズスルーが両手に持ったサーベルの刃が、壁の中に入り込んでいくというもので。

サーベルが通った跡には、ズタズタに抉られた痕跡だけが残り、原形を著しく破壊している。事実、彼の剣が入り込んだ周りの壁は、キュイイイイイン、と、静かに、されど確かな威力で、刀身に纏った斬風でサーベルの周りを綺麗に抉っていた。

それは乱暴に言えば鎌風のミキサー。

それは地球で言えば鉄にも勝る掘削機。

それが二振り、アズスルーの両手に一本ずつ掴まれていた。

【嵐風魔道】。

時に春風、時には嵐。

それは気まぐれ一つで姿を変えて、強き意思にて形を変える。

時に刃に、時には槌に。

嵐と共にする彼等は、その嵐の目と成るつ。

アズスルーが行使したのは【嵐風魔道】の一つ、エアリエ・アームド  
エンチャント『斬風の纏』。

それは己の剣に風を纏わせ、触れる物を切り裂く付加魔術。術者のイメージや魔力によって形状は多少代わりはするものの、そう簡単にはアズスルーの様にはならない。のだがしかし、これではないのだ。

先程の覚悟など吹き飛ばされ、瞬間的に彼の感情を、形容したが何かで覆い尽したのは、これではないのだ。

アズスルーは腰を抜かして後退るジゼルを見、グリーンと顔を動かさず口を開ける。

「避けるなよ？ もうよけなくていいんだからな？」

ジゼルが悲鳴を上げた原因。

それは、彼の目。

アズスルーは好青年の顔を変え、何でジゼルが自分の剣を避けたかが、まるで理解出来ない様な表情を浮かべてくるその双眸。

闇より明るく、紫より暗く。

赤と緑が混じり合い、それに愉悦と快楽を加えた瞳の色は、正に狂気を宿したもので。

アズスルーはサーベルを壁から抜き、次に天高く振り上げる。廊下の天井に剣の先端から伸びた鎌風が当たるが、そんなものは存在していないと言う様に、滑らかな動きで、指し足る抵抗も無く天井の壁を抉っていた。

そして手に持ったサーベルを流れる動作で反転、逆手に持ち換える。

「先ずは、あしから」

本能からの警告。

ジゼルが耳にその言葉を入れた瞬間、それを一瞬で理解し、反射的に行動を。

ジゼルの体は意識外でスムーズに動き、彼がこの場で出来る限りで最小限の動作で、己に向けられた脅威の刃からの回避を果たす。後退る体制から、足を自分の腹につくまで曲げて、その勢いを利用して、後転。直後、ジゼルがいた場所に二本の剣が突き刺さり、響く甲高い掘削音。壁だった欠片を刺さった箇所から巻き散らした。

「……………あああ、あああああ？ 何で、何でよけるんだよお？

！」

聞こえてきた声は無視。

ジゼルは直ぐ様丸めた体を起こし、前に向かって飛び出した。

（あと、少しっ！！）

壁の曲がり角まで後数十センチ。

そしてジゼルにとって最後の希望の象徴、曲がり角まで壁に手を掛け様として 足首を“何か”に掴まれる。

まさか、という思いと、やっぱり捕まったか、という思いが混ざり合った感情が沸き出て、それでも確認する為にジゼルは掴まれた方の足を見た。

そして。

「……………ひゅっ」

息を飲む。

思考が白に染まり、心から示す感情は恐怖。全身の水が冷や汗に変わる。



ジゼルの視界には自分の足。それは締め付けられる様な圧迫感を伝えてくる左足首で、ジゼルを捕えて動けなくしているそこには

何も、無かった。

足が縄で巻かれている様な痕以外、何も。

悪感が、走った。

「……………まあああああつつつてええつ、よおおおおおおお  
おおおお」

地の底から怨霊が嘆く様な、子供がごねる様な、かこつ様な、轟く様な、蠢く様な。

先程のとは懸け離れた、余りにも不気味過ぎる雰囲気その身から溢れ出して、剣を両手に持つて立つ彼は、先程から一步も動いていない。

確かにジゼルとアズスルーの距離はジゼルが走った分だけ離れいていて、尚且つその間には何も無い。であるならば、自分は此所から離れられる筈、筈なのに。

「　　つ」

ジゼルは掴まれた足を振る。が、足首を掴んでいるその“何か”は強い力でそれを押さえ、苦しい事に少しだけしか動かせない。

自身を掴んでいるものは、風ではなかった。寧ろ、風だったならばジゼルはここまで取り乱さなかったかもしれない。

しかし、これは無色の風では決して無い。ある筈が、ない。

これが風ならば、どうしてこうも、掴まれた足首からは、生き物の様に生温い体温が、伝わってくるのか。

何故、ぬるり、と粘液の様な滑りの感触を、受けなければならぬのか。

そして、獲物を捕えた蛇が這いずる様に、その感触が上と近付いて来ているのか。

そうして混乱している間に、ジゼルの掴んでいる何か、彼の足首を掴んだまま、太股まで届いた時。

太腿にまで絡みついたそれに、ぐい、と引かれた。

「ほおおおらああああ、おおおいいでええええええええええ

」

三日月の笑みを浮かべた彼は、最早先程までの名残など無く。

剣が頬に当てられた時よりも濃い恐怖と、心から沸き出た生理的嫌悪が、ジゼルの肺に取り込んだ空気を、悲鳴ごと外に出す。

「いや、だあああああああ！！！！」

ジゼルは叫んだ。

“助けて”と叫んだ。

答える者など、いないというのに。

足から引つ張られる力が強くなり、手を伸ばして曲がり角の壁に手を掛ける。が、それもすぐに限界を迎え。

ずる、と填めた手袋が滑り、壁から手が離れ、ジゼルは一瞬宙を浮く。

そして。

「あああああ つぐぼ、おええっ！！！！？」

何か、ジゼルの足首を掴んでいる“何か”が、彼の体に巻き付き、絡み付くと同時。ズボツ、とその透明な“何か”ジゼルの絶叫



ブツンッ、と犬歯辺りに何かを噛み切る感触。

「……………いいイイイイイイイイイイああアあああ良い良  
いいいい、ゾオオエエツツ！！！！」

直後、アズスルーはその場に浮かぶ。

否、浮かんだのではなく、透明な何かに持ち上げられたのだ。

そして奇声を発しながら、ギギギッ、と何かがしなる様な音を  
立てて、次の瞬間。

彼は弾かれる様に、発射。

己の体を弾と見立て、銀の鎧で包まれたそれは突進する。そして  
目の先に捕えていたジゼルに直撃、そのまま壁に叩き付けた。

ドゴンッ、と大きな音を立て、壁を少し凹ませる程の威力を  
持ったアズスルーという名の弾は、ジゼルの華奢な体を行動不能に  
するには十分足るもの。

ミシメキメキ　ボキィッ！！

生々しく、凄まじい音が、ジゼルの胸から発される。

胸に激痛、込み上がる血。

彼の肋骨は、容易く限界を迎えたのだ。

「　　かつつハッ！！」

ジゼルは口に入った異物を吐き出すと共に、血反吐を吐いて、そ  
れが幾らかアズスルーのマントに掛り、染み込んでいく。

腰に力など入らず、そのまま、ずるり、とジゼルは崩れ落ちる。

体には未だ見えない縄で縛られたままで、止まぬ激痛の中、動かせ  
るのは両指くらいのものである。

それでもなんとか生き延び様と、己の体を動かそうとし、しかし  
それに反する様に、頭の中の冷酷な部分が囁いてくる。

動け。無理だ。

動け！ 無理だ。

動けよ！ 無理だ。

動けつて、言ってるだろ！！

だから、無理なんだつて。

ぱきん。

「……………あ」

それは、己の心が折れる音。

体が動かないと確信した瞬間、脆く細い何か折れた音を、ジゼルは激痛が止まぬ思考の中、はつきりと聞こえた。

もう、ジゼルの体は動かない。

全身に絶望に浸った血が、巡り始める。

アズスルーは、と、と、とよろつきながらも二、三步自らの足で下がり、獲物を見据え、顔にも掛った血を舌で舐め取り、再び斬撃を纏う剣を翳す。

そしてジゼルの顔を瞳に写し、彼は念願の玩具を手に入れた様な笑みで、破顔した。

「やあああつぱり、どうたいからにしましようかああアアアアアアアア？ いい、そのひょうじょおお、すごおくいいいいイイイイいい！！！！」

終わった。

そう思いながら、ジゼルは目の前に迫る現実を受け入れた。

痛みで歪む視界に、近付いて来る狂気の塊を収め、ふう、と息を吐いて、全身の力を抜く。

自分はもう、諦めたのだ。

死から逃げる事を、死から避ける事を。“生きる”という事を。諦観と虚脱の微睡みに浸り、彼は思う。自分の人生とは、一体何の意味が有ったのだろうか、と。

思い出すのは数年前　自分を置いて去っていった父、付いていた母、自分だけが森の中に取り残されて、それでも親が戻って来ると信じて暮らしたあの日々を。

自身の“生”にしがみつき、必死に獣から逃げ、食べられる物を探し、安全な寝床など無く、木の上で震えながら朝を待つ日々を。

そして彼等が戻って来ないと悟ったあの時に、ジゼルは自身に誓った事を。

あの日、自分は何を誓った？

それは　。

（　もう、いいや）

もう、思い出す事も億劫だ。

死ぬ間際にそんな事を思い出して、どうしろというのだろうか。

血に濡れた視界を閉じる。

感覚も壊れたのか、激痛が走っている筈なのに、今はもう痛みすら感じない。

ジゼルは内心ため息をついた。

ああ、これでやっと死ねる。そういう意味を含んだ息を。

されど、ジゼルは気付く。

何故、血とは別の液体が、頬を伝うのだろう。

何故、自分の目から、涙が溢れて止まらないのだろう。

ああ、そうか。と、ジゼルは理解し、そして内心で苦笑する。

（死にたく、ないなあ）

ジゼルは純粹に、本当に純粹に、そう思った。  
直後。

「おおおおおおおおおおお！……！」

やっと、と言うべきか、漸く、と言うべきか。  
奇跡は彼に、訪れた。

「おおおおおおおおおおお！……！」

銀色の檻が転がり回る。  
ぐるんぐると、恐ろしい速さで回転する巨大な鳥籠は、その中  
に入れた者に対してある種の地獄をもたらしていた。

咆哮のような叫び声をあげる中、ハルアキは今の状況を的確に分析  
する。

自身が入っている檻に直撃したのは、左半身が粉碎されたとしても  
形容出来そうな、大人の男性だ。彼の左腕は二の腕から先が無く、  
銀色の光を放つ鎧も輝だらけ。そして、檻にぶつかった際にだろう  
か、それともその前にだろうか、ハルアキが正体に気付いた時には、  
既に彼は絶命していた。

砲弾の様に飛んで来たその男はハルアキの入っている檻の側面に  
激突。その際に、半ば頭部と右腕とを突っ込む様に檻の柵に填って

おり、籠に張り付く様な形で一緒に転がり、また轆かかっている。鳥籠が一回転することに、グチュ、という潰れた音を立て、吹き出る鮮血が檻の中にまで舞うという状況は、はっきり言ってグロい以外の何でも無い。

そして向かう先は、舞台裏。

黒と赤の塊がいる、魔の空間へ。

「くうらええええええ！！！！」

ハルアキは吠えた。

目標は赤マントの銀騎士。

かなりの速度が付いた鳥籠は、舞台裏を繋ぐ階段を降りる直前に、柵に引つ掛かっていった男により跳ね、飛んだ。

その際に彼の填っていた頭が外れ、右腕がもげる。引つ掛かっていった部分が外れたという事はつまり、男が檻に繋がっているという事ではなくるので、男の骸も曲線を描き、ハルアキの入った檻と同じくアズスルーに襲い掛る。

が、しかし。

「うおおっ!?!」

ハルアキの檻と男性はアズスルーの手前、何も無い空間に、何かに阻まれる様に止まってしまふ。

それは受け止められた、言うよりは、透明な何かに激突した、と言った方が正しく、故にその衝撃により、苦痛の声と共にハルアキは慣性に抗う事無く、柵に叩き付けられる。

揺れる視界の中、ハルアキはアズスルーのことを捉えており



そして、ハルアキは驚愕する。

それはハルアキの突進を妨げた透明だったモノ。しかしそれはジゼルに噛み千切られた際のの血が掛り、今その姿を、ハルアキの目に写していた。

混濁した気分と思考の中、ハルアキはその正体を口にする。

「しよ、触手ツ?!」

そう、それは触手。

蛸の足の様な、烏賊の足の様な形状をしたそれは、飛び散った血の後ををよく見てみると、アズスルーのマントの下から沸き出ていた。彼の肩から付いた紅いマントは、風で靡いていたのではない。そこから蠢く不可視の触手によって盛り上がっていたのだ。

「……………お、おお、おまえも、うる、うつつるうるさい  
ii!!!」

「っおお!?!」

ヒュボツツ!! と風を起こし、血で濡れた大小様々な触手がハルアキに向かう。

この時、ハルアキにとって幸運だったのは、自分を閉じ込めている檻の中にいた事だ。

バチバチバチツ、と鋭い破裂音が響き、烏籠の柵より大きい触手は弾かれる。そして柵によって、殆どの触手は逸れたりしたのだが、全てが防ぐ事は叶う筈もなく。

バチインツ!

柵をとそれに防がれて張り付く触手を掻い潜って来た細い一本が、ハルアキの腕の皮膚を強打する。

それはまるで細い鞭。

ひゅう、と開いた口から肺の空気が抜けて、ジンジンと皮膚が裂ける痛みと共にやって来た衝撃はハルアキの思考を数瞬白く染める。太ければ、人の首等捻切る事が可能な強靱な筋肉で出来た鞭打。恐らくは全力が込められたそれは、ハルアキの左腕の皮を、当たった分だけ持つていく。しかし。

( つ!!! )

心の中で己に喝。

ハルアキは先程からの闘志を失ってはいない。寧ろ、今の攻撃を偶然にでも防ぎきった事により、反撃に対する気力が漲っている。

先にすべき事はやった、準備も万端。残す要素はそれを放つタイミンゲ。

痛みで細めた目で、触手と柵の間隙から見える狂気の騎士を視界に入れる。どう見ても正気ではない彼の状態と、危な過ぎる雰囲気。を放つこの魔術。ハルアキは彼の触手の魔術は知らないが、この感覚は知っている、この凶悪極まりない雰囲気、身を持って知っているのだ。

恐らくは、今ハルアキが反撃をしても、奴はそれを躲すか、逸らすか。兎に角ダメージは見込めない。

それに今打てば、最悪あの子供が巻き込まれて死ぬ事になる。そんな事をハルアキは当然認めない。

ならば一体どうやればいいのか 答えは簡単、隙を作ればいいのである。

が、それをやるには至難の業だ。

しかし、そんな事、ハルアキは分かっている。理解はしている。

けれど、己はそれをやらなければならないのだ そう、自身に決めたのだから。





壁に寄り掛つてい座っているジゼルは、その光景を明瞭とした意識の中、確りと捕えていた。

彼の薄れた意識が回復したのは、つい先程の事。

痛くありません様に、と思い視界を閉じて、今か今かと凶刃が振るわれるのを覚悟していた最中だった。

突如、一滴の水が垂れたと感じた瞬間、体の痛みが引いたのだ。

すう、と水が流れ落ちる感覚と共に、胸に感じていた痛みは半分無くなつて。腕くらいならば動かせる様になつた体は、それでも節々が痛んでおり、余り動く事は出来そうにはなかった。が、しかし、ジゼルはそれでも今自身の周りに何が起こっているかを確認しようと目を開けて、飛込んできたのは一人の少年。ジゼルよりも年上の彼は、先程まで自分を縛っていた何か “触手” と呼んだモノに襲われていた所からだった。

一瞬で檻にまで届いた触手の鞭が彼の顔に回した腕に当たり、鋭い音を立てて皮膚が喰らわれる。

痛いのだろう、彼の表情は歪み、歯は食い縛って堪えている。

だが、そこでジゼルは何故、という疑問に襲われる。

( 何である人は…… )

ジゼルが見たもの、それは彼の目。

その瞳は恐怖になど覆われてなく、その内に込められた闘志が遠くから見ているジゼルにも感じ取れたのだ。

確かに、今の彼は何もする事が出来ていない。

しかし、だかしかしだ。

何故、あの人は、狂気を発する彼に怯えないのか。

何故、あの人は、その心だけでも立ち向かえる事が出来ているの





ずる、と。べちゃり、と。  
触手を伴い、一步、又一步。

(逃げなきゃ逃げなきゃ逃げなきゃ逃げなきゃ  
!!!)

後退るも既に壁。

ガタガタと震える手足で床を這う。

しかし、そんな隙だらけのジゼルにアズスルーは剣を振る事なく、  
もう一度別の方へ視線をやる。

直後、キーン、という金属音。

その正体は小振りの短刀。投合され、弾かれた銀色のそれは、回  
転しながらジゼルの真横に突き刺さる。

誰が投げたのか。

ジゼルも恐る恐るとアズスルーと同じ方々に視線を向けて  
そして、信じられないものを見た。

その先には、先程まで檻にいた彼の姿。

後ろの方には、開閉部分が切られた鳥籠、手枷を繋いでいた鎖は  
恐らく先程の突きの際に上手く当てたのだろう 丁度中間辺

りで干切れていた。

そして彼を見れば、所々から血が出ているが、意識を保ち、ちゃ  
んと地に足を着けて踏んでいる。

「なん……で……………」

側に落ちた骸が持っていたのだろう、二本目の短刀をアズスルー  
に向けて構え、確りと意志を放ち、その瞳で敵を見つめている。

先程とは違う意味でジゼルはまさか、と、そう思った。

何故、彼は逃げないのか。



何故、何故、何故。

「 そのの、こっちに來い！！ 」

彼はジゼルに向けて呼び掛ける。

何故かどくん、と鼓動が高まり、息が熱く。

それに疑問を数瞬抱くが、すぐに棄てる。

ガクガクと、脚が震えながらもジゼルは立つ。弱々しくも、懸命に動こうとする姿は、まるで産まれたばかりの鹿の様で、事実彼は、生きようとしているのだ。

一度諦めた“生”を、再びその手に取り戻して。

「 にいがああすかああよううおおつつ！！ 」

だが、敵は無情。

それをさせまいと、ジゼルに血で濡れた、触手が向かう。

太い触手を何本も束になったそれは、先程までとは違い、正に暴力の象徴の様で、当たれば確実にジゼルの華奢な体など押し潰される事は明白。そしてそれは恐らく、短刀を持ったハルアキが介入しても結果は同じだ。

絶体絶命かに見えたそれは、再びジゼルの予想外の方に転がって行く。

それは来た、ハルアキの上を飛び越えて。

「 ガアアアアルルルルアアアアアアアアアアアアアッ  
ツ！！！！ 」

獣の咆哮と同時、肉を裂き、噛み千切る音。

そのまま廊下の奥へと着地、下に転がる触手を踏みつけ、二度目



たハルアキが短刀と己の体で防ぎきる。

両腕共に肘から先の皮が何筋かが捲り上がり、激痛が身を襲うが、ハルアキは後ろにいるジゼルをちらと見て、言葉を放つ。

「一緒に逃げ」

瞬間、肌を殴る様な暴風がジゼルの目の前を通り過ぎる。前髪の何本かを持っていったそれは、しかし一瞬にして止んだ。

視界に二体目、三体目の獣が、触手の本体に襲い掛るのを入れるが、そんな事は今のジゼルの思考の中には認識されない。

彼の意識が向いているのは、今起きた事。

今のは風？ いや違う。あれは一瞬視界に入った触手が彼を薙ぎ払った威力の名残だ。でなければ、ジゼルを守ってくれた彼が、視界から消える筈がないのだから。

「……………っ！」

時間にしてコンマ数秒、ジゼルは今の一瞬で何が起きたのか理解し、急ぎ吹き飛んだ彼の方向に目を向ける。

そこには、原形を留めた彼の姿が。

横に立って伏しているものの、大きく胸を上下させている。

“生きている”その事実でとりあえずはほっと息を吐く、そして駆け寄ろうと走り出す、が。

「ざぁんねん」

立ち塞がるは、狂気の騎士。

口から涎が垂れた痕を拭い、肩で息をする彼の片腕からは、頭部いや口の部分だけが残った獣の成れの果てがぶら下がっている。

アズスルーは感嘆の吐息を吐きながら、腕に噛みついた牙を抜き、

それが水を跳ねて血溜りの中へ。右腕に握ったサーベルは、一頭の獣を串刺にしている。

彼は暫しその場に佇み、己の背から生えた触手と魔獣の血で濡れた左腕を、サーベルを掴んで握ったまま、天井を見上げた自分の額に当てる。

「あああ………ん、んっ、………ふむ。馴染むのに時間が掛ったが、あああ、狂気の中とやらは、慣れると存外心地良い」

そう呟き、くくく、とアズスルーは笑う。

それに合わせて、彼の触手は蠢き、まるで深い喜びを表している様で、それが堪らなくジゼルにとって不快だった。

普通に喋り始めたアズスルーの表情は幸か不幸か、正気を取り戻している様にも見えた。が、矢張り彼の瞳は濁った光を放っている。

ジゼルは警戒を緩めない。

アズスルーは飛び掛って来た二体の獣の内の一体を仕留めたサーベルを骸から抜いて、ジゼルに向かって血の池の中、足を踏み出し、彼はもう一度、笑う。

「とんだ邪魔が入ってしまった。　　続きをやるつか」

ばしゃん、血が跳ね、もう一步。

しかし、ジゼルは動かない。

立って、アズスルーと相対するジゼルは、一步も其処から離れない。

対峙している彼は自身より強者であり、恐怖も感じる。それに一秒でも彼の顔を拝みたくはないし捕まれば死ぬより酷い地獄を見るかもしれない。

けれど、ジゼルはもう、一步も退く気は無かった。

ジゼルはもう、逃げる気などこれっぽっちも、無かった。

「……………今より小さい頃」

ジゼルは語り始める。

小さな声で。確かな声で。

「お父さんとお母さんはぼくの前から消えた」

「……………仕切り直しだ。先ずは足からだな」

アズスルーは聞いてないのか、ジゼルの無視して、背中 of 触手を動かす。

それを後ろに跳んで回避、血で濡れたその軌道は、ジゼルにはよく見えた。

触手の向こうからの舌打ちと共に空気が蠢く。ジゼルは足元の血溜まりを蹴り、飛沫を上げて起動を推測、横に跳ぶ。

跳ねた血で顕現された暴力は、その脇を通り過ぎていく。後ろにあつた死骸がバラバラになって吹き飛んだ。

「っ、ちょこまかとおつ！」

「戻って来ない、そう分かった時、僕は決めたんだった！」

ジゼルは声を張り上げる。

自分に言い聞かせる様に、自身に宣誓する様に。

頭を低くし前傾姿勢で全力疾走。

不思議と息は切れず、胸の痛みも忘れ、ジゼルは今までで一番速く走れる気がした。

血の水を足で切り、遅れて細かく軽い水跳ね音が、手を低くし目的の物を掴む。

それを引き上げ、ジゼルは咆哮

否、産声を上げた。

「ガキイツ！！」

「つよくなる”って、そう決めたんだツツツ！！！！”

《 特定条件を満たしました。

ジゼル・ライツァウルトの『カテゴリー分類』が、“魔族”から“影狼族”  
へと《ランクアップ存在昇格》します》

脳内に響いたのは無機質な声。

その直後、ジゼルの体が進化を遂げる。

血で汚れた灰色の髪、耳、尻尾が一新。より濃く、しかし美しい色になり、光に反射し綺麗な光沢を魅せる様に。

頬の切り傷や、胸に受けた傷が回復し、痩せこけていた肌には窪みが無くなり、健康の色を取り戻す。

小さな体軀はそのまま、しかし華奢だった骨格は、丈夫でしなやかな物へと変貌した。

ジゼルはその足を止める事なく、咆哮。

「う、ああああああああああああああああああ！！」

「スラッシュ・エテ斬風『ツ！！』」

窓の無い廊下に風が吹く。

ジゼルの纏う雰囲気の変化に気付き、アズスルーは自身の“獲物は自分の剣で切る”という主義を曲げて、彼を拘束する魔術ではなく、相手を傷付ける為のものを唱える。

空気が歪ませ現れたのは、薄く、しかし人など容易く切れる風。

淡い緑の光を内包させたそれを幾重にも産み出し、それを数メートルの間が開いたジゼルに放つ。

時間を同時に、又バラバラに射出された斬風は、ひゅお、と細い棒を宙に降った様な、空気を裂く音と共に目標へ接近。ジゼルが相対する風は先ず二つ、横になって並んでいた。

奥に五つ、触手が三本。

確りとジゼルはそれを見据え、とんと軽い跳躍。身を出来る限り縮め、その開いた隙間を潜り抜ける。さんっ、と呆気なく安全範囲からはみ出たドレスに付いたフリルが切断された。

次いで、接近していた触手に当たる瞬間、回転。威力を後ろに流し、上手く触手の上になる形になり、触手を蹴って前に出る。乗った触手のすれすれに向かって来る三つ目の斬風をで跳んで回避して

「甘しッ！」

嘲笑を含んだアズスルーの声。

目の前に来ていたのは二本目の触手。

明らかにジゼルが回転して流した触手より太い触手は、それがアズスルーの本命だという事を示していた。

果たして、ジゼルに向けられた脅威の拳は 当たる事無く空を切る。ジゼルは二本目の触手すらも通り越して、上を取んだのだ。

「っ！」

アズスルーが息を飲む、まさか、という思いを込めて。

ジゼルが着地した場所、それは廊下の天井だ。

空中で体制を逆転させた彼は、そのまま、ぎょう、と脚を曲げて、力を込め 　そして、それを解き放った。

ダアンと勇ましい音を連れて、ジゼルは短刀を振り上げる。触手

は動いていない、持った剣も防御するには間に合わない。  
が、しかし。

「矢張り、甘いな」

アズスルーは口の端を吊り上げる。

戦闘に対する情報の処理、反応、対応、先程とは“まるで”ではなく“正に”別人の動き。《存在昇格》ランクアップ、その進化とは如何なるものか、ジゼルはその結果を自身の体で確りと現していた。

しかし、である。

《存在昇格》ランクアップ しているのは、何もジゼルだけではないのだ。

アズスルー・ダン・ガズドウロノフ。

『エアロ・フォーメー  
旋風の纏人』であり、“魔道剣士”の護衛騎士。

故に、彼が唯それをくらう筈が有る訳も無く。

ジゼルを見上げる彼の腕には、小型の風の塊が、不安定な一つの形を持って発生していた。

『トルネイヴ  
竜巻』。

込められた魔力に比例して凶悪性と暴力性を増す魔術は、一種彼の切り札の一つとして存在している。

“恐らくは死なないだろう”並の魔力を込めたそれは、今か今かとその威力を解放するの舌舐めずりするかの様に、時折形を崩しながら、飛び掛って来る獲物を待ち侘びていた。

そして今。

「終わりだ!!」

その魔術は放たれる。

ジゼルより、少しずれた右側に向かって。



「つな!!?」

その原因は、己の上に突き出した腕に当たった短刀。鎧で刺さり  
はしなかったものの、しかし腕の示す方向を変えるには十分過ぎて  
結果、放たれた『竜巻』<sup>トルネード</sup>はジゼルを中心としない軌道を描き、己  
の魔力を風に変換して解放した。

巻き起こるのは暴風。

風によって引き込まれる筈のジゼルは、発動した魔術の距離が遠  
かった事により、アズスルーから見て左に吹き飛んだ。

アズスルーから見て左側、それはつまり、彼に向かって短刀が飛  
んで来た方向で。

振り向けば、殺した筈の子供の奴隷が目に写り、直後に赤い  
何かが視界を覆う。

思考が加速し、あの奴隷に何をされたかを理解した瞬間、アズス  
ルーの中で何かの緒が、ぷちん、と音を立てて切れた。

「こ、ここ、こ、のお、ゴミがああああああああ!!!」

目の先にいるアズスルーが再び狂う様に叫び始めるのを視界に、  
ハルアキはうるせえ、とそう思った。

触手が横腹に当たる寸前、咄嗟に入れた縦を填めた腕を入れ、威  
力を軽減する為に吹き飛ぶ方向に跳躍したのが幸をきしたのか、ハ  
ルアキは気絶する事なく、しかし全身を打った衝撃と、横腹からの  
激痛に悶えるだけで済んでいた。

数秒の間悶絶した後、漸くアズスルーとジゼルの間に何が起き  
てるかを視認したのも束の間。ジゼルが天井に着地した時、ハルア  
キはアズスルーの腕に魔術が備えられているのを見て、それを防ぐ

為に急ぎ一緒に吹き飛んでいた短刀を拾い、投合。運良くそれがアズスルーの突き出した腕に当たり、魔術の軌道がずれる。

何より最高だったのは、あの魔術で 先程とは雰囲気は違うが 狼の耳と尻尾が生えた子供が、ハルアキ側に飛んで来た事だ。

これで、気負いする事はなくなった。

今までハルアキが動けなかったのは、この時までで。

今までハルアキが動かなかったのは、この時の為に。

もう、ハルアキは遠慮はしない。

ハルアキが投げたバンダナは、アズスルーの顔に当たる前に、見えない触手に払われる。しかし、それでいい。それでいいのだ。

ハルアキは限りなく加速する意識の中で考える。

目の先にいる男は、駄目である。

狂気を帯た目、力に支配された体。危険人物であり、力があるとか、彼の趣味がおかしいからとか、彼の顔が気に入らないとか、そういう問題ではないのだ。

駄目なのは、もっと根本的な所。理由等を抜きで言えば、要はハルアキの願望を叶える為には、彼の存在が邪魔なのだ。

然るが故に、ハルアキは彼を殺す。

ハルアキの歩むレールから退ける為に、自分の命を守る為に、そして 自身の腕に抱いたこの勇気ある子供を守る為に。

そこまで考えて、内心でハルアキはいやいやいやいや、と首を振る。

( そもそも俺が悪いんだろうに、恩着せがましいにも程があるだろう )

この事態を引き起こした原因は自分であるというのに、何を助ける気にいるんだか。

とんだマッチポンプだ、ハルアキは最後の理由に、思わず苦笑を  
してしまう。

偽善、と言われてもいい。

独善だ、と罵られてもいい。

けれど今は、“この子を守る”。その気持ちには、嘘は無いのだ。  
だから。

「お前は死ねっ！！！！」

《『罨<sup>トリット</sup>作成：【獄門鬼の砲弾】×1』を選択しました。50000  
p×1に加えコマンド【セレクト】【クイック】【ポイント】によ  
りコストが500倍されます。使用Pは250000000pです。

【残P：293701172 268701172】です《

ハルアキが吠えたと同時に、現れたそれは廊下を埋め尽す。

血に塗<sup>まみ</sup>れ、戦場と化していた其処に生えてきたのは口径が一メー  
トルはある巨大な大砲。

それは黒くメタリックな光沢を見せて、誰もが禍々しいと思われ  
る装飾が施されている。

床から植物のように直接生えている筒の先には、丁度人間の大人  
サイズの顎の無い髑<sup>むく</sup>髑<sup>むく</sup>が同じように光を反射しており、砲台の付け  
根の箇所にも髑<sup>むく</sup>髑<sup>むく</sup>があるが、それは確実に人間の物ではなかった。  
二回り、いや三回りも人のものより大きく、額の端と端には円錐形  
の角が生えていて、まさに鬼のよう。

そして、瞬く間に展開されたその巨大な髑<sup>むく</sup>髑<sup>むく</sup>の間より深い眼球が  
紅く光ったと思うと同時。

大地すら震えさせる程の轟音を発して、一発の弾丸が発射された。

「な  
」

アズスルーの意識が逸れたのは一秒にも満たない時間、だから出来た隙は数瞬で。

しかしその刹那の時の間隙を抜けて飛来して来る弾丸に抗う術はなく、彼は理解出来ないまま、向かい来る暴力をその身に受ける事となる。

衝撃。

「  
ルーっ！  
ズスルー！！」

掠れた意識の中、声が聞こえた。

目を開けば、眉を吊り上げて己を揺する一人の女性が右目だけに写る。

指や足等の感覚は薄くだが、思考の片隅に存在しており、口もまだ、声が出ると確信出来る。

「  
……わ………わた、し………は………？  
」  
「アズスルー！！」

女性が彼の声を聞き、所々が赤く染まった視界でも分かる程青ざめていた顔に、生気が戻る。

しかし、それは彼の求める返事とは違う。

彼が口に出した声は疑問。

己の獲物は、何処に消えたのだ。己は、剣を抜いた筈ではなかったのか。

何かが起きた直前の記憶は、衝撃により吹き飛んでいたのだ。

彼は、知りたい。

一体、何が起こって、どうしてこうなっているのか、それだけを知りたいだけだ。

右目だけの視界に入る、自分を知っていそうな女などどうでもいい。

後ろで手を宙で遊ばせている男など、どうでもいい。

ただ何が起きたのかを、知りたいだけで。

知りたい。知りたい。何が起こったかを、自分は知りたい！

「凄い音がしたから来て見れば、アズスルー！！ 貴方はあんな子供にすら負けたというのっ？！」

目の前にいる彼女は激昂して彼を罵る。

だが罵られている顔には、そんな事よりも引つ掛かった言葉があった。

子供？

そうだ、子供だ。

己は子供に剣を向けていたのに、一体、何故。

全身に傷を負っているのに、脳が疼く様な痛みだけがやけに響く。

「ちょっと！！ 聞いているのですかアズスルー！！？」

「……………ああ？」

思い出そうとすると、肩を揺すられ騒がれる。

耳障りだ。

だから彼は背中に生えた腕を無意識的に動かそうとして。

そして、見た。

「……………けれど、まあ生きていれば罰を」

音も無く、いや音を追い越して。

最後に彼が見たのは、目の前にいた女性を吹き飛ばし、既に鼻先まで近付いたそれ。

遅くなった時間の中、彼は己の鼻が潰れる感覚と共に、己の歩んだ人生の走馬灯を拝む。

アズスルーがいる廊下の奥から、二度目の轟音が、遅れて響いた。

《『 “人間” スコア：804p』が加算されます。

【残P：243701187 243701991】です》

《『 “人間” スコア：5163p』が加算されます。

【残P：243701991 243707154】です》

《『 “魔道剣士” スコア：22889452p』が加算されます。

【残P：243707154 266596606】です》

ポーン。ポーン。ポーン。

感情の無い声で読み上げられる死亡通知。

ハルアキは恐らくは彼は倒せたのだろうと思ひ、そして同時に安堵した事に何とも言い難い感覚になる。

罪悪感の様な、虚脱感の様な。

当たり前だ。人を自らの手で殺し、しかもそれで得た生に、喜びの感情が芽生えるのだから。既にハルアキは日本人で生きた道徳は、もう、ない。それを再び実感して、ああ、と呟きを洩らす。

(寧ろ、何も思わない方がもっと異常か……)

そんな余り益体の無い考えをしながら、そういえば、と腕の中に入れた存在に目を向ける。

蒼色の瞳が、そこにはあった。

「……………」  
「……………」

目が合い、沈黙。

じ、とハルアキを見つめ、視界に捕えて放さない。どことなくハルアキの服を掴んでいる手が、きゅ、と強くなった様な気がした。さてどうしようかと考えて、まああの時と同じ様にすればいいかと自己完結し、よいしょと首に回した腕をそのままに立つ。

腕の中の存在は意外と軽く、楽に立つ事が出来て、少々驚いたのは「愛敬だ。

「つと、立てる？」

「あ、はい」

とと、と軽くよるめき、それでも片手は放さない。

まあしょうがないか、と思いつつ、ハルアキは腕を解いて話を続ける。

「あ」と妙に残念そうな吐息があちらから漏れるのが聞こえたが、そこをハルアキは敢えて聞かなかった事にした。

お互いの顔が鼻が触れ合いそうな程近かったのだ、常識的に考え

て離れるべきだろうし、流石に幾等可愛くても、小さい子に性的に興奮するとか、ハルアキにはそういう趣味はないのであるからして。

けどまあ、とハルアキはその狼の耳が生えている頭に手を起き、カチューシヤを外さない様に撫でる。

さらさらの髪感触。

「とりあえず、お疲れ様」

「……………あ、はい」

顔を少し伏せて、上目使いで此方を見上げる蒼い双眸。それを見てハルアキが、かわいいなあ、と庇護欲に駆られそうになるのも束の間。

「グルルルル……………」

「グルルル……………」

「っ!?!」

ハルアキ達の周りに、二匹の獣。

口から涎を垂らし、ぐるぐると二人を中心に円を画いていた。

撫でられていたジゼルが思わず息を飲み、すぐに短刀を構える。

手は片手は後ろに広げ、言うなればハルアキを守る様に。

来るなら、来い。

ぴり、とジゼルを中心に殺気が放たれ、場の空気が張り詰めるが、三度、彼にとって話は予想外の方向へと転がった。

「大丈夫」

ハルアキがジゼルの肩を掴み、言う。



「彼等は、味方だ」

「え？」

「どういう事か、それをジゼルが聞こうとし口を開くが、その前に。」

「その話、私にも聞かせてくれるわよね」

「舞台側の廊下からの問掛けが、ハルアキ達に向けられる。」

視線を向ければ、二人の少女。

髪は金髪、目の瞳は瑠璃と緋。

裸足の脚に、白いドレスと、黒のワンピース。

髪は水で濡れており、兩名共に服を慌てて着たのか、あちらこちらが寄っていたり、肌などが見え隠れしている。

蝙蝠の羽の骨を無くした様な黒い翼を背中に生やす、身長が小さい  
い 恐らくは妹だと思われる子は腕を胸の前に組み、此方を油断  
無く見つめ、もう一人 耳が常人よりも多少長い姉の方は、自身  
のすぐ横に立つ妹に縋り付く様に凭れ掛かっている。

その姉の姿を見て、ハルアキは何処か心を、かりかり、と掻き  
まれた。

「……………君達は？」

ハルアキは、この二人に見覚えがある。

それは、つい先程見た顔で。

ハルアキの問いに、小さい方の少女は抑揚無く答える。

「私はエルティオネ・バーニ・ファムファタル、此方が姉のフィオ  
ーナ・バーニ・ファムファタル。もしくは」

彼女は少々皮肉を込めた笑みに乗せて、ハルアキにも分かる自己紹介をした。

「 “四番” と “五番” 。 そう言った方が分かりやすいかしらね？」

にやりと笑ったエルティオネ。そして、その横から覗かせたフィオーナの綺麗な緋色の瞳を見て、先程の正体をハルアキは知る。

ハルアキは見た。

たった今、四番と名乗ったこの少女。その彼女に寄り掛っている姉、フィオーナ・バーニ・ファムファタルの表情を。

諦観の意思など容易く塗り潰し、復讐の焰に駆られた、その瞳を。

## 序章「03（後書き）」

主人公は傷付いてなんぼのものだと思っの。

この話で折り返し。漸く『序章』の後半に入ります。

あと一、二話ぐらいの後、やっとこさ経営という名の閑話が入れそうです。

「冗長だと思われた方ごめんなさい。もうちょっと続きます。

あと少しでもハルアキ君がかっこいいなと思ってくれたらがんばった甲斐があります。ヒヤッホー。

ついでに「ハルアキ君心の切り替え（モラル的な意味で）早すぎんじゃないね?」とか思われる方がいると思いますが、これは心の葛藤が主題ではありませんし、冗長になり過ぎない様に、という意図と、実はすでにハルアキ君のモラル等は一度ぶっ壊れているという設定からきております。そこら辺は所謂『過去編』でやりますのでご安心を。

本編で出てきた単語簡易補足。

『分類／カテゴリ』……ジョブ職業。

『称号』……MMOとかにある補正オプシオン。

【魔道】……この世界特有のスキルツリー。

みたいなもんです。そしてどれもが王道要素。

【魔道】に関しては大体想像つくとは思いますがこれも、中二要

素です。

とりあえずは主人公は最強ではないという証明でした。コスト高み過ぎてやってらんねえというのが主な理由。

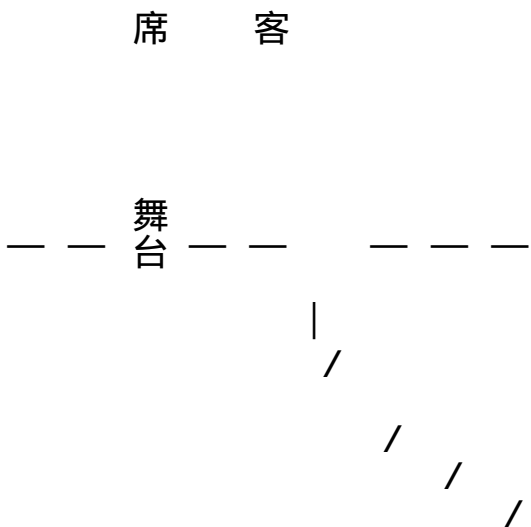
あと大体想像はつくかと思いますが、コマンド【ポイント】は消費Pを増やす代わりに、その効果を発揮するというシステムです。以下説明。

・【クイック】……本来ある罫等の作成、設置時間を0にできます。使用p x 10倍。

・【セレクト】……本来ランダムに選ばれる罫等を指定できます。使用p x 10倍。

・【ポイント】……本来ランダムに置かれる罫等の設置場所を指定できます。使用p x 5倍。

あと表記してなかったから分かんないだろうと思われる廊下の補足です。



## 商品待機口

……アズスルー達死亡した場所

……『商品受取り部屋』

……丁字路。ハルアキ達が戦ってた場所

とまあここだけ見ればP字の作りになっております。  
ジゼルが逃げ出したルートは上の斜線部分の道ですね。  
途中出てきた獣達は商品待機口からの直輸入でした。

## 序章「04（前書き）」

あとがき、まで最後まで読んでほしいですハイ。

## 序章「04

スキル【迷宮創造】。

それは何も《迷宮》だけを作れるだけではない。

例えば中で籠る為の住居、そこで食べる為の食糧等の生活面に対する作成が可能なのだ。

【迷宮創造】の能力を分けるとするならば、主に三つ。

一つ目は『迷宮機能』。

その名の通り、迷宮製作に関わる能力だ。

罾製作、モンスター生成、階層の追加や迷宮内における 扉や置物等の オブジェクトポイントの設置等が主な機能である。

これらの機能は全て、Pを消費して使用する事が可能で、ポイントさえあれば、モンスター数の調整や罾の設置等を半自動的に迷宮内部の調整をやってくれる。

二つ目は『生活機能』。

此方はハルアキ等の人間が、迷宮内で暮らすために使われる機能である。

建物製作、内装製作、パンや果実を実らす木等の食糧や飲み水生成等が主流である。

但しこれはハルアキが【迷宮創造】で制作した階層の中で一階層分だけしか選択出来ない【住居層】と設定した階層でなければ使えない。

そして『迷宮機能』と同じく、ポイントを消費する事により、使用する事が可能だ。

因みに此方は何を作るかを選択可能で、待機時間等はどれも短い。しかも、木々等を生やす場所は自動的に決まるので、コマンドを使

う必要は無い。

最後は『特殊機能』。

これは上の二つに属さない、いわばゲームの隠し要素の様なものだ。ハルアキの“前の”スキルと違う点は主にこれであつた。

製作に関するコマンドや、『ユニークモンスター』なる存在等、総じてポイントを消費しないのが特徴だろうか。

そして今、【迷宮創造】の二番目の機能、『生活機能で』作られた一つの部屋に、彼等はいた。

部屋は質素だが、しかしどこか高級な雰囲気が出ており、天井からの光に照らされている。中央には上質な木材で作られたテーブル。五つの肘掛け椅子がその周りに置かれ、部屋の中にいる人影は全部で三つ。

「と、まあそういう事だ」

その人影を構成する一人、ハルアキは自分が用意した椅子に座り、テーブルを挟んで向かい側に座る少女 エルティオネに対しての説明を終える。

今の時刻は、ハルアキが己のスキル【迷宮創造】を発動させて数時間程が経つた所である。疾うに《イスリツシヨン》会場で起きた戦闘は終わり、今現在ハルアキが創り出した《迷宮》に侵入者は一人もいない。ましてやハルアキ達が今いる場所は、リュシカ王国の南方にある平原に創られた、現《迷宮》の最奥部 地下十一階層目。余程の事が無い限りは安全と言つていい場所であるのだつた。

舞台裏での邂逅の後、エルティオネとフィオーナの姉妹を加え、



ハルアキとジゼルが起こした行動は、商品として扱われる予定だった奴隷達の解放だ。ハルアキ達が舞台上上がった頃には既に 蛇竜ゲルアとの戦闘は終結していたので商品達の解放は殆ど問題なく終える事が出来たのは、行幸と言っていいだろう。

解放された彼等は今、ハルアキの【迷宮創造】で創った屋敷の中で各々の時間を過ごしている。

そしてとりあえずは一連のごたごたを終え、場が落ち着いたので見計らって、ハルアキは自身の説明をエルティオネに話したのだ。

「……………」

エルティオネは片手を口元にやり、考える仕草をとる。

「……………ふうん。ていうことは、あの獣達も、あの巨大な蛇もハルアキ、だっけ？ あなたが創り出したって事でいいのね？」  
「ん、んー……。まあそう思って貰って構わない」

エルティオネはしどろもどろにハルアキに疑問、というよりは確認に近い質問をする。

「どうやら未だ信じられない様だ。それを目の前にいる少女から察し、ハルアキは思わず苦笑した。当然と言えば当然だろう。何せたかが一人の人間が、大規模な地形の変動やら生命創造やらが出来るという無茶苦茶な能力なのだから。」

彼女、エルティオネが聞いているのは、先程の獣達の事だ。

獅子の鬣を持ち、一尻尾が三本ある魔獣 ライオハルト や豹と虎を足して二で割った様な一赤毛の魔獣 ブラッドパンサー、彼等は大体8000pから12000pの間で生成される獣型モンスターだ。『モンスター生成場』で生まれたモンスターは、総じて八

ルアキの自己は持つものの、ハルアキの言う事を聞いてくれるので、間違いではないのだが、ハルアキが言い淀んだのは蛇の方。  
ユニークモンスター 蛇竜ゲルアトウル蜥蜴。一応は解放した奴隷達を説得する際に、ハルアキの言う事を聞いてくれたので、恐らくは問題はない筈である。

エルティオネはもう一度、ふうん、と相槌して、席を立つ。

「とりあえず礼は言っておくわ。ハルアキ、ありがとう」

「……………別に俺が巻き込んだからそう言われてもな」

「そう、まあ確かにね。あ、あと今聞いた事は口外はしないから安心して。ハルアキの目的も聞けたし最低限の協力はするわ」

「ん、あ、おお。此方こそありがとう？」

「なんで疑問系なの」

顔を崩して礼を言うハルアキに、エルティオネはくすくすと笑う。それを見てどことなく煮えきららない感情がハルアキに芽生えるも、しかしそれを口に出す事はない。

「ていうかエルティオネも疲れただろうに、さっさと寝ろ」

「うん、もうそうする」

ふわあとエルティオネは欠伸を掻いて、てくてくと出口に向かう。そして部屋の扉を閉める際に、もう一度ハルアキの方を向いて、口を開いた。

「ああ、それと……………私の姉に気を付けてね」

「……………なんでだ？」

「……………まあ、恋人の仇つてどこかしらね」

は？　と思わず漏らしたハルアキにエルティオネは、それじゃ、とだけ言つて扉を完全に閉めて去つて行く。

足音が段々離れて行つているので、扉の外で聞耳立てている、という事はまず無いだろう。まあ、する意味が分からないが。

(……………強い子だな)

聞けば齡十四歳、あの少女は達観し過ぎているような気がする。少なくとも自分があの年で逆の立場だったりしていたら、訳が分からないと叫んでだろうに、とハルアキは思う。

突然奴隷から解放されて、しかし親元へは返す事が出来ないというこの状況で、よくまあ彼処まで冷静でいられるものだ。それが、例え表面上だけでも、である。

何故、彼女を地上に帰す事が出来ないのか。

理由は単純明快、ハルアキの存在がばれないようにする為である。ハルアキは弱い。それは自分でも自覚出来る程だ。頼みの綱である『<sup>トラップ</sup>罫作成』だつて使える範囲は迷宮の中だけ。自分の創造した迷宮<sup>トリ</sup>から出れば、ハルアキはそこから唯の一般人に戻つてしまう。ハルアキの目的を叶える為には、恐らくは何度か迷宮から外にでなければいけない。故に特徴等を知られ、ハルアキが迷宮を出た所を狙われるという状況は、絶対に避けたい事柄なのだ。　　少なくとも、今はまだ。

勿論、ハルアキも聞かれたから答える、という御人好しでは決して無い。エルティオネに話した事は【**迷宮創造**】でモンスターが作れるのと、家等が作れる程度。ポイントの事等は一切話していない。

更に説明する前に“【**住居層**】から出れなくなるがそれでもいいか”という承諾をとつたが、すぐに返答が来て驚いた程だ。

まあ万が一彼女が此所から出ようとしても、一応今いる此処は地

下十一階、ハルアキの手助け無しに地上に上がるのは不可能とは言わないが、かなり難しいだろう。

急な展開に付いて行けてないのは、もしかしたら自分かもしれないなあ、と益体の無い事を考えながら、ふう、とハルアキは息をついて、次に自分の横にいる存在に目を向ける事にした。

視線の先は、一人の子供。

「ジゼルくんもそれでいい？」

「勿論です主様」

「……その呼び方は止めて欲しいんだけど……」

「無理ですね」

「……………」

一刀両断、ばっさりである。

満面の笑みで答えるジゼルの表情を見て、ハルアキは、はあ、とため息をついた。

一度肩辺りまでに切り揃えた髪を、後ろの方で一つに束ねている深い灰色の髪の毛。先程の服とは似ている様で違う、膝下まで届いた黒を基調としたフリルが付いたゴスロリドレス、自分で開けたのか、狼の様な尻尾がドレスから覗かせていた。腕には白い手袋、腰の左右に二本の剣をぶら下げて、椅子に座っているハルアキの横に、まるで護衛の様に立っている。

言わずもがな。“元”商品番号三番、ジゼル・ライツァウィルトである。

何故こんな事になっているのだろう、とハルアキは回想したが、特に回想する程の経歴がなくて、やっぱりもう一度ため息を吐いた。

そもその原因はアズスルーを倒した後、ハルアキの横にくっついてたジゼルが何度か躊躇う様に口を開こうとしているのを見て、それにハルアキが何でしようと聞いた事である。

それでジゼルが決心したのかハルアキに向かって礼をし、こう言っただ。

「ぼくを僕しもへにして下さい！」

覚悟を決めていた声であった。

たっぷり十秒程放心した後、当然ハルアキは別に取って食いはしないと力説したのだが、ジゼルは頑なにそれは違うと否定して、結局ハルアキが折れる形となり今に至る。

その時から「あの」だの「その」だのハルアキを呼ぶ際にまごついていた言葉が迷わず「主様」に変わり、あれ、最初から詰んでたんじゃないかこれ、と再びハルアキは放心したのだが、これは余談である。

「……と、いうよりジゼルくん」

「ジゼル、です。主様」

「……………ジゼル、何で君ドレス何か着てるのさ」

「似合ってないですか？」

「いや似合ってるけどさ……………」

何で女装してんのさ、ハルアキはなんとなくそれを聞いてはいけない様な気がして口を閉じた。取り返しがつかなくなるよ、と心が訴えてくるのだ、無下には出来ない。

ふうー、と顔を腕で拭うハルアキを見て、不思議そうに首をこてんと傾げる男の娘、即ちジゼル。その仕草に思わず可愛いと思ってしまう、次いで何それこわい、そして恐ろしい子……………！ と冷や汗を掻いた。

服は汚れ一つなく、殆ど新品と言って差し支えが無い程だ。これについては奴隷会場だった準備室にずらりと並べられた服があったからである。恐らくは商品を着飾る用の類だったのだろう、幾つか露出とかの意味でヤバいのが数点見付かった。それらを除いた服達は、今現在子供達等が着用中である。まあいざとなれば【迷宮創造】の生活機能から作れる話なのだが。

くああ、と欠伸を噛み殺し、それに合わせて尻尾がぴーんと張っている。そんな女装が異性よりも似合うジゼルを見て、ふと先程の会話が頭を過ぎる。

『しっかし君……ジゼルくん、だよ。女の子だったのかー、かわいいいなー』

『え？ 残念ですが違いますよ』

『え？』

何が残念なのかは聞かなかった。理由は同上である。

まあ趣味なんじゃないかな、と結論を出して、ハルアキは椅子から立ち上がった。

『お出掛けですか？』

『違います。もう俺は寝るからジゼル、君も疲れたでしょう。はよ寝なさい』

『ならばくが部屋までお供しますっ』

『いやいらない』

『お供します』

ちよつと身を乗り出してジゼルは言う。

それに何処か犬の散歩に行く時の急かす様な面影を見て、耳と尻

尾ってそういうことかあ、とハルアキは一人納得した。

「いいから寝ろ」

「お供し」

「よしわかった俺がお前の部屋までついてってやるっ」  
「……………」

上から目線なのは決して主だからではなく年上だからと、一人こちてハルアキは自分達がいる部屋から出る。

【迷宮創造】で建てた屋敷は所謂木で洋風のもの、なので廊下も洋風である。等間隔に置かれたランプは魔法の光が灯されており、それは燃料の供給が尽きるまで消える事はない。

ここでいう“燃料”とは、【迷宮創造】のポイントの事である。  
例えば今この廊下を照らしているランプ『魔術洋灯』。

例えば生活機能で作成した水を好きなだけ出せる『無限の沸き水』。

これらの建物に関する光や、風呂を用意する為の水等は当然無料ではないのだ。

主に生活機能で作成したものに使われるこのポイントを『パフォーマンスコスト』と呼ぶ。しかし一聞かなりのコストが掛るのではないかと思われるその実体は、一日に数ポイント程。正に微々たるものである。

「あ、待って下さいっ」

とたとたとた、と軽く走ってで前を歩くハルアキに追い付くジゼル。その軽い足取りには、先程までの戦闘で、受けた傷の存在など微塵も無い。

大丈夫か、と聞いた際には既に元気を取り戻しており、痩せていた体すら肉付きが良くなっているものだから、ハルアキの驚き様は語るまでもない。

聞けば“魔族”から“影狼族”に《存在昇格》ランクアップしたのだという。

ハルアキも一度経験した事あるそれは、矢張りそんなにも凄いのだろうか、とハルアキは一人考える。

実際、ハルアキが《存在昇格》ランクアップした時は、外見実力共に然したる変化等なく、【迷宮創造】にとある機能が追加されただけだったのだが、矢張り自分だけが別なのだろうか。

恐らくは、別なのだろう。あれは“昇格した”というよりは“変更された”と言った方が正しい様な気がするからだ。

しかし、とハルアキは思う。

一人人が別人の様に改造される、それは何処か恐怖を感じないだろうか。自分が作り変わる、という事は自分の使っていた、馴染みある体を捨てるという事である。それが彼等は怖くないのだろうか。それとも、その恐怖を越えられるから《存在昇格》ランクアップが出来るのだろうか。

( いやいや。なら、“魔王”とか“勇者”とか先天的な奴等はどうなるんだよ )

少なくとも、ハルアキが憶えている彼女達は、そんなに脆くはなかった。が、それでも危うい状態になっていた人はいたのである。まあそれを支えた結果で恐らく、ハルアキはこうなっているのだが。

( 元気……だと良いなあ…… )



はあ、と哀愁漂う息を一つ。ジゼルが心配そうに声を掛け、それに何でもないと返事をする。

と、まあそんな益体のない事をしている内に、ハルアキはジゼルの部屋まで連れて行き、そして矢張り一悶着した後、年上権限で寝かし付けて、ハルアキだけが部屋を出る事となるのだが、割愛しておこう。

帰り道、やっぱりハルアキは物思いにふけていた。

ジゼルを部屋に寝かし付けた時、彼の武器等を取り上げないのは、矢張り自分が甘いからなのだろう、そう思いながらハルアキは廊下を歩く。

うわー、俺超あめー。と自覚しつつも、ハルアキは踵を返さない。返す気は無い。

要は、ハルアキはジゼルの事を信頼しているのである。それもたった数時間で、彼に背中を預ける事が出来るくらいには。

理由は色々ある。

例えば、死闘を共にしたとか。

例えば、自分が見てる限りはいい子だとか。

後は勘。それに容姿や態度で判断しているという部分も少なからず存在している。

あくまでハルアキは地球にいた一学生、人を見る目等そこまで養われてる筈がない。

当然、自分一人で全てが何とか出来るならばそっちの方が断然いい。しかしハルアキの即興で組み立てた計画上、一人では到底不可能なのだ。

ならばどうするか。

その答えは、多少警戒しながらも、仲間となった人を信用するしかないのである。後ろから刺される覚悟をしながらも、愚直にする

しかないのである。

(……やっぱ頼むかー)

しかし、それ以外の方法が、今ハルアキの手の内にある。

気乗りはしない。しかし、ただその為に、ハルアキはある人物がいる扉を開けて協力を、否、助けを求めるのだ。

「戻って来ましたよー」

ハルアキは、目の前の扉を開ける。

先程までハルアキと対談していた少女、エルティオネは、自身に与えられた部屋まで続く廊下を少し遅いペースで歩く。

少し遅い、といってもそれは、考え事をしている内に無意識に足取りが遅くなる程度の違いなので、別段珍しい事でもない。

(ハルアキ、【迷宮創造】、モンスター………)

エルティオネの頭を中を飛び交っているのは先程の話の事。恐らくは、というより確実に全てを話されてないと分かつてはいるが、それでも聞けた少なくとも情報思考の中で固め、またどんなことが出来るのかを予想する。

（【迷宮創造】に関する能力は無尽蔵に使える？ いやそんな筈はない、ハルアキは此処が十一階層だと言っていた。それにハルアキの“目的”と合わせて考えるならば、少なくともここまで敵がこられてはならない筈）

無尽蔵に使えるのならば、それこそ阿呆みたいに階層数を増やせるだろう。

それをしないというのは即ち、ハルアキの【迷宮創造】は“何か”を消費して初めて効力を現す類という事だ。

ではその“何か”とは何だ。エルティオネは考察する。

彼女が知っている力は二つ。

魔術を唱える為に必要な魔力と、自身の体を強化するらしい氣力の存在である。

らしい、というのは氣力とやらをエルティオネが使えないからであり、また見た事がないという理由からだ。とりあえず【迷宮創造】の能力と氣力の使い方を見てみると、氣力を燃料とする可能性は低い。

逆に魔力を燃料とするならば、自分がハルアキに協力出来る可能性は高いので、エルティオネはそっちに期待する事にした。

エルティオネが考えている事は、ハルアキに対する魔力の譲渡。

つまりはエルティオネの持つ魔力を、ハルアキに与えるという行為だ。彼が魔力を消費して力を発動させるのならば、それはエルティオネが出来る協力の一つの主力になる。

本来、血縁関係でもなければ不可能だと言われるその行為は、しかしエルティオネにとっては逆に潜り抜ける事が可能なハードルである。

エルティオネは、ぺろ、と舌で唇を舐める。

( まあその辺はとりあえず保留するとして、やっぱり何が出来るかよね )

エルティオネが聞いた情報から推察するに、かなり無敵の能力なのでないか、と彼女は思う。

だってそうだろう、モンスターを大量に創り出す事ができ、罨等も自由に設置出来る。内部構造も思い通りのままだろうし、果ては金銀財宝も創れてしまいかもしれないではないか。

一人が一国に及ぶ軍力を持つ、凄まじい力。

エルティオネは立ち止まり、いつの間にか握り締めていた手を開いてそれを見る。

乾いた空気に晒された掌は、随分と汗で濡れていた。

( ……………あの力なら )

自分の目的が、果たせるかもしれない。エルティオネは唾を飲み込んだ。

彼女だって唯ハルアキの言葉にほいほいと従う馬鹿ではない。

結果として助けてもらった身としては図々しいが、彼のスキルを自分の目的の為に利用しない手はないのである。勿論、裏切るのはない。協力してもらおうのだ。

故にエルティオネはハルアキに協力を惜しまないつもりだし、また彼の正体を露見させるつもりもない。当然、反抗等を企てた時に対する防御策も隠しているのだろうし、何よりあんな魔獣や化物の様な蛇がいる迷宮から、一人で生きて出られる姿等想像もつかなかった。

順当に考えれば、彼の下に就く事が一番早く信用を得る事が出来る筈である。

とりあえずはこの【迷宮】とやらから自由に外に出られるのを許可されるくらいの信用を得る事が目標だ。

「あ」

考えている内に、エルティオネは自分に割り振られた部屋の前に着いた。

木で出来た扉に付いた取っ手を捻り、押して開ける。

今の時刻はまだ夜なのに、部屋は明るい。これも【迷宮創造】のおかげなのだろう。

「ただいま、姉さん」

それに対する返事は無い。

部屋は質素だけど綺麗な作りであり、壁には服を入れる為のクローゼット。小さな円型テーブルが一つに、それを木製の椅子が四つで囲んでいる。向かいあった二つのベットの間に、外が見渡せる為の木枠の窓がついている。

窓から外を見れば、下に幾つか木やら“おんせん”とかいう露天風呂以外、見渡す限り何も無い。遠くの方に壁だけが見えて、日や月の光が当たらないというのに、完全な闇ではなくて、夜の月を浴びてるかの様に薄暗い。

これ等が全てあのハルアキという男が創ったと思うと、よくもまあ、という何とも言えない微妙な感想しか出てこない。

半信半疑なのがその感想の大部分を構成しているのも一つの原因だろうと思いつつ、エルティオネは入り口から見て右側のベットの上に腰掛けた。

手と下半身から伝わる感触は、ぎし、というエルティオネが予想

したのではなく、ぼす、という何とも柔らかいもの。

「……………」

柔らかい、どういうことが、柔らかい。

思わず目を見開いて、そのまま手を何回か降り下ろした。

(……………気持ちいいな、これ)

ぼす、ぼす、とベットが彼女の手を受け止めて形を変える。さぞ寝心地がよさそうだ、と少々感動しながらエルティオネは向かい側のベットの方に視線を向ける。

視界に入ってきたのは、一人の少女。壁に背を向け三角座り、膝と膝の間に伏せた顔からはぶつぶつと何かを呟いている声が聞こえている。

潤いを取り戻した金色の髪に、その間から覗く長い耳。

エルティオネの姉、フィオーナであった。

「姉さん、元気だして」

「……………」

「ベットふかふかだよふかふか」

「……………」

「……………」

ぶつぶつ、ぶつぶつ。フィオーナの呟きは止まらない。

エルティオネの声が聞こえてない訳ではない、無視されているだけだ。

はぁ、とエルティオネは深くため息をついて、頭を抱える。まったく、どうしてこう面倒な事になっているんだ、と。

そもその原因は、姉であるフィオーナの性格だった。

正義感溢れる淡麗少女、自身の主義に反するものは受け入れず、悪と見なしたものには徹底的に排除する。

その好きな人とも思える彼女の正体は、見方を変えれば酷いものとなる。

自分の基準価値が絶対だと疑わずに、勝手に人の善悪を判断し、尚且つ悪と見なしたものはその全てが悪と見なされ、最早どんな理屈も通用しなくなる。自分に力がないくせに口を出し、それに反故を申し付ければ「貴方は間違っている」と騒ぎ出す。何か事あるごとにもう駄目だとすぐ諦めて、壁にぶつかれば一人じゃ出来ないと縋りつく。

思考回路が妄信的で、諦めが早い。

己が正しいと認めたものは全てが正しいと信じ。己が悪だと認めたまものは全てが悪いと信じ始める。

別に自分の考えを主張する事は悪いとは言わない、ただ身の程とその時と場所を理解してから行動をして欲しいのだ。

そしてその被害が彼女だけに降り掛るだけならまだしも、妹のエルティオネにまで皺寄せや影響が来るのだから、エルティオネにとり迷惑甚だしい事この上ない。しかし面倒だという思いを持ちながら、エルティオネが姉から離れなかったのは、一重に姉妹としての繋がりを持っていて、更にはフィオーナの方がエルティオネを放そうとしなかった事に起因する。

だけれども、それもここまで。

幾等腹違いの姉妹だとしても、エルティオネの姉に対する心情は限界に達し、もう関係無い、の一言で済ませられる。

大体、である。

姉が大丈夫だから、と無理矢理連れていかれば、そこでやつぱり騙されて捕まる事から始まり。馬車や檻の中で延々とまるで“自分がこの世で一番不幸な人”とでもいうように自身の不幸を嘆き、それに同情やらを求めてくる。

そして溜っていた不満を抑えていたエルティオネに止めを刺したのが《イースリッション》での舞台裏での事である。

結論から言えば、フィオーナがエルティオネを自分の意思で突き放したのだ。

競売にかけられる前に、彼女達に行われた行為は身の洗浄である。少しでも自分達の値段を上げる為なのか、贅沢に水を被って体を洗わせられ、その後自分が着る洋服を渡される事になった。が着替え終わった後に、エルティオネの姉であるフィオーナが不安からか、恐怖からか、何処をとは言わないが盛大に濡らしてしまったのである。

当然自分達を洗った男は激怒し、再びエルティオネごと洗い場に戻され、洗われる事に。自分達姉妹が競売に出るのが延期されたのもこれが原因である。

そこで何が彼女の琴線に触れたのか、フィオーナはその男に惚れてしまったのだ。

元々偏見や妄信しやすい姉である、フィオーナは恐ろしい速さでその男に依存する事に決め込む事に。容姿は悪くない彼女である、男も気に入ったのか、上層部に話をつけてフィオーナを奴隷にするという返事をし、姉がそれに大感激。何故か目の前で行われている展開に馬鹿だなあと無視を決め込んでいたエルティオネまで巻き込んで。

そしてそれにフィオーナが嫉妬し、エルティオネを睨み始めた辺



りで起きた事が 先程知ったのだが ハルアキの【迷宮創造】  
が起こした地震である。

当然姉もエルティオネも混乱し、何が起きたのかという疑問に捕  
われるのも束の間、何か地響きが近付いてくると気付いてからす  
ぐに、男を含めた彼女達は、裏口から突撃してきた獣に囲まれる事  
となった。

その時だ、男がエルティオネを獣達に対する餌として、餌として  
投げ飛ばしたのは。

その時にエルティオネは見たのだ、自分を投げ飛ばした男に対し  
て縋り付いているのを。

その後、結局エルティオネは獣に襲われずに済み、男は壁を突き  
破り入って来た巨大な蛇に食われて事なきを得て、その後舞台会場  
まで走って行く獣達に付いていきハルアキ達と出会ったのである。

と、まあそんなこんなで今に至る訳なのだが、矢張り問題はフイ  
オーナである。

フイオーナが愛した、自らを“用心棒”と名乗った男 と言っ  
ても時間にして数分程だったが を殺したのは、直接的にはあの  
蛇だが、間接的に、つまり根本的犯人はハルアキなのだ。

フイオーナにそれを知られるとなると、それは非常に不味い事  
になるとするのはまず間違い無い。そして、それはハルアキに信用を  
得ようと思っているエルティオネにとり、足を引っ張る重りであ  
った。

「……………どうするっかなあ」

都合良く、ハルアキの雑な演説の際に気絶していて、何も聞いて  
いないし見てもいない、何も知らない姉。彼女をどうやってハルア

キに対して無力化させるかが、自分の当面の課題だと、エルティオネは天井を見上げてため息をつき、姉の事は放って置こうと決めてベットの中に潜り込む。

ベットは冷めており、ひんやりと心地良くエルティオネの体を包む。

ふわぁ、と大きな欠伸を一つ掻いて少女の意識は静かな微睡みの中へ。

「おやすみ」

そう言うってから、エルティオネは瞼を綴じた。  
これからが大変だ、そう心の中で思いながら。

夜が明ける。

## 序章「04（後書き）」

序章、了。

どんだけ序章長いんだよとか思われそうですが、これで序章は終了です。コメント欄にも書いてある通り、様々な場面はカットしました。やー。

奴隷から解放したら惚れるというテンプレをブツ壊していますねこの姉妹。ジゼル君はまああれです、何かあれです。気にしてはいけませんね。

余談ですが、視点変更とか気にしてみたり、会話文が乱雑じゃないか気を付けて書いてみました。また、この回で登場させたかったキャラがいたんだけど、やっぱり小出しにした方がいいんじゃないかしらん。と試してみたのでそれは次回に回す事にしてみました。

あのエロゲ姉弟とかどうなったのかも次回に回し、そして次の章の始まりを含みつつ迷宮管理の様子が書けたらいいなと思ってますですよ。

……………もしかしたらエロゲ姉弟は出てこない可能性があります

が。

あとは、変な始めになると思いますが、まあよせの作品何てそんなもんだと思って下さい。

話の副タイトルはちよつと格好付けて、

次回『A harbinger of lemmings』。

超展開と言われても、気にしない！)

《イースリツション》から数日。

リシユカ王国首都バスラノ。

その中心にある王城　ムーグル城は、上空に立ち込める雲に遮られ、太陽の日差しが当たらなくても明るさを失っていない。それは蝋燭の様に揺らめく光ではなく、付加させた物に光を発する魔術

『照明ノライト』のおかげに因るものである。

直径百八十メートル並の土地に建てられた王城。その一室では現在、リシユカ王国の貴族達が集まり、所謂会議というものを開いていた。

会議室の最奥　リシユカ王国の貴族よりも一際目立つ席に座っているのは、見た目中年の男性。色が薄れた金髪、白が混じった顎髭を生やし、目の隈が遠くからでも分かる程酷い顔。全体的に細く見え、事実に質的に痩せている、というよりは栄養が不足している様な、そんな所謂不健康な印象を受ける体格。

彼こそがバースルダイグ・グリッドバルム・ゲツテ・ライル・セルグリウツド　リシユカ王国の、国王である。彼は長年に次ぐ『異界大戦』が終わり、その約一年と半後にイスリツシヨ奴隷競売を開く事になった原因である“奴隷政策”を構じた一人であり、その許可をだした張本人である。

彼の右の席には、一人の若い男性。

一般的な男の魅力でいうと、出ていては余り好印象を受けない部分　つまり、腹がぶくぶくに膨らんでおり、腕や足もそれ相応に贅肉が付いて、膨らんでいる。顔は脂でテカテカと光り、周りに付いた肉のせいで、瞼が下がり、目が細まっている。

彼は国王の三人の子の一人。リシユカ王国が唯一の王子であり、常人ならば楽々座れる椅子に、窮屈そうに肘をついて座っていた。

国王の頭にある王冠が、部屋のランプに付加されたに『照明』の光を浴びて、鈍く光る。

「結果を申せ」

一人の声が部屋に響く。  
弱々しく、また地から出す様な低い声は、誰にも遮られる事なく  
虚空に溶ける。

「はっ」

国王の声に反応して、王とは反対側に佇んでいる人影の一人が、  
何かを乗せた台を手に持ち彼等の中から前に出た。

かち、かち、と。

前に出た者が歩く度、硬い物どうしがぶつかる音が、手に持った  
台の上から鳴る。

台の上に鎮座された物は、一、二……計三個の珠。瑠璃色に光り、  
爛々と輝くそれは、自身の中心に黒点の様に鈍く光るものを内包さ  
せていた。珠の表面は誰が磨いた訳でもないのに綺麗な真円を画き、  
またつるりとした光沢を魅せている。

それはまるで宝玉のようで、男は頭を下げたまま、手に持つ珠を王  
に掲げ、口を開いた。

「宮廷魔術師に鑑定させた所、これ等は全て純粹なる『魔石』。  
即ち、『原石』にてございます」

しん……、と一拍の静寂の後、ざわめきが広がる。

「おお……!!」

「なんと、あれが全て……」

「これで我が国の力は……！」

周りにいる貴族達が、欲を含んだ笑い声が洩れ、そして顔を見合  
せこれからの打算を話始める。

『魔石』とは、いわば魔力をその内に秘めた宝石である。

一般的に空気中や物質中に存在すると思われる魔力が、土の中の  
鉱石や、エメラルド、ルビイと呼ばれる様々な宝石内に溜め込まれ  
た貴重な物質だ。

大小様々、多種多様な『魔石』は、各々違う特長を持っている。

例えばアルルリンと呼ばれる蒼い宝石の『魔石』は水属性の魔力  
を溜め込み、更に水属性の魔術との相性が良く、リファイラという  
紅い宝石は火属性の魔術と相性が良い。

更には『魔石』の種類事に、魔力の内包量すら違うのだ。

拳大程の唯の鉱石の『魔石』と指の第一関節分くらいしかない宝  
石の『魔石』では、断然後者の方が量も質も良いのである。

その中でも更に貴重だと言われる物が、『原石』の存在だ。

宝石等にもあるように、下手に加工したそれよりも、その素材と  
なる原石の方が貴重である。何故なら原石が無ければ、そもそも宝  
石などが生産される筈が無いのであるからだ。

そして、『原石』と呼ばれる物には、魔石の周りの環境等による  
“属性汚染”なるものがなく、純粋な魔力 即ち未加工の魔力が  
内包されているのである。

未加工の魔力の一体何処が魅力的なのか。

その価値は『原石』の利便性にある。

未加工の魔力、それは例えるのなら無色の水である。それ故そ  
の魔力は所有者の思う通りに、自由自在にその性質を変化させる事  
が可能となるのだ。

例えば水属性の魔力を持つ『魔石』があるとしよう。その『魔石』  
は水属性の魔術には使用できるが、火や土等の他の魔術には適用不  
可能なのである。しかし未加工の魔力を持つ『原石』ならばどんな

属性の魔術にも適用可能だし、内包されている魔力を取り出して、術者の消費した魔力の回復だって行えるのだ。

魔力とは人各々で違うもの、いわば適合者の無い血液型のようなものである。本来時間を掛けなければ回復しない魔力、それを即座に回復する事が可能となる『原石』。更には一般的な所でも様々な使い方が出来るその貴重性は、元々かなりの高級品である『魔石』マジックウエポンや『魔武器』の軽く数倍は越える。

単純な話、『魔石』と『原石』では、『原石』の方が応用性が桁違いなのである。

貴族達の会話は続く。

その内容は国の詳しい内情を知る者にとっては聞くに耐えず、しかし知ろうともしない貴族達は彼等の思いとは裏腹に、欲心を隠そうとする気配など失われていた。

「これが彼処から取れるのならば、我等も下に見られなくて済むな」

「まったく、まったく」

「あの忌々しいギョन्दルダームの糞共が

!!!」

そうだ、しかり。

会議室に、彼等の文句が波紋の様に広がっていく。それに迷惑そうな顔をする貴族は、一握り程。第一王子はその例に漏れており、ここにはいない者達に、決して聞こえぬ皮肉を語る貴族達の中に混じっており、それを傍目に国王は深いため息をついた。

堕ちたものだ。

しかし、それは自分にも言える事か。国王、バースルダイグは心



の内で苦笑する。

暫く、彼は思案した後、ゆっくりと口を開く。

「……………王領直属の軍は、確か一万程だったな」

「はっ、その通りであります」

リシユカ王国の国民総数は四十三万。更に加えて三万人程の奴隷で、計四十六万程になる。

何故、奴隷制度が適用されて一年と半年、これ程までに奴隷の数が多いのか。理由はリシユカ王国の上部に位置する国が原因である。そこは奴隷制度など制定されておらず、奴隷の存在は認められていない。がしかし、世の中にはいるのだ、どうしようもなくなり、どんな手段でも成り振り構わなくらいに切迫している人達が。

後は語るまでもないだろう暮らし等で貧困に襲われた人々は、己の身かその肉親を差し出す事等しか方法がないのである。

話を戻すが、リシユカ王国の王領の国民は全四十六万の内約半分二十四万超である。その内の四パーセントが軍に所属しているというのは些か多いと思われるが、これは国王の力を示しているのと、他の貴族や周りの大国に対する牽制でもある為のものだ。

それをどうするというのか、その答えは。

「……………四千、いや五千程、動かす」

ざわり、とどよめきが走る。

迷惑そうな顔をしていた貴族達の一人が、ああ、と呟いて、こめかみを押さえながら天井に顔を向けた。

軍の攻め入る場所は王都の南方、トリューシャ平原に現出した

それ。

幾人もの巨人が列を成しても行軍出来る巨大な扉、無くなつた草原。誰かを迎えるために開いている扉は、外から光を照らしても内部は見れず、光を遮断する漆黒の膜が貼られている。平原があつた場所は全て紋様が彫られた石に覆われており、緑だつた大地が、一夜にして石の白と変わっている。リシユカ王国にいる“異世界人”達が挙つて【迷宮】と称するものへ。

先程の『原石』は、全てあの【迷宮】から退く際に襲い掛つて来たモンスターの死体から、体内に光る物を見付け、それを咄嗟の判断で持ち帰つて獲れた物であるのだ。

『魔石』を体内に溜め込むモンスターは確かにいなくはない。が、その存在は非常に見付け難く、半年に数回目撃されれば運が良い程である。ましてや『原石』を体内に存在しているモンスターなど知られた事など無い。

普通ならば信じられる出来事ではないが、その証拠と言わんばかりの『原石』存在。つまりは確証はないが、あの【迷宮】とやらは宝の山なのである。

その事をこの場にいる貴族達は、何人かが知っていた。故に。

「ならば私も参加しましょうぞ」

「おお、侯爵殿が出るのなら私もですよ」

「我がイリーズ軍の力を見せてしんぜましょう」

次々と、貴族達から声上がり、瞬く間に声が広がってゆく。こつこつという時に限り、何故だか勘が冴える彼等の頭は、この場の時も例外ではなく、鋭く働いていた。

それを傍目に、バースルダイグはやってしまった、とでもいうような表情を一瞬とり、すぐに諦めた様な表情に変わる。

そうだ、彼等は、欲しか出さない者達ばかりだったではないか。そう思っても、後の祭り。王である彼は、欲に駆られている貴族達を見る事しか出来ていない。

そして次の声によって、更に彼の表情が険しくなったのは気のせいではないだろう。

「父上、私も参加しますッ！！」

「……………なんだと？」

「私も出陣すると言っているのです！！」

唾を飛ばしながら大声で喚くのは第一王子。彼は膨らんだ腹をぶよぶよと揺らしながら、父である国王に、不満をぶつけていた。

「私の華麗なる魔術により、私の強さを見せ付けてあげましょうぞ！！」

ブヒイー、と汗を拭いながら、王子は言う。それに合わせて「おお！」と、「流石！」と、周囲の貴族が囁し立てる。

リシユカ王国第一王子、彼は確かに魔術としての腕前はいいが、残念ながら良くて二流の中堅程度。ギルドランクでいう“D”が良いとこだ。それで頂上にいると妄信しているのは、一重に育て方を間違えたせい、それとも周りの環境のせい。

どちらにせよ甘やかされて育てられたには間違いなく、事実彼は国等の政策に関しては無能以下である。父である国王が決めた“奴隷制度”に大喜びしていた程だ。

更には気に入っていた奴隷が全て【迷宮】内部に置いていかれ、それに激怒していたのも束の間、王が見ていない内に誰かが余計な

事を吹き込み、新たな奴隷を与えたのだろう。彼の後ろには何人も女性の奴隷が、彼の後ろに控えていた。

藍色の髪的女性、スレンダーな体を持つ女性、何人も美女をはべらせて。

「最強の証、見せてあげましょうぞッ！」

自分の息子は何を対価に彼女達を手に入れたのか、国王の頭を悩ませる種は、減る事を知らない。

「ふっ」

「お疲れのようで」

「まったくだ」

会議を終えた後、国王　　バースルダイグは一人の男に話し掛ける。

壁に寄り掛っているのは、足まで届く長い黒ズボン、高級に飾られた長袖の服を皮で出来た丈夫なジャケットの下に着ている彼の髪と目の色はハルアキと同じ様な、紛う事なき黒。見れば日本人特有の、東洋風の顔立ちの彼は、事実この世界に召喚された日本人つまりは“異世界人”だ。

二人いる内の近衛師団副隊長が一人の彼は、呼び出された事が気に食わないのか、少々顔を不機嫌そうに歪めている。

「　　という訳だカイト、頼めるか」

王は言う。

頼みとは、周りの国に知られる事なく、軍を動かす事。

本来そんな事は『分類/カテゴリ』『賢者』クラスでも難しいのだが、他ならぬ彼が持つ 異世界人だけの 【魔道】とは別の特別な存在、【スキル】。そのカイトの【スキル】ならば、それは可能となるのである。

黒髪の青年 カイトはにやりと笑い、国王にその表情を向ける。

「いいけど、報酬は忘れるなよな」

「何を求める？」

「勿論、これ数人。極上のな」

カイトと呼ばれた彼は、片手で丸を作り、もう片方の手の指をそれに。

つまりは、女性の奴隷である。

国王は頷き、カイトも満足そうに首肯した。

「あ、それと俺も【迷宮】探索に参加するわ。 多分<sup>キョト</sup>清人の奴も参加するから」

「……………そうか」

「それじゃあ、ちゃんとやりますよ」

日程等の打ち合わせを終えたカイトは、肩を回して部屋を出る。

その姿を見届けて、バースルダイグは座っている椅子に背中を預ける。ふう、と息を吐く彼は、誰が見ても疲弊していると分かる程

の雰囲気、溢れさせていた。

リシユカ王国は大陸のほぼ中心に位置しているからである。

大陸のほぼ中心、つまりは【人間界】と【魔界】の境界線上に存在していた国は、戦争が起きた直後はどれも、当然の如く激戦区だったのだ。

しかしその当時のリシユカ王国も、周りの国々にとっては、比べるまでもなく小国国家であった。小さい、という事は国力の弱さを意味し、また軍事力の低さを示している。

そんな国がどうやって《異界大戦》の激戦区を生き残ったか。

単純だ 答えは“借金”である。

金を借りて、その資金を軍事費等に当て、また傭兵達を雇う際に消費する。それを繰り返し、リシユカ王国はその名を失わずに、《大戦》を生き残ったのだ。

しかしだ。金を借りた、というのはちゃんと返さなければならず、そして引き延ばしに使っていた“戦争が長引いているので云々”という言い訳は、《大戦》が終結してしまい通用しなくなってしまう。小さいとは言っても国は国、踏み倒す事が出来れば とは考えたものの、残念ながらそれは出来ない状況なのだ。

何故なら、資金を借りた所は、ゴコロブ・バルネ・アガルゴニツシユ。今や大陸にその名を轟かせる大商人が一人。彼を踏み倒すという事は、他国から貿易出来なくなる事に等しい。故に、利子を付けて、きちんと金は返さなければならぬ。故にバースルダイグは苦肉の策として、最後の策として“奴隷制度”と《イースリツシヨン》の存在を許可したのだ。

しかしその《イースリツシヨン》も、恐らく今回の騒動で駄目に

なっただろう。

だがその代わり、【迷宮】の『原石』という存在を手に入れた事に、バースルダイグは安堵を覚えている。もしかしたら、安定した高収入が手に入る可能性が高いのだから。

彼が先程、軍の出勤を即断したのも、この“借金”が理由だ。運が悪い事に、次の利子を付けた借金の一部が返済出来なければ、《イスリツション》会場付近の平原の土地の所有権が、全てゴコロブの方に移るからである。

彼も《イスリツション》会場から一緒に脱出していたので、死んだというのは先ず有り得ない。

しかし、リシュカ王国はこれから繁栄するのだと、バースルダイグは笑う。

近い未来、リシュカ王国は大陸に名を轟かせる大国になると、そう信じて。

日は沈み、夜が、再び訪れる。

明けぬ夜が無いように、沈まない昼もまた、無いのだから。





血の臭いが拡がっていた。

広大な平原。曇天の空から数本の光の筋が漏れ出している。降り注いでいた紅い雨は既に止み、緑の大地を赤に染めて、海を作っていた。

血の台地に根を生やしているのは、折れた剣、欠けた斧、破れた盾に、傷だらけの鎧。突き立てられた旗が、支える者なく風にはためき、隙間なく敷き詰められているのは、夢に敗れた兵共<sup>つわもの</sup>。

ずしん、ぐしゃり。ずしいん、べきやり。

地獄を終えた世界。恐ろしい程の静けさが辺りを包む中、重い金属の音が。

重厚な足音と共に、地面からは鉄がひしゃげる音がする。歩むのは巨体。潰れるは死体。

一匹ではない。二匹でもない。何匹も、何十匹も、何百匹も。群れとなつて、軍となつて。

彼等は飢えている。血に、肉に、骨に、臭いに、空気に、敵に、戦に、戦場に、彼等は飢えている。数多の戦場を練り歩き、時に襲い、時に襲われ。しかし彼等は満ちず、まだ足りない。まだ、足りない。

次の戦場は何処にあるか。

軍の先頭、一際目立つ者<sup>つしき</sup>が、向きを変えて進み出す。それを追う様に、付いてく様に、群れの列が曲がる。

ずしいん、ぐちゃり。ずしいん、ぐしゃり。

進め。進め。進め。

彼等は歩み、進軍する。  
彼等は歩み、前進する。  
行軍せよ、丘の向こうへ。  
誰かが呼ぶのだ、戦は此方と。  
彼等は進む。楽土へと。  
彼等は進む。戦場へと。  
彼等は丘を越え、そして  
。

何処か、別の世界の話。

【迷宮】第十一階層目    【住居層】。  
ハルアキがいる場所は、『生活機能』で制作した屋敷の部屋の一つだ。

質素だが確りとした作り、部屋の脇には素朴なテーブル、エルテ

イオネと話した談話室と大きく違い、人が二、三人は横になれそうなベットが一つ。窓からは太陽の様な日射しが差し込み、部屋の床を照らしている。

地下なのに、何故明るいのか。

実の所、ハルアキにも何故かは分かっていない。

しかし、それは迷宮の外、つまり地上に太陽が昇っている時間ならば迷宮は一定以上の明るさを保ち、月が昇る時間になれば、それ相応の明るさしか灯さないという仕組みという事は分かっているのだ、ハルアキは別に気にしてはいなかったりする。

一時期、この様な謎について考えたりしてみたのだが、ゲームで液体を飲めば体力が回復したり鳥の尾で瀕死の状態から復活する事を、“どういう理屈で生き返るのか”という事を考えないのと同じ様に、これも“そういうもの”という結論に終わり、結局はあやふやな認識の範疇に収まっており、またこれからもあやふやなのだろうという事で割り切っていた。

ハルアキはそんな太陽の日射し、いや『迷宮光』とでも言うべきだろうか。兎も角、光を浴びながら、ふわあ、と口も隠さず欠伸を掻いた。それに、椅子に座るハルアキの横に立つジゼルが苦笑する。

彼の格好は相も変わらずフリルがそれなりに付いた黒のドレス。

一つにまとめられた深い灰色の髪が、さらさらと動く。

因みに、今の時刻は昼を過ぎた所であった。

解放した奴隷達は昼食を終えて、今頃は皆で遊んでいるのだろうか。親交は深めときたいっは思いつつも、今は【迷宮】の警戒は怠ってはならぬと戒めて、ハルアキは【迷宮創造】のコントロールドール面を開き、【迷宮】の状態を観察する。

『【迷宮・NOName】』

階層：全十一階層 詳細

【迷宮層】：十階層迄

詳細

【住居層】：十一階層目

詳細

モンスター数：「2157」

詳細

侵入者：「0」

詳細

オブジェクト数：「228個」

維持コスト：「504p/日」

詳細

( 特に異常無し、か )

半透明の画面に表示された文字を読んで、ハルアキは、ふむ、と息をつく。

既に《イーシリツション》から三日の時間が経ち、その間、特にこれという出来事もなく、ハルアキ達は【迷宮】の中で生活している。今の所、元奴隷達のいざこざも殆ど発生せずに、問題なく彼等の親睦は深まっている筈である。まあ、それは問題ではないのだが、気になる事項は【迷宮】の方であった。

【迷宮】が出現してから早三日。

その間一度も 元奴隷達に聞いた所に因ればリシユカ国というらしい 彼等の動きが全く無いのである。競売を 蛇竜蜥蜴ノゲルアトウル 達であれだけ荒らしたのだ、直ぐ様報復だなんだとやって来るのを覚悟していたのだが、どうやらそんなに軽率には動かないらしい。

冒険者でも送ってくるのではないか、とも思ったが、本当に誰も【迷宮】に入ってこない。少々懸念事項が増えた事に、ハルアキは頭を抱えたい気持ちに襲われた。

ハルアキが心配しているのは、この迷宮が“魔王”が管理している、と思われる事であった。ハルアキ自身の『分類/カテゴリー』は“魔王”ではなく“異世界人”なのだが、もしもこの【迷宮】に“魔王”がいると勘違いされれば、必ず動く者達がいる。

“勇者”。

一騎等万、最強無敵。そんな形容詞が付く、正真正銘の強者達。基本的に、“勇者”達は“異世界人”達より数は少ないが、強い。本当に強い。少なくとも、ハルアキが戦った彼等はそうだった。

彼等、彼女等は戦闘の経験が豊富で、場数も踏んでいる。ハルアキ達“異世界人”が【スキル】で手に入れた借り物の実力ではなく、それを血と汗と涙で地に根に生やしている者達の集まりである。

【スキル】に頼るだけの“異世界人”辺りならまだ何とか【迷宮】自体で対処可能なのだが、正直“勇者”を相手にするならば、ハルアキ自身が出ばらなければならず、しかも勝てるかどうか分からない。

勿論、その強さの分獲られるポイントは大量だが、それだけである。ハルアキは人間勢の戦力を減らす事が目的ではないし、また他の勇者や実力者に目を付けられる事も望んでいない。何よりメリツトよりもデメリットの方が多いので、相手にしたくないものなのだ。そんな、今はハルアキにとって迷惑な彼等が「魔王討伐」の看板を掲げて【迷宮】にやって来られるのは、厄介極まり無いのである。

しかし、【迷宮創造】は基本的に【迷宮】に入った者を迎え撃つ、という受動型の能力なので、此方からはどうにも出来ない。それが

歯痒くハルアキは唸るが、現状は何も変わらない。

いくら頭を捻っても、本当にそっちの対策は何も思い付かないので仕方なく、どうか来ませんようにと祈りつつ、ハルアキは【迷宮】の迎撃準備に精を出す事にした。

「『罨作成』」

ハルアキがそう言うと、表示画面が切り替わる。

《『罨作成』を選択しました。『罨作成ユニット』に投入されている残りPは「1036720p」です。追加しますか？》

ポーン、と軽快な音と共に現れた、新たな画面と共に、これまた無感情な声が画面の文字を読みあげる。ハルアキは十秒程考えて、やっぱりいらぬか、と思い、その画面を閉じる。【迷宮】に設置される罨は、ハルアキが使う【コマンド】を除き、ほぼ自動的に創られ、また【迷宮】の何処かに配置される。ハルアキの能力はあくまで“創造”であり、何かを創るまでが自身の役割で、設置や調整等はその中には入っていないのである。

どこからがハルアキの役目で、どこまでが【迷宮創造】の自動機能なのかは、使い手さえなんとも言えない境界線が引かれている。言わば半自動機能、と表せるだろうか。

因みに、【迷宮創造】には「事典」なる機能が存在しており、基本的に表示されている罨や建物、モンスター等を閲覧する事が可能である。例えば、アズスルーを倒した罨、【獄門鬼の砲弾】はこんな風に。

No.5988：【獄門鬼の砲弾】 詳細

「ロックされています」

『使用P：「50000p」』

設置可能範囲：【迷宮層】最下層階 - 2階層

設置可能台数：「0 / 3」

設置所要時間：「00 : 45 : 00」

再設置可能時間：「03 : 00 : 00」

詳細

「00 : 00 : 00」

「00 : 00 : 00」

「00 : 00 : 00」

実行可能コマンド：有

選択

【セレクト】

【クイック】

【ポイント】

【リロード】

【  
E

と、まあこの様に色々并表示され、更にこの下の項目には“罨”の全長の表記、効果や有効射程諸々の説明が記載されている。

設置可能範囲は、現在の【迷宮層】最下層　つまり十階層目から二階層分、つまり十、九、八、階層の何処かに設置される、という事だ。設置可能台数の「0 / 3」は、最大三台までこの罨が設置可能であるという表示である、また【リロード】という【コマンド】を使用すれば、設置場所は変わらないが、二度目の発動が可能となる。

再設置可能時間はそれぞれ別々にカウントされる、つまり一台設置した後には再設置可能時間を待たなければ二台目の設置が出来ない、というわけではないという事だ。

「ロックされています」という表示は、ランダムに選択されて設置される罨の中、1000p払いこの項目を入れる事で、勝手に設

置されなくなりますよ、という役割を持っている。

これは非常時の事態に陥った際、使用したい罫が既に設置数が限界になっていたり、再設置可能時間中で使用出来ない事を防ぐためだ。一応、これらの問題はポイントに余裕がある場合に限り、【コマンド】で何とか対処できるのだが、ただでさえ恐ろしいまでの使用コストが掛るのに、それを更に倍増する事になるのは、何としても避けたい事態である。まあ実の所、今はそこまで必要性は無いのだが、こういう事は忘れない内にやっておいた方が良いという判断で、ハルアキはこの項目を入れている。

ハルアキは幾つか長し読みした後、再び新しい画面を開く。

【モンスター生成場】 詳細

『投入残P：「830260p」

設置台数：「22/22」

状態：「異常無し」「稼働中」

消費上限：「38500p」

生成可能種：「『

さて、画面に表示されているのは【迷宮】で創造されたモンスターに関わるものだ。

一階層を増やすごとに設置可能台数が「2」ずつ増える仕組みになっており、今の所一階層目を除く全階層に二台ずつ設置されている。

各階層事に設置しなければいけない理由は、単純に階層ごとに設置出来る台数が二台という事（一階層目は例外として四台となっている）や、モンスターの生成速度の短縮、及び各階層のモンスターの補充等が素早く出来ないからだ。

例えば一階層目にしか『モンスター生成場』がないとすると、八階層目や九階層目にモンスターを補充するのにどれくらいの時間が



掛るだろうか。ましてや、他の階層にモンスターを補充しながら、尚且つ自身に割り振られた階層のモンスターも生成せなければならず、非効率的なのだ。

そして、これはハルアキが忘れていた事だったが、『モンスター生成場』は一定以上のポイントを投資しても余り意味がなかったりする。というのも理由があり、『モンスター生成場』の画面に表記されている『消費上限：「38500p」』というものが原因である。

この“消費上限”というのは即ち、投入されたポイントを一度にどれだけの量を使えるか、という意味で、『モンスター生成場』の場合、“モンスター一体の生成の際”にどれだけのポイントを使用出来るかを示している。モンスター生成で創られるモンスターの強さは、単純に決められた“ポイントの量”で決定される。また、「30000p」から始まるこの消費上限は、条件さえ満たせば増えていくという仕組みになっているので、上限が上がれば上がる程生成されるモンスターの種類と強さは増していく。

これは『畏作成<sup>トラップ</sup>』を創る仕組みも大体同じ様なものであり、「25000p」から始まった消費上限は「25500p」になっている。

ここであれ？ と思った人がいるかもしれない。

なんで消費上限が「25000p」だったのに、消費ポイントが「50000p」の【獄門鬼の砲弾】をハルアキ使えたのか。

実は、前のスキルからある特殊機能 【コマンド】の【セレクト】というものがあり、それを使用すれば、消費上限以上のものを作れる、という効果を持っているのである。「×10倍」という恐ろしい代償を払うことになるが、消費上限が既定値に達するまでは、お世話になるコマンドの一つなのだ。

現在この『モンスター生成場』で作れるモンスターの種類は、大きく分けて七種類。

《イースリツシヨン》の舞台で暴れた ライオハルト や ブラッドパンサー の様なビーストタイプ、所謂“魔獣型”。

丸太の様な腕を持つ怪力のモンスター オーガ や大きくても一米ートル四十センチ程の身長しかない褐色の小人 ゴブリン、二足歩行をするかなり犬寄りの見た目を持った コポルト の様な“亜人型”。

空を飛び回る狂暴な血吸い蝙蝠 キラーバット や、300pから800p辺りで生成される クックロウ 黒鷄 等の“鳥獣型”。

人間とトカゲを足して二で割った様な体格を持つ リザードマン や、野生の蛇よりも一回り大きい蛇の ドラッグスネーク 這蛇 “爬虫類型”。

中に数多の虫型モンスターを孕ませた ジャイアント・コウリン 巨大繭 に、頑丈な甲殻を持つ巨大な昆虫 ドロップ・アイビ 一角黒虫 の様な“昆虫型”に、獲物を幾重もの蔦で絞め上げる フェアリーエッグ 人喰い蔦、攻撃性が高いモンスターを生む妖精の薈 等の“植物型”。

液状生命体である スライム にその強化版である レッドゲル 赤水 という“液体生物型”。

今の所はそこまで種類は無いが、恐らくは条件を増やせば、もっと種族を増やせる筈である。根拠はハルアキが前使っていたスキルゴレムの時に存在していた 一般的に『魔道人形』という、魔力で動くモンスター達のタイプである“人形型”というものが、今現在の『モンスター生成場』の情報に記載されて無かった事に起因する。

ならさっさと種類増やそう、という訳にもいかない。というのも、前の時はいつのまにか追加されていたので“人形型”の生成可能条件はハルアキは知らないからである。

これら消費上限やモンスター生成の種類等がリセットされている

事から、どうやら【迷宮創造】は本当に次世代機になっていたらしい。ハルアキがこの事実を知った時、どうせなら引き継ぎ機能とか搭載してるよ、と 疑問符は付くが 自分の能力に内心で愚痴を溢したのは仕方が無いと言えよう。

まあ、今回も知らない間に追加されていればいいなあ、とハルアキは割り切る事にした。

さて、と息を吐き、ハルアキは【迷宮創造】のコントロール画面を閉じた。

何かした方がいいんじゃないかな、何かやり忘れてるんじゃないかな、という思いはあるが、実際何をやるかなんて思い付かないし、自分の少々過剰な心配性を少なからず理解しているので、ハルアキは多分大丈夫でしょうと思うことにした。

それよりも今は、自分の膝の上を占領している存在である。

ハルアキは心持ち視線を下にやり、自身の膝の上に座る白い頭を視界に入れた。

「リュネさん、ちょっと膝から降りてくれませんかね  
「いやー」

一刀両断、ばっさりである。

まあ軽いから別にいいんだけども、だけど地味に辛く、というよりも少しだけ感覚がなくなってきた始めているんだけども、とハルアキはため息をついて、彼女の頭に顎を乗せる。

何故か二、三歳程若返った体にとって、たった八歳の少女 否、  
幼女の重さはそこまで苦を労さないのだ。

ハルアキは今一度、自分の膝上にのる存在を観察する。

背中まで伸びた白いアルビノの髪、肌は雪のようで、子供特有の柔らかさを持っている。解放した子供達をまとめて風呂に入れた際に

使った染髪剤の匂いが、膝の上に座る彼女の芳しい芳香と混じり、ハルアキの鼻孔をくすぐり、何とももどかしい。

「おもいー」

ハルアキの顎が痛いのか、ガクガクと、顎を乗せた彼女の頭が揺れる。

ハルアキはすぐに顎を放し、揺れた視界を元に戻した。

「じゃあ膝からどきなさい」

「ぶー、本当は軽くて気持ちいいとか思っているくせにー。このロリコンっ」

「心を読むな、俺はロリコンじゃない。とりあえず降ろしますよー」

有言実行。ハルアキは彼女の両脇に腕をやり、ぐいと持ち上げて膝から降ろす。

ぶー、と文句を垂れながらも、彼女は抵抗らしい抵抗をせずにその行為を受け床に立つ。

二本の裸足が絨毯の敷かれた床に軽く沈み、その感触に顔を綻ばせ、リユネと呼ばれた幼い少女はハルアキの方を振り向く。

「むふー、ありがとうっ！」

「どーいたしました」

ハルアキは少女の頭を撫でながら返事を返す。

わしゃわしゃと撫でられるのが心地いいのか、彼女は綺麗な金色の双眸と、その白くツルンとした額の中心にある銀色の瞳を気持ち良さそうに細めながら、ハルアキの事を見つめていた。

“かいじ 覺”。

それがこの少女の『分類』<sup>カテゴリー</sup>だ。

人の心を読む事ができ、嘘は通じず、また感情なども汲み取ることが出来るそうだ。本人談なので、らしいが付くが。

『分類』、『称号』、『スキル』もしくは【魔道】は、三日前に馬車の中で表示された。所謂『ステータス画面』で確認が可能だ。但しその詳細までは知る事は叶わないので、そこから先を知る事が出来るのは本人だけとなるのである。

三日前、《イスリッション》での騒動が終え、嚴重にされた檻の中に閉じ込められているのを奴隷達を解放していたハルアキ達が発見し、幾重のも施錠を開けた中に、彼女はいた。ハルアキ達は一先ず少女を檻から出して、何かを封印する様に巻かれた目隠しを解いて以降、何故か彼女はハルアキに懐いたのだ。それはもう有り得ないくらいに。

この前ハルアキがエルティオネと対談した時刻が遅くなったのも、離れるのが嫌と言うこの少女が寝るのを待った為であった。確かに助けた人物に頼るのはいいとしても、これはもうハルアキの事を昔から知っている様な感じで懐いてくるので、ハルアキもなし崩しにまあいいや、と諦めた程である。

ジゼルの時もそうだが、何故こうも急に懐かれるのか、ハルアキ自身にもよく分からなかった。

因みに、エルティオネとの対談後に、彼女の口から心を読めるといふ事実を聞き驚愕し、ええー、と知らせないように注意していたのが水の泡になり、ハルアキはなんとも言えない気分になったのは余談である。リュネがハルアキに抱きついている所を目撃したエルティオネが白い目で見ていたのも、余談である。誰を見ていたかは言うまでもない。

まあハルアキに懐き、またとりあえずはここからは離れるつもりは無いらしい。とりあえず、今の所彼女に関しては特に割り振る仕

事もないので、解放された事以外何も知らない元奴隷達と扱いは同じにしている。

「ふわぁー、気持ちいいー」

ハルアキのそこそこ大きな手に撫でられながら、撫でられている少女 リユネはどこか夢見心地のようだ。

その表情が純粹に自身の気持ちを表している様で、ハルアキも顔を綻ばせた。

ふと、ハルアキは彼女から聞かされた、奇怪な話を思い出す。もう一度聞けば、何か新しい事に気が付く、というのはよくある事である。なのでハルアキは話を聞こうと口を開こうとして、しかしそれよりも先にリユネが話をし始めた。

「 えっとねー。わたしが暗い箱の中に入れられてる時に、おねえちゃんがやって来て、『買ったから、もう少しそこで待ってて』って言っ来てー……、その暫く後に【迷宮創造】の地震が起きて、今に至るんだよー」

リユネはさも当然かの様に、質問された事を答える様に喋り終えた。恐らくは“覺”の能力とやらでハルアキの心を読んだのだろう。でなければ、恍惚としていた表情を切り換えて、こんな唐突に、しかもハルアキが今口に出して聞こうとしていた事を言える筈がない。彼女が今した話は《イースリッション》当日の話である。一聞してみると、単にリユネが既に女性に買われただけという特に問題なさそうなもののだが、実際は幾つかの疑問点が生ずる事になるだろう。

それを今から説明していこう。

先ず第一に、何故リュネは箱の中に入っていたのか。その理由は、リュネの『分類』<sup>カテコリ</sup>“覺”<sup>さと</sup>の特殊能力を弱まらせる為だ。

心を読む、という行為はリュネ曰く、遮蔽物が有れば有るほど効きにくく、また難しい様で、箱に触れられる程近付いてくれなければ心はおろか、感情すら感じ取れなかつたとは本人の談だ。彼女にされていた目隠しも同様で、“覺”の様な特殊能力を阻害させる為のものだったらしい。

今はそんなものは知らんとばかりに遮蔽物を付けておらずに、存分に“覺”の能力を発揮させている。こちらもエルティオネに負けず劣らず、常識の範囲内がいい子なので、必要以上に相手の心の中を詮索し暴露したりという行為は、未だ見受けられていない。

二つ目は、何故リュネに話し掛けてきた人物が女性と分かったかである。

こちらは先程言った通り、例えば箱と目隠しという遮蔽物があつても、箱に触れられる距離にいてくれさえすれば、リュネにとってはそれだけで、感情は読めずとも、そこに立っている人物が男か女、更に大体の年齢が感じとる事が可能、らしい。

ハルアキはどのような感じるのか気になったので、リュネに聞いた所によると「若いのは生き生きしてて、お爺ちゃんとかは噎れているよー」だそうだ。

あとは純粹に、かけられた声のトーンが、女性のものだったという事から、という理由だ。

そして最後は。

「その“おねえちゃん”が女性っていうのは間違い無いんだよね？」

「そーだよー」

「で、働いていた人も嘘は付いていないと」

「うん、多分間違い無いと思うよ？」

「そっかー……」

最後は、《イスリツション》で、奴隷達を置いておく牢屋を通り過ぎた女性など、一人としていなかった事だ。

リュネを入れた檻は、ハルアキ達が入っていた牢屋の奥、そこにある小部屋の中に置かれていた。

牢屋の通路は裏口に直結しており、一本道となっていて、また小部屋の中には人が入れる窓など存在していなかった。裏口から入り、リュネの所へ行って、再び裏口から出て行ったのではないかとも思われたが、これについてはリュネが否定しており、どうも“おねえちゃん”という人物はハルアキ達の牢屋が並んだ通路の方に向かっていったそうだ。また、訪問してきた時刻はハルアキ達が搬入されてきた後らしいので、つまりはハルアキ達はその人物を見ている筈なのである。

しかし、ここで問題が発生している。

というのも実は、ハルアキ達はその人物を見掛けてはいないのだ。確かに、幾人かは通路を通っているのを目撃したが、その中に女性は一人もいない。解放した元奴隷達も同様の様で　とはいえ、そんな事に関して目を向けてなかったのもあるが　これには人の心を読むリュネのお墨付きである。

通路に女性を通り、しかしそれを誰も見ていないという矛盾。ハルアキは訳が分からないと頭を悩ませる。

（　　女性 transparent になって通って行った？　いやでもそれに対するメリットは何だろう。リュネを助けるために何か準備をしたとか？　それなら一度場所の確認とかの意味があるし。いやでも、それなら何で俺が起こした混乱に乗じてリュネの所に行かなかったんだ？　行けなかったとかはなんだか違いそうな気がするし………  
…それに、何よりリュネを救うためだとしたら“買った”なんて言葉言わない筈だよなあ。　　さてよ、変身出来る魔術は？いやいや、それも透明化と同じ様な……）



うーむ、わからん、とハルアキは頭を抱える。

何かがつっくり填りそうな気がするのだが、それが思い浮かばない。最近そんな事が多い気がする、と、ハルアキは一人ごちた。

それでもうんうんと唸れば、頭に蒸気機関でも付いているかのよう  
うに、耳と口からぷすぷすと煙を吐き出しそうになりそうだったので、ハルアキは一度思考を放棄した。

ならば、とハルアキは顔を上げて、まるで護衛の様に佇む者に声をかける。

「ジゼルくん」

「ジゼル、です主様」

……そうだったね、とため息ひとつ。

「……ジゼル」

「はい、なんでしょうか」

「一階層うへに行くから、着いて来て」

証拠が足りないなら、集めてみよう。

## 閑話「02（前編）」

【迷宮】地下第一階層。

ハルアキの【迷宮創造】が原因の大地震によって、元々トリューシャ平原と呼ばれたそこは局地的な地盤変化を起こされ、その広範囲が地下に沈んだ。これは【迷宮創造】は、【迷宮】を創る際に、その地上に存在するものを地下に移すか、そのままにするかを選択出来る機能の効果であり、現在元々あった土地には、『モンスター生成場』の物よりも巨大な石が、代わりに地上を覆っている。

それはさて置き、ハルアキとジゼル、及び“イースリッジョン 覺”のリユネがいるのは、【迷宮】の一階層目にある元会場である。

会場、とは言うが、実際は既にほぼ全焼気味の廃墟と化しており、唯一残っている何本かの支柱はなんとか大地に支えられるように直立はしていたが、半分程炭となつてはいる。

とはいえ、会場が炎上しているのを放っておいて、更には放置した上で支柱が残っていたという事は、この建物は余程しっかりとした造りだったのだろう。

大部分が瓦礫となつている元客席には、【迷宮創造】の機能により、既に草木が生え始めている。所々に、ハルアキも入れられた、あの鳥籠の様な銀色の檻等が地面に埋まっかけていて、半分程地上に覗かせている檻の中には、巢の代わりにしているのだろう、ハングリー・ラット という二十日鼠とカピバラを足して二で割った様な魔獣型のモンスターがハルアキ達をこそそと身を隠す様に、見つめている。

「主様主様」

ハルアキの後ろに、足音を立てずについてきているジゼルが、柳眉を心配そうにひそめて自分の主に問い掛ける。

「ん、何ー？」

「いや、あの、ちらほらとモンスターを見掛けるのですが、先に駆除しなくても大丈夫なのでしょうか？」

「……………あー、今は大丈夫だから安心しといていいよ。ジゼル君を連れてきたのは念のためだから」

駆除、と目の前のジゼルが言うには似合わない言葉に驚いて反応が遅れたが、特に問題なさそうにハルアキは答えた。

実際、【迷宮】内に生息しているモンスターは、今の所ハルアキが『モンスター生成場』で生成した生き物達だけなので、余程の事がなければハルアキ達に牙を掛ける事は無い。というのも彼等『モンスター生成場』で生成されたモンスター達は、産まれてくる途中で本能に“侵入者の排除”に加え、“ハルアキ及び彼が許可した、許可している生物を攻撃対象にしない”という命令が刷り込まれているからである。

この制約はハルアキが意識せずとも自動的に組み込まれており、また外す事が不可能な機能の一つである。なのでそう予想外の事態は起きない筈なのだが…………。

「主様、主様」

「はいはい、なんででしょう」

お次は何だとはかりに答えるハルアキに、ジゼルは静かに、にこ、と微笑を浮かべて、その小さな唇を動かした。

「ジゼル、です」

「……………はい」

笑みがこわい。

「ごめんなさい、と思わず言いそうになったが、それを何とか抑え、ハルアキは何度が首肯した。そろそろ、君付けしてしまうこの癖を何とかしなければいけない、笑顔が先程よりも冷たくなってきているのを肌で感じとったハルアキは、一度ぶるりと身を震わせた。

「……しかし、何も残ってないなあ」

カラン、と半分以上が炭と化した木材を蹴り、ハルアキはため息混じりに呟いた。

まあ、会場内に置いてあった金や、使えそうな物品は《イースリツション》の翌日には回収したので、当然と言えば当然である。

ハルアキ達が今している事は、只の宛ての無い現場検証だ。今現在、一緒に付いて来て、炭となった支柱の一つに近付いているリュネが言っていた“おねえちゃん”の事もあるが、ハルアキにももう一つ気になる事があった。

「やっぱり【魔道】の魔術……じゃないと思うし」

「うん、とハルアキは疲れた様な声を出す。

ハルアキの気になった事、それは《イースリツション》の参加者達が“どうやって”此処から逃げ果せたか、というものである。

蛇と蜥蜴を足して二で割り、巨大化させたモンスター ゲルアトゥル 蛇竜蜥蜴

。その体長は優にメートル単位で考えて三桁は越えていた。そして蛇竜の体躯は、《イースリツション》会場をぐるりと囲んでいた

筈なのである。つまり、会場から脱出し、地上へと戻る為には ゲ蛇

ルアトゥル

竜蜥蜴 との戦闘は、退却するにせよ強制的に必然となる筈なのだ。しかし現実では、ハルアキ達が奴隷を解放している時には、ゲルア蛇竜トラル蜥蜴 が戦闘を行っていた気配はなくて、気付けば《イスリツシヨン》参加者は、死んだ者を除いて全員が会場から消えていたのである。蛇竜が全員丸呑みにしたのではないか、というのも有り得ず、となれば当然何らかの手段によって、参加者達は脱出したという事は明らかなのだ。

その事に気付いたのは《イスリツシヨン》から二日後、つまりは昨日なのだったのだが、既にハルアキには大体的見当はついてた。

「……………同郷、じゃないといいんだけど」

恐らくは、“異世界人”の仕業。

ハルアキは、此処から脱出を可能にした犯人をそう考えている。これには幾つか理由があり、それらを踏まえて考えると、一番その可能性が高い人物が“異世界人”という結果であり、断定までは至らない。

現状を見てみるに、此処から脱出した手段は、十中八九「転移」に関する何かである。

全員が透明化して脱け出した、というのはなんとというか規格外過ぎるし、何より体臭等で反応できる“魔獣型”のモンスターや、ピット器官という熱センサーを持つ ゲルアトラル蛇竜蜥蜴 がそれを逃しはしない筈なのだ。

更には、ある時間からぱったりと死者が出ていないことが、ハルアキの考えを確信に固めている。

次に、転移に関するそれについてだが、ハルアキの知る【魔道】

には、『転移』に関する魔術を知らない、という事だ。一時期、まあ召喚された国にいた時に、ハルアキは【魔道】を歩む者達を大勢見ている。しかさその中には『転移魔術』なるものを持つ魔術師は一人もおらず、ましてや唯一その劣化版ともいえるもの使えたのが、他ならぬハルアキだけだったからである。

ハルアキが自由に行える転移術は、『ワープポータル』という【住居層】からしか使えないという『特殊機能』の一つだけ。これには様々な条件があるが、例外的にハルアキが手で触れているものなら【迷宮】内を転移する事が可能である。

畏にも一応あるにはあるのだが、こちらは自由に使うとしたらコストが異常と言っていい程消費するので、使用する機会はずまず存在しない。

また“勇者”達は、基本的に皆ハルアキがチートだと断言出来る能力、及びに称号を冠してはいるが、彼等はそんな“邪道”とも言える能力を持ち合わせてはいない。あくまで自分に真っ直ぐ、それに加えて応用性が高く、また打ち破りにくい。そんな、知ったとしてもどうしようもない能力を備えているのが“勇者”の存在なのである。

“魔王”も大抵その様な存在なのだが、リシユカ王国は人間主体の国。まず“魔王”がいるのは有り得ぬ事だ。

というか既に“魔王”はこの大陸から一人残らず殲滅されたために、新しく産まれてない限りはほぼこの世に存在しない。更には現在の暦は、ハルアキが死んだ時から三年程しか経ってないらしいので、まあまず“魔王”は有り得ないのは分かりきった事なのであった。

“魔王”と“勇者”及び【魔道】の考えを消すと、残る候補は何かしらの『魔道具』<sup>マジックアイテム</sup>か“異世界人”の【スキル】の二つになる。

前者は、『魔武器』<sup>マジックウェポン</sup>と同じく、その身に魔術や魔石、特殊効果等

を内包した道具アイテムの事であり、その際足る例としては飲むだけで傷を癒す『ポーション』という液体があったりする。

ハルアキの見聞が狭すぎるだけかもしれないが、これまたそんな“転移”の特殊効果を秘めた魔道具等聞いた事が無い。第一、そんな便利な道具があったとしたら、《大戦》の時代に広まっていなければおかしい話だろう。

という訳で、ハルアキの考えで一番可能性が高くなるのは、自分達“異世界人”が持つ能力 【スキル】の存在だ。

《ファンタジア》に召喚された者達が持つ【スキル】の存在。それは【魔道】とは別ベクトルの力を持っている事が多い。

どうにも“異世界人”が持っている魔力が、指向性とやらを持ってない魔力である事が原因らしく、なので属性という壁を潜り抜ける事が可能となるようなのだ。なれば『転移』という“火”や“水”等の属性に、何の関わりもなさそうな奇跡は何らかの【スキル】なのではないか。となるのは、当然の思考の帰結といえる。

余談だが、考察を進める際に、ハルアキが唯一魔術を行使出来る可能性があるのは『身体強化』だけ、という説明を受けた時に教わった記憶を思い出し、ほろりと涙腺が緩んだのは、秘密の話である。

(もしかしたら、と思っただけど……)

ガラガラガラ、とハルアキは元は客席だっただろう材木を蹴って退かし、地面に付着した炭を足で払う。

ざり、という音と共に、黒く焦げた様な土が無くなるが、下にあるのは唯の焦げた土であった。

今までの考えから、会場から脱出出来た鍵はハルアキとは違う”異世界人“の【スキル】であるという事、それを前提にハルアキは考えている。

ならば、知っておきたい事は、相手のスキルについての情報だ。

ハルアキのスキル【迷宮創造】は、ポイントが無ければ使えない、自分が製作した【迷宮】でなければ罫等は設置出来ない、という幾つかの制限を持っている。無論、仕組みを細かく分けていけば、何十という法則<sup>ルール</sup>が出てくるが、大まかにいえばポイントと場所、というのが最重要の制限である。

ハルアキのスキルは確かに強力だが制限が多い。なれば『転移』という移動に関して言えば反則級の力を持つ【スキル】も、様々な制限や条件が掛っているのはおかしくない筈なのである。

故にハルアキはあわよくば何かめばしい証拠でもないかしら、と期待していたのだが、結果は収穫ゼロ。

「世知辛いなあ」

思わず 最近癖になりつつある ため息をしようとして、幸せが逃げるかな、と思いき直して何とか抑え、抑えるのキツイわー、とため息をついた。  
ため息をついた。

……………。

「……………あ、あの、主様？ だ、大丈夫ですか？」

「……………ああ、うん。なんでもないよ、うん」

急に「うおーい」と言わんばかりに頭を抱えたハルアキを心配し



て、ジゼルが声を掛けて来る。

それに動揺しながら返事をしていると、会場跡の支柱の方からはしゃぐ声が。

「うわー、とりだー！」

白髪三ツ目の真白い少女、リュネである。

彼女は上半分が焼け焦げている支柱の一本を見上げ、歓声を発しながら何かを観察していた。

木の支柱の上には、炭の様な焦げた黒とは違う、ふわふわしてそうなグレーの羽毛を生やした鳥である。鋭利な嘴に、身を覆う羽毛立つために地に着けた後ろ足は、羽毛ではなく黄土色の鱗に覆われておりまた、子供の腕くらい太さを持っている。頭部で目立っているのは単冠の鶏冠とさか、これもまたグレーの色で、かなり目立っている。

そう、鳥は鳥でも、些か脚部が巨大な鶏である。

「ハールーアーキー、とりだよとりー」

「それはえーと、クックロウ黒鶏 だな。刺激しちゃいけませんよー」

ハルアキは動物園に子供を連れて来て、そのテンションに疲れた様な雰囲気を含み出しながら、リュネの視線の先にいるモンスターの名前を教える。

ハルアキは全部のモンスターの特長や名前を記憶している訳ではないが、【迷宮創造】

で生成されたモンスターは、ハルアキが知りたい思考すれば自動的に「カタログ事典」が教えてくれるので、間違いはない筈である。

No.1012: クックロウ 黒鷄 詳細

『消費P:「300〜800p」

生息階層:【迷宮層】第一、二層迄

（中略）

生態

・約300pから800pの間で生成される“鳥獣型”モンスター。

・地球のキジ目キジ科の鶏の倍サイズ、たまに80cmを越える個体もいる。体毛や嘴は全て濃いグレーの色で染まっており、唯一違う瞳の色は全て紅い。敵対者を見付けると、奇妙な鳴き声を上げて襲い掛る。跳べるけど飛べない。

・因みに鷄冠とんかかは単冠の一種類のみ。

・外見はコーニツシュよりは少々丸みを帯たレグホーンに近く、また通常の鶏とは違い攻撃性が高い。前足の翼と鱗に覆われた足に生えた爪は、切れ味が高く、人の肉など簡単に斬ることが出来るだろう。

・また、稀に 『

コーニツシュよりはレグホーン、前者の名前は聞いた事はあるが、はたして見た事があるかどうか分からないハルアキにとっては何それ！、と言える説明書きであった。

しかし、心を読んでほおー、と分かったのか分かってないのか、ハルアキの事を見つめていたリユネは感心した声を上げて、再び黒鷄ノクックロウ に向き直る。

子供特有の好奇心が溢れている彼女の後ろ姿は、どこかハルアキの心を和ませる。

「主様、主様」

「ん？」

と、リュネを見ていたハルアキの横から声が掛る。  
見れば、ジゼルが目を輝かせて、ハルアキの事を見上げていた。

「……あー、はいはい。えっとねあれは」

教えて欲しそうにハルアキの服の袖を軽く摘んで引つ張るジセルに、ハルアキはとりあえずはかいつまみ、問題なく伝わる部分だけを抜き出して簡単に説明し始めた。

少々大きな黒い鶏 クックロウ 黒鶏 クックロウ。

能力を総合的に見れば、同じ一階層に生息する ゴブリン より格下の雑魚モンスターである。

「1000p」で生成されるゴブリンの個体の強さが大体、ハルアキがいた地球の中学、高校生程度の運動神経が比較的良いとされる男子が角材を装備して、油断せずに戦えば何とか勝てるレベル。なのでそれよりも弱い クックロウ 黒鶏 クックロウ の強さは、なんとも微妙といった所だ。因みに、ハルアキのいた地球には、義務教育に戦闘に関する指導など存在していなかった。

勿論、油断すれば クックロウ 黒鶏 クックロウ 相手でも軽く死を迎える事になるのは受合いだが、このモンスターの耐久力は見た目通り、大体鶏の二倍程度。

使用ポイントが最大で「800p」のモンスターとは、そんな程度の強さなのである。

「ジゼル、気を付けてね」

「がんばれー！」

「はい、がんばります」

後ろに下がって並んで立つハルアキとリュネの目の前には、七十センチ程の体格を持った クックロウ 黒鷄 と対峙する子供の姿。

その子供の登頂部に生えた狼の耳に、フリルが付いた黒のドレスから出ている深い灰色の尻尾。

ハルアキの事を主と呼ぶ子供、ジゼルである。

何故こんなことになっているかというのと、ハルアキがジゼルに クックロウ 黒鷄 の説明をした後、ジゼルが“戦わせて欲しい”と頼んできたのを、ハルアキが叶えたまでである。

なんでも、《存在昇格》ランクアップ した体慣らしに加え、主であるハルアキを守るために軽い修行をつけたい、という事らしい。

何故、そこまで自分が慕われているのか、主とされているのか、ハルアキは疑問が尽きないが、それ以外は別段問題はないし、これぐらいの事なら前は当たり前だったので、すぐにハルアキは了承した。まあ《存在昇格》ランクアップ を経験しているジゼルが負けるとは思えないので、安全だろうという判断である。

ただ、気掛かりになるのは、ハルアキの横に立つリュネに対して、嫌な影響を与えないか、という事である。ジゼルと クックロウ 黒鷄 の戦いをハルアキが後にしようか、と断ろうとしたら「わたしはだいたいじょうぶっ」と無理矢理ハルアキに肯定させたのがリュネである事を考えるならば、別に気にする事でも無いかもしれない。が、しかしリュネは子供なので、どうにも心配してしまう。

そんなハルアキの心を“視”かねたのか、リュネがもっつ、と言つてハルアキに口を開いた。

「ハルアキー、わたしはだいじょうぶって言ってるじゃん」  
「いや、でもねえ？」

あくまでリュネ九歳程の少女である。

そんな子供に、はたして、生死を賭けた命の取り合いを見せてもいいのだろうか、という気持ちが闘せめぎ合うのは、仕方がない事だろう。

「ほら、養鶏場で育てた鶏を屠殺するのを見せる訳じゃないんだし……いやでもああいう所で育つ子供は幼い頃から殺つてんのかな？」

「だからだいじょうぶなの！ わたしは数えきれないくらい“視てきたんだからっ！”

っ、とハルアキは息を飲んだ。

彼女は死というものを“視て”きた、技術が余り発達していない《ファンタジア》の世界では、幼い内に食糧となる生き物を捕える事はあるのだろうか。

だが、リュネの事情はそういうものではない。  
必要以上に心が読めて、周りからは異常と罵られる。

リュネの視てきた死、それはどっちの？

そう聞きたい気持ちを抑えつけ、リュネがその答えを言おうと口を開く寸前に、ハルアキはもう大丈夫だから、と心で呟き、自分の心を落ち着かせる。

「……………そうか、そうだな」  
「そうなのだよっ」

ハルアキはぽん、と手を置いて、リュネの小さな頭を撫でた。

「ジゼル、覚悟は出来てるかー？」

「はいっ」

「じゃあ、言った通りに」

「はい！」

明るい返事を返してきたジゼルは、既にこちらを向いておらず、背を向けていた。

どこから見ても可愛らしい女の子にしか見えない彼は今、腰に巻いた、劍鞘の役割も兼ねている、二本のベルトにぶら下げていた剣を両手に持ち、まるで跳躍する寸前の獣の様に腰を低く構えている。右手に持つは刃渡り三十センチ程の短刀、左手には、それよりも更に一回り小さい短刀を。

短刀の二刀流。それがジゼルの戦闘スタイルらしい。

ジゼルの構えは、利き手である右腕を前方に向けて、左腕は少し横に向ける、というよくある構えだったが、ハルアキの素人目から見て、ジゼルはちゃんとした様さまにはなっているように思えた。

一時期モンスターが蔓延る森の中でのサバイバル経験があり、そこで狩りなどの技術を独学で鍛えあげた、とは本人の弁である。

《モンスター操作を行います》

ポーン、と軽快な音が鳴る。

ハルアキはコントロール画面を動かし、幾つかの操作を開始。それは勿論、クックロウ黒鷄をジゼルに襲わせるために。

《クックロウ黒鷄 『52』の操作を行います》

ぴく、とジゼルの前に立つクックロウが、動きを止める。

そして、その唯一赤い目に、己の前に立つジゼルの事を収め、身

に纏わせる雰囲気を変えた。

《敵対認識変更 最優先排除対象をジゼル・ライツァウィルトに変更しました》

ざり、と鱗に覆われた足で土を踏みしめ、人の肉が触れるだけで斬れそうな爪が地面に埋まる。

「ジゼルッ！」

ハルアキがジゼルに叫んだ。

それはモンスター操作を終えた宣言、戦いの始まりの合図。

クックロウはばさり、と飛ぶのには適さない翼を広げる。それだけで、体長が一回り大きくなった様な錯覚が、ジゼルには見えた。すうう、と息を吸い込むクックロウ。胸辺りを風船の様に膨らませ、それを一度に排出する。

「クルアルアルアツッ！」

威嚇。

そして同時に地を蹴り、即座に戦闘に移行する。

「っ!？」

その動きに、一瞬、ジゼルは硬直し、狼狽する。

まさか、と思った。

まさかこれほど。

「クウルルルッ!!」

クックロウは地を蹴った反動を利用した速さで、ジゼルに迫る。そして十分に近付くと、ばさ、と翼を広げて跳躍。五メートル程の距離を一跳びで積めて、クックロウは嘴の中に生えた、凶悪な牙をジゼルのその柔肌に突き立てようと口を開き。

クックロウ

黒鷄の戦闘能力は、確かに《ファンタジア》底辺のモンスターとされるゴブリンより下だ。だが忘れてはならないのは、黒鷄/クックロウですら人をも殺せる殺傷能力を保有している事である。

格下が格上に勝つ、よくある事である。

己の体調、相手の調子、敵の情報、編み出した奇策、心構え、慢心、時、気候、場所、運……。様々な要素が噛み合つて、命の賭けた勝負の賽子は転がっていく。そして予想外の事があるからこそ、勝負というのは成り立ち、また意外な結果を残すものだ。

格下が格上に勝つ、よくある事である。

だがそれは、その殆んどが相手の油断から来ていることが原因であり、油断していない格上に勝つ事はまず失敗に終わるだろう。

一瞬、ジゼルは硬直し、狼狽した。

だがそれは、目の前に迫ってくるクックロウが、翼を広げて威嚇したからではない。

（まさか）

まさか、と思った。

一瞬、嘘だと思ってしまった。

だがしかし、それは確かに現実であり、また変えようの無い事実



であった。

ジゼルは刹那の狼狽の後、嬉しさによる感情で、笑う。  
まさか、まさかこれほど。

（ 遅すぎるッ！ ）

相手の動きが遅いとは。

断じて相手の動きが遅い訳ではない。大体中学生程の男子が、五十メートル走を全力走る速度の平均程度ほどだ。遅すぎる、と感じるのは、ジゼルの強化された動体視力がなせる技である。

現にクックロウはそれなりの速さで突撃して来ており、戦闘に経験がない者にとっては恐怖を感じるだろう。

だが、それでもジゼルにとって、このクックロウは遅く、また恐怖を感じる対象としては捕えられなかった。

その原因は、ジゼルにとって絶対的強者だったアズスルーの殺気によって、三日経った今もまだ影響を残している事もあったが、一番の原因はジゼルが《存在昇格》<sup>ランクアップ</sup>した事だ。

“魔族”から“影狼族”への《存在昇格》<sup>ランクアップ</sup>を介し、ジゼルの体は身体能力の向上、特殊能力の追加が施され、より“主”を守るために、戦闘に適したものに進化する。

《存在昇格》<sup>ランクアップ</sup>を遂げたジゼルは、元々同年代の子供とは一線を越えていた己の存在を、更に上へと押し上げたのだ。

ジゼルは慌てる事なく、クックロウに狙われた右の腕を下げるようにして自分の方に寄せる。同時に、反撃がしやすい位置へと距離を置くために地面を軽く蹴り、バックステップ。

腕を下げる途中で、ジゼルは流水の様な動きで、右手に持った武器を逆手に持ち変え、今度は上に持ち上げた。

狙いは、未だ閉じられていないクックロウの下嘴に。

「　　っは！」

果たして、ジゼルの攻撃は見事に当たり、クックロウの下顎を右腕に持った剣の柄をぶつけ、打ち上げる。

ガチンと、固い物同士がぶつかり合った音が、剣の柄と嘴の間から生じ、空気を震わせる。剣の柄はジゼルの右腕に込められた力により、クックロウの嘴に輝を入れられ、また嘴の中に生えた牙が数本砕け、宙を舞った。

クックロウの顔は完全に真上を向き、首の骨が嫌な音を出し、そしてがら空きの首に目掛け左腕を振り、短刀一閃。

「クル、ウツツ！！！」

然したる抵抗もなく、ジゼルの左腕は肉を切る感触と共に振り抜かれる。首を根元から半分以上切られ、響き渡るはクックロウの断末魔が叫び声。

「ふつつ！！！」

が、その声を無視して、ジゼルは追撃。

クックロウの下嘴を打ち上げ、持ち上げたままの右腕を、今度は真上を向いたクックロウの顔面目掛けて　　振り下ろす。

「ク」

ドズン、と鈍い音を出して、ジゼルの右手に握られた剣はクック

口ウ肉を断ち切り、刃の先の大部分が迷宮の地面に突き刺さった。  
ず、と剣をクッククウウから抜き取れば、頭から刺さっていた支え  
が無くなりクッククウウの体は崩れ、地面に墜ちる。ぴくりとも動か  
ぬクッククウウの死体から、先程まで彼の流れていた赤い血が噴き出  
して、地面を赤く染めていく。

決着。

時間にして十秒足らず。

幼い影狼と クッククウウ 黒鷄 との勝負は最早勝負にあらず、ジゼルの圧勝  
に終わった。

「……………すげー」

思わずハルアキは、今の戦闘に呆れた感情が混じった声を洩らす。  
当たり前前だろう。己を殺そうと向かってくるモンスターに動じる  
ことなく剣を向け、尚且つ一撃も攻撃を貰わずに圧倒したのだから。  
それがまだ、歴戦の戦士、いや初心者ルキから脱け出して、ギルドの  
ランクとやらを持っている若輩者なら、まあそんなものだろうと納  
得出来る。だが、目の前に立つジゼルは、未だ十一歳という若い、  
ハルアキにとっては若過ぎる年代だ。

そんな若い年で、命のやりとりに物怖じしない。それがこの世界  
で何れ程異常なのか、ハルアキには分からない。

しかし、ジゼルが自分以上の身体能力を保有している事には  
変わりはないのだ。

その事実をまざまざと実感した事により、ハルアキがジゼルに対  
する感情に微量の警戒心が宿り始める寸前。

「ジゼルは、だいじょうぶだよ」

ハルアキの隣に立つリユネが、それを止めた。

リユネが今歩んでいる人生の根源、“覺”。

その能力で心を読める彼女に対し、ハルアキが己の目的を話し、頭を下げた求めた事は“周りのいる人の心を読んで欲しい”というものだ。

野心を企てる者はいないか、脱出しようと計画するものはいないか、徒党を組んでハルアキ達に対し反乱しようとしていないか。心を読んで、それを知る為に。ハルアキはリユネに頼み込んだのだった。

今現在、少女の能力を知っている者は、ハルアキとジゼル、エルティオネの三人のみ。情報の漏洩は当たり前だが好ましい事ではないし、なにより、リユネが【住居層】に住む子供達に嫌われる事を防ぐためでもある。

誰にだって、何かしら人に隠したい事は存在するし、何より交友関係が続けるために、たとえ本人が望まなくとも、時に嘘や建前を取り繕ったりする事はある。

触れて欲しく無い事情やら、知られたく無い秘密。それを、近づくだけで知られてしまう人物に、誰が好んで近づくだろうか。

そういう事を知って、それでもその事実を乗り越えて、リユネに近付いて来る者だけと友達になればいい、と中には言う人もいるだろう。

しかし、ハルアキはそうは思っていないかった。

もしもだが、【住居層】に今いる、大人を含めた元奴隷達にリユネの能力について、話してみたでしょう。

結果は恐らく、ハルアキとジゼル、エルティオネの三人を除いて、

リユネに出来る友達の数は数十人を越える子供達の内、よくて数人残ればいい方だろう。

子供、というものは、良くも悪くも純粹であり、また純粹であるからこそ残酷だ。

学校等でいえる事だが、子供達は一定人数以上で尚且つ、一定の空間に置かれると、彼等は単体、又は複数のグループに分かれる事が見受けられる。単体のグループならまだしも、複数のグループともなれば当然、グループ間での対立等が発生し、また溢れ者が出ることは必至。何人かが孤立する。

そしてその中で不満や苛立ち等の負の感情が溜るとどうなるか何て、分かりきった事。

群れに加われなかつた溢れ者に、矛先が向くのである。

【住居層】には、十代後半から、二十代の、この世界では既に成人となっている大人組がいる。そんな、子供達より年上である彼等彼女等が、リユネの能力を受け入れられず、少しでも負の感情を見せたら、それを見た子供達はつけ上がることは目に見えているのだ。

今、【住居層】に住んでいる子供達は、大人組も含め、皆少なからずストレスを抱えている。

それこそ、ぱんぱんに膨らみ続けている、いつ爆発するか分からない風船の様に。

勿論ハルアキには、リユネをその的にする訳にはいかないし、ストレスの吐き出し方を、そんな歪んだ方法を選ばせるつもりも毛頭無いのであった。

だが、だ。

リユネの読心の力、それによって、村から迫害され、奴隷として売られたという事を考えれば、ハルアキが強いたのは余りにも残酷な行為である。

それを分かっていたからこそ、ハルアキは彼女の事を恐れない、疑わない。

自分の行動の責任のために。

彼女は独りじゃないと伝えるために。

「そっか」

「うん、そうなの。だからハルアキは安心して！」

リユネの頭を撫で、ハルアキは剣を鞘にしまい近寄ってくるジゼルに顔を向けた。

ジゼルは目線で クックロウ 黒鷄 の骸を指して、ハルアキに問う。

「主様、このコの事はどうすれば？」

「……ああ、ほっとけば勝手に無くなるから大丈夫だよ。素材とかは剥ぎ取らなくても勝手に出てくるから、時間に余裕がある今は見るだけでいいよ」

「分かりました」

基本的に、【迷宮】内で死んだモンスターの死骸はある程度の間が経てば、【迷宮】に吸収されるか他のモンスターに食われるかして迷宮内から除去される、という仕組みになっている。吸収されたモンスターは、再び微量のポイントに還元され、再び新しいモンスターを生成するのに使用されるのだ。

「あ」

「ほら、まあ、こんな感じに」

首から上がぐちゃぐちゃになって生き絶えた 黒鷄クックロウ の骸が、瞬  
く間に変化を起こし始めた。

地面を赤く濡らしていた水溜まりはいつのまにか消えており、  
黒鷄クックロウ の骸の方も、まるで溶ける様に無くなっていき、残された物  
は、少量の黒に近いグレーの羽毛と、瑠璃色に光る、指の爪程の大  
きさの『原石』の欠片。

自身がスキルで生成したモンスターの死。

ハルアキにとっては、幾度となく見てきた光景。

【迷宮】で生成されたモンスターには共通して言える事だが、魔  
石の『原石』の方は、迷宮に吸収されずに、そのまま放置される。

通常、残るのは『原石』だけなのだが、生成された当時より成長、  
進化している部分は、所謂ドロップアイテムとして数えられるのだ。

ありがとう。

ジゼルがそれらを回収した後、ハルアキはクックロウがいた場所  
を見る。奥の方にも 黒鷄クックロウ はいたが、ハルアキが礼を言ったのは  
あくまでジゼルと戦った固体にだけである。

【迷宮創造】を行使した当初、ハルアキは何度か、自分が生成し  
たモンスターに同情に近い感情を抱いた事がある。

創られて、操られて、戦わされて、創られて。

繰り返し、繰り返し。ハルアキの現実に現れた、ゲームの様に他  
者の命を持って遊ぶスキル。

それについて悩みもしたし、軽い自己嫌悪にも陥った。

悩まされながら、それでもハルアキが出した結論は、自分は生き  
たいという生への執着。

その時から、ハルアキはモンスター達に対する同情は止めて、せ

めてもの礼として、感謝の意を示すようになったのである。

「ごめん、ではなく、ありがとう。」

そうでなければ、ハルアキの為に作り出された彼等には、失礼に値すると思ったから。

「ジゼル、戻るよ」

「はいっ」

一滴の返り血も受けず、ハルアキの事を主と崇める少年は満面の笑みで応えを返す。

さあ、<sup>いえ</sup>下に戻るっ。

百二十九。

《イースリッション》会場で、ハルアキが保護した奴隷達の総数である。

元々の商品候補だった奴隷は七十八名で、残りの五十一名が《イースリッション》に参加していた貴族の奴隷達だ。後者の奴隷達は、本人に聞いた所によると、どうやら格式の高い貴族の間では、自らの自慢の奴隷をお披露目させる機会であるために態々会場にまで連れて来られ、イースリッション会場に隣接した建物の中に置いて



いかれたらしく、帰る際に回収される予定だったそうだ。

前者の彼等は、人間と魔族の割合が大体三：七程。更にその半数以上がハルアキよりも年下なので、彼等に対しては反逆等の企て事は、そこまで心配はしていない。

一応、後者の奴隷を含めた彼等に対してもこの【住居層】に滞在させてはいるが、王族に付いていた元奴隷八名や、ハルアキに牙を剥く可能性が高い数名の戦奴隷達は、不安要素の一つとして挙げられる。

幸い と言えるかは分からないが、ここは幸いと言っておこう、元犯罪者の奴隷は一人もいなかった。

因みに、ジゼルは例外として、リユネとエルティオネはハルアキが必要とする時以外、そこまで接触していない。これは二人がハルアキにとり“特別”な存在なのではないかと勘繰られ、不信心、及び不満を持たれないようにするためだ。

蛇竜等を使ったある意味恐喝に近い演説により、ハルアキは暫定的に【住居層】のトップに立ち、また奴隷達の主人という位置に立っている。その演説の際に、【住居層】から出たら死ぬ事を伝え、また此処から暫く出す積もりは無いというハルアキの説明は、暴力による圧力で少なからずの不満を彼等に抱かせるには十分過ぎるものだろう。故に、ハルアキに近付いている者に対しては、ハルアキを快く思っていない連中から媚を売っているとみられる可能性もなきにあらず、唯一護衛役を買って出てきているジゼル以外には、なるべく重度な接触は控えているのだ。

「じゃあ間違い無い、と」

「はい、恐らくなのですけど……」

ハルアキの前には、数人の女性。

比較的なだらかな者から、肉欲的なボディラインを画く者。

金髪や茶髪に、緑眼や青眼。

髪や瞳、肌の色等、各々の特徴を持っている。

その中で皆に通ずる共通点は、比較的地球の大衆と同じ様な美的感覚を持っていると考えるハルアキから見れば、彼女達は全員、どれも整った顔をしており、とても魅力的に見える、という事だ。

吊り目が特徴的な、緑髪の女性。

目尻にある泣き黒子が目立つ、やや垂れ目の女性。

ウエーブしている金髪を腰の下辺りまで伸ばしている女性等々。

貴族が全員美形だとは言わないが、彼女達にドレスでも着せて化粧等で着飾れば、何処かの貴族と言っても疑われない程の美の持ち主達である。まあ残念ながらというべきか、彼女達が着ている服はドレス等の豪華な服ではなく、各々が好みに合った、布地のスカートやズボンを履いているのであるのだが。

「確認だけど、その陣とやらの中に入って、気付けば会場にいたと」

「その通りです。一瞬視界が真っ白になって、気付いたら此所に…」

…ね？」

「うん」

「そうね」

ハルアキの前に立つ彼女達は皆、リュシカ王国の王族 第一王

子の奴隷だった者達だ。

彼が《イースリッション》の会場についた際に連れて来られ、そしてそのまま置いていかれたらしい。

ハルアキはふうむ、と頷き、自分が話を聞いていた先頭に立つ女性に礼を言う。

「分かった、ありがとう。引き続き、子供達の事を頼みます。」

あと、えーと…、何か問題や不満があれば遠慮せずに報告してください」

「かしこまりました」

ペこり、と先頭に立つ、二つのおさげを栗色の髪で作っている女性が礼をし、続いて後ろの女性達もそれに倣う。

奴隷といえど、王子を不快にさせないように、必要最低限の作法を教えられたのだろう。彼女達 特に先頭の人の 礼は、どこか品があるようにハルアキには感じられた。

「 それでは、失礼します」

そうして顔を持ち上げ、ちらとハルアキを見て、次に彼の少し斜め前に立つジゼル、そして再びハルアキに目を向ける。ハルアキも気が付かなかったそれは数瞬の事だ。彼女は、す、と後ろを向き、足を動かし引き返す。他の人も、失礼します、とハルアキ達に言って、彼女の後ろについていった。

先頭に行く女性の、栗色のおさげが宙に揺れ、さらさらしてそうだな、とハルアキは思った。

今彼女達に頼んでいる役割は、鬱や心的外傷後ストレス障害 略称PTSD等の、精神障害に成り掛けそうな子供達の治療である。

皮肉ながらも、ハルアキが暮らしていた時代の日本よりも、生きていく環境が厳しいこの世界の住人は、例え幼くとも心が強い。しかしそれでも、家族に売られたという現実を受け止められなかったり、会場に連れていくまでに暴力を振るわれるなどして悲惨な目にあったり等様々な要因で、心に傷が付いた者がいるのも事実なのだ。

とはいえ、一概に“治療”とは言っても、当時高校生だったハル

アキには精神病の治し方など知るわけがないので、簡単に会話の相手となったり、遊び相手になったり、後は独自の判断をするようにという、精神的なケアに分類される事をするだけであるのだが。

なので、今は特に頼む事が無いエルティオネや、今まで王族の奴隷とはいえ暮らしにはそこまで不自由が無かつたらしい彼女達八名等、更に加えて数人程の精神的に余裕がありそうな者達だけに頼んでいる。無論、無理強いはしなかったが。

彼女達が屋敷の通路を曲がるのを見届けて、ハルアキは、くつく、と苦笑を洩らす。

「主様？」

「んん、何でもないよ。心配するほどの事じゃない」

「そう、ですか。分かりました」

ジゼルが訝しげに聞いてきたが、これはそんなに問題にすべき事ではない。

これは先程の彼女達に対する態度に関連するものではなくて、寧ろ彼女達に関係する未来を想像して、だ。

( 絶対何人か、惚れちゃうんだろうなあ )

惚れる、とは勿論、“治療される側”が“治療する側”にだ。

只の異性でも十分過ぎるほどののに、エルティオネを含めた彼女達は皆 ハルアキよりも少し年下や、同年代（肉体が若返っている）、約十七歳）もいるが 顔立ちが整っている。簡単にと言えど、そんな彼女達が、精神的に崩れかけている者達等の看護をするのだ。

当然、初めは嫌がったりする者も現れるだろうが、最終的には、好意的な感情を持たない者は少ないだろう。そしてその内、好意が

恋慕のに情に変わる人は、必ず出てくる筈である。

ハルアキにとって他人の恋愛には然程興味は無いが、恋を例外を除けば良い事だと思っではいるので、それ事態は肯定的に受け止めているのである。

まあ、余計な問題が起こるのは確実なので、性的な事は“絶対にしないようにとは釘を刺してはいるのだが。”

「ハルアキー」

と、思考を中断させたのは、先程の彼女達が曲がったのとは、ハルアキとジゼルを挟んで正反対に位置する通路。

ひよこ、と顔を出して近付いてくるのは、額にある銀の瞳と、金色の眼でハルアキを見る白髪の少女　リユネである。

彼女には、初めから通路の陰で隠れてもらっていた。理由は単純であり、リユネが常にハルアキの近くにいれば、確実にリユネには“何か”がある、と疑われるのは明白だからだ。

故に、心が読める距離で身を隠せる所にいてもらい、そこからハルアキと会話した彼女との心の内を読んでもらったのである。

「嘘はついてなかったよー。あのおねえさんが言ってたとおり、よく分かんない陣の中に入って、びゅーんって」  
「なるほど」

どうだった？ とハルアキが聞こうとして、やはりここでもリユネが先に口を開き、その結果を言う。

それを聞いてハルアキは、どうやら彼女達に対する心配は、余りしなくてよさそうだと肩の荷も軽くなった。

( だけどそっかー、やっぱり召喚された人なわけねー…… )

胸からもやもやしたものが溜り、そのもやもやが体内に取り込んだ空気に混じり、喉に込み上がってくる。

それを吐かずに循環させ、少々体にどろりとした感触を覚えたが、ハルアキは自分自身に嘘をつき、それに気付かぬ振りをした。

ハルアキが先程聞いていたのは、自身の考えの裏付けである。

《ファンタジア》に召喚された異世界人は、その召喚の理由や能力から高い地位に就く事が多い。それこそ国の軍団長やら、異世界人の為に創立された組織のトップにやら、兎に角引く手数多の存在だ。

故に、この国の王族にも何かしら関わっているのではないかと【住居層】に戻って思い付き、早速“元”王子の奴隷に聞いてみた所、この上ない当たりを引いたのであった。

どうやら彼女達 正確に言えばその主である王子や、その親の国王なのだが、奴隷競売の会場に赴く際に、所謂ハルアキの知る瞬間移動なるものを行使したらしい。

曰く、カイトと呼ばれた人物が地面に描いた『陣』に乗って、気付けば会場に着いていた、らしい。着いた会場の部屋の床にも、似たようなものがあつたらしいので、恐らくはそれが【スキル】の制限に関する何かであるとハルアキは見当をつけた。

そしてカイト、というその男性は、別の男からウナウ、アラ、とも呼ばれていたそうだ。

ウナウ、アラ 恐らく正しい発音だと、ウナバラ、いや、海原うなはら、  
と言ったのではないのだろうか。

ハルアキの知る人物の中で、海原、という名字を持った者はいないが、恐らくはその考えで正解だろう。

名字、名前共にハルアキが考えた当て字だが、そう外れたものではない筈だ。

そうして考えれば、いかにも異世界人“らしい”名前ではないのだろうか。

《ファンタジア》にも和名に近い名前を持っている者もいる事は知っているが、ウナバラカイトは日本“らしすぎる”。ハルアキが知るこの世界の和名は、エダ・カツウールだとか、アズハ・ヴェロノーチカ云々等々、そんな感じの中途半端な名前だけである。

そして黒髪、というのはたまに珍しい、という程度だが、それとセットで黒目というのはかなり稀、と認識されている。

よって、ハルアキが導き出した結論は、ウナバラ・カイトは『転移』に関する“異世界人”である、という事だ。

はああ、とついにハルアキは我慢出来なくなったため息を吐いて片手を額にやる。

眉は額に皺を作り、顔にはこれからの苦勞が増えた事に対しての疲れが溢れ出していた。

「ハルアキー？」

「主様？」

「いや、もう、きつついなあ……」

確実に、カイトとかいう人物は、近い内にこの【迷宫】にやって来るだろう。

それはつまり、ハルアキが覚悟しなければならぬ敵の一人、“異世界人”が来訪する事を意味していた。

遅かれ早かれやって来るのは覚悟していたが、よりにもよって、“異世界人”がいる国に当たってしまったとは運がない。そう思っ

てしまうのも無理らしからぬ反応である。

加えて、彼女達から聞いた、カイトとは違う、キヨトとか呼ばれていたらしいもう一人の人物の存在。

キヨト、日本人の名前でありそうなそれは、ハルアキがもう一度ため息をつくには、十分過ぎる案件だった。

「はあああ……………これ、こんな迷宮で大丈夫か？」

「だ、大丈夫だよ、問題ないよつ、きつと！……………えーと、えーと、あ、そうそう！ さっきのおねえさんは今のところ不満はあんまりないっばいよー。ごはんとかこつちの方がおいしいし、豚もないからだつて」

「へえ、そっか。ありがとなー」

凄い勢いで沈み出すハルアキを励まそうとしてか、リユネが慌てた様に言う。

それに少々投げやりになった返事を返し、頭を撫でた。

「へふー、えへへー」

「……………いいなあ」

満足そうな声と、羨ましそうな声。

しかし後者の声は残念ながら、ハルアキには聞こえていなかった。触り心地が良さそうな狼の耳が、力なく、しゅん、と垂れた。

【住居層】での食事は今の所、ハルアキ 間接的にだが の自家製でなんとかしている。要は、【迷宮創造】の『生活機能』から賄っているのである。

料理は、調理済みの食事一回につき、約5pから20p程が消費される。朝昼晩と三食出しているのので、一日の食事に対しての消費は、大体30p前後から多くて50p程に収まっているのが現状だ。



一食分の消費量、それだけを見るならば決して対した数値ではないのだが、それを百人を越える人数で、しかも毎日となると話は違ってくるのは当然の理と言うべきだろう。

実のところ、調理された料理を出すよりも、迷宮の【住居層】に植えたり栽培する食材を育てて、それを調理に回した方が圧倒的にポイントの消費が少ないのだが、今あえてハルアキはそれをしていない。

理由は、奴隷達が状況の整理がついていないだろうという、ハルアキなりの配慮である。

日常から奴隷へ、その後ハルアキによる騒動で、故郷へ帰る事は暫く先に。そんな彼等に、せめて食事だけでも、というハルアキの気持ちは、やはりどこか甘いと見られてしまうだろう。

因みにハルアキ自身は料理が出来る腕前ではないし、何より百人以上の食事を作るのは無理と割り切っている。

男ハルアキ十九歳（肉体年齢は十七）、今現在料理の学が余りない、元地球人の異世界人である。

一週間程したら、料理担当を決めようと考えているハルアキなのであった。

リュシカ王国王領の一つ、スイーダブル。

首都バスラノから向かって西側にあるそこは、領土の広さに対して他の三方よりも、戦争の爪痕が色濃く残っており、また復興がそこまで行われていない。

復興に対する問題は、【人間界】と【魔界】の戦争 《異界大戦》による影響である。

リュシカ王国は、大陸の中央に位置する国であり、その上下は人間側の国で埋まっていた。つまり、リュシカ王国は北西から南西にかけての領土が戦場となった。

戦争開始初期にかけて“激戦地”と指定されていたその場所は、読んで字の如く、言わば戦の最前線だ。そしてその戦火により、元々その辺りに存在していた集落や都市が軒並み壊滅してしまうのは仕方がなかったことだ。

とはいえ、戦争終結から三年が経ち、しかも王国領土内の戦争は更にその前から終わっていたのに、西方の領土が復興が余り進んでいないというのは、流石に無いのでないか、と思われるかもしれない。その原因は、《大戦》の戦火は王国西方だけでなく、王国中央にある首都や、王領ではない貴族の土地にまで影響を及ぼしてしまっていた事である。

リュシカ王国の貴族達は、その大半が見栄や矜持等を高く持つ、良くも悪くも、所謂貴族主義の思想を持つ者で占めていた。《大戦》前から傾向が強かったのだが、《大戦》後、その勢いは増すことになったのである。

助長させた原因は皮肉なことに、激戦地を勝ち残り、生き残ってしまったからだ。

幾つかの国が亡びた激戦地。それをリュシカ王国はそれを見事耐

えきり、国を存続させた。その中核を担った傭兵や、食糧等を調達するための軍資金、それがどこから出ているかなど気にも止めずに無関心な貴族達は、その都合のいい思考で、都合のいい結論を弾き出したのは、彼等にとっては当然のことだったのだらう。

要は、激戦地を勝ち残った我等は、亡びてしまったそんじよそのらの国とは違うのだ、という風な主張である。

実際は勝ち残ったのではなく、なんとか形だけは生き残ったにすぎず、また後半戦をしていたのは、貴族達の兵士達ではなく、その大半が国の借金で雇った傭兵達だ。聞く人が聞けば「は？ 何言ってるんのお前」とでも言われそうな考えだ。

そんな思考回路を頭の奥底に埋め込まれている彼等が、身の保心や、体裁を気にせず己の領土の復興を先に手を掛ける事を遅らせ、てまで、一番被害が酷い西方の復興を支援する筈もなく。また、それにより王領も張り合わなければ貴族達にのまれてしまうので、それを防ぐために、王領の復興に力を入れなければならないという悪循環が引き起こされた結果、西方の領土の復興は、大幅に遅れて開始されたのであった。

話を戻そう。

王国の西方の領土、スイーダブル。

そこには“第八兵舎”と呼ばれる兵舎が、キロメートル単位の土地を使って、どんと一つの囲いでくくられ、スイーダブルの土地に建てられている。

第八、と番号が振られている事から分かるように、首都バストラノの王城の横やその東側等にも幾つか兵舎は存在するが、スイーダブルにある兵舎はこの第八兵舎だけである。

兵舎には王都直属の兵士が常に駐在しており、軍の寝泊まりの場

所としての機能を果たしていると同時に、《第 兵舎》と付く場所は、宿泊施設と隣接して兵士が訓練を行うための広場が設置されているので、鍛練場としての役割も担っているのであるのだった。

コツ、コツ、と。

第八兵舎内部、宿泊施設から鍛練場 広場へと繋がる石畳の通路を、一人の男性が音を立てて歩いていった。

茶色が所々に混じる黒髪。瞳の周りが少し充血して赤くなった黒目。顔立ちはまだ年若く、約十七、八、といったところ。

胸、肘、膝、局部だけを覆う軽装を身に付けて、剣やメイス等の幾つかの武器をぶらさげている。そしてそれらは微弱ながらも魔力を発しており、見る者が見れば、それは最低ランクの為ながらも、確かに全てが魔力を内包している『マジックウェポン魔武器』だと分かっただろう。

ジャラ、ジャラ。

彼が一本歩く度に、正体不明の音が鳴る。

装備だけを見れば、彼が幾つかの武器を手に取り戦う戦士なのかもしれない、という事は、彼を見れば誰でも予想できる。だけでもかもしれない、と曖昧な表現を使う理由は、彼の腰にぶら下げているのが武器だけでなかったからだ。

ジャラ、ジャラ。

彼の腰には、腰に巻いた数本のベルトに、武器と一緒に吊されている、幾つもの袋。

厚地の布で作られたその袋は、布に通した紐を使って袋の口を絞っていて、彼が歩く度に鳴っていた、ジャラ、ジャラ、という硬い物がぶつかり合う音は、どうやらその中から響いていたようだ。

彼は途中で足を止め、誰かを見付けるように立ち止まった。そして進行方向を目線の先にいる金髪の男に変えて、再び歩き出した。

「おうい、フェアブレアー」

「ああ、キヨトか」

少々気安い 見掛けた友達を呼んだような 声の後、返ってきたのは落ち着きをはらった、年若い青年の声が。

返事を返した人物を一言で表すならば、精悍な男性だ。

少し説明を加えるならば、金髪青眼、顎先か細く、また文句なしの美男子と言えるくらい、凛々しい顔立ちをしているという男性だ。腰には一本の剣だけをさし、背中には肩幅ほどの長さを持つ細かな装飾が施された、輝く銀の鎧で包んだ彼の体は、鎧の上から見るだけでも鋭く、鍛えぬかれた肉体だと分かる。

彼の名前はフェアブレア・ナツツイ・レッヒエンド。リュシカ王国近衛師団、その頂点の座に付く人物である。

「何かあったの？ こんな所で」

「……いや、特になんでもない」

余り興味がない事であり、なんとなく聞いただけだったのだろう。そっか、とキヨトと呼ばれた若者は、己の上司であるフェアブレアにあっさりとした返事を返す。そして「あーあ」と退屈そうな声と出すと、彼は両手を頭の後ろにやった。

事実、フェアブレアを含めた彼等は、退屈だった。

「あー、早く迷宮行ってーなー」

「そう焦るな。もう少しの辛抱だ」

王領の兵士を半分以上動員した、王国軍の出撃準備が漸く終わった現在、彼等を含めた近衛師団達は、ここスィーダブルにある“第八兵舎”で出動待機中である。

進軍先は、十日前、首都バスラノの南方にあるトリューシャ平原に突如現れた、【迷宮】と名付けられた場所。

異様な扉が出現しているそこは、今の所、あの中からモンスターが沸き出してくる等というキョトやカイト 二人の“異世界人”が危惧した様な事態は起こらずに、平穏を保っている。

「あいつ、はやく来ねえかなあ……」

もう一度「迷宮に行きたい」とぼやいたキョト。そんな彼の様子を見ながら、フェアブレアは前から気になっていた疑問を口に出した。

「気になってはいたのだが、お前等がアレを“めいきゅう”と呼ぶのは何でだ？というより、お前達はアレを知っていたのか？」

フェアブレアがいうアレとは、トリューシャ平原を占領し、奴隷競売の祭典を潰した<sup>イースリッジョン</sup> “異世界人”が【迷宮】と名付けたものことだ。

そもそも、なぜアレが【迷宮】と呼ばれる事になったのかというと、それはキョトとカイトの言動が原因になったからである。

アレが出現した後、リュシカ王国の学者達も首を捻るアレの存在を興奮しながら迷宮だ、ダンジョンだ、と騒ぎ、その会話を聞いた貴族達が、自分達より下だと思っている者達に知識が劣るなど当然甘受する訳がなかったのだ。

『あれは一体なんだというのだまったく……!!』

『おやおや？ おやおやおや？ あれは“めいきゅう”というのですぞ？ はっ、まさか貴方の様子……、もしかして、知らないのですかな？ ぷほwぶほほw』

『……いやいやいやいや、私は知っておりましたとも。あれは“めいきゅう”です。私が言っていたのは』

と 実際はこの数十倍は厭らしい会話なのだが この様な事が貴族達の間で伝染し、瞬く間にそれが貴族中に広まってしまふ事態になり、なし崩しにアレが【迷宮】と呼ばれる様になってしまったのだ。

「え、迷宮は迷宮だろ。宝の山に、蔓延るモンスター、要はダンジョンだよダンジョン。それで知ってたというか、なんというか、そういう物語がこっちには有っただけで、それと似ているからっていうだけだ」

とはいえ、カイトやキヨトにとって、現れた扉、モンスター、宝（この場合は『原石』）の三拍子が揃っている時点で連想するものなど、彼等が元の世界にいた時に読んだ小説やゲームに出てくる【迷宮】や【ダンジョン】以外に勝るものなどなく。結果として騒いでいただけであり、そう重要視するほどの事ではなかったのだった。

ふむ、と口に手を当てるフェアブレア。相対するキヨトを見るその視線は、どこか疑わしげだ。

「物語、というと、矢張りお前の住んでいた世界には【迷宮】なるものがあつたのか？ それを出来れば教えて欲しいのだが……」

「だーかーらー、物語は物語なんだよ。フィクション、空想。こっ

ちにもあるじゃん、《ルヴィクエスの丘》だっけ？ まあそれとか、えーと、あれ、あれだ、あの魔法使いの」  
「《イエンルダルティーアの魔法使い》、か？」  
「そう、それぞれ」

フェアブレアの言葉に頷き、首肯するキヨト。フェアブレアもキヨトの言葉に合点がいったのか、先程よりかは幾分納得の色が見えている。

《ルヴィクエスの丘》、《イエンルダルティーアの魔法使い》。

弧高の英雄のお話と、狂ってしまった伝説の魔法使いの話。

どちらもこの世界では有名な御伽噺だ。

この世界にもちゃんとした書籍の存在はあるのだが、フェアブレアは余りそちらには精通していなかったため、身近な例として、“異世界人”のキヨトですら知っている、ファンタジアの有名な話を持ち出した事が、どうやら功をそうした様だ。  
だが、とフェアブレアは口を開く。

「それでもあれに関して、間違っている情報でもいいから、言うて欲しい。それが例え作り話だとしても、だ」

誰も知らない情報を知っている、という事は、時には非常に重要な事態を防ぐ要因となる。その重要さをフェアブレアは理解しているから、どうしてもキヨトからそれを聞きたいのだ。

キヨトも納得がいった顔で、ふーむと顎に手をやり、何かを思い出す様に目を閉じた。

「……むう、まあそうだよな」

「うむ。ほら、言え」

「あー……はいはい、分かりました。つっても違つかもしんないか



らな」

「承知の上だ」

「んじゃまあ、えーと、【迷宮】ってのは大抵は潜る程敵が強くなって、たまにボスキャラが出てくるとか、そんな感じ」

「他に特徴とかないのか？」

「あとはそうだな……」再びキヨトは考える仕草を取り「……場合によってはアイテムが落ちていたり、罠が仕掛けられていたり定番だなあ……あ、あとモンスターハウスっていうのがゲームであって、ああゲームつーのは」

「いた、いた。広場にはいないと思ったら、こんな所で二人とも何やってんだよ」

キヨトがフェアブレアに迷宮について話していると、キヨトの低い声とは違う、一人の若者の声が二人に掛る。

「もうそろそろ移動するから広場について欲しいんだけど」

そう言って、声を出さずに苦笑する彼は、東洋人特有の顔を持っていた。

百七十と少しの身長、少しボサボサになっている黒髪に、光を発している、綺麗な黒目。足まで届いた黒ズボンを履き、繊細だが綺麗に見えるよう飾られた長袖の服を、皮で出来たジャケットを着込んでいる。手には、杖として使うには長過ぎて、また棍棒にして扱うには短い棒を持ち、腰にはちゃぶちゃぶと水筒の中身が、音を出しながら波を立てていた。

「カイトか」

「？　そうだけど、何？」

「いや、何でもないさ」

「そうか」

フェアブレアの言葉を簡単に返しつつ、カイトという黒髪の青年は近付いて来る。

二人を見る彼の表情には、少々疲れが見えていて、どこか負の雰囲気を感じていた。とはいっても、息切れすら起こしてもいないのだが。

「おー、やっと終わったのか？」

「あともう少し。つうか清人、お前も協力させるつつただらうが。覚えてるよ」

あーそうだったわな、とキョトが呑気そうに言うのを聞いて、カイトと呼ばれた若者はため息を漏らす。まあ、いつもの事だとキョトは気を取り直し、くいと右手の親指だけ立てて、自身の後ろを指差した。

カイトの後ろは、ここ“第八兵舎”の鍛練場　即ち広場である。

「それじゃ、そろそろ。フェアブレアも、お前も、広場に行くぞ」

「うむ、そうだな」

「おーう」

二人が返事をし、カイトを含めた三人で、足並を揃えて歩き出す。キョトが一人で歩いていた時より、足音や衣擦れの音が増え、誰も口を開かなくとも静かには感じられない空気。だけれども、その空気を壊してまで、キョトは一つ、どうしても言いたい事があった

彼は再び両手を頭の後ろにやり、“第八兵舎”の広場を視界に収めて、呆れに近い感情を含んだ声を出す。

「しっかし、まあ、何人いるんだあれ？」

そう、彼の視界には鍛練をしている兵士の姿等ではなく、大小様々な隊列を組んだ、この国の兵士によって埋め尽されてた“第八兵舎”広場の光景だった。

スイーダブル“第八兵舎”。それは王国の中でも広場が一番広く、その大きさは王領の軍全部を入れてもまだ余裕がある程だ。

そんな広場に　大きさは違えども、四角い隊列を組む兵士達を見て思わず、すげえなあ、と感嘆の声を漏らすキヨトの横から、フェアブレアが答えた。

「大体一万と六千程だな。その内の大体半分程が王領の兵士達で、あとは周りの貴族達からの派遣軍だ」

「へえ」キヨトが感心した声を出し、そのままフェアブレアに聞いた「確か王の軍って俺達合わせて……一万くらいだったけど、そんなに動かして大丈夫なのか？」

「まあ本当は五千程だったんだが、今回はあの馬鹿王子付きだからな」

「ああ、なるほど。納得」

馬鹿王子　正確に言えば、リュシカ王国が唯一の王子である第一王子。

その悪名はキヨトもカイトも重々知っており、何回かは彼が起こした騒動や我儘に巻き込まれて、煮え湯を飲んだ覚えがあるほどである。そんな彼の“迷宮に出陣する”という我儘は、どうやら無事もしくは結局　可決されてしまったらしい。

本人は自信满满だが、これから行く【迷宮】には危険があるのは

分かりきっている。彼は腐っけていてもこの国唯一の王子。死なせる訳にもいかないので、予定より多く出兵しているのだ。

因みに、この七千の王領軍の内、五百程の兵士達は、王子が無理矢理連れてきた兵士である。

「にしても、貴族の軍の数、多くないか？」

納得がいったキヨトとは別に、カイトがぼつり、と呟いた。

全総数は一万六千、王領軍は七千なので、差し引けば単純に九千程がそれである。

しかし実際は計九千とはいえ、この【迷宮】に参加している貴族達の人数等を考えれば、そこまで非現実的な数ではない。

塵も積もれば山となる。イリーズ家、ダヴァラス家、ムルボウエン家、ザルバダ家等の計十を越える男爵、子爵、伯爵達。そしてウエンディアンヌス公爵の騎士団千二百人に加え、バックトラング公爵の八百。その全て自領の私兵、という訳ではなく、中には恐らく恥など考慮の外だったのだろう、只の領民を出してる所まである始末だ。しかし、それでも全員合わせて七千程。残りの二千は彼等の中でも、一番多く私兵を出している人物の影響であるのだが。

「まあ、エスナスティンク侯爵がほぼ全軍を参加させているからな。七千に加えて、更に二千程が増えて、九千だ。王領軍よりも多くなる」

「？ そりゃなんでまた」

キヨトが軽い調子でフェアブレアに聞く。

彼は理由を知らなければ、何事も納得しない性であった。

「なんでも、本家の娘が死んだらしい。たしかウリネアール、と言ったか」

「あー、そういう話かー」

キヨトは思わず苦い顔をして、眉をひそめる。どうやらそのような話は、余り好きではないらしい。

と、キヨトを挟んでフェアブレアとは逆側を歩くカイトが、ふと気付いた。

「余り人の名前を覚えないうフェアブレアが、覚えてるなんて珍しいな。まさか、意中の人だったのか？」

「まさか」カイトの質問に、フェアブレアは肩を疎めた。「そいつの護衛だったアズスルー、という奴の面識があるだけだ」

「へえ、アズスルー、ねえ。どんな奴？」

カイトが続けて聞く。

己の上司が覚えている人物だ、気にならない訳がなかった。

「中々強かったぞ？ 剣士の癖に【魔道】何てももの使うからな。だからこそ、そう死ぬとは思わなんだが……」

「フェアブレアあの時いなかったもんなー」

「うむ」

《イスリツション》は二日間に渡って開かれる奴隷競売だ。今回、初日がキヨトとカイトと他の副隊長の計四人が出張り、二日目にフェアブレアと副隊長四人が出るといいう計画だったのだが、今となってはどうでもいい話である。

「じゃあそのアズスルーって奴と、フェアブレアや俺とどっち

が強かったんだ？」

「あ、オレも気になるわそれ」

はいはいと、キヨトが拳手をしながら言う。正直カイトにとって拳げられた右手は邪魔である。

フェアブレアは暫し思考して、やがて結論が出たのか、口を開いた。

「まあ、奴の纏う風には苦労させられたが、私の方が上だったな。カイトとキヨトは……そうだな、純粋な勝負だったらアズスルに負けるが、何でもありませんならばそこそこ勝率が高いんじゃないか？」

「へえ、スキル使っても絶対に勝てるわけじゃないのか」

「本当にかー？」

カイトは感心した様に、キヨトは疑わし気な声を出す。

この二人の反応は、カイトが余り戦闘向きではない能力からくる警戒の差であり、またキヨトは、強力な能力を得た自信からくる油断であった。まあ、キヨトも余り戦闘向き、とは言えない様な能力なのだが。

「というかカイト」

「？」

「貴様、あいつを見たことある筈だぞ」

「え、何それマジ？」

「ああ、前回の大会の時に」

「ん？ ああー！！もしかしてアイツの」

「あのー、オレわからないんだけどー……」

「あ、あれって」

フェアブレアとカイトの会話が盛り上がる中、一人話に置いていかれていたキヨト。

彼は兵士達が集まっている広場の中である人物を見て、思わず声を漏らした。

「となつてな、ん？ どうした」

「へえー……。あ、あの二人、確か会場にいたような……」

彼等の視線の先には、二人の男女。

赤が混じった橙色の髪。見るもの全てを威嚇しているような鋭い目つきをした朱色の瞳。所々がボロボロになってはいるが、艶のある紅色のローブを羽織っている。

少々距離が離れているキヨトから見ても、女らしさを強調する体のラインを持った美女。

もう一人は、丸眼鏡をした男性だ。

白が混じった淡黒の頭髮に、片手に白く細長い棒を杖代わりに使っていた。着ている服は、黒いスーツに白いシャツ。橙色が目立つ女性に寄り添われている細身の体は、更に肉がなくなっているようにも見えたが、その目にはちゃんと光が灯っている。

だが、以前と違う点が一つ。それは。

「海斗。あの人、右腕つて無かつたっけ？」

「いや、あつた様な気がするけど」

腕が、無い。

黒いスーツを来た男性の右腕の袖が、そこに何も無い事を示すように風でためき、宙で揺れている。

顔色は悪くはなさそうだが、その目の下には軽い隈が出来ており、どこか心が不安定そうだ。

カイトは、彼等を思い出す。

そういえば、自身の能力で運んでいる時に見掛けた彼等は、皺一つ無い綺麗な服装ではなく、所々が破れ、赤色で染まっていた筈だ。余り詳しくも見ていなかったし、隣にぴったりとくっついていた女性の服装が赤色を基調としていたから気付かなかったが、男性の服が赤色で染まっていたのは恐らく、彼の。

「喰われたか」

フェアブレアの、ただの事実を断言しただけの言葉に、彼等は心に重い物が落ちたような気がした。

余りにも薄い、日常と非日常を隔てる壁。生死が引かれた境界線上に立たされている彼等にとって、その現実はいかなるものか。

その現実を、見せられた様な気がして。

と、三人の視線に気が付いたのか、ぴったりと男性の側に付いていた女性が此方を向き、近付いて来た。そのまま彼女は彼等の前で止まり、言つ。

「近衛師団ね」

「そうだが」

「……何か用か？」

「……おいキヨト。ここは黙っとけ」

威圧するように確認してきた彼女に対し、フェアブレアは淡々と



肯定し、少々腹がたったキョトが一步前に踏み出すのをカイトが肩を掴んで止める。

ふん、と橙色の美女　ベルディックがつまらなそうに鼻を鳴らし、先程より強い気迫を持ってフェアブレアを睨む。

その艶やかな唇から紡がれた声は、はつきりとした暗く、しかし燃えるような熱さを持った感情が込められていた。

「要件は一つ、あの蛇には手を出さないで」

「あの蛇、とは？」

「言わなくても分かるでしょう？あのデカイクソ蛇よ」

蛇。

十日前に開催された《イースリッション》を破壊した、蛇。異世界人の二人はボスだなんだと言っており、倒せば稀少な物を落とす確率が高いとされているあの蛇竜。

「了解した。但し、その後の処理や戦利品等は、こちらが貰おう」  
「構わないわ。まあ、回収出来る物があればだけど」

ベルディックの目に宿っているのは、復讐を糧に燃える、蒼い炎。愛する者の片腕を奪った存在を、彼女は放置する筈などなかった。

「あいつは」

彼女は断言し、宣言する。

憎悪の矛先を向けた、あの蛇竜へと。

「あいつは、私が殺すわ」

シユカ王国南方、トリユーシャ平原。

モンスター等が生息しておらず、人に対して基本的に無害な小鳥が鳴き、前までは、見渡しても《イスリツション》会場以外何もなかったその土地は、今や別の土地かと思われる程に、その姿を変えていた。

まず一目見て分かる事は、そこら一面に生えていた、野草の大部分が無くなり、その下にある茶色の地面を覗かせている事だ。辺り周辺はよく見れば地面は所々が黒くなっており、人の手で直接、ではなく、何かによって焼き払われていて、焦臭い香りが広がっている。

次に目立つのは　　というより此方の方が目を引きそうだが平原に聳え立つ、巨大な門だ。

それは岩の様な材質で構成されており、驚く程に白く、太陽の日射しを雪のように反射して、その白さ殊更に強調している。一見壁とも間違えられそうな門には不可思議な紋様が細やかに刻まれており、どこことなく神聖な雰囲気を感じている印象を受ける。高さは二十メートルを軽く越え、三十メートルに届くかどうかといった所。更には門を中心とした周りは、そこそこの範囲が土の大地から石で出来た者へと変わっており、前までのトリユーシャ平原を知る人が見れば、現実よりも己の目を疑う光景だろう。

巨人が隊列を組んで潜れる程の門、だが一番異様な所は、その大きさでもなければ、技巧が散りばめられた装飾でもない。

一番異様なのは　　その門の内側である。

幅数メートルはある重厚な門は両開きになっており、その中を外部に曝け出している。しかし、トリユーシャ平原に現れている門の

後方には何もなく、ただの大地が広がっているだけ。となれば当然、開かれている門の中を覗いてみれば、見えるのはそれな訳なのだが、しかし現実には、それを容易く覆す。

門の内側は、まるで暗幕でも降ろしているかのような、漆黒の幕、いや膜が張られていたのだ。

門の白とは正反対である、淀むことなどない完全な黒。

太陽の光を浴びても一向に晴れる様子を見せず、またそんな闇で覆われた門の向こう側など見える筈もない。

そんな巨大な門　【迷宮】の入口は、今もその口を開いて、その中を潜ろうとする侵入者を待っていた。

「あともうちよつと、つと」

そんな十日程で変貌を遂げたそこに、一人の男の姿が見えた。

男はガリガリと鼻唄交りにそこらで拾った樹の棒を使い、焦げた地面の上に線を引いている。ガリガリ、ガリガリ、と歩きながら、その後、樹の枝を連れさせて、焦茶色の大地に線を引いていく。

大体数百メートルぐらいだろうか、前から歩いてきた分を足せば、キロに届くのではないかという距離を歩いた所で、彼は足を止めた。

「ここら辺かな」

彼はそう呟き、今度はその内側に線を引き始める。その軌道は先程までの直線ではなく、曲線や円等の図形を組み合わせた紋様を描いていき、やがて途中まで書いてあったそれに線同士を繋ぎ合わせる。

今のトリユーシャ平原を俯瞰する事ができたら、巨大な門の前方に、非常に大きな長方形の形をした、所謂“魔法陣”の様な地上絵が観察出来る筈だろう。

それを書いた張本人である彼が、ふう、と一息ついていると、後方から声が掛る。

「終わったかー!？」

退屈が混ざった声である。

こちらの苦勞も知らないで、と彼は先程吐いた息とは違う息のため息とも言う　を吐き、まだ終わっていないと返事を返す為に顔を起こして、体の向きを変えた。

今、トリユーシャ平原に来ている人物は、彼を合わせて二人だけなので、声を掛けた人物など振り向いて確認するまでもないのだが、特に振り向かない理由もない。なのでなんとはなしに振り向き、彼はその人物を視界に入れた。

「　清人ー！　お前、そろそろ準備しとけよー!!」

「あいよー、りょうかーい！」

キヨト・カラスマ　烏丸清人。

リュシカ王国近衛師団に四人いる副隊長、その内の一人であり、“異世界人”である彼は、先程のスイーダブルの“第八兵舎”からカイトと共にここ、トリユーシャ平原にやって来ていたのだった。

王国の西方にあるスイーダブル“第八兵舎”と、彼等二人がいる王国南方のトリユーシャ平原には、馬を全力で走らせても最短で三時間は掛る距離。二人の近くには馬の姿はないので、徒歩で来たという事になる。が、しかし太陽は、彼等がフェアブレアと会話して

いた頃から殆ど動いてはいない。更には汗一つ掻いていないキョトとカイトは、走った後には到底見えず、まるで殆ど体を動かさないでここに来た様に思われる。

否、思われるのではなく、彼等は。

「はい終了ー！！ やるぞ、手伝え清人！！」

「あい、よお！！」

全ての線を繋ぎ終えたカイトが、キョトに叫んだ。

キョトもそれに大声で返し、カイトに近付き、彼に向けて手を翳した。

長方形の魔法陣の大きさは、“第八兵舎”とほぼ同じ。

カイトの体には能力を発動させる感覚が巡ると同時、己の書いた陣が白い光を放つ。

自身の魔力の大半を奪われそんな感覚を得るが、カイトは迷わず、自身の【スキル】を行使した。

「【転移術】、起動」

「【魔力介入】発動、『対象：海原海斗【転移術】』」

光の、奔流。

【スキル】とは、実はこの世界の中には存在しない、異世界ファンタジアから加えられた一つの法則だ。

それは“異世界人”だけにとり、明確な線引きをされている。

例えばハルアキの『ステータス』の画面を見てみると。

《『ステータス』

『カテゴリ分類』

“異世界人”

『称号』

『スキル』

【迷宮創造】》

と、この様に表示される。カイトの場合ならば『スキル』の欄が【迷宮創造】から【転移術】に変わる具合いだ。

だが、これが“魔族”“人間族”関係なく《ファンタジア》の住人の場合は、これとは違った結果になる。

《『ステータス』

『カテゴリ分類』

“人間族”

『称号』

『魔道』

【魔道】》

一目瞭然だろう。

【スキル】の枠が【魔道】に、いや【魔道】の項目が【スキル】に変わっているのである。後者の『魔道』の下にある【】の欄には【魔道】という風に項目が記載される仕組みとなっていて、実力や才能がある人だと、複数の【魔道】を持っている者も存在しているのだが、“異世界人”が【魔道】を持つ事、選ばれる事は決していない。

だが、極稀にその逆を可能とする者はいるのだが 話を戻す。

【スキル】の存在は【魔道】とは別ベクトルの力を持っている事が多い。

それはハルアキ達のような“異世界人”が持っている魔力が、指向性を持ってない無色の魔力が原因だと思われるからである。

これは例えばだが、ハルアキのスキルである【迷宮創造】は一般の【魔道】に対して比べてみると、どれだけハルアキの【スキル】が異常だという事が分かるだろうか。

【魔道】とは、“火”“水”“風”“土”に新たな“属性”を加える事が大前提の、基本魔術の上の段階だ。つまり、『身体強化』を除いたこの世界の魔術は“属性”というものが不可欠なものであり、その大前提は、例えば大陸で有名な《宗教》に禁忌認定されている【魔道】も同じである程、確固たるものである。

対して、【迷宮創造】はその大前提の前に、“属性”と言えるものが無い。なのに【魔道】の魔術並、もしくはそれ以上のものを使用出来るというのだから、やはり能力のベクトルが違う事が分かるだろう。

「 来いッッッ!! 」

だから、“異世界人”のキョトとカイトは、この世界の魔術では未だ確認されていない『転移』の異能を、行使出来るのである。

光の奔流が、止まる。

「 はあっ、はあっ 」

「……………ふうー」

キヨトとカイト、二人の額には汗が浮かび、肩を上下に揺らす。その顔には疲労の色が少し見えた。

服に土が付くのも構わず、二人共その場にどさり、と尻餅をついて、体の力を抜く。疲れたー、と酸素を肺に取り込むために開いた口から漏れる文句。そんな二人に、一人の人物の影がさした。

「キヨト、カイトご苦労だ。」

「ま、まったく、だ。はあー、さ、すがに、いち、ど、……………ふうー、は、キツイものが、はあー、ふうー……………、あるぜ」

「本当に、だよ、魔力を補助する、はっ、身にも、な、なれって、ふうっ、いうんだ」

彼等二人の前に立っているのは、一人の男。先程スィーダブルの“第八兵舎”で、別れた男。

先程まで彼がいなかった彼が、此処に、トリューシャ平原にいるという事。

それは、つまり。

「さあ、始めようか」

リュシカ王国近衛師団隊長、フェアブレア・ナツツイ・レッヒエ  
エンドはカイト達を背にして振り返り、その視界に収まらない程の  
個々に整列した、一万六千三百六十八名からなる軍を見渡し、  
そして顔を見られないように天を見上げて、表情を変えた。

それは宛ら、欲情仕切った雄の様な。

そんな、深い快感を前にした、獣の様に。



「なあ、さつき耳に挟んだんだけどさ」  
「おう、何だ？」

トリユーシャ平原の巨大門を傍目に、二人はその辺に落ちていた、丁度いい程度の大きさに腰掛けて息を休めていた。

斥候が帰ってくるまでは、一万以上の兵士達が待機しているのと同じく、今は彼等も待機中なのである。

既に二人共魔力が全快とは言えないものの、息は整っており、汗もひいている。そんなキヨトとカイトは特にする事もないので、益体も無い雑談中だ。

「いや」キヨトは多少口籠もり小声で言う。「何か、“俺、この戦いが終わったら結婚を申し込むんだ”って真顔で言ってた奴がいてさ……いやもう、ね。噴き出さなかったオレ、凄くない？」

「……え？ え、ちょ、それ、本当に？」  
「間違いなく」

「……ぶ、ぶふーッ！！ マジかよ！！ 本当にフラグ立てる奴ってマジにいるんだなっ。ひー、お前より長くこっちに居るけど、そんな死亡フラグの代表ともいえるセリフ初めて聞いたぜ！」

「あ、そうなの？ てつきり珍しくないのかと思っっちゃったよ」

カイトの思わぬ返答に、キヨトは意外そうに目を丸くした。

キヨトとカイトは、同じ日日ひびに召喚された、所謂同期の“異世界人”ではない。

今や各国に数人はいる程の人数が召喚された彼等は、当然その時期はかなりバラバラになっている。これは《大戦》な終わった後も、自国の戦力の強化と、他国にいる異世界人達等の脅威に対抗するために起きた、今現在も続いているイタチごっこの結果であった。

異世界人が来た時期を大きく分けると 前期 と 後期 の二つ。

前期 とは、三年前に終結した《大戦》中に召喚された者達で、後期 がその終結後に召喚された者達のことだ。

リュシカ王国にいる二人は共に 後期 に入るが、カイトが約一年前、キヨトが半年程前に召喚されており、カイトの方が半年といえども先輩なのである。

故にキヨトは、そんなカイトが今のような「俺に任せて先に行け！」やら「また、また俺は守れなかった……！」だののベタな台詞を聞いた事がないのを意外に思ったが、よく考えてみれば、自分も半年暮らして初めて聞いたものだと思いつき、まあそんなものと一人納得する。

ひーひー言いながら腹を抱えているカイトが、にやり、と口の端を吊り上げて、意地の悪い表情に変わった。

何か、悪い事を考えたな。

キヨトは内心苦笑しながら、カイトの言葉を待つ。

そういう悪巧みは、キヨトは嫌いでは無いのである。

「そいつ、死ぬかどうか賭けようぜ」

「……そいつって、さっきオレが言った、死亡フラグ建てた奴？」  
「ああ、お互い手エ出すのは無しで、後から聞けば大体分かるだろ」  
「おお、海斗は本当に酷い奴だな。でもオレは死ぬ方に今月の給料賭けるぜ！」

「はっはー、お前もノリノリじゃねえか！ てか死ぬ方に賭けんな、賭けになんないえ」

「じゃあ二人共に彼は死ぬ、と」

「外れたらフェアブリアにでも貢ぐか？」

「それは勿体無いから二人で奴隷でも買って遊ぼうぜ」

「あー、でも娼婦とかでもよくねえ？ 高級なのをパーツに使ってさ」

「あーでもなあ……」

「……そうだなあ」

二人はふう、と息を吐いて、明後日の方を見る。その目には多少の憂いの感情の色が混じっていた。

「歌姫ちゃんなあ……」

「いやそこは巫女姫様だろうに」

キヨトの言葉に、カイトが直ぐ様反応した。

二人の目が合う、気の所為か、火花が散っているようだ。

「いいじゃねえかよ、歌姫。闇の巫女ちゃんの黒髪も良いけど金髪最高だよ金髪」

「ほほう、巫女姫様の美しさが分からないようだな。少しばかりやっつてやるうじやないか清人君」

「うわ、何か口調変わってるよ。キモイヨー」

「デメエ」

カーン。カーン。カーン。カーン。

カイトが腕を捲って立ち上がる寸前、待機している軍の中から、鐘の音が鳴り響く。

その音は四回ずつ鳴らした後に間を置いて、再び四回鳴らすのを繰り返し、兵士達に準備せよ、という支持を伝えた。

「　　どうやら先行組が戻ってきたっばいな」

「　　ちよ、殴んな海斗。ほら、そろそろ行か、いてっ、ないと」

「　　当たり前だ。フェアブレアを怒らしたら後が怖い」

「　　違うないね、っと」

二人共に既に息は整ってはいるが、魔力は未だそこまで回復はしておらず、両者残る魔力はあと六割程、といった所だ。とはいえ、一晩十分に休めばその殆どが回復するし、また食糧は先程の一万六千人の呼び出しの際に、一緒に召喚しているので、もしカイトの魔力が底を着いても問題はないのである。

岩から降りて、キョトとカイトは軍の方へと歩いていく。

その途中、キョトは迷宮の入口とされる門を眺めて、ポツリと漏らした。

「　　モノライド単輪駆動車あつたら楽そうなのになあ」

「　　ものらいど？」

「　　あれ、知らない？　一輪車だよ一輪車」

「　　ああ、一輪車ね。わかつたわかつた。あんなガキが遊ぶようなあれの何が便利なんだ？」

「　　え、オレある乗るのにかなり時間かかったんだけど。すごいな海斗」

「　　？　　そうかあ？」

「そつだと思っけど……。あ、フェアブレイヤー！ こっちこっちー  
！」

空気が静まっている。

それは決して沈静されたようなものではなく、押さえつけられた  
獣が開放される様な、ぴりぴりとした静けさだ。

「皆、此処に集った兵士達よ！！」

静寂を裂いたのは、一人の男の咆哮にも似た宣誓だ。  
準備は終わった。

フェアブレイヤーは、右手に持つ剣を天に翳し、次に【**迷宮**】の入口  
である門を指して、言う。

「いざ行かん！！ 我等の正義は、此処にあり！！！」

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオ！！！！

間を置かずに、怒号が響く。

隊列を組んだ暴力が、剣を持ち、槍を持ち、斧を持ち、盾を持ち、  
杖を持ち。

進め。進め。進め。

鎧を着、ローブを羽織り、馬に乗り。

前進する。進軍する。行軍する。

それは、正しく【迷宮】を相手にした“探索”ではなく、“侵略”だ。

彼等は進む。

そして一歩。

「進、めエエエエー……ッッッ！！！」

そして隊列を組んだ先頭が、門を、潜った。

潜って、しまった。

《パーティ【リュシカ王国軍迷宮探索隊】のパーティメンバーが規定人数の上限を越えました。特定条件を満たしたことによりユニークモンスター 向こう見ずな猪 が発生します。使用コストは0です》

彼等は気付かない。

「漆黒の闇等恐れるな！！ それはすぐに終わる！！ す、すめエエエエエエー……ッッ！！！」

先程の彼とは違う、軍隊長の一人が叫ぶ。

それに呼応するように、咆哮が拳がった。

進軍は、止まらない。

《パーティ【リュシカ王国軍迷宮探索隊】のパーティメンバーが規

定人数の上限を50名以上越えました。特定条件を満たしたことからより“亜人型”モンスター 子鬼 ミディアル・ゴブリン ……以下七種類のモンスター及び、ユニークモンスター 洗練された子鬼達 ホムレス・ホーネット 巢無し蜂 が発生します。使用コストは0です》

「第六軍から十軍まで、行軍開始ッ！！」

《パーティ【リュシカ王国軍迷宮探索隊】のパーティメンバーが規定人数の上限を200名以上越えました。特定条件を満たしたことにより“魔獣型”モンスター ノイレス・キャット 忍び足の猫 レッドキャップ、 “亜人型”モンスター トル 巨鬼、“鳥獣型”モンスター ウィングバード、“液状生物型”モンスター アシッド・ジェル 強酸水 ……以下十二種類のモンスター及びオンリートラップ アルフォビヌ 奈落箱 が発生します。使用コストは0です》

彼等は気付かない。

自分達が、【迷宮】に対して何をしているのか、分かっていない。分かって、いない。

《パーティ【リュシカ王国軍迷宮探索隊】のパーティメンバーが規定人数の上限を800名以上越えました。特定条件を満たしたことにより“魔獣型”モンスター タイガー・ランス 虎角 エイビルエイプ

異世界人は、思い付かなかった。

“何故”迷宮には、一度に組めるパーティの人数が決まっていたのかを。

遊ぶ事に夢中になって、目の前の事に捕われて、その真意を考えはしなかった。

《 “亜人型”モンスター ハイ・ゴブリン 以下三種

類のモンスターが発生し、『条件：“魔獣型”“亜人型”の総種類が一定値を越える』を満たしたことにより“獣人型”モンスターケンタウロス が追加され、及びユニークモンスター バニール・バニール 気狂い狡兎 鋼鉄劉隆 が発生 》

迷宮とは、探索をするものである。

侵略、略奪、戦争、そのどれもが当て嵌らずに、しかしそのどれも要素が、迷宮には備わっている。

しかし、迷宮に対しては、戦争する、とは言わない、略奪するとも言わない、侵略するとも言わない。

迷宮に対して望む言葉は、挑戦であり、探索なのだ。

故に、それを破った者には、罰を。

探索せずに、侵略し、略奪しようとする者には、罰を。

《 索隊】のパーティメンバーが規定人数の上限を12800名以上越えました。特定条件を満たしたことにより“魔獣型”ハイ・オーク ……計十一の種類及び、ユニークモンスター ロード・オプ 豚皇 ・オーク が発生します。使用コストは0です》

目には目を、歯には歯を 　では軍には？

その答えは、【迷宮】だけが知っている。

《侵入者と一定数に達したモンスター個体数の差が五倍以上により、救急コマンド【楽園の謳香】を使用しますか 残り9秒「Yes / No」？

この選択は選ばない場合、「Yes」と見なされます》

蹂躞が始まる。



《 『 特定条件：軍場の匂い』 を満たしたことにより、『 戦に  
飢えるモノ達』：スライッシュ・ミンダ 肉を裂く者 、 ミノタウロス』 を召喚しま  
す。使用コストは0です》

蹂躪が、始まる。

閑話「02」(後編)(後書き)

え？ やりすぎ？

……アアアア( )。( )ボクナニモキコエナイ。ボクナニモキイテナーイ。

あとがき(最後に愚痴のようなものあり)

鶏と命を賭けて戦うSSはきつとこれだけです。他にもありそうな気はしますけど、お得だよ！(何が

ジゼルの武器の使い方イメージはモンハンの双剣で想像してくださって結構かと。スタミナ消費してからの無双モードは今の所ジゼルには搭載されておりませんが。

或いはFFのシーフとか？

現実と非現実の境があやふやな、異世界人の精神的違和感を感じてくれたらな、と書きながら思いました。書いてる時に、自分でも「あ」とか思うことがありますよね。

はてさて、本来この閑話は、先に投稿した01合わせて40KBくらいで終わるだろうなー、とか考えていたんですが、気付けば倍以上の長さになっていました。なんだこれ。

書いている途中に、あ、これも書かなきゃ、とか、ここ書いとかないとヤバくね？とか思っているのが原因だと自負しております。後半部分とかもう書きたくないとか思っちゃいました。あはは、はは、は……。

まあ無事書き終えたから別にいいのですけども。

ジゼル君の戦闘シーンは本来考えては無かったのですが、先に16KB程で書き終えていた伏線を“これを今出したら確実に混乱する”という理由で省いた事により本文の、尺が足りなくなるのでは（結果的にはメチャクチャ尺が長くなりましたけど）、と思い、“クックロウとほんわかする和みシーン”があのように変更されました。

よせにはほのぼの純愛ラブコメが書ける気がしないの。

時に話を変えますが、よせが考えたオリジナルモンスター……の、あれ……？

……まあ、よせに次々と新しいモンスターは思い付く自信がないので、絶対パクリじゃねーかこのモンスター、とか言われる存在も出てくるかもしれないが、出来るだけそのような事にならないよう努力しますので、多少甘めに見てくれると嬉しいです。

個人的には結構満足できる長さで内容に仕上がったんじゃないかなど。

結構長く感じなかったらうれしいです。そしてできればコメントくださいー、いえー。

ちよいと愚痴入ります。

今回は、二種類の蹂躪が出てきます。

片方はしょうがないとして、片方の蹂躪はどうにかして回避出来ないか、と考えてはいたのですが、物語上どうしても回避は出来な  
いという事になりました。自分の作品に偽善成分垂れ長しです。

それでもなんとなく、自分で作った作品ですが、悔しいなと思  
いました。

はい、それだけです。

次回、『二つの蹂躪』。

この作品を読んでくれている人に感謝。

蹂躪「01（序）」

「10:32:55」

太陽の光が照り注ぐ、よく晴れた日。

晴天とも言える空は、地上で何が起こっつていようとも、その表情を変えないだろう。

そんな空の下、一つの集団が、広がっている一面の緑が生い茂る草原に作られた街道の上を、談笑しながら歩いていた。

「いやー、今日は中々だった」

「うん、あのオーガは強かった。危うくこっちがやられてしまつとこだったよ」

「ははっ、二頭を押さえといて無傷でいられているのくせに。リーダーはもう少し自分を高く見た方がいいぜ」

「確かに、それは私も同意。だからたまに舐められるのよ、もう」

「むっ、そんなことはないんだけどなあ……」

「そんなことあるわね」

「あるね」

「あるな」

「……………」

人影の数は全部で四つ。

男、男、女、男、と横一列に並び、装備している武器や防具を鳴らしながら、彼等は街道を歩いていく。

落ち着いた雰囲気を身に纏っつてはいるが、彼等の見た目は若く、恐らくは十七、八ぐらいだろう。全員、王国等の一般市民とは懸け離れた格好をしており、誰もが少なからずの防具を纏い、腰には剣や杖などがぶら下がっている。

更には正面から見ても一番左に立つ、重厚な鎧を纏う男の背には、多少血が滲んだ布袋が背負われていた。

まるで、戦闘等を生業としてしていると主張している様な姿。

勿論それは事実であり、彼等四人は今、先程生死をかけた依頼を終えて、帰って来る最中なのであった。

「けどマジでリーダー凄いやな。多分実力だけなら上のランクと遜色無いだろ」

「それは確かに。それに氣力が使えるのは珍しいと言いますし」

仲間達の言葉が示す人物は、列の内側にいる男である。

短く切り揃えられた茶髪に、焦茶の目。丈夫な鋼を使って製作した鎖帷子を装備しており、腰にはバスターソードをぶら下げている、剣士風の男。

リーダーと呼ばれ、仲間達の視線を当てられた彼は、頬を指で掻き、すぐに弁明するかのような口調で喋り始めた。

「いやいや、オーガ二体なんて、ほら、上のランクにいる人達に比べたら楽勝じゃん。だから あてっ」

のだがすぐに、彼の隣にいる人物がそれを止める。

こっん、と彼の頭を叩いた女性は、まったく、とでも言いたそうに眉を寄せていた。

女性の外見を例えるならば、いかにも魔術師ですね、とでも思えそうな格好だ。

皮を鞣した厚手のローブ、手首辺りをバッチで留めた手袋、先程剣士風の男の頭に当てた、木の枝の様な杖。

肩まで届く茶色い髪を持っている彼女は少し頬を膨らましていた。

「ほらまた自分を下に見る。あのねラック、貴方もうちよつと自分に自信持ちなさいよ」

そう言い、少し彼女は俯いて。

「……それに、ラックはできるって、信じてるんだから」

「……う、ごめんエルナ。気を付ける」

二人はその場で立ち止まり、二人だけの世界をその場に形成し始める。

二人の世界を主張するかのように、なんとなく、こう、桃色のオラの様なものが立ち込め始めた、気がする。

「やれやれ、またか」

「またですねえ」

ある意味で原因でもある他の男二人は、それを傍目で見ながら、とため息をついた。

一番頑丈そうな金属の鎧を纏う男が、局所だけを守る皮の鎧付けて、ベルトに二振りのメイスを下げている男に話しかける。

「バリー、リーダーの嫁がデレている。早急にガリの実をくれ、キツイやつ」

「ちょ、なあつ?! よ、よめですって!?!」

バリーン、薄い硝子が割れる幻聴と共に、二人の世界は無散した。見れば、彼等のリーダーであるラックが、吹き飛ばされて、うつ伏せになって転がっている。

犯行に使われた凶器は、彼女の杖であった。

因みにガリの実とは焦茶色の小さな豆の事であり、それを煎って粉末状にしたものを、熱湯を使い専用の紙で瀘した飲み物 一般的にティーノと呼ばれる は、独特の香りと苦味が特徴だ。

しかしそんなものは、バリーと呼ばれた彼が持っている筈もなく。

「すみませんが、持ち合わせて無いです。まあ私には家に待っている人がいるのでそこまで気にはしていませんが」

「デリテュード、訂正しなさい！ 私はねえ、コイツのよ、よよ

っ嫁じゃないわよ！ そう、まだ！」

「確定はしているんだな」

「しているんですね」

「あうううう……」

う、うるさい！ とエルナと呼ばれた彼女は、顔を真っ赤にして男二人 バリーとデリテュードに反論する。

置いていかれた剣士風の男 ラックは、そんな彼女を、苦笑しながら見つめていた。

「と、ところで、あのスケルトン！ ちゃんと指輪とか持ってきたでしょうね!？」

「あー面白い……… っと、おうよ。ちゃんと持ってるさ。今はバリーに預けてるが」

「ええ、ほら、これですよね？」

いじるのにも満足したのか、魔術師である彼女 エルナのあからさまな話の転換に、デリテュード達は乗った。

エルナが言うスケルトンとは、オーガ討伐の依頼の最中に現れたモンスターの事である。



スケルトン。

主に墓場で見掛けるモンスター、と言われているが、スケルトンが発生するためには地面に一定以上深く埋められていない、もしくは一定以上破損されていない白骨死体が必要なだけである。と学説では言われているが、その信憑性はあんまりない。からなのであって、冒険者をやってる者にとっては別段珍しい事でも何でもない。

スケルトンの強さは白骨死体になってしまった者と、それに取り憑いた悪霊等で決まると言われているので、街にある墓場に出てくるスケルトンの危険性は高くはない。

そのほとんどが戦闘経験等がない、一般市民だからである。

ただ、それが山奥や、強力な霊が徘徊するような場所だと危険性は増してくるのだが、幸いにして、ラックがリーダーであるパーティー【灼熱の息吹】は、元冒険者のスケルトンを倒すことが出来たのである。

その戦利品、というよりか、倒したスケルトンの骸から拝借してきた物品の一つが、エルナやデリテュードのいう指輪であった。

メイスを下げている男　バリーがエルナに差し出した掌に乗せている指輪は、彼の指よりも少し大きい。拾った時にあった表面の汚れは、布で拭いて綺麗に落ちており、太陽の光を反射している。

銀色に輝く指輪の裏側には小さく文字が掘られていて、その文字が表すものは、持ち主の名前。

これはマジックアイテム等ではなく、単純に金属をリング状の形に加工した、ただの結婚指輪である。

うんうん、とそれを確認したエルナは満足そうに頷いて、口を開く。

「よし、ちゃんと持ってるわね」

「ギルドに提出すれば、行方不明になった冒険者の数が減る、でしたっけ？個人的にはちゃんと送り主に返したいのですけどね」

「まあまあ、そういうのはギルドがちゃんとやってくれるだろ。臨時収入にならないのがちと残念だがな」

「おいおい罰当たりだぞデリテユード」

「分かってるってリーダー」

ギルドに登録された冒険者で、行方不明になる者は少なくない。

そんな彼等は依頼の最中に死んでしまったりするのが大体を占めており、ギルドにとって依頼途中に死んでしまった彼等は、誰かが生き残り、依頼の失敗を報告するならばまだしも全滅してしまった場合、一々依頼の成否を確認するのが面倒なのだ。

なのでギルドでは昔から、依頼の終了期間というものを設け、その期間を越えても連絡がなく戻ってこなかった場合、依頼は失敗扱いとなると同時に、依頼を受けた冒険者は死亡扱いとする制度を作り、生死判定を行っているのである。

行方不明の扱いとなっているのは、その死亡扱いとなった人に対して関係のある誰かが、ギルドに行方不明届けを出す必要がある。因みにこれは、無償で行われている事で、メリットは限りなくゼロだ。

一時期、行方不明者の遺品に報酬を出した事は有ったのだが、遺品を偽ったり、故意に殺して、行方不明届けを出させるといふ悪質な事件があつたが故の措置である。

「アルエック・ティム……ね」

バリーが指輪を持ち上げ、片方の目を閉じながら透かすようにそれを見る。

「剣士、だったのかなあ」

「子供とか、いたのかしらね……」

「まあ、俺らは、ああはなんないように、な」

バリーの呟いた言葉は、他の三人にも聞こえていた。

各々が想像を働かせて、一度も会ったことも無いのに、まるで知っていたかのように、思いを馳せた。

アルエック・ティム、自分達が倒したスケルトンの名前。

彼は、どんな夢を持ち、どんな事を考えて死んでしまったのだろうか。

同じ冒険者であるラック達にとって、それは興味を引くものであるのには間違いなかった。

「11:23:08」

リュシカ王国の都市の一つ、タロツソル。

リュシカ王国の北側に接している帝国。その境界線の役割を果たすモルル山脈の近くに存在している其処は、リュシカ王国の市民達が比較的穏やかな日々を過ごし、暮らしている。

「変わってないなあ……」

【灼熱の息吹】リーダー、ラック・スミルソウは、半年ぶりに戻って来た己の故郷を見て、そう感じた。

ギルドに依頼の終了報告をした後、彼等は一度解散し、各自自由行動をとっている。

というのも、結成してから二年が経つ彼等のパーティ【灼熱の息吹】は、メンバー全員がここ、タロツソル出身だからであった。

基本的にこの付近で依頼を受けている彼等は、一定の期間を空けて、幾度かタロツソルに戻ってくる。

その理由は様々で、バリーは家で帰りを待っているという妻に会いに。デリテュードは病気で亡くなった親の墓参りに。エルナは自分の家に戻り、今頃唯一の家族である祖父に今までの冒険の内容を話していることだろう。

ラックには既に親はおらず、正式な両親の墓も有るわけではない。故に初めは、ラックの彼女であるエルナの家に行こうと、エルナの方から提案されたのだが、彼は後で行く、とだけ返事を返し、一時的に別行動をとっているのであった。

彼が今歩いている場所は、人が賑わう表通りから離れた、裏通りの一つ。

何処かひっそりとしているこの通路は、裏通りの人間として生きてきたラックにとっては最早過去の記憶と化していたので、なんとも思っていないかったのだが、こうして再び帰ってくれば、いつもと変わらない、懐かしい感情に襲われる。

こつ、こつ。

一歩一歩を味わいながら、ラックはゆっくり歩みを進める。

先程から視界に入ってくるのは、枠組みを木で建てて作った、余り代わり映えがない家が並んでいるだけの光景だ。

それでも、と言うべきか、それが、と言うべきか、どちらにせよラックにとってこの景色は、矢張り心に響く、懐かしいものであった。

ラックはふと立ち止まり、視線を前方の上に向ける。

視界に入ってくるのは、巨大な壁。家屋の向こう側に建てられているそれは、ここタロツソルを、文字通り三百六十度囲っている。

ここタロツソルの特徴は、都市全てを囲む分厚い城壁だ。

幾千もの敵が攻めてきても揺らがない、不動の鉄壁とも称されるその壁は、確かに見た者を納得させる程の迫力を持っている。

昔、ラックにとっては自分を閉じ込める檻に見えていたが、時間が経てば見方も代わる。その事を感じで犇々と感じながら、ラックはもう一度、遠くからでも見える壁を見る。

視界に入るそれは、帝国の軍が攻めて来ても、そうそう負ける事はないだろう。何度見ても、そう思わせられる城塞だった。

ここでいう帝国とは、リュシカ王国に接している国　イグナード帝国の事である。

ギウンデルダムと呼ばれる都市を首都にしたその国は、リュシカ王国の北東から北西に至るまで、つまり王国の北側に接している。現在イグナード帝国は、リュシカ王国に隣接している他の二大帝国と同じ様に協定を結んでいる。なので帝国や、他の二国が今すぐリュシカ王国に攻めてくる可能性は低い。

しかし、正直いつ破棄されてもおかしくないと、ラックは思う。

何せリュシカ王国は周り三国に比べて圧倒的に土地が狭く、尚且つ《大戦》で軍事力の大半を失った弱小国家である。今現在は何とか数を持ち直しているものの、その質までは補えてはいない。

それでも三国がリュシカ王国に攻めてこないのは、未だに《大戦》の傷が癒えていない事と、三国同士で牽制し合い、膠着状態にあるからだろう。

今にも千切れてしまいそうな綱の上、そこがリュシカ王国の立ち位置だった。

ラックは考える。

もし、もしも戦争が起きた場合、自分達はどうなるのだろうか。

リュシカ王国に従い、破滅の道を歩むのか。

帝国等三大大国の傘下に入り、隷属の道を歩むのか。

(……………どっちも嫌だなあ)

選べと言われたら間違いなく後者なのだが、農民などとして暮らすのではなく、出来ればこのまま他の国に移り住み、冒険者としての人生を歩んでいきたい、というのがラックの本音であった。

冒険者達は、冒険者になると同時に『ギルド』という、土地を持っていないが大陸中に根を生やしている大組織に属す事になるので、国に直接属しているパーティ等を除き、大抵の 実力が余りない 冒険者は、国との繋がりが薄くなってしまふ。

故に一応は、ラックの“別の国で冒険者として暮らす”という希望は十分叶うのだが、一点の場所に長く届まる事は、少々難しくなる。

というのもこれは単純に、戦争をした国や、自分達が暮らしているリュシカ王国にいる場合に限る事なので、さほど問題はないのだが。

ちなみに、ギルドの規定しているランクが高位であれば、戦争等の問題が起こったとしても、ギルド側が勝手に手助けや、後処理を行ってくれる。

しかしそんな特別待遇を受ける存在は一握りだけであり、ラック達【灼熱の息吹】は、当然の如くその枠外であった。

ギルドのランクは、パーティ用と、個人用の二つが存在している。どちらも基本的にはA、B、C、D、E、F、G、の七つの階級が存在しており、その各々に+を付ける階級を合わせて更に七つの階級が加えられ、全部で十四の階級に分けられているのだ。ランクがAに近付けば近づく程そのパーティの格は上がり、その人口の割合は反比例になっていく。

自分達のクラスはD。

思えばあつという間だったなあ、とラックは感慨に浸る。

『 【灼熱の杖】 【クリムゾンレット】 【ヨルダの光】 …… どれも迷うわね …… 』

『 何その名前？ あ、もしかして 』

『 そ、私たちのチームの名前よ。他に何かあるかしら 』

『 うむむ …… 【デリテュード団】とかどうだ！ ！ 』

『 デリテュード、リーダーは貴方ではなくてラックですから 』

『 そうよ、ふざけないでデリテュード。      ちなみにバリーは名前の候補とかある？ 』

『 いえ、特には。私はエルナにお任せしますよ 』

『 あらそう。なら決めちゃうわね？ 』

『 あの、エルナ …… 俺の意見は ……？ 』

『 黙りなさいラック。そうね、 【灼熱の息吹】！ これでどう？ 』

『 …… 【最強！ デリテュード軍団】とかどうだ？ 』

『 デリテュード、まずは自分の名前から離れてみましょうか。ああ、私はそれでいいと思いますよ。ラックはどう思います？ 』

『 いや、まあ、別にいいんだけど …… エルナ、それも彼女に関連するものなの？ 』

『 ー、まあそうね。ミユ様の通り名の一つでしたし 』

『 相変わらずのファンなこと。      そういえば、 【月の王冠】の

人達は興味ないの？』

『私はミユ様のファンですから。へえ、それとも何？ もしかしてラックはあの勇者さん狙い？』

『んなつ？！ 違う違う！ 初めて見た時確かに綺麗って思ったけど』

『ふーん、可愛かったんだ。良かったわね。じゃあ何？ 【勇者様

親衛隊】にでもする？ でも残念ながら二番煎じ以下よそれは』

『おお、エルナが怒ったぞ。どうすんだよラック』

『ラック、貴方が原因です。なんとかしなさい』

『だから違つってー！ー！』

脳裏に浮かんできたのは、チーム結成当初の時期。まるで昨日の事だったかの様に鮮明に思い出せるその記憶は、一生忘れることはないだろう。

ラックはこれからの未来に思いを馳せる。

【灼熱の息吹】は、あと何度か依頼を成功させれば、このパーティはすぐに“D+”になれるだろう。

基本的にCランクより下の+の意味は、そのパーティが“昇格試験”を受けられる最低基準を上回った証である。そこまでは問題はない筈であるというのは、今回の依頼により確認できた。

しかし同時に、自分達【灼熱の息吹】は、大抵の冒険者達と同じ様に、丁度Cクラスになれる直前のランク　つまりD+の辺りで、一度壁にぶつかる事になるだろうということも、ラックは予想がついてしまったのだ。

というのも、今までの【灼熱の息吹】は、ラックがこのチーム全体の力の底上げをしている節があり、また仲間に頼られる場面が多かったのである。

つまり極端に言えば、ラックがいなければ、【灼熱の息吹】は現



在Dランクには成れていなかった、という事なのだ。

そして今回の依頼から推測するにあたり、Cランクより上の依頼だと、恐らく自分一人だけでは対処しきれない状況が必ず出てくる。その時に犠牲者が出さないで危機を脱出出来る可能性は、限りなく低いだろう。

そんな状況を発生させる可能性は、出来る限り摘まなくてはいけない。

それを摘んだ者達だけが、Cクラスに上がる権利があるのだから。だから、とラックは思考する。

だから、【灼熱の息吹】のランクがD+になった辺りから、個人の実力を上げていかねばならない。

何時かは来ると思っていた壁、自分達のパーティは、出来る限り皆で乗り越えたい。

それを実現するためには、皆の意見を聞いて、一つの目標を目指す事である。難しいかもしれないけれど、ラックの心はやる気で満ち満ちていた。

何故ならばそれが、パーティのリーダーの役割なのだから。

(……………うん。 やれる！ 絶対やれる!!！)

今なら何をやっても上手くいく。

そんな気分になりながら、ラックはふんつ、と気合い込めて、全身に力を入れた。

そうして、エルナ達の所へ向かおうと足を一步踏み出して。

「 は、放してくださいっ」

「……………ん？」

ラックが歩く裏通りの路地裏から、女性の声が聞こえた。

「11:26:37」

【迷宮】第一階層、そこは巨大な森が広がっている空間だ。

トリユーシャ平原にある巨大な門を潜り、抜けてまず目にするのは、一面の緑。大地には簡単な草が生えており、立ち並んでいる木々や藪が、隊列を組めて歩ける程の道を作っている。

しかし木々の長さは二十メートル程ある天井までは届いておらず、もしも空を飛べるのならば、この階層を見渡す事が可能だろう。

現に、入口付近では簡易橋が建てられ始めていた。

ここは例えるならば、大きな箱の中に木々を植えて迷路を作成した様なものだろうか。

潜って来た方向を振り向けば、その階層の“枠”となっていて、第一階層の天井と側面を覆っている不透明な白い色の壁。その一部がぼつかりと黒く変色しており、その場所が迷宮と地上を繋ぐ唯一の出入口だということが必然的に理解できるだろう。

迷宮の入口付近はかなりの大部屋 一区画ともいえる程の作り

になつており、次々とリュシカ王国の軍が進軍してきて、然程苦にはなつていない。が、それでもやはり二千程度が限界なので、一軍五百人程からなる部隊はそこで待機する暇なく迷宮の中を進まされるのであつた。

広場から分かれている道は、迷宮入口正面から見て右に二本、正面に一本、左に二本の計五本。これを一万六千人を三十二の部隊に分けた兵士達が進んで行く。

一から五軍が最右の道を。

六から十軍が右から二番目を。

十一から十五軍が真中の道を。

十六から二十軍が左から二番目を。

二十一から二十五軍が最左の道を。

二十六軍と二十七軍が迷宮内部の入口で待機。

そして残る近衛師団三百名及び、リュシカ王国第一王子が率いる二千と他五百は迷宮外の地上で待機中である。

「ガギアアアア!!」

「んおつ、あぶねえつ」

ガギイン、と。その血管の様に別れた迷宮の通路の一角で、硬い物同士をぶつけた音が鳴る。

音を鳴らす片方は、銀色に光る鎧を纏い、両手で持ったバスターソードを持つ男　リュシカ王国軍第一軍に分けられた内の一人だ。彼の背後には武器は違えども、どれも似たような格好をした幾十人も兵士達が立ち止まり、彼や彼の他に前に出ている者の戦闘を見物している。

前に出ている十名が相手しているのは、三匹のモンスター。

褐色の肌に、痩せて骨張った顔や手足。一メートル十数センチと子供程の身長に、猿と人間を足して、それを猿よりに傾けた様な顔目には、ギラギラと黄土色の鈍い色を灯しており、並々ならぬ殺意を宿している。

彼等是个々に差はあるが、服は薄汚い襤褸の布の上に、寸々の皮で出来た胸当て等を装備し、手に持った錆びた剣やゴツゴツとした棍棒等で、迷宮に入ってきた侵入者である兵士達に襲い掛っていた。

力関係のヒエラルキー、その最下位に属するモンスター、ゴブリンである。

「1000p」という一般人レベルの者から入手出来る程のポイントで創られた彼等は、残念ながら、そこまで強くはないのであった。

「くらえっ」

「ギイイッツ！！！」

「うるせえ！ さっさと死にやがれッ！！」

「グガッ」

鮮血が舞う。

一匹のゴブリンの胸を、囲っていた三人の兵士の一人がサーベルで突き刺し、もう一人がその頭にゴブリンの落とした棍棒を打ち付けたのだ。

初めは五匹いたゴブリンも、残るは二匹。その内の一匹のゴブリンが短刀を翳して、兵士に突撃する。

「ジネ、エエエエ！！！」

ぶうん、とまるで子供が木の枝を振り回すような、乱暴で、力任せの一刀。

そんな軌道が丸見えの一撃を、一応は訓練を受けた兵士が喰らう筈もない。

「おっと！」

ガイーン！

それは剣戟と呼べるものではなく、正しく、剣の形状をした鉄同士の打ち合いだ。

鈍い音が鳴り響き、ゴブリンの枯れ枝の様な腕が跳ね上がり、手にしていた短剣が持ち主の後方へ吹き飛んでいく。

ゴブリンは目を丸くしたものの、すぐに表情を怒りのそれに変えて、口を開き、そのギザギザになっている牙を剥いた。

しかし、その反撃虚しく。

「ほお……らよっ！！」

頭が飛ぶ。

怒りの表情のまま、ゴブリンの頭部は地面に落ちた。

首から上を断ち切られたゴブリンの体はぐらりと揺れて、すぐに彼の横に沈む。血が地面を濡らす、それもすぐに無くなり、残るはゴブリンの死体のみ。

ゴブリンの首を断った彼は、そのバスターソードを死骸に突き刺し、てこの様にそれを使い、ぐちゃり、と軀の中を抉り出す。

「お、マジであった！！」

まるで今まで信じていなかった事が本当だった様に、彼はゴブリンの内臓の中から目当ての物を取り出し、興奮したように喋り出す。彼の指に掴まれたそれは、瑠璃色に光る小さな小石、『原石』である。

そう、彼等は迷宮に蔓延るモンスターの掃除と同時に、『原石』の回収も兼ねているのだ。

今しがたゴブリンの死骸を漁った彼は、次にその死骸が無くなっていることに気付いて喫驚するも、「こりゃあ便利だ！ 剥ぎ取る必要が無いとは！」と、すぐに破顔した。

「うえっ……………」

「……………アイツ、おかしいだろ」

そんな彼を見て、後列に続いている兵士達の反応は、大きく分けて二つである。

一つは、嫌な顔をしたり、口に手を当てている　つまり嫌悪の感情を露にしている者達だ。

幾人か　いや、かなりの者がこちらの反応であり、そんな彼等は、この迷宮探索での戦闘が、自身の命をかけた初めての戦いであると言っている程、経験が浅い者達であった。

第一軍は、このような新兵が多い。経験を積ませるといふ名目上の、当て馬である。

もう一つは、そんな嫌悪の反応を見せる兵士達を見て呆れるか、興味なさげにしている　要は彼の行為を受け止めている者達である。

彼等は、前者の者達と違い、『大戦』を生き残った者達であり、経験がそれなりに以上に深い人物ばかり。その大部分が、不満を垂れ流す新兵達を見て、内心で駄目だこりゃ、とため息をついていた。戦場とは、戦場である。

そこは決して騎士同士の決闘の様な　ましてや武闘会等の安全や礼儀が確約された場所ではない。

戦場とは、“戦女神（ウ、アルキリア）”達が迎えに来るような

神聖なものとは程遠く、泥泥濁濁、血生臭く、悲鳴は絶えず。ある種地獄の一つである光景は、戦争を経験した彼等にとって、記憶に根深く残っている。

けれども、まあ、そんな事は関係ないのであるのだが。

「 よしっ！ 前進再開イッツー！！ 」

彼等は進む。

迷宮の奥へ。

「 11:26:15 」

幾百にも重なった足音が、迷宮の内部に響いている。しかし、先頭の人物が立ち止まると、その足音は段々と静まっていった。

迷宮に入ってから、右から二番目の道は、リュシカ王国第六軍から第十軍までが進軍している。

迷宮内部には、先に進めば空間が開けた部屋や別れ道等が存在しており、彼等リュシカ軍は、隊列を半々に分けて進んでいく。後々、別れた隊列の中には合流する部隊もいるので、その規模は大体数十人から数百人の範囲に収まるだろう。

隊列の後方にいる兵士達が活躍するのは、別れ道で人数が少なくなっていく辺りからだ。故にそれまでは出番がなく暇なので、隊列の後方では、早く戦いたいだの、戦はまだか等の文句を口にしていく者達は少なくなかった。

しかし、中には前列の方でも愚痴を垂らす者はいるもので。

「早く帰りたいなあ……」

リュシカ王国の王領に属する兵士、レベック・スタンデュードはその一人だった。

第六軍に配属された彼は、皆と同じ様な歩兵用の鎧を着込んでいるものの、その顔からはやる気と言つものが感じられない。

彼は当初　というよりも、迷宮に入る前は意気込んでいたのだが、その気合いは、迷宮内部に入ってから急速に萎んでいった。

なんだこれは、面倒過ぎる。

レベックは迷宮の探索を始めてから数分経ち、そう確信した。

天井から分かる、この階層の広大な面積。

出てくるモンスターは　ゴブリン　や　コボルト　ばかり。こんな場所に、何も一万以上の兵士など必要ないのではないか、とレベックは思う。

「どうしたレベック。腹でも痛めたか？」

彼の隣を歩く、同じ部隊に配属された同僚が笑いながら声をかける。

頬に出来た生傷や、無精髭を生やしたその顔が原因で、子供が見たら泣き出してしまうといった悩みを持つその同僚は、こんな所でも元氣そうだ。

「んや、別にそういう訳じゃないけどさあ……。ほら、こんなものとは思ってなくて」

苦い顔をしながら答えるレベックに、彼の同僚は口を大きく開けて笑いながら、レベックの背中を強く叩き、語りかける。



「ガハハハ！ なあレベックう、お前はこの仕事を終えたら彼女に告白しに行くんだろ？ ならしゃきつとしろ、しゃきつと。じゃねえとユリネに嫌われちまうぞ？」

「なっ、い、今それを言うなよ、俺も不安なんだからさあ」

「んー？ そうか、不安かあ。なあに、安心しろ！ 絶対に成功する。俺が保証してやるから」彼は周りを見渡し、言う。「なあお前らっ」

「うむ」「本当にな」「ヘタレー」「にぶ男」

「うおおっ！？ 誰だ今ヘタレとかにぶ男って言った人？！」

彼の背中を叩いた者とは別に、他の同僚達が、水を得た魚の様にレベック話し掛けてくる。

どうやら、聞耳を立てていたらしい。同僚の大半が、レベックの事を生暖かい視線で見っていた。

「 そうだな。お前は俺たちより若いんだから、精を出せ。そして俺たちを休ませろ」

「 全くだ。というよりも完全に付き合ってるようにしか見えないからお前。なあ、自覚してる？ そこんところ自覚してるの、なあ？」

「 あーだめだコイツ、完璧に嫉妬してやがる。まあ、頑張れよ。アイツの言う通り成功すると思うから、おもいつきりな」

「 失敗したら酒を飲もう、と言いたい所だが……だがだレベック。とりあえずにぶちんのお前は『エキストラロード爆発』でもくらって爆発しろ」

二言三言、同僚達はレベックに激励を送る。

それが少し恥ずかしく、レベックは顔を伏せ、彼は答えを返す。

「 んなこと言われてもなあ……でもそうだよな、うん。しっか

りしなきゃ」

そう言い、レベックは顔を上げる。

彼の表情は先程とは違い、やる気に満ちて、引き締まっていた。同僚達からの返事はなく、皆元の隊列に戻り平平と手を降るだけ。そんな後ろ姿を見ながら、レベックは手に掴んでいる剣を握り直す。

心の中で、気のいい友人達に、ありがとつと呟いて。

「オラアア！」

ズン、と鈍い音と共に、全高二十センチ程の蛇の胴体が断ち切られる。

力任せに切られた断面からは、濁濁と血を流す。

数分もしない内に、レベックとその同僚達を含めた隊列が足を止めていた。

止めた原因は当然、モンスターの存在である。最前列に並んでいたレベックは勿論の事、周りの同僚達も戦闘に加わっている。

今彼等がいる場所は、大きく開けた四角い部屋だ。

数百人は余裕で入れる空間には、所々に木が生えており、枝には緑が生い茂っている。

中でも一際目立つのが、中央付近にどっしりと根を生やしている巨大な樹や、部屋の内部の木々の根元から芽を伸ばしている、巨大な淡桃色の蕾。

部屋に入ってきたレベック達に気付き、襲いかかってきた

ドラッグスネーク  
這蛇

や 赤水<sup>レッドジヘル</sup> 等の息の根を止め、一息付けると思つと同時に。

「おい」

「ああ」

「なんだコイツ等、始めてみるぜ……」

「うええっ………気持ワル」

その蕾は開く。

ぼとり、と蕾の中から落ちる様にして産まれてきたのは、身長六十センチ程の小さな小人。

背中には透明な翅を二枚生やしており、それはまるで魔族の中の一つである妖精族の様ではあるが、その容姿は妖精からは懸け離れている。

体の色は緑色。茶に染まった襪褌の布を見に纏い、両手に己の半分以上もある鎌を掴んでいる。頭部は人のそれではなく、熊のそれと犬を足して二で割った様な、そんな醜悪にとんだ顔をしている。大小バラバラな歯の間からは、血の様に紅い舌が伸び、ギョロリと丸い目玉でレベック達を視界に入れた。

蕾から産まれてきたのは、全部で三体。“植物型”モンスター<sup>フェアリー・エッグ</sup> 妖精の蕾<sup>フェアリー・エッグ</sup> が産んだ彼等は、妖精の種<sup>フェアリー・シード</sup> と呼ばれるモンスター達である。

そんな彼等は攻撃性が高く、産まれて直ぐ様レベック達に飛び掛つた。

「ギョイエエエエエアア！！」

「きつ、来たッ！」

「油断するなッ！殲滅しろッ！！」

粘液を体に纏わりつかせ、涎を散らばせながら、フェアリーシードは近付いて来る。

その気迫に兵士達が怖気付いたが、部隊隊長の一喝により、すぐに自身を取り戻す。

だが、その僅かな間に、フェアリーシードは自身の攻撃が届く範囲にまで近付いていた。

そしてその内の一匹は、レベックの元に。

「ッ！」

「ギャギイー!!!」

甲高い音、金属音。

フェアリーシードの鎌はレベックの剣に阻まれて、彼の胸の前で止まる。

ギギギ……！ と鎌と剣が擦れていたが、その拮抗は、レベックが押し勝ち、段々とフェアリーシードの方へと傾いていく。

分が悪いと察したのか、フェアリーシードはギャギャ、と鳴いて鎌を引き、後ろへ下がる。レベックはそれを好機と踏んで、剣を構えて前に出た。

「くら、えエ！」

大きく唖り、横薙ぎの一閃。

縦による線の斬撃ではなく、横による面への攻撃。

フェアリーシードを狙いに、ぶうんと力強く振るわれた彼の剣は、しかし何にも当たる感触無く振り抜かれた。

フェアリーシードが、消えていた。

「?!」

「レベック！ 上だツツ!!」

疑問を覚えるのも数瞬、レベックは耳を打った声に弾かれる様子上を見る。

目に写った光景は、翅を使って飛翔しているフェアリーシードの姿と、目の前にまで迫る一振りの鎌。

避けなければ顔面に突き刺さり、致命的な傷を負う。しかし今の体制からでは避ける事は不可能に近く。

当たって、たまるか!!

しかし、レベックは全力の筋肉を使い、無理矢理体を下げる。地面に倒れ込む様な、首の筋肉が悲鳴を上げた必死の回避は功を奏し、レベックの頭上を通り過ぎた。

と同時に、下げた頭の上から肉を刺す音が聞こえ、生暖かい液体が降ってきた。

「ガボツ……………ガア……………!」

「怪我はないか、レベック」

レベックが顔を上げれば、無精髭を生やした同僚の姿。

彼が手に持っている斧槍ハルバードの槍の部分にはフェアリーシードの胴体が串刺になっており、たった今血を吐いて生き絶える。

他のフェアリーシードの個体も、既に骸を晒しており、迷宮の地面に転がっていた。

「……………ああ、何処にも怪我はない。強いて言えば首を捻って寝るのが大変になりそうだ　　っつと」

レベックは同僚から差し出された手を借りて体を起こし、服に付

いた草を払う。

首に手を当て骨を鳴らす、当然の如く痛みはとれず、寧ろそれにより走った痛み顔に顔を顰めた。

「そいつあ良かったな、ユリネと寝ないで一晩共に寝られる理由ができて」

「だからそういつ関係じゃないってのに……」

口を尖らせて反論するレベックを見て、ガハハハ、と同僚はいつも通り笑う。

「なあに、安心しろ。すぐにそうなる」

「すぐってどれくらいさ」

訝しそうに見てくるレベックに、同僚はハルバードを持っていない方の手を顎にやり、考える仕草をとった。

手にしているハルバードの先からは、既にフェアリーシードの死体は消えており、下に『原石』が転がっている。

「そうだな」

そしてにやりとレベックを見返して、彼は言う。

「家に帰るまでの間にだ」

## 蹂躪「01」(破)

向こう見ずな猪。

キリングマーチ  
洗練された小鬼達。

ホムレス・ホーネット  
巢無し蜂。

バニー・バニー・バニー  
気狂い狡兔。

鋼鉄劉隆。

洗々兜蟲。

ジェノサイドワーム  
破壊土壌蟲。

ロウバ・ドワードルバテグ  
箱の中にいる者。

サイコイーグル・エルベステイオ  
荒れ狂う昼の猛禽類。

サイコオウル・ガーテベステイオ  
荒れ狂う夜の猛禽類。

ディテイクオニエイズ・フエアリイパレード  
狂喜する妖精の宴。

ジェルゲルウースト・ラボツレットツエ・ウーグ  
透き通った雨水。

ロード・オブ・オーク  
豚皇帝。

その他色々二十二種類。

元からいた ゲルアトウル 蛇竜蜥蜴 や迷宮を創造してから一週間内に出現し

た リウティフ 空白を埋める者 等を合わせれば計二十六種のユニークモンス

ターに、ユニークアイテム 寂しがりやの誘蛾灯 等、それと新し

く加えられたモンスター百十二種。一事に三匹ボーナスとして産

まれてきたので三百三十六匹。更に元からいた【迷宮】のモンス

ター約二千六百匹を合わせて全部で二千五百匹と少し。

対して迷宮の侵入者は【リュシカ王国軍迷宮探索隊】と表示され  
たワンパーティーのみ。

但し、その数は一万四千。地上にいる部隊も【迷宮創造】の画面  
に表示されており、総勢一万六千五百人の軍団だ。

現在の迷宮の状態は、一言で表すと、大変な事になっていた。

「なんじゃこりゃあ……………」

思わずハルアキは口を押さえて呟いた。

浮かんでくる感情は、圧倒的な優越感でもなく、悦に入る程の高揚感でもなく、純粹な驚愕だ。

確かに、ハルアキは軍が来る事は予測はしていた　というよりも、想像内の範囲には収まっていた。が、それはあくまで数百人、多くとも千人台程だと思っていたのだ。

それも合わせてハルアキにとっては、ユニークモンスター達の事も、増大したモンスター達の種類の事も合わせて、想定外の事だった。

何とは無しに、ハルアキは【迷宮創造】で開いたウィンドウの右上を見る。そこにはデジタル数字で今の時刻が表示されている。

「11:28:43」。

「　もう少しで昼飯だよな……………って違う。現実逃避するな！　現状を見るっ！！」

心の中で活を入れ、ハルアキは頬を両手で叩く。ハルアキの頬はパンツ、と高い音を立て、じんじんと痛みが広がっていく。

その代わりハルアキの茫然とした思考が、少しずつ冴えてくる。

いつもはハルアキの横に立っているジゼルも今はおらず、エルトイオネ達と一緒にいる。

だが、今はそんな事は関係無い。

ハルアキは元より一人、【迷宮創造】も操作できるのもハルアキだけだ。



今の迷宮の状況は、そう思い、ハルアキはもう一度画面を見る。  
画面に表示された迷宮の地図上では既に一階層の五分の一程が侵略されている、しかしリュシカ王国軍の数は殆ど変わらず、迷宮内のモンスターはかなりの速さで減少していた。

「……あんま意味ないとは思っけど」

そう呟きながら、ハルアキは画面に手を翳す。

【迷宮創造】を操る意思を行使、画面が即座に切り替わり、  
ファジーモード に新しく搭載された機能を表示するウィンドウがハルアキの視界を埋める。

ウィンドウの最上部に書かれている文字は【迷宮にもぐったー】。  
画面の右端に作られた画面の空間に並べられた文字の一覧には、【住居層】と【リュシカ王国軍迷宮探索隊】の二つが表示されていた。  
思考で【リュシカ王国軍迷宮探索隊】を選択、ウィンドウに文字次々と浮かび上がり、消えていく。

【リュシカ王国軍迷宮探索隊】：Heishi1899さんの発言

なんだここ、ゴブリンしか出てこない。

「11:28:48」

【リュシカ王国軍迷宮探索隊】：Heishi9885さんの発言

暇、超暇。

迷宮、別れ道左に曲がった。

「11:28:48」

【リュシカ王国軍迷宮探索隊】：Heishi2519さんの発言

言

危うくモンスターに殺されるところだった。ユリネに会いたい。

[ 1 1 : 2 8 : 4 8 ]

【リュシカ王国軍迷宮探索隊】：Heishi6522さんの発言

今の所異常無し、上からの指示に従い行動する。

[ 1 1 : 2 8 : 4 9 ]

このような風に、一つのパーティ毎の様子を載せるだけの機能である。

一見巫山戯けているだけにしか思えないこの機能。しかし、この【迷宮にもぐったー】は、ハルアキにとってはあつて損はない貴重な情報収集に特化した機能である。

しかし今回、この状況でハルアキは、それほどこの機能を当ててはしていないかった。

というよりも、当てには出来ないのである。

【リュシカ王国軍迷宮探索隊】：Heishi688さんの発言  
くそっ！ またゴブリンとコボルト！！ しかも魔術を使つてきやがった！！

[ 1 1 : 2 8 : 5 0 ]

【リュシカ王国軍迷宮探索隊】：Heishi691さんの発言  
ゴブリン メイジか！！ 魔術隊！！

[ 1 1 : 2 8 : 5 0 ]

【リュシカ王国軍迷宮探索隊】：Heishi19さんの発言  
行き止まりか。戻るぞ、引き返せ！

[ 1 1 : 2 8 : 5 0 ]

文字が流れる速度が、速すぎるのだ。

迷宮を創造してから二日後に気付いたこの機能は、【住居層】と【迷宮層】と共に有効範囲には含まれている。しかし問題は【リユシカ王国軍迷宮探索隊】の人数にあった。

“一つのパーティ”ごとに分けて更新していくこの機能、その“一つのパーティ”の人数が十人程度ならば、まだ一つ一つの発言を見ていられるが、今侵入してきている【リユシカ王国軍迷宮探索隊】の人数は一万以上。そんな大勢が随時新しく発言を重ねていく中で、唯一価値のある情報を抜き出すことなどハルアキにとっては到底不可能であるのだ。

現状を見れば、この機能を起動しているのも正しく気休め以外の何にでもないが、無いよりはまし、今のハルアキには、あるものを使うしかあがく方法は無いのだから。

しかし、どうする。

ハルアキは今尚一秒で数十件単位でスクロールされる画面を傍目に思考を張り巡らせる。

はつきり言つて、ハルアキにはどこから手を出せばよいのか分からない。数百人程度だったならば、モンスターを簡単にだが指示を出したりして相手に休憩を挟まずに攻撃したり、ポイントは痛いが進軍する場所に罠を仕掛けたりする（階段付近は設置不可となっている）のだけでも、その数十倍となれば話は別だ。

なにしろ、迷宮の通路が全て敵の兵士達で埋まっていくのである。全部の通路に罠を仕掛けるとか、ポイント的にまず不可能。指揮系統等の表示はされない。

正直言つて、ハルアキにとってこの状況はお手上げであった。

だが、ハルアキには逃げられない理由がある。

それは自身の目標に関する事に加えて。

「ユウラーこっちこっちー！」

「ギリユークンまってよー！」

「あー！ エルおねえちゃん、ケリオルがまた花食べてますー！」

「こらー！ ケリオルーー！」

自分が背負うと決めた、元奴隷達を再び絶望に落とさないためにだ。

「……………まったく、楽しそうな事で」

どうやらエルティオネは、想像以上に懐かれているらしい様だ。

ハルアキは笑う。皮肉や嘲りを含んだ様な嫌な笑いではなく、気楽そうな苦笑に近いもので。無邪気な子供達の声は、ほんの少し程度だが、外から聞こえてくる子供達のはしゃぎ声は、一万以上の兵士に打ち拉がれそうになっている心を支えてくれる。

さあ、やるか。

そう決心した直後である。

《侵入者と一定数に達したモンスター個体数の差が五倍以上により、救急コマンド【楽園の謳歌】を使用しますか 残り9秒「Yes / No」?》  
選ばない場合、「Yes」と見なされます》

「っ!?!」

無感情な声が響くと同時、【迷宮創造】のインターフェース画面

を一つのウィンドウが占領する。

《9秒》

画面に書かれているのは、たった今読みあげられた文章と、その【コマンド】について。

ハルアキの思考は即座に動き、すぐにその効果を目を通し。

No.0004【楽園の謳香】

消費P：全体pの1割

持続時間：「03：00：00」

効果

『憐憫謳歌』：【迷宮層】に存在しているモンスター全てが指定された階層にやって来ます。これは本来指定された階層に住んでいないモンスターや、ユニークモンスター、オンリーモンスターも含まれています。

『屍死濁濁』：このコマンドが発生している間、【迷宮層】に存在する者全ての者にエクストラステータス“猛進”“腐敗”“風化”が付加されます。コマンドが発生している限り解除はできません。

『楽園の香』：このコマンドが発生すると同時、指定範囲内（変更不可）

そして、地獄を見た。

「……………これ、は」

ハルアキは思わず手を顔にやり、意識が飛びそうになった頭を押さえつける。

今、ハルアキの心内は、混乱の境地に達していた。希望、後悔、躊躇、安堵、不安、様々な感情が要り混じり、思考がまとまらない。

《4秒》

これは、本当にやっていいのか？ 本当に？  
自分に問掛ける。答えは見付からない。助言をしてくれる者もいない。

一度やるって決めただろう？  
自分に囁かれる。答えを返せられない。その返答は決まっているのに。

《3秒》

このまま、侵略されていいのか？  
答えは否だ。それは、駄目に決まっている。

なら選択肢は選べるだろう？  
ああ、そうだ。これは自分で決めた道だ。  
だから今も、己の意思で、ハルアキは決めた。

《2秒》

「……【迷宮創造】、階層増加、三十階層分」

ポーン、軽快な音が、脳内に響く。

《『【迷宮】：階層増加』を選択しました。30階層分を加えます。  
1階層につき50000000p消費します。

【残P：213640980p 63640980p】《

ずずん、と軽い震動。

迷宮層の階層が、増えた。

《【迷宮層】は40階層になりました》

そしてハルアキは。

《1びよ 「Yes」が選択されました。救急コマンド【楽園の謳香】が発動します。消費ポイントは残りポイントの1割です。

【残P：63640980p 57276880】《

「11：29：31」。

「11：30：52」

「おらよっ」  
「ギイッ！」

迷宮第一階層、その一角にある部屋の中では、分裂、合流を繰り返

返して百数十人の団体となった兵士達が占領していた。

大部屋の内部にはモンスターが蔓延っており、その八割程を殲滅したところで暇ができた一部の兵士達は、合流する前から組んでいた元々のグループごとに集まり、その時間を過ごしている。

大部屋の中で固まり、皆で何かを取り囲んでいる六人の彼等もまた、その中の一つだった。

「しっかり叫びやが、れ！」

「ガッ……」

「おいおい。もう限界ですかー？」

第四軍に所属している彼等の囲みの中から、鈍い音が放たれる。

息も絶え絶えな声上がるのとは裏腹に、掛けられる言葉は馬鹿にしたような 否、馬鹿にしているものだけで、殴られた者を心配をするような言葉を発する者は一人もない。

「……ガアアッ！！」

「ああ！？ 何言ってるのか分かんねーぞ！！！」

「グガッ ！」

もう一度、肉に拳が食い込み、骨を殴る音が鳴る。

彼等が取り囲み、足で踏むなどをして押さえ付けているのは、一匹のゴブリン。

彼は四肢の先を剣やナイフ等で串刺にされ、動けぬ様に地面に針付けにされた後、迷宮を侵略してきた兵士達による暴力を、その身全身に振るわれていた。

皺だらけの顔は、既に原形を保ってはおらず、何十と殴打された事によりボコボコに腫れ上がり、歯も何本かが欠けている。物を見ることがすら叶わないだろう、目元も同様にぱんぱんに腫れ、血を流している四肢は、その中間で骨が粉々に砕かれびくりともしない。



誰かが見れば、無惨と思うかもしれない。  
誰かが見れば、良い気味だと思うかもしれない。

数による暴力。力による蹂躪。

力無き敗北者を甚振る、力無き勝利者。

これは、命のやりとりの結末の一つである。

取り囲んでいる兵士の彼等は、先程から止めを刺されていないゴブリンを目敏く見つけ、同じ様な行為を繰り返していた。

何故そんな事をするのか？

決まっている。

弱った獲物を徹底的に騷る事で、自分達のストレスの発散と、強者という立ち位置にいる優越感に浸っているのである。

ゴブリンと彼等の間の法は、全てが暴力によって決まるのだから。故に、周りの者は止めようとせず、にやにやと見下し、侮蔑と嘲りの感情を隠そうともしないで笑っていた。

そして、瀕死に等しいゴブリンを囲む一人が、手に持つ 先端  
がゴツゴツとした棒状の武器である クラブを振り翳し。

「 オおらッ! 」

顔面に向けて振り下ろす。

ゴチュ、と肉が骨との圧迫により潰れ、鮮血が飛ぶ。

びくん、とゴブリンの体が大きく跳ね、もう彼から聞こえるものは、ひゅう、ひゅう、というか細い呼吸の音だけで。

「 うおっ、汚ねえ 」

取り囲んでいる一人の兵士が、足に付いた血をゴブリンの着ている服で踏むように拭い、足を離す際に、ゴブリンの脇腹に蹴りを入



「そうかあ？ 血とかの匂いしかないけど」

「……………いや、ツアツケの言う通りっばい。俺もそう感じる」

「へえ。そうなのか。やっぱわけ分かんねー場所だな此処」

「俺いーちばーん。先ゴ布林殺しとくわ」

「おーう」

がちやがちや、と金属音が鳴り響く中、一番早く準備し終えた兵士がしゃがみこみ、ゴ布林を地に縫い付けていたナイフを乱暴に抜く。

丁度ゴ布林の額に来るようにナイフの軌道を確認した後、彼はしゃがんだまま、右腕を上げて

瞬間、“がしり”、と掴まれる。

「……………あ？」

彼の思考は一瞬白に染まる。

掴んでいる腕の正体は、薄汚れて血だらけの、ナイフで貫通された傷から血が溢れている、褐色の手。

ゴ布林の、手。

瀕死である筈のゴ布林が、彼の腕を掴み、反撃の意思を見せている。その現実を受け入れて認めるまで数秒、その隙を突くかの様に、彼は掴まれた腕を引っ張られ。

「お

首に、ずぶり、と鋭い歯が、食い込んだ。

そしてそのまま。

《『人間』スコア：2180p』加算されます》

異変が進む。

着実に、確実に。

彼等はまだ、気付かない。

「おい、はやく行こう」

ゴブリンに止めを刺すと言った彼が戻って来ないのを不思議がり、一人の兵士が準備途中で振り向いた。

振り向いた彼の視界には、赤に染まった歯を見せるゴブリンが飛込んで来る所が、写った。

「え？」

首元より走る衝撃。何か千切れていく感覚と、血液が吹き出て気が遠くなる様な喪失感。

理解不可能な状況の中、即座に力任せで首を噛み千切られた彼に見えたのは、数メートル先の草むらに、赤い水溜まりの中でうつ伏せに倒れている己の同僚。

薄暗くなつてゆく視界写ったのは、彼が先程まで翳っていた褐色の亜人の。

歯に啜えられた肉は、恐らくは今、倒れている最中である自分の首肉。

だが、それを彼が気付く事なく。

《『人間』スコア：1882p』が加算されます》

生き絶える。

「ツッコイツ、まだ動けたのか!!」

自分達がリンチしていたゴブリンの反抗に、彼等が気付いたのは二人目の兵士が殺されたすぐだった。

彼等は直ぐ様武器を手に取り、ゴブリンに襲われたらしい、姿が見えない仲間呼び掛ける。

「ゲルド! ベルゲン!」

返事はない。

どさり、とたった今、首を噛み千切られた同僚が地に伏し、二つ目の血溜りを形成し始める。

仲間が、死んだ。殺された。

たった今まで、笑いあっていた仲間が、消えた。

「……………あ、ああ、ちくしょう、ちくしょうちくしょうちくしょう!!」

「殺せ! 殺すぞツ!!」

ゲルド、ベルゲン、二人の仲間が殺され、残る四人の兵士達は怒りに奮え、武器を持ち、たった数メートル手前に佇むゴブリンに、感情を乗せた罵声を浴びさせる。

その罵声に釣られ、なんだなんだと他の兵士も集まり出す。恐らくは数十秒もしない内に、真円の人垣が形成されるだろう。

そう、数十秒。

ゴブリン一匹を四人掛りで殺すには、十分すぎる時間である。

が。

「テメエ、ぶつ殺してやる!!」

「……」

「よくも、よくもゲルドとベルゲンを!!」

「こ、殺す、殺してや　　!!」

端から見れば不思議な事に、残された四人の兵士の中、仲間の仇に飛び掛る者は一人もいない。

四方を囲んだ彼等の中心に、身動き一つなく、静かに、膝立ちで直立しているだけのモンスター。他者から見れば隙だらけで、絶好の機会だと思わせる彼の異様さは、相對することで理解する。

剣を向けている彼等が切り掛らない理由、それは恐怖だ。

それも狂気を感じさせる程の、格別な。

圧倒的強者という存在と対峙するのとは違う、不気味で、触れてはいけないものを触っているかの様な、怖気が走る、そんな存在の前にして、彼等四人の足は、止まっていた。

「　　何とか言えよクソ野郎!!」

「……」

返事はない。

口回りを血で濡らしたゴブリンは上を向き、だらんと腕を力無くぶら下げている。

瞳の色は濁った黄色。瞬きしないその眼球は、虚空を見つめて放さない。

片手にはナイフが握られてはいるものの、無理矢理剣の拘束を脱け出したのか、四肢からは血が止まることなく溢れており、特に右手や左足は、甲の部分が完全に裂かれていた。

腕は折れているのに、脚も折れているのに、どこか恐怖、どこか異常。

そんな異常で硬直した空間を、再び動かしたのは。

「……………」

その混乱の中心に立つ、死に掛けのゴブリンだった。  
無言の跳躍。

「ツアツケ、避ける!!」

「ひいつ?!」

兵士の悲鳴。

モーシヨンを見せずに、ゴブリンは跳んだ。  
折れてる足を使い、跳ねる様に。

四肢からは血が飛び散り、宙に舞う。

狙いは前方、ゴブリンの前に立っている、口だけの戦士。

ゴブリンは動かぬ腕を肩で振り、持っていたナイフを 手の内  
から抜ける様な 投合。

歪な投げ方をされたそれは、しかししっかり前に投げられる。

「うわっわ!!」

標である兵士の彼は、目を見開き、動揺する。

投げられたナイフを避けるのではなく、落とそうとして剣を降る。  
当たらない。

「しま ……!!」

そしてナイフは落ちる事なく目標に当たり 来ている胸甲鎧に

跳ね返された。

（ あ、あぶ、なッ！！ ）

自身の着ている鎧に当たり、落ちるナイフを目で追いながら、兵士 ツアツケは冷や汗を掻いた。

もし自分が鎧を着ていなかったら、あれは胸へと刺さっただろう。もし自分の鎧が貫かれてしまっていたら、己の命は無かつただろう。

そんな、兵舎の訓練では感じた事のない“死”を一瞬でも感じた恐怖に、ツアツケは体を震わせた。

もうこんなへまをしでかさない様に、ツアツケは決心した。

まあ、たかが ゴブリン 程度の腕力では、例え絶好調の調子でも、鉄の鎧を貫通するのはまず不可能な話なので、短刀を投合して鎧を貫通するなどは有り得ないのだが、そこはナイフを当てられたという恐怖から来る感覚であった。

ツアツケはほう、と過ぎ去った死を見つめ、安堵の吐息を吐き

そして、“顔全体を”嚙られた。

名一杯開かれたゴブリンの口が、彼の両こめかみに食い込み、肉を断つ。

直後、焼けるような痛みが、顔の両側頭部から伝統する。

「 いぎいいいいアアアア！！？」

過ぎ去った死？ ナイフを見つめた？ もうこんなへまはしない？ 馬鹿である。

冷や汗を掻いた？ “死”を感じた経験？ 安堵の吐息？ 阿呆である。



そんな事を考える内に、彼には次の“死”が形を持って、迫って来ていたのだから。

「ああああ？！　痛い痛い痛い！！　あゝあゝあゝあゝあ

ゝあゝ　！！！！」

「ガアアア……………！！！！」

「ツァ、ツァツケ……………！！」

ぶちぶちと、噛みついたゴブリンの牙が、叫びをあげる兵士

ツァツケの皮膚を剥がし、顔の肉を千切り、筋肉を断裂し始める。

ごり、と歯が筋肉を断ち切り頭蓋骨に届く、がり、と骨が削られる。

ぶちゅ、と目玉に牙が食い込み、ぐちゃ、と潰す。

「ガアア……………！！」

「あゝあゝあゝあゝギイゝイゝイゝイゝイゝイゝイゝイゝイゝ

……………！！」

絶叫に次ぐ絶叫。

ツァツケは激痛から逃れようと無我夢中で己の体から、牙を立てているゴブリンを引き剥がし、その場に顔を押しさえて崩れ落ちる。

両者が地面に投げ出され、しかし惨劇は終わらない。

頭を掴まれ投げ飛ばされたゴブリンは、迷宮の地面を這いながらも再びツァツケに飛び掛ろうとして。

「い、今だツツ！」

「おおオツ！！」

「あああああ！！」

ツァツケを除いた他の三名が各々の武器を使い、瀕死のゴブリン

の命に終止符を打つために、動く。

形状しがたい、断肉音。

半分程両断された首、脇腹に突き刺さったサーベル、ボコボコに腫れている頭部を貫いたロングソード。

びくん！と大きくゴブリンは跳ねて、その生命の最後を遂げた。

「……………やったの、か？」

「……………あ、ああ」

ツアツケの悲鳴が響く中、ゴブリンに止めを刺した三名の間に流れるものは、気味の悪い静寂。

「……………なんだよ。なんなんだよ、コイツ。気味が、悪リイよ……………」

ぽつり、と震える声で呟かれた言葉は、彼等全員の思いだったのだろう。誰も彼の発言を否定せず、只々死んだゴブリンの骸から目を放していないかった。

この死体から、視界から外すのが、怖い。

それは、彼等が兵士になって、初めて抱く感情だ。

今までずっと　　つい先程まで鬨り、殺していた圧倒的弱者。そんな彼等の認識していたゴブリンの立場を容易く覆した程、このゴブリンは異常で、非現実的だったのだから。彼等の心内では、この頭を刺されたゴブリンが、また再び動き出しそうな予感が肌にこびりつき、離れようとはしない。

たった一匹、ただ一匹。

それも瀕死のゴブリンに二人の仲間が殺され、一人は今も悲鳴を拳げている。



「う、おおおおっ!!」

「ッこ、の!!」

「ガアアツツ!!」

「つてエな……、ツオラ!!」

迷宮第一階層、リュシカ王国軍第二十一軍。

入口の広場に五本あった道の一つ、左から二番目の通路を進軍する二十一軍に所属している彼等は今、迷宮にある部屋の中でゴ布林やコボルト達との戦闘を行っている。部屋に突入した時点で十六体いたモンスターに対して、リュシカ軍の部隊は四十八。少なくとも百人以上は入れるこの部屋の中では、モンスターを包囲する事は容易であり、然らば殲滅も容易い筈だった。

だった。

そう、戦闘を開始してから五分弱。軍の奇襲による先制から始まった戦闘は、今尚続いていたのである。

「魔術隊二列目！ 詠唱開始！」

隊長格とおぼしき人物が、円形の陣でモンスター達を囲っている兵士達の外にいる、前衛とは違い、鎧ではなくローブ等を着用している者達に指示を出す。

指示を与えられた数名の魔術師は、己の【魔道】の魔術の詠唱を紡ぎ始める。

【魔道】の魔術は普通、その殆どが基本魔術よりも消費魔力が高い。故に消費魔力が高いという事は術者の魔力もその分速く底を着くのは明白であるので、戦力差が数倍以上この戦闘、普通ならば使う事はまずなかったのだが、しかし魔術者の彼等は迷わず【魔道】の魔術に踏み切った。

狙う相手はギルドで遙か格下に入るFランク、基本魔術で十分対処が可能なゴブリンやコボルト達だ。基本魔術で十分対処が可能な彼等を、リュシカ王国軍の魔術師達が【魔道】の魔術を行使しようとしているのか。

理由は、この部屋でモンスターと戦闘を行っているからこそ、分かる恐怖であった。

六体と三十九人。

現在、生き残っているモンスターと、リュシカ軍の数である。

数だけを見れば、未だリュシカ軍側が優勢じゃないか、などと言われそうだが、これがどれほど異常な数値か分かってくれるだろうか。

ゴブリン、コボルト。彼等はどちらも、その強さは最下層に位置するというモンスター達だ。

その強さは、そこそこの訓練しかしていない兵士達でも、複数の人数で組めば、一方的な展開に持ち込める。それほど大きな実力の差がある中で、彼等モンスターに殺された軍の人数は、九人。

九人。

九人だ。

彼等は首を切られ、胸に刃物を刺され、呆然、恐怖が張り付いた顔で骸と化した。傍らには、モンスター達の死骸が横たわり、彼等もまた、生きている者は、いない。

「せあツツ!!」

兵士の掛け声と共に、茶色の毛波を持った、二足歩行をする犬、

コボルトが右肩から斜めに切り裂かれる。

ぶしゃりと、血飛沫。

コボルトの胸に至るまで深々と斬ったロングソードは、しかしコ

ポルトが装備していた皮の胸当てにより、心臓に届く一歩手前で止まってしまふ。

しかしその肩傷は、十センチ以上に及び両断されており、致命傷には違いがない。

心臓の鼓動に合わせて、ぶしゅ、ブシュ、とコボルトの鮮血が、自身が負った傷口から吐き出され、傷を負わした兵士の顔や胸などに万勉なく掛る。

このモンスターが尋常だったならば、この時点でコボルトは余りの痛さに叫びをあげて、地面に無様に転がる筈だったのだろう。

しかし。

しかし、彼等の前に訪れた現実は、異常であった。

「……………ガ、アアアアアアアア！！！」

「！！く、そおオツ！」

モンスターは、止まらない。

痛みを叫ばず、咆哮あげて。

斬られた右肩の先は動いていない。しかし左腕で掴んでいる棍棒をコボルトは振りかぶる。

接近された兵士はロングソードを構え、再び切り掛る体制を取った。

そして、彼の視界が赤に染まる。

「ツぐう?!」

彼の目に掛ったのは、コボルトの右肩から勢い良く吹き出ている血。

血による、目潰し。

両目から伝わる痛みには彼は、襲い来るコボルトの事を一瞬思考の外へと飛ばしてしまふ。反射的に目を閉じ、掛った異物を落とそうと、瞳に涙が分泌されて、付いた汚れを洗い流す。

「ガアアアアア　　！！」

しかし、それは致命的な隙。

コボルトが左手に持つ棍棒を彼の頭部に当てようと、振り下ろす。そして。

どさり、と。棍棒を掴んだコボルトの腕が、迷宮の地面に転がった。

コボルトの腕を斬り落とした犯人は、目を擦る彼とは別の、リュシカ兵。

彼と同じロングソードを腰に構えて、隻腕となったコボルトと相対する。

「危なかったな、大丈夫か？」

「　あ、ああ、助かった。感謝する」

六対三十九。

人数の差は、例え仲間が危機に窮しても、それを補い、助け合える力がある。

力の利より、数の利を。人間は、群れてこそその力を持つ。

腕を断たれたコボルトは、ごぶ、と血を吐き体制をふらり、と崩す。

明らかに血の流し過ぎによる、貧血であった。

ぜひゅ、ぜひゅ、という死に掛けになった呼吸。顔色は茶色の毛

に覆われているので見えないが、土気色に染まっているに違いない。しかし、その目は敵意に燃えて、焦茶色の瞳の奥には、戦意がほんの少しも失われてはいない。

が、すぐにそのコボルトは、数名のリュシカ兵士の剣に斬られ、命を落とす。

目に入った血を落とした彼は、その奥の方でも一体、ゴブリンが倒れるのを視界に入れた。

残るモンスターは、あと四体。  
だがその四体も。

「……を燃やせ 『火炎』！」

「『火炎』！」

「くらえエ！ 『火炎』！」

終わりを告げる魔術の言葉。

ゴウツツツ、と円陣の中心にいたゴブリンやコボルト達に、赤く燃える炎が吹き当たり、その身を焼いた。

足などを斬られ、動きが鈍くなったモンスター達は全員避けられず、火達磨となる。

だが、それでも。

しかし、それでも。

彼等モンスターは苦痛の悲鳴をあげず、今尚自分達リュシカ兵を殺してやろうと動きを止めない。

「……く、来るなア！！！」

「 ついい加減にしゃがれエ！」

どすり、と。ごちゅり、と。

兵士達は不気味なものを見る目で、火達磨となっているモンスター



ー達に止めを刺した。

頭を刺され、潰され、遂に動かなくなった彼等は、ぱちぱちと音を立てて燃えて、肉を焦がす。

周囲になんともいえない悪臭が立ち込めて、幾人かが鼻を押さえ、顔を顰めた。

残るリュシカ兵士は、先程より二人減って三十七、残るモンスターの数は、零。

十一名もの死者を出した戦闘が、漸く終りを向かえた。

「……………一体何が起こってんだ……………?!」

誰かが、言う。

それはたかが ゴブリン コボルト 程度のモンスターに対して恐怖するようなものであったが、その言葉に反論の声をあげる者は、一人もいない。

それほどまでに、先程までのモンスター達は、尋常ではなかった。

一言で言えば そう、モンスターが、全力で殺しに来ている、とでも言えばいいのだろうか。

先程までのモンスター達は、傷を負えば痛みに苦しみ、隙だらけになっていた。

故に兵士達は、その隙を主に狙って止めを刺していたのだが、今の戦闘では全くと言っていい程違っていた。

どこか不気味。どこかに違和感。

察しの悪い兵士達も本能でそれを感じ取っており、戦いに勝利した彼等は いや、勝利したからこそ、混乱していたのである。

だけれども、その混乱が収まる前に、更なる混乱はやって来る。それは新しい命を乗せて。真つ黒に染まった絶望を乗せて。

《ゴブリン 、『18』、『89』、『101』 以下数匹、及び  
コボルト 、『55』、『16』 以下数匹、計12匹、及び侵入者  
11名『所属：【リュシカ王国迷宮探索軍】……『分類/カテゴリ』  
：人間』の生命活動が停止しました。 侵入者 にエクストラステ  
ータス“腐敗” “風化” が付加されます。 エクストラステータス“  
腐敗” が進行します。 エクストラステータス“腐敗” が進行します。  
エクストラステータス“腐敗” が進行します。 エクストラステータ  
ス“腐敗” が進行します。 エクストラステータス“腐敗” が進行  
《》

《ゴブリン コボルト 侵入者 の“腐敗” が完了しました。  
ゴブリン は ゴブリンゾンビ に、 コボルト は コボルト  
ゾンビ に、 侵入者 は ゾンビ に新生します。 消費コストは  
0です》

風が来ている。

彼等の栄光への夢を断ち切る、真つ黒な風が。

《ゴブリン コボルト 計4匹の生命活動が停止しました。  
エクストラステータス“腐敗” を行使する肉体がありませんので次  
の段階へ移行します。 エクストラステータス“風化” が進行します。  
エクストラステータス“風化” が進行します。 エクストラステータ  
ス“風化” が進行します。 エクストラステータス“風化” が進行し  
ます。 エクストラステータス“風化” が進行しま 《》  
《ゴブリン コボルト の“風化” が完了しました。 ゴブリン  
は スケルトン・ゴブリン に、 コボルト は スケルトン・  
コボルト に新生します。 消費コストは0です》

「……………あ」

最初に気付いたのは、誰だったのだろうか。

静寂に包み込まれていた彼等の中ではよく響き、声のした方へと  
うつむいていた顔を上げた。

そして、彼等の思考は止まる。

「……………なあ、あれって」

「……………うそ、だろ」

何人かが気付き始めたが、もう遅い。

幾人かが後悔し始めたが、もう遅い。

ずる、びちゃ、ぐちゃ、ごちゅ。

耳障りな音を立てて、ゾンビになったゴブリンやコボルト、そして  
今の戦闘で“死んでしまった”彼等の仲間。

ガチャ、カチ、カラ、コト。

骨が、骨同士でぶつかりあって、内臓や皮膚は何処かに消えて。

立ち上がって来るのは全身が骨と化したモンスター。

「で、デットーリオ……あ、あれ？ おまえ、生き、て？」

「ばば、ば、ばかな、あ、あいつは死んだんだぞ！ それも、

お、おれの、俺の目の前で！ なのになんで、何で、何で立ち上が  
ってんだよオツツ！！」

返事は、無い。

起き上がった友の死体。それと共に立ち上がった、たった今殺し  
た筈のモンスターの屍達<sup>かばね</sup>。

彼等は千切れかけた腕で剣を持ち、虚ろな目で兵士達を視界に捕  
えた直後。

「……………総員、構えろツツ！！ 来るぞ！！！！」

「ちくしょお！　ちくしょおおおおおお！！」

戦いの指示を受け、彼等は嘆きながら構えを取った。

たつた今まで生きていた、友人達を殺す為に。

残るリュシカ兵士は、三十七、残るモンスターの数は、二十七。

十一名もの死者が敵に変わった、滑稽な喜劇。

迷宮の一角、その一つの部屋の中で戦闘の舞台が、再び幕を開ける。

「 11：31：48 」

「 ギイイイ！！ 」

「 三匹、目エ！！ 」

迷宮第一階層の通路の一つ、そこでは他の場所と同じ様に、ゴブリンを初めとしたモンスター達と交戦していた。

辺りには剣と剣を打ち合わせる音などなく、あるのは人とモンスターの怨嗟の怒号。

「 ゾンビになったモンスターは首を切れ！　そしてその後頭部を潰せエツ！！ 」

「 う、ああああ！！ 」

「 死ねツ！　死んじまえツツ！！ 」

「 ギャギャギャギャギャ！　ジニ、ヤ、ガレ！！！！ 」

「 あぐう！！　つこのお！！！！ 」

ある者はモンスターと戦い、ある者はゾンビやスケルトンとなったモンスターと戦い、ある者はゾンビと化して生前仲間だった侵入者達に襲い掛る。

敵も味方も入り混じり、死んだそばから蘇る。そんな地獄絵図とも言える光景の中で、死に逝く者が一人、また一人。

「でりゃあああああ!!」

光芒一閃、一人の兵士の斬撃により、ゴブリンゾンビの首が胴体から別れを告げて、地面に転がっていく。

《ゴブリンゾンビ が行動不能となりました。エクストラステータス“風化”が進行します。エクストラステータス“風化”が進行します。エクストラステータス“風化”が進行します。エクストラステータス 《》

「四匹目エ!!」

そしてポロポロになり始めたゴブリンゾンビの頭蓋骨を、その兵士は容赦なく潰す。

硬い骨と肉を踏み潰した足には、ゴブリンの脳髓が付着していたが、それも漸く消えていく。

足元に残った物は小さな『原石』。しかし止めを刺した彼はそれを拾おうともせず、剣を振りかぶって次の獲物へと牙を剥く。

「ギギイ!!」

「邪魔だア!!」

彼が走る道を阻んだフェアリーシードを切り伏せて、小手に取り

付けてある小盾で殴り飛ばす。

彼が狙う獲物は、数メートル先にいる一匹のモンスター。

褐色の肌は、それが来ているローブの様な服で隠されており、首には綺麗に光る石を中心として、左右に並ぶ獣の牙を一本の紐で通しているネックレス。ゴブリンよりは健康的な両手には、小人サイズの頭蓋骨が先端に取り付けられている杖。

モンスターの名前はゴブリン・メイジ。「3500p」以上のポイントから創られるその個体は、この世界の住民と同じく、魔力を消費し魔術を使う。

フェアリーシードを切り伏せた兵士が肉迫する前に、ゴブリンメイジは詠唱を終えて、杖を振る。

「グラ、エ、エー！」

『ルベ・エケード  
爆発する灯火』。

ゴブリンメイジの腕から放たれたのは、爆炎を内包させている、直径三十センチ程の球。

接近する兵士の足元に向けて飛んでいくそれは、地面に接触すると同時に、その暴力を解き放った。

爆音。

迷宮の地面が抉れ、土を周りに吹き飛ばす。

なんの防御も無しに直撃すれば、確実に戦闘不能になってしまうその一撃は、魔術の恐ろしさを実感させる。

「はあっ！！」

しかしその威力に反し、爆発の煙が立ち込める中飛び出してきた

のは無傷の兵士。

彼は向かってきた『ルベ・エカード爆発する灯火』を避け、そのまま前進。数メートルの間を詰めて、遂にゴ布林メイジに肉迫した。

「ギイイツツ！！」

後退等端から思慮の他。

ゴ布林メイジは手に持っている杖を構え、すぐ目の前にいる兵士と相対。口では次の魔術の詠唱を始めながら、今度は魔術を唱えるためではなく、直接殴打するために杖を振った。

しかし悲しいかな。魔力関連に強化されているゴ布林メイジの運動能力は基本的に、ゴ布林よりも下なのだ。

「ふんっ！！」

兵士の気合いと共に振られた剣は、ゴ布林メイジの杖を掴んでいる腕ごと弾き飛ばす。

返す刃で、一刀両断。

ゴ布林メイジの右腕は鮮血を散らしながら宙を舞い、ぼとりと無様に地面に落ちた。

肘から先、手首との中間を切断されたゴ布林メイジ。しかし彼は痛みの声を上げずに、魔術の詠唱を続けている。

「 させるかア！！ 」

兵士の咆哮。

もう一度剣を振り、今度は左腕を断ち切った。人よりも小さな手に掴まれていた杖も地面に落ちて、しかしそれでもゴ布林メイジは叫ばない。

不気味に思った兵士は、モンスターを前に一瞬の硬直をみせ

そしてプレートアーマーに小さな違和感に気付く。

ちらと見れば、目に写ったものは褐色の腕、ゴ布林メイジの右腕が。

斜めの軌道を描いた剣で、乱暴に絶たれたその腕は、斜めに切られて鋭くなってしまった骨が露出しており、その先端が丁度胸甲の上、心臓を位置した場所に当てられている。

ゴ布林には鎧を断ち切る腕力等持つてはおらず、ならば当然ゴ布林メイジもそんな力など持ち得はしない。

それを彼は知っていた。知っていたからこそゴ布林メイジの、こんな全くと断言していい程の無駄な行為に対して“こいつは一体何をしているんだ”、と混乱するのは必然の事で。

しかし一体誰が相対するモンスターの考えを思い付くだろうか。

誰が骨で鎧を貫こうなどという狂った思惑に、至れるだろうか。

「ギギイツー!!」

兵士の驚愕し、硬直して出来た隙を、【楽園の謳香】の効果によって、全力の殺意という激情を漲らせているゴ布林メイジが逃す筈なく。

ゴ布林メイジは実行する。躊躇いなどそこにはない。あるのはそう、殺意だけ。

そして、魔術は紡がれた。

エクスプロード  
『爆発』。

鎧を貫く力が足りない？  
ならば外から足せばいい。



【爆炎魔道】。

油に焰。鉄に水。

甘い香りに囲まれて、貴方は蒼い火を灯す。

巻き上がる烟。弾け飛ぶ軀。

貴方はランプの灯し人。

ゴ布林メイジの魔道【爆炎魔道】、その中の魔術の一つ『爆発ノエクспロード』。小規模の範囲で爆発を生み出すそれは、ゴ布林メイジの右肘で、その暴力を解放された。

爆発。

関節辺りの筋肉が吹き飛び、爆発による推進力で分離された腕は加速。ゴ布林メイジの千切れた腕は、爆発の威力を受けて鎧に当たる。

金属を貫く、硬い音が鳴った。

「ガッハア!!!」

兵士の視界が爆発に包まれた直後、彼は吹き飛び地面に転がり、そして己の胸 心臓に激痛が走る

「イ…………ガ、ア！ あ、あ…………?!」

混乱の最中、がふつ、と血を吐き視界が回る。

胸を見れば、そこには鎧に突き刺さった褐色の腕。肘から手前が無くなっているその腕は、千切れた場所を炭と化して、嫌な臭いを発していた。

「隊長!!!」

「む、胸に腕が…………!!!」

「バカツツ！ 抜こうとすんじゃないねエ！！」

「でもよ、血が、血が……！！」

「くそつ、誰か！運ぶの手伝え！！」

赤く点滅する彼の視界に入ってきたのは、己の下についている兵士達の姿。

ゴブリンメイジに吹き飛ばされた自分達の隊長が、心臓に骨の杭を打ち込まれ、瀕死の状態だということを信じられないような表情で、兵士達は倒れた彼に集まってくる。

そんな兵士達の姿を見て、彼は力を振り絞り、最期の言葉を紡ぎ出す。

「……おい、……だれ……か……」

「隊長！！ もう少し堪えてください！！ もう少しで救護隊が

「どけテメエら！！ 救護どこだ！！」

「ポーションは？！！」

「もう掛けたよ！ けど血が止まらねえ！！」

「……もう……がふつ、ゴポツ！ ……いい……」

「そんな！！」

口に出された言葉は、諦観の意思で。

それが信じられなくて、彼を運んでいる兵士の一人が叫びを上げた。他の者達も同様に、隊長である彼に言葉を掛ける。

しかし彼等は、次の言葉に絶句する。

「おれ、を……殺……せ……！！」

「は？」

「俺の首を、切れ……ってんだよ……！！」

それは、殺害指令。

腕がもう満足に動かせない彼の、最期の望み。だが当然、彼の周りにいる兵士は困惑を顔に張り付かせるだけで

「た、隊長、それは」

「そ、そうです！ もう少し、もう少しで救護隊が」

ふざけんなよ。

その反応に、彼は激昂した。

一番近くにいた兵士の首を掴み、引き寄せる。血を再び吐きながら、彼は吠えた。

「いいからさっさとしゃがめ！！ テメエら、俺を化物にさせる気かア！！」

「早くしろ……ハア、ゴッブツ……ああ、もうもたねえ……」  
「た、隊長……」

先程とは違う静寂が、彼等の周りに訪れる。

前方では未だモンスター達の叫び声に混じり、人の声が聞こえてくるが、彼等の耳には入らない。

静まりかえった空気の中、一人の兵士が動き出す。

首を掴まれ、一喝されたその兵士は、腰にぶら下げている剣を抜いた。

表情はぐちゃぐちゃになりながら、涙が頬を伝っている。息を必死に押し殺しているのに、ひっ、ひぐっ、と声漏れ出している。体全体がガクガクと震え、剣の先も、いつも同じ構えをとっているのに、笑ってしまう程震えている。

しかしそれでも、それでも彼は、剣を、己の隊長に、向けていた。

「……………うづうつ！ うづうつ！…！」  
「そうだ……………それでいい……………」

それを視界に納めて、隊長である彼は頷き目を閉じる。

安かな死を。

隊長である彼は、己の部下に殺される筈だった。

筈、だった。

「……………おい。なんだ、あれ」

誰かが気付き、呟いた。

何かが来る。土煙を上げて。

「……………あ、ああ？」

隊長の意識は既に無い。

部下の行動に安堵し、彼は意識を手放したのだから。  
だから、視線は隊長から外されて。

彼等は前を見る。他の兵士達と同じ様に。

「……………ガルボア、なの、か？」

ガルボア。

それはこの世界で言う猪だ。

しかし二、三百メートルは離れた所からはつきりと分かるガルボアなんて、信じられない。信じられる筈がない。

なのに、分かってしまう。



## 蹂躪「01（急）」

「11:33:14」

No.10208: 向こう見ずな猪 詳細

『消費P:「0p」』

限界個体数:「1/1匹」

生息可能階層:第1、第2階層

出現条件

「前提条件」

・“魔獣型”モンスターが生成可能。

「条件:1」

・1つの【パーティ】に決められた規定人数の上限を越える。

・1つの【パーティ】が魔獣型モンスターの中で、猪型モンスターを一定期間内に80匹以上倒す。

再出現必要時間

「168:00:00」

特徴

・決められた条件を満たすことで発生するユニークモンスター。

・見た目は茶色の体毛を持つ猪だが、4メートル前後の体長と、一回転以上捻れて円を描く二本の牙が、他の猪型モンスターよりも異常だという事を物語る。

・表皮は何もしないでも硬いが、獲物を見つけた際に、無意識に行使し始める微弱の『身体強化』が合わさり、鉄の如き硬さを誇る。但し魔力保有量は然程ある訳でもないので、身体強化は長持ちはしない。頭蓋骨が異常に固い。

・条件を満たした状態で死ぬと、極稀の確率で転生する。』

「う、うわあああ！！」

「あぎッッ」

「逃げっ、逃げろおおお！！」

「ブオオオオオオオオオッ！！！」

迷宮第一階層、その通路の中で、リュシカ王国軍第二十二軍は、その数を半数にまで減らしていた。

悲鳴をあげながら逃げ行く兵士の背中を追うのは、巨大な猪 向こう見ずな猪。

幾十人を吹き飛ばした顔面は多少の傷はあれど深いものはなく、初めは白く輝き、捻れて鋭利な牙は、兵士達を貫いた際に真っ赤に染まっていた。

体には何本もの剣や斧等が刺さっているがどれも四肢の動きを重くするには至らない。

猪突猛進、その文字がぴたりと当て嵌るモンスター、 向こう見ずな猪 は相対して二分弱、休む事なく走り続ける。

「ブオオオオオオオオオッ！！！」

ずざざざざざ、と土を巻き上げながら、 向こう見ずな猪 は急停止。ブルブルブル、と首を振り、突き刺さっていた兵士が宙を飛んで行く。

向こう見ずな猪 が止まった場所は、迷宮の通路の別れ道 十字路の中心だ。今突進してきた通路を除いた三本の道には、全て兵士達の姿が見える。

さて、どれを追うか。

向こう見ずな猪 は一秒足らずで三本の道を照準し、そして体

の向きを九十度左に曲げた。

選んだ道は、左の道だ。

「ブオオオオオオオツツ！！」

「く、くそつ！ こつちに来んじゃねえ！！」

「はやっ……！！ そこツ……、どけツ……！！」

「魔術隊詠唱開始！！ 奴の背中を狙えエ！！」

「突撃部隊準備は出来たな！！ いくぞおおおお！！！！」

前方からは焦りと苛立ちと憎しみが混じった声が、後方からは気が迫が込められた敵意の音が。

迷宮のモンスターである 向こう見ずな猪 はそんな言葉に反応する筈もなく前方の獲物を排除するために、脚を動かすギアを上げた。

リュシカ王国軍が、 向こう見ずな猪 に劣勢を強いられている原因は、ただ単なる強さの違いではなく、その地形等にある。

まず一つ目は、対峙した場所が通路であつた事である。

向こう見ずな猪 と通路の隙間は殆どなく、よくて大人一人分ぐらいしか入らない。

藪の中に逃げると言う手もあるが、そもなので逃げられる時間がないし、常に右下から左上へ、左下から右上へと牙を 正確には頭全体を動かしているの、逃げ場が無いのだ。

ズン、と地面が少し沈む程の力を込められ、 向こう見ずな猪の巨体が更に加速する。

逃げる兵士との距離は、近付いている。



二つ目の原因は、彼等の誤算であった。

向こう見ずな猪 が自分達に突撃してくるといふ事を認めた時、  
彼等の対応は素早かった。

最前列に、身を覆い隠せる程の大きさを持った巨大な盾 カイ  
トシールドを装備した、重装歩兵を並ばして、 向こう見ずな猪  
の衝突を押さえ付け、次に後列に構えた歩兵達の槍や、弓兵、魔術  
隊達の攻撃による反撃をする。という単純だが想定外の状況に対し  
て作った、即興の策にすれば出来のいい方であった のだが、  
そこで、彼等の誤算があった。

迫り来ると重装歩兵がぶつかると寸前、 向こう見ずな猪 は口か  
ら突き出た牙を使い、重装歩兵がいた地面ごと、迷宮の土を抉り取  
ったのだ。

腰を落とし、重心を低く地面に預けていた重装歩兵の彼等はバラ  
ンスを崩した状態で戦技 氣力を消費する技である を使う暇  
さえ与えられずに衝突し、魔術隊達のいる後方まで吹き飛んだ。

全身を鎧で包んだ彼等の体重は百キロを越えており、そんな塊が  
飛んで来ようものなら攻撃所ではなかったのは当然の事。しかしそ  
れでも反撃にでた者はいたのだが、全てが 向こう見ずな猪 の一  
番丈夫な箇所である顔面にしか当たらずに、対したダメージを負わ  
なかったのであった。

そしてこの“ダメージを負わなかった”事こそが、リュシカ軍の  
誤算だったのだ。

ズン、と地面が少し沈む程の力を込められ、 向こう見ずな猪  
の巨体が更に、加速する。

逃げる兵士との距離は、あと少し。



ズン、と地面が少し沈む程の力を込められ、 向こう見ずな猪の巨体が更に、加速した。

逃げる兵士との距離は、零。  
兵士の背中に、牙が届いた。

「あああああ ああ ああ !!」

「ゴッ」

「たすげでえエ……………あガッツ」

大の大人が、紙の様に吹き飛ばされ、宙を舞う。

吹き飛ばされた者は木々に叩き付けられて気絶して、宙を舞った者は着地の際に首を折る。

猪の足に巻き込まれた者は、その重さに潰され圧死する。

《「人間」スコア：7039p が加算されます》

《「人間」スコア：4483p が加算されます》

加速する、加速する。

向こう見ずな猪 は、牙を掬い上げるように動かし、前を走る獲物を吹き飛ばす。

《「人間」スコア：2239p が加算されます》「人間」ス

コア：3491p が加算されます》「人間」スコア：4227

p が加算されます》「人間」スコア：3815p が加算され

《「人間」スコア：6255p が加算》「人間」スコア：4

211p が《「人間」スコア：7039p 《「人間」スコア：4

「人間」《「人間」》《「人間」》《「人間」》《「人間」

人間」スコア：5001p が加算されます》

ガッ、ゴッ、メギヤ、ゴキ。

鈍い音が迷宮の通路に響き渡る。  
悲鳴が上がるが、それでもモンスターは止まらない。  
それでもモンスターは、止まらない。

「11:34:48」

「クソがああッッ!!」

リュシカ王国軍第十八、十九軍を合わせた六百二十八人は、一匹の蟲相手に圧倒的劣勢　ワンサイドゲームを繰り広げており、その人数を二百六十人にまで減らしていた。

入口程の広さを持つ巨大な部屋の中で、彼等が相對しているのは一匹の蟲、甲虫。

それはカブトムシとクワガタを足して二で割り、それを人型サイズの三倍程にまで巨大化させた様な外見を持つモンスターだ。

兜虫に見られる、先端が左右二分された角状突起と、鍬形状になっている一対の顎を持ち、その黒褐色の甲殻は迷宮の光を反射し、輝いていた。

「さ、刺さらねエ!!」

「慌てるな!!　関節部を狙うんだ!!」

「おおおお!!」

「ヤバイ!　みんな避け」

モンスターを取り囲む様に陣を組み、剣や斧を振るっている兵士

達。

それをモンスターは煩わしそうに、六本ある足の内の二本を動かした。

両断。

《『 “人間” スコア：7018p 』が加算されます》

「うああああ！！」

「なっ?! はや」

三分割。

二二分。

《『 “人間” スコア：8824p 』が加算されます》

《『 “人間” スコア：5041p 』が加算されます》

幾重もの鋸を組み合わせたかのような歯状突起を脛節が、目にも止まらぬ速さで動き、周囲に肉薄していた兵士達を切り刻む。

もって五合、剣や盾でその斬撃を防いだとしても、突き出た顎に挟まれて、上半身と下半身に両断される。そのモンスターのシンボルとも言える角状突起は、その先端を、兵士たちの血によって赤く染まっていた。

No.10302: 洗々兜蟲 詳細

『特徴

- ・決められた条件を満たすことで発生するユニークモンスター。
- ・全12種類(+1)の巨大甲虫型ユニークモンスターが1匹。
- ・特徴は兜虫の先端が左右2分された角状突起と、鋏形状になっている1対の顎。その黒褐色の甲殻はそこらの剣等簡単に弾くだろう。

・ 洗々兜蟲 の驚異は、最も硬度が高い角や顎による攻撃ではなく、翅を閉まっっている甲殻の下に隠されている器官から放たれる『  
ウエロー・ムストレイ  
洗線』。

・ しかし、最も破壊力がある攻撃は、その角から発射される

『

「  
ソル・ザ・ジャベリ  
太陽の槍』！！」

「  
グラス・ダリア  
爆炎華火』！！」

魔術師達の攻撃。

洗々兜蟲 に、数十センチの炎の槍が突き刺さり、三つの火の華が、甲殻の上で爆発を咲かす。

「  
放てエ！！」

「  
お、おおおおお！！」

「  
やあああああッッ！！！！」

その二つの魔術を先頭に、次々と 洗々兜蟲 へ様々な魔術が矛を向けた。

それは圧縮された炎の弾丸。

それは切味を持った鋭い風。

それは斧の形を担った青い水。

それは木々を絡み合わせた巨大な木槌。

それは地面から突き出て来た土の槍。

全てが 洗々兜蟲 に向かい、その全部がモンスターに当たるかと思われた瞬間。

ギィィィィィィィィィィ！！

洗々兜蟲 が、大きく鳴いた。

ガバン、と 洗々兜蟲 の翅を隠していた甲殻が、大きく開く。乳白色に近い色を持った体には、直径十センチ程の無数の孔。それはまるで息をしているかの様に開閉し、脈動し、その一つ一つが光を内部に取り込んでいる。

ガチガチ、ガチガチ、ギチギチギチ、 洗々兜蟲 が顎や歯を鳴らしながら体を揺らし、周囲の大気を震わせる。 洗々兜蟲 の孔の発する光が、より強く輝き始めた。

あれは、まさか。

二度目ともなる甲殻の下の出現に、部屋の内部にいる兵士の殆どが何が起こるかを察し、誰かが叫ぶ。

「アレ” が来るぞおおおお！！ 避けるぞおおおおッ！！」

直後、 洗々兜蟲 の孔からそれは、放たれた。

『ウエロームストレイ  
洗線』。

光の針。

孔の一つ一つから光の道とも言える光線が発射され、直線を描いて部屋の内部を突き進む。

洗々兜蟲 を中心にして、全周囲に発射された『洗線』は、何かに着弾しても止まらず、人の体を貫通していき、肉を焼く。

『洗線』を放った後、光を溜め込んでいた孔は萎み、少しだけだが 洗々兜蟲 の体が縮む。

数秒にも満たない内に放射は終わり、部屋には肉を焼いた、鉄を熱した、草木を燃やした焦臭い匂いが充満し、阿鼻叫喚の叫び声が

舞い降りる。

死臭漂い、呻き声。

その中心に立つ 洗々兜蟲 は、倒れ伏す彼等に追撃をかける。

ビーイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イイイイイイイイイイイイイイイイイ  
ツツツ!!!

鳴き声、ではない。

それは空気を圧迫させるような音に近く、 洗々兜蟲 の二又に分かれた角から発せられていた。

十秒もしない内に、角は漆黒のそれから熱した鋼の様に赤く変色、周りを膜の様に覆い始めたものは、集中されて可視化される程のエネルギー。その威力を解き放つのを今か今かと待つ様に、膜の輪郭が時たま揺れる。

「な……なんだ、あれ……」

「だ、だれか、だれか防御を……！」

そんな顕現された暴力を前にして、『洗線（ウ）エローマストレ  
イ）』を辛うじて避けた者達も、膝が震えながら立ち尽くす。

イイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イイイイイイイイイイイイイイイイ  
ツツ!!!

角から発生する音は更に強くなり、 洗々兜蟲 の近くにいた兵士達の肌をびりびりと震えさせる。

だが、それが放たれる前に。

「ラアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」



顔を崩し、股間を濡らしている者すら出始めている中、一人の兵士が飛び出した。

全身の所々が焼け焦げて、しかし腰にバスターソードを構えて突進する彼の左腕は、先程の『洗線』ヴェロームストレイに被弾しており、二の腕から先が無くなっている。

焼き千切れた腕の断面は、全てが焼き焦げ壊死しており、血が出る前に塞がってはいはいるものの、脳に響く激痛に顔を青く染めていた。

それでも彼は走る、雄叫びをあげて。

「頑張れえっ!!」

「い、いっけえええええッッ!!」

「やっちまえええ!!」

後方からの声援を受けて、突撃する彼は唇の端をあげた。

任せろ、と言つかの様に右腕を振り上げ、洗々兜蟲に向かつて跳躍。

果たして、彼は角を覆う光を発する膜へと突撃し、そして一瞬で消し炭と化す。

《『“戦士”スコア：325568p』が加算されます》

「……………え？」

彼は死んだ。

近付いただけで、触れただけで。

炭となった体はボロボロに崩れ、宙に舞う。

彼の武器は液状になり、地面に落ちる。



が、同様に、平等に、齒向かえる筈もなく消えて逝く。

そして 洗々兜蟲 は地面と平行に、角を横へと動かした。

『極・光線』は『洗線』のようにすぐに止まず、光の暴力を吐き出している。

つまり、レーザーは止まっていない。その状態で角を動かせば当然。。。

イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イ……イイ……イ……ン……。

きつかり五秒後、暴虐の光は止まる。

『極・光線』を射った角は、未だ赤く発熱しており、しゅうしゅうと白い煙を噴き出している。

迷宮の地面は扇状に焼き付くされており、見える一面生きている者はおろか、草木一本残っていない。

部屋を貫通して通路側にまで届いたのだろう、遠くで叫び声が上がっていた。

ざすんざすんと『極・光線』の反動で、地面に埋まった足を持ち上げる。

そして、百八十度向きを変え。

ヒイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

再び足を、地に埋めた。

こっちだよ、こっち！

脳内に直接響く、不思議な声。

男のような、女のような。

少々高いトーンのそれは、老人のようにも聞こえるし、子供の無邪気な声にも聞こえる。

老若男女で判別不可能、その声が、囁く。

ほおら何やってんのさ！　そこにいたら危ないよ！　右にずれて、そう右に！！

注意を受ける。

彼は言われた通りに行動し、足を動かし、右にずれた。瞬間、たった今まで自分がいた場所に矢が通過する。

ああ、そういえば探索中だっけ。

そう思いながらも、しかし意識は上の空。

間一髪で避けた弓矢の鏃の先は、地面に刺さり、その威力を物語っているのに、彼の意識は頭に響くその声に向いている。

エへへへへ！　ほおら言った通りっしょ！！　だからこっちだよ、こっち！！

自慢気な声。

彼はふらりと、と感覚的に捕えて、音が聞こえてきた方に近付けば見えたのは仄かに灯りを照らす小さな街灯が目に入る。黒く塗り潰されたそれは、まるで杖の様に小さくて、先端に付いている硝子のケースの中で映る焰は幻想的で、蟲惑的な光を放つ。

もっと、あの光を見てみたい。

だから彼はふらりと歩き、足を光の方へと向けた。  
周りの者達も、皆同じ様になっっているのに気付かずに。  
彼等は宛ら、光に群れる蛾の様に。

「……………おい、どうした」

彼等の異常に気が付いたのは、とある兵士の一人だった。

「おいっ！ みんなどこに行くんだよ！！」

彼は叫ぶ。彼の周囲 否、彼の部隊は隊列を崩し、ふらふらと何かにつられるように歩いている。

彼は隣を横切った兵士の肩を掴み、ぐいところらに引つ張った。  
ぐるり、と然したる抵抗なくその兵士は彼の方を向き、足をもたつかせて体制を崩す。こちらを向いた兵士の顔を見れば、視線は宙をさま迷っており、半開きの口からは涎が垂れている。

一体、何が。

彼は沸き出る不安に圧され、ガクガクと肩を掴んで振った。

「おいッッ！ しっかりしろ！！」

「……………っ……………ア、……………あ？」

気が付いた！

今すぐ大声を出して問い質したい感情に駆られるが、しかしそれを行動に移す前に、意識を覚醒された兵士は額を抑え、次いで何かに気付いて顔を起こす。

右へ、左へ。顔を振りながら、彼は何かを探し求める

「ど、どうしたんだ？」

「……ひかり、光は………？」

恐る恐ると口を挟むが返事は返事とならず、ただぶつぶつと呟いているだけ。

まるで幻覚を見ていたようだ。

そう彼は思い、そして答えに辿り着く。

幻覚、そう幻覚だ。

つまり、彼等は幻覚を見ているのだ。

効果は薄い、それともかなり広範囲の。

周囲で唯一幻覚に掛らなかつた彼は、リュシカ王国軍迷宮探索隊第十五軍の魔術隊に属する彼は、『守護の防膜』という称号を持っていたからであった。

『称号』というものは多かれ少なかれ、その名に関する特殊能力を保有している。

それは例えば、己の得意な魔術の強化であり、それは例えば、身体能力の急上昇でもある。

それは当然、自身の『分類』<sup>カテゴリー</sup>の名前が入っていれば効果は倍増し、『神』等を冠する称号ともなれば乗増になる。

『守護の防膜』、その効果は常にその持ち主の周りに展開される、防御の膜だ。

微弱ながらもその膜は、幻術等から防いでくれるといったもの、故に彼は幻術をくらわずに、一人正気でいられたのだ。

で、あるならば、だ。

今この状況を打破するためには、彼がその原因を絶てばいい話であり、ならば彼は幻術を放っている大元を探す事から始めなければならぬ訳であるのだが。

「……………あつたあ……………光だあ」

それはすぐに明らかになる。

恍惚とした声を出したのは、彼が先程目を醒まさした兵士であった。

その兵士は通路の奥を見つめており、その方向に向かって歩き始める。

彼もそれに倣って視線をやると、成程確かに光が見える。

それは漆黒に光る真っ直ぐな棒の先端に、六角柱の水晶の形をとった、硝子ケースが付いている。その中でぼんやりと光っている淡い火が、幻覚を見ている仲間達が言うものなのだろう。

そのランプが付いている棒は、迷宮の曲がり角から地面に平行になるように姿を覗かせており、誰かに操られてゆらゆらと揺れている。それに合わせて周囲の兵士が動くのを確認し、推測は確信に変わる。

だが、彼はそのランプに攻撃を仕掛けない。

即座に攻撃を試みたい気持ちはあるが、しかしすぐには叩けない理由があるからだ。

己の杖を抱くように握り締める彼は、主に防御の魔術に秀でており、攻撃魔術は然程威力が少ない。もしここであるのランプの持ち手を倒さなければ、逃げられてしまい、今度は別の場所で違う部隊に牙を向くかもしれない。その時、自分みたいな人物がいなかったら、どうなってしまうのか。

そういった危険性を無くす為に、彼は機会を待つ事に決めた。

操られている周囲に溶け込みながら、彼は仲間達と一緒にあって、ランプについていく。

その心の奥底に、自分は特別だという考えを持ちながら。

すぐに移動は終りを告げて、幻術により意識を半ば無くしている  
兵士達が着いた先は、巨大な部屋だ。

入口の部屋の半分程の広さを持ったその場所で、彼等はぼんやり  
立っていた。

正気を保っている彼は、その部屋の中を見回し、ランプの持ち主  
を目で探す。

部屋に入る寸前の曲がり角で見失い、しかし幻術を掛けられてい  
る兵士達は、この部屋の中心で集まっていた。

どこにいる。

ここで仲間が止まったのだから、何かを仕掛けてくる筈。弓や魔  
術ならば防ぎきれぬし、準備は万端。もう一度杖を握り絞める。

来るなら、来い。

そう意気込んでいた彼の自信は、しかし次の瞬間、呆気なく霧散  
する。

何故なら、それは。

「……………あ、あれ？ 俺、なんでこんなところにいんの？」

「っは！ あの光は？ 光はどこだ?!」

「う……………ん……………あー、頭がくらくらする」

「……………い、一体なにが……………?」

仲間達が、目を冷まし始めたからだ。

「……………あ?」

意味が、分からない。

そんな感情が込められた彼の呟きは、周りに雑音に紛れ、掻き消



えた。

意味が、分からない。

彼は心の中で呟いた。

なぜこんな所で幻術を解いた？

攻撃準備に取り掛かった為に？

彼は慌てて周りを見る。しかし、何も仕掛けてくる気配はない。

目標を次の得物に変えたため？

分からない。しかしここにも隊長格は混じっているのに。

分からない。

分からない。

分からない。

何故、何故、何故。

混乱が脳内を犯す、考えがまとまらない。

皆目見当が付かない答え、それを導き出す為に、彼は頭を掻きまわす。

「　　へへへ」

しかし、その答えが出る前に、部屋の隅に生えた木から、笑い声。枝に座り、足をばたつかせながら腹を抱えて晒うベストを纏った兎が一匹。腹は白く、他はベージュの毛波に覆われて、長い耳にはリング状のピアスが右に二つと左に一つ。足には巨大なサイズのブーツを履いて、腹を抱える腕の間に、先程まで見た小さな外灯。

白い歯を剥き出しに、ユニークモンスター バニール・バニール・バニール 気狂い狡兎 は嘲り

笑う。

「　　へへ、エへへ、エへへへへ！！ バツカじゃないの？ バ  
アカじゃないの！？ 自分で隊列組んで、欠伸して！ 幻術くらう  
状態になりやすくなるとかバカすぎるでしょっ！！ エへへへへッ  
！！」

笑う、笑う。

愉快そうに、狂ったように。

これからの末路を、見ているように。

「エへへへエへへ、エへエへエへッッ！！ 今日っ、この日っ、この場所です！ テメエらみくんな」

幻覚を見ていた兵士達には、聞き覚えがありすぎるその声は、果然とする彼等に向かい、楽しそうに宣言した。

「死にましたっ！」

足下から、答えは来る。

《オンリートラップ アルフォビヌ 奈落箱 が発動します》

ひゅうん、と聞こえたのは一瞬。

彼等の足場は、無くなった。

「え」

オンリートラップ アルフォビヌ 奈落箱。

本来ならば下の階層に繋がる穴は、何故か底が見えない程の深さを持って。部屋の四隅以外をほぼ無くす程の巨大な穴は、この場にいたリユシカ王国軍 全二百八名を一人残らず呑み込んだ。

落とされた彼等の思考は、気付いたら別の部屋にいて、いつの間にか奈落の穴に落とされて 当然思考は付いては行けず、叫び声は上がらない。

だから、そのまま落ちて死ねれば、どれ程幸せだっただろうか。  
幻覚を見たまま死ねれば、どれ程楽だっただろうか。  
彼等が起こした災害は、落とされてから牙を剥く。

《アルフォビヌ 奈落箱 ウバ・ドワードルバアグ が作動しました。特定条件を満たしたことにより 箱<sup>□</sup>  
の中に住む者 が寄生します》

「あああああああ　　！！！」

状況を把握した兵士達がした行動は、死にたくないという願いで  
はなく、神に対する祈りでもなく、本能からの絶叫だった。

落下していく風圧で顔を歪ませて、兵士は絶叫しながら落ちて行く。

「　　あああああ、ああ！！？」

しゅるり、と落ちて行く兵士の一人の腹に、蠢く何かが回される。  
その外側には粘り気のある粘膜を分泌しており、内側には吸い付いた  
ら離れないと確信できる大小様々な吸盤が。

それは触手の様なもの。

それが兵士の腹を抱えて、落下を止めた。

但し、受け止めるようなものではなくて、無理矢理落下を止める  
やり方で。

「　　オツボエツッ！！！」

急停止した反動で、兵士の体はくの字に曲がり、胃の内容物をぶ  
ちまけた。

ボキボキボキイ、と背骨が砕け、今度は激痛に顔を歪ませる。

しかし、それも束の間。

「あっ……がッ……！ あ、ああ、うあああああ  
！！」

腹に巻かれた触手により、彼は空を飛んで行く。

右へ、左へ、上へ、下へ。

子供が玩具で遊ぶ様に、急上昇、急降下、急停止、急発進を繰り返す。触手を紐の代わりに使い、円を画いて旋回させて。独楽を回す様に触手を使い、回転する兵士を空中で掴む。

疾うにその兵士の命は潰え、遠心力により触手に弄ばれた兵士の体は、背中と膝裏が密着していた。

No.10422： ロウバ・ドワードルバアゲ 箱の中にいる者 詳細

消費P：「0p」

限界個体数：「1/1匹」

生息可能階層：なし。 アルフォビヌ 奈落箱 内のみ

出現条件

「前提条件」

・ オンリートラップ アルフォビヌ 奈落箱 が発生している。

「条件：1」

・ 1つの【パーティ】に決められた規定人数の上限を越える。

・ 1つの【パーティ】に

（中略）

特徴

・決められた条件を満たすことで発生するユニークモンスター。  
・全高10メートル、幅8メートル。見た目は磯巾着の中心に、幾百と枝分かれした珊瑚を生やしている様な形状。珊瑚の表面には咀嚼器官が何百とついており、磯巾着状の部分に生えた触手を使い、

侵入者を喰らう。

・熱に弱く、弱点部位は珊瑚の形状をしている部分なのだが、その前に強靭な筋肉を有する1000以上の触手に阻まれてしまうだろう。

・ロウバ・ドゥードルバアグ箱の中にいる者 アルフォビヌは 奈落箱 内に寄生し、そこを住処にするので、 奈落箱 アルフォビヌ内から動く事はない。

・しかし触手は アルフォビヌ奈落箱 内から外に出るので、迂濶に近付かない方が賢明だ。

・転生不可

《『 “人間” スコア：3744p』が加算されます》

そして触手は、彼を掴んでいた一本だけでは、当然、ない。

アルフォビヌ奈落箱 に落ちたりユシカ王国兵士 二百八、一人減った二百七名全員は、既に優に千を超える触手に捕まっていた。

「アガアアアアアアアア！」

「だずげッッ！！ だずげでえええええ」

「やめっ、やめ ああああああああッッ！！」

兵士達の絶叫。文字の通りに血の雨が降り、その地獄は終わらない。

《『 “人間” スコア：89924p』が加算されます》

《『 “人間” スコア：6154p』が加算されます》

《『 “人間” スコア：6263p』が加算されます》

《『 “人間” スコア：2071p』が加算されます》

《『 “人間” スコア：4829p』が加算されます》

部屋に空いた穴、そこから叫ぶ兵士達。

それを肴に、狡兎は笑う。

「エヘエヘエヘッツ！ 紅茶で乾杯、れっつぱーていつてかつ！  
？ エヘヘヘヘ、エヘヘヘヘヘ、かんぱーいつ！ エヘヘヘヘヘ  
ッ！ おつもしれー！！ 人を騙すの超っつっつっつオモシロッツ！  
！ エヘヘヘヘヘ！！」

No.10502: バニール・バニール・バニール 気狂い狡兎

詳細

#### 特徴

- ・決められた条件を満たすことで発生するユニークモンスター。
- ・全高86センチ、体重27キログラム。腹（白）以外の部分はベージュ色の毛波を持った“獣人型”モンスター。皮のベストを着込み、足には不釣り合いなブーツを掃いている。
- ・笑い方は「エヘヘヘヘ」しばらく聞いてると何故か腹が立つ。
- ・基本的に戦闘はしない。が、逃げ足は恐ろしく速い。たまに反転し、その脚力をラビットキックで反撃にできるので注意が必要。
- ・人語、獣語、亜人語、の中でも様々な言語を介し、様々な生物を騙す。バニール・バニール・バニール 気狂い狡兎 の魔道は【変幻魔道】。また、“幻術”系統のアイテムを持つと、相互に+補正がかかる。
- ・とにかく騙す事を主流にはしているが、【迷宮】に不利になる事はしない。他のユニークモンスターとも会話することがあり、その際は交渉やら作戦についての事が大半である。
- ・狂ってる割には比較的冷静であり、命の危機と察したら即逃げる。

↳

No.105428: 寂しがりやの誘蛾灯 詳細

消費P: [0p]

限界出現数: [2/8個]

出現条件

「固定条件:1」

- ・「72:00:00」内に【迷宮層】に侵入者が1人も来ない。
- ・「144:00:00」内に【迷宮層】に侵入者が1人も来ない。
- ・【ソロ】の【パーティ】が累計100以上になる。
- ・【ソロ】の【パーティ】のどれか1つが、1回の探索でモンスターを100以上撃破する。
- ・【ソロ】の【パーティ】のどれか1つが、1回の探索でモンスターを200以上撃破する。
- ・【ソロ】の【パーティ】のどれか1つが、1回の探索でモンスターを300以上撃破する。
- ・【ソロ】の【パーティ】のどれか1つが、迷宮内を累計50km以上歩く。
- ・【ソロ】の【パーティ】のどれか1つが、迷宮内を累計100km以上歩く。

#### 効果

- ・火を灯せば、光につられて周囲から敵が集まってくる。
- ・対象に対して“幻術”の効果を持っているが、所有者が対象に殺意を見せるとすぐに効果を失う。

- ・所有者に“幻術”に関するものに+補正を与える。

#### 特徴

- ・条件を満たすと迷宮内に出現するユニークアイテム。
- ・外国（欧州風のデザイン）の街灯を1/3サイズにした様な形状をしている。カラーは黒、青、濃青、紺、濃紺、青紫、淡黒、濃黒、の8色。どれも暗い色をしている。効果は変わらない。
- ・燃料は持ち主の魔力。満タンにすれば30分間は魔力を補給しないで済む。ちなみに、一般人の持つ魔力でも二十分程はもつ。（魔術師の平均で考えるならば25〜30時間）
- ・灯りは持ち主の意思により点火、消火が可能。この時 寂しがりやの誘蛾灯 に掛っていた者への効果はリセットされる。』

「はーあ、笑った笑った。さてさてさて、行きますか　　つと」  
迷宮内部に落ちていた、ユニークアイテム 寂しがりやの誘蛾灯  
を持ちながら、バニー・バニー・バニー 気狂い狡兎 は枝から降りて歩き出す。

そして歩いている途中、狡兎はベストにくくって取り付けた、ジヤラジャラと鳴る布袋に腕を突っ込み、中身を一掴み程取り出した。手に掴まれているのは、瑠璃色に輝く綺麗な小石。尖った先で突けば、皮膚を貫けるであろうそれを。

「　　いったただつきまーす」

まとめて口に放り込む。

口に入れた物は、兵士から盗んだ小さな『原石』。

ガリ、ゴリ、ガリ、と噛み砕き、喉を鳴らして嚥下して、ふう、と息を吐いて、口を拭う。

背後にある、阿鼻叫喚の地獄を無視し バニー・バニー・バニー 気狂い狡兎 は歩き出す。

「　　ランクアップまであと三百二十と五千といくつ、今の内に稼がせて貰いますかねっ」

エへへへへ、エへへ、エへエへエへ。

狡兎は笑う。

笑う。

笑う。



場所は変わって【迷宮第一階層】 入口付近。

そこにはリユシカ王国軍の地上と迷宮の中間地点の役割を担う筈の天幕が張られている途中である。

現在この中にはリユシカ王国軍の総指揮官である男を中心にして、近衛師団を除いて、王領軍に支援してきた者を含めた参謀達が集まっていた。

何故、近衛師団を抜いているのか。

それは端的に言えば、ただの嫉妬に近い感情により生まれてしまった区別意識が原因だ。

近衛師団は近衛師団、王国軍は王国軍。

同じ国に属してはいるが、最早別々の組織と言っても過言ではない。

王国軍にとっては都合のいいことに、近衛師団は第一王子に付き添い、護衛役をかつている。なので現段階での【迷宮】探索の最高指令官は形式上近衛師団隊長に任命された王国軍にあるのだが。

「何が起こっている！！」

天幕の中で、一人の男が怒声をあげた。

ダアン、と設置された卓を叩かれ、その威力によりぐらぐらと机上の物が揺れた。

立派な口髭を生やしたその男は、顔に皺を寄せながら、たった今報告しにきた兵士を睨みつけている。

怒声をあげた男の正面に立つその兵士は、肩を震わせながらも、もう一度同じ答えを報告する。

「だ、第一、第二、第六、第八、第十、第十二、第十五、第十八、第十九、第二十一、第二十三軍が各々数十人から半数に及び死傷者が出ており、特に第六、二十一軍が半数以上が死亡が報告されています」そして兵士は一度下を向き、躊躇いがちに口を開く。「……………中でも、第二、十八、十九軍は　全滅だと言われている」

「馬鹿な!!」

もう一度同じ言葉を耳にして、意味を反芻し終えたのか、今度は別の者が怒声をあげた。

彼は十八軍に自身の部隊を属させていた者である。

彼はたった今報告された言葉を信じられず、意味はないというのに、その兵士に向かって反論した。

「我がイリーズ家の騎士団達はこんな辺境な場所にいるモンスター風情に負ける程弱くは無いッ!!」

「然り！　我等も同じ意見であるッ!!　その報告は我がダウ、アラス家達を貶めんとする誤報に違いない!!」

「そうだッ！　私の騎士団とて敗けは　」

それに伴い、次々と。

というよりも、論点はそこなのか。

その言葉を聞いても何とも言えない兵士は、弱々しく彼等の中へと割って入る。

「……………いえ、でも報告には」

「黙れ！　この平民風情が!!　たかが平民の癖にこの私、ゲツヒ・シユナ　」

「そ、そうだ！　貴様は駄目だ!!　違うやつを持ってこい!!」

事が出来る筈もなく、怒鳴られるだけに終わる。というよりもこの兵士じゃなくとも、報告内容は変わらないのだが、貴族達は気付いているのだろうか。

「だいたいさつきから何だと言うのだ！兵士達がゾンビになって動き出す？一瞬で肉体が腐敗するとでも言うのか？馬鹿を言うのも大概にしろ！！」

「いえ！それは事実で」

「全くです。それでもそうだと言うのなら、なんなら貴様が今此処で死んで、証拠を見せて欲しいですねえ」

「そ、それは」

何、を言っているんだ。

兵士はそう叫ぶのを寸前で堪え、次にどう返すかを考える。

なにせ返答を誤れば、そのまま首をはねられるかもしれないからだ。

返答を考えながら、頭の片隅で彼は思う。

まさか、ここまで軍が、腐っているとは、と。

そして、そんな取り付く島もない状況に、喝が飛ぶ。

「静まれ貴様らアツツツ！！！！！！」

発した人物は、リュシカ王国領軍最高指令官リベルド・バス・ゲードルウィツシュ。

年齢は四十代ぐらいだろうか。白髪混じりの髪、髭、少し丸みを帯たその体には、他の者にはない威圧感を放っていた。

「確認だ。第二軍と十八、九が壊滅だと？」

静寂が天幕の内部を包む中、最高指令官である彼　　リベルドの低い声が空間に響く。

「あ、はい、はい、そう報告を受けました」

「　　どんなやつだ」

「は？」

「壊滅させたのは、どんなやつだと聞いている」

「は、はい……！　えつと……」　兵士は手にもった紙を見て、気まぐすそうに口を開いた。「角があり、体表が黒い大型の蟲……としか」

静寂が再び天幕の中を包み込む。

「　　半壊した部隊があるといったな、それは？」

「は！　現在伝わっているのは軍隊らしき行動をとる　小鬼、巨大なガルボアと思わしきモンスターと二匹の怪鳥に、　オーガの亜種だと推測されています」

「……………ふうむ、それらは恐らく、この森から出ているのだろう。そして息を吸い込み、リベルドは言った。「一度撤退する。兵を引け」

三度、静寂が訪れた。

リベルドは、にやりと口角をつり上げる。

「　　モンスター達は森から出ているならば、その住処を消してしまえばいいだけの話だ。元から我々が住んでない場所だ、開墾地にするにしても良いだろう」

「で、ですが地上に出てくるのでは……？」

「なに、その時は」

リベルドは言う。

「その時は近衛師団に精を出して貰おうじゃないか」

数分後、天幕から王領軍最高指令官、リベルド・バス・ゲードル  
ウィツシュから指令が下る。

彼等はまだ知らない。

その時既に、リュシカ王国軍に属する約三千五百名が屍を晒し、  
元同僚達へと牙を剥いている事を、彼等はまだ知らない。

《『条件：迷宮内部の森を規定時間内に一定数以上故意に燃やす』  
を満たしました》

《『特定条件：森の怒り』をの1つを満たした事により、ユニーク  
モンスター 燐爛蝶蝶<sup>アールラレイ</sup>、獅子炎炎<sup>フェライガベル</sup>、爆薬火葬<sup>グラス・マンドゥラケラ</sup>が発生しま  
す。消費コストは0です》

彼等はまだ知らない。

迷宮に対する常識を、彼等はまだ知らない。

「11:42:03」

リュシカ王国の都市の一つ、タロツソル。

リュシカ王国の北側に接している帝国、その境界線の役割を果たすモルル山脈の近くに存在している其処は、リュシカ王国の市民達が比較的穏やかな日々を過ごし、暮らしている。

そしてそのタロツソルを西から東へ、上下に分断するように伸びているのは、俗に表通りと呼ばれる道だ。

タロツソルの表通り、そこは裏通りとは百八十度違い、人々の活気に満ち溢れている。

平均サイズの馬車が二台分の幅を持っている中央の道は、馬車が絶えず走っており、脇には様々な露店が立ち並ぶ。武器家や防具屋、魔術商店等は看板を掲げ、客を呼ぶ声が、表通りには絶えず聞こえてくる。

十にも満たない少年が、その親であるだろうという女性と手を繋いで歩き、もう片手に露店で買った果物を食べながら笑っている。腹が出ているが、健康そうな表情をしている女性が、売られている肉の値段の交渉をして、店員と競うように己の提示価格をあげている。

冒険者だと思われる男性は、表に出された剣の値札を片手に、財布の中身と向き合っている。

活気満ちた大通り、その一角で。

「はあっ、はあっ　ふうう……。だ、大丈夫？」

「は、はい。平気、です。だから、あの、降ろしてもらっても……」

「あ、うん、ちょっと待ってな」

【灼熱の息吹】リーダー、ラック・スミルソウは、己の故郷である此処タロツソルにて、一つの厄介事に巻き込まれていた。

「にしてもあいつら、しつげえなあ……」

そんな喧騒溢れる人混みの中、ラックはため息をついて呟いた。その言葉が耳に入ったのか、たった今ラックが降ろした金髪の女性性が頭を下げる。

「ご、ごめんなさい。わたしのせいで……」

「ん、ああ。別に気にする事は無いよ、俺が勝手に首を突っ込んだだけだから」

ラックは少々慌てながら、目の前の少女の言葉を否定する。

ラックの目の前にいる一人の少女。彼女はラックが裏通りを歩いていた時に聞こえてきた、助けを求める声を発した張本人である。

結論から言えば、ラックはこの少女を助けたがために、厄介事に巻き込まれているのであった。

『は、放してくださいっ』

この声が耳に届いた時、ラックは少しの間助けに行くか行かないかで逡巡したが、このまま放っておけば寝覚めが悪いと結論を出して、裏通りの路地で悪漢に捕まっていた彼女と出会う。

ラックが路地に突入した時、少女を襲っていた悪漢は二人いたのだが、そこはラックの腕前で何とか出来た。しかし予想外だったのは、彼等に対する増援が大量に来た事だ。十人以上の男達を相手取り、少女を守りきれぬ自信がなかったラックがとった行動は、逃げの一手。

そうしてラックは少女の背中と膝裏に腕をやって持ち上げながら、走って表通りまで来たのであったのだ。

しかし、ラックには既に、先程の仲間と思しき者がちらほら

と目についている。

ラックが助けた少女の髪は金色で、胸まで届いたセミロング。身なりはただの一市民と大差なく、冒険者等から懸け離れている。顔の作りは整っており、弱気そうなる。小動物の雰囲気が見受けられる。十四、五歳、といった所であろう少女の体は胸、腰、尻、と出るところは出で、引っ込むところは引っ込んでいるという、一言で言えば魅力的なラインを画いていた。

そんな美少女の部類に入る彼女は、首から掛けた紐に取り付けられた菱形の水晶を握りしめながら、申し訳無さそうにラックを見上げる。

「……………でも、貴方に迷惑ですし」

「なんだ、そんなことか」

「え？」

あっさりとしすぎた答えを聞いて、ぽかんとする少女の肩に片手を置きながら、ラックはからからと笑う。

「いーからいーから。それともミルティちゃん、だっけ、俺がいなくてもキミ一人で何とか出来たの？」

少女はあう、と呟いて、頭を垂らす。

そして両手の指を使ってもじもじしながら、小さな声で返事を返した。

「で、できません……………です」

「うん、なら俺が助けてやるから」

「あ、あうう」

「それとも迷惑かな？」



「い、いや、迷惑じゃ、ない、です」  
「なら手伝ってもいいよな。というか多分俺もマークされてると思  
うし」

何せ少なくとも四、五人程は殴打等して気絶させたのだから、恨  
まれてない方がおかしいだろう。

あと骨も折っちゃったしな、とそんな事をつらつらと考えてい  
ると、少女は自分の心に踏ん切りがついたのか、ラックにぺこりと  
頭を下げた。

「……………よ、よろしくお願いします」  
「ん、よろしく」

そしてラックは自分の腰に手をやり、一息ついた。

「さて、まずは仲間達と合流するけど、いい」  
「は、はい」

とりあえず仲間にあって、彼女のことを話さなければ。

ラック達が今いる場所はタロツソルの西の方、エルナヤデリテュ  
ードはここから真逆の位置にあるので、少々時間は掛るが合流する  
事は可能だろう。

まったく、とんだ誕生日だな。

ぺこぺこと繰り返し礼をしている少女を見ながら、そうラックは  
思う。今日は彼が十八に成る日、この少女との出会いは運命なのだ  
ろうか、そんな益体の無い考えが頭をよぎる。

思わず、空を見上げる。

そこには白い雲が流れる、蒼い空。

何一つ変わらない白と蒼、その視界には、遠くに黒い雲を捕えて



「 モンスターの、襲来か」

誰かが、言う。

そう、この鐘の音は、モンスターの襲来の合図。

都市タロツソルは、帝国イグナードとは地図上では接しているものの、厳密に言えばそうではない。というのも、リュシカ王国とイグナード帝国の境界線を担っているモルル山脈と呼ばれる場所が在ることが原因だ。

モルル山脈は、リュシカ王国の領土でもなく、イグナード帝国の領土でもなく、モンスターのものと定義されている。

これはモルル山脈内に住む ロックタイラント ワイバーン や 岩石巨人 等のモンスターや、山脈の麓に広がる森を住処にしている ゴブリン や オーク、オーク 等のモンスター達が、種族ごとに分かれて大量に住み着いているからだ。

今現在の学者達によれば、このモンスターの大群は、千にも万にも達していると言われており、駆除するにも時間と労力が掛り過ぎる事と、とある一つの事情があり、どちらも昔に開拓して作り出した王国と帝国を繋ぐ通路以外は、手を出してはいないのが現状である。

で、そのモルル山脈に一番近いこの都市タロツソルでは、生存競争が激しいモルル山脈から溢れたモンスターが、都市に向かってやって来るのがよくあるのである。

そういうモンスターは都市内に入る前に、タロツソルを囲む壁の前に阻まれ、常に警戒している兵士達に駆除されるのだが、時たまそういう溢れたモンスターが、部族単位で攻めてくる事があるのである。

それを知らせるのがたった今鳴った、鐘の音だ。

これは住民に避難を呼び掛け、兵士達に対して迎撃準備の指示を

出すものであるのだが、住民達は余り避難をしようとしな  
これは長年の間モンスターが侵入された歴史が無いからであり、  
皮肉な事に兵士達の実績を証明する一つである。

そして今日も、皆は同じく避難の行動を取らなかった。

但し、取らなかった理由は、それではない。

「……………なあ、あれ、なんだ？」  
「え？ どれ」

恐らく彼等は、本能で感じたのだらう。  
いつもと違うと、何かが違うと。

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ……………ン……………！

三度目の、鐘が鳴る。

誰かがごくり、と唾を飲んだ。

「……………あれ、あの黒い雲みたいなやつ」  
「あ、あれ……………雲？ くも、なの、か？」  
「おい、あれ見ろよ……………！」  
「あ、あ、あ……………うそだろ……………?!」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ……………ン……………！

四度目の、鐘が鳴る。

何処か切迫した空気を肌で感じられる。  
殆どの住民が、異変に気付く。

キヨロキヨロと周りを見渡していた少女の肩に、ぽん、と震えた手が置かれる。

「ひゃ！……………ら、ラックさん？」

置かれた手の持ち主は、彼女を助けた冒険者、ラック・スマイソウ。

彼はある一点を捕えて放さず、小さな声で、彼女に言った。

「逃げるぞ、逃げないと。でも、いや、そんな、嘘だろあれは」

「へ？ え？ あの」

しかさ少女の口が最後まで言葉を紡ぐ前に、彼女の後方から、叫び声があがった。

「あれは雲じゃない！ モンスターだ！！ ワイバーン達  
が！！ あの雲が！！」

モルル山脈の方角から見えた黒雲は、雲ではない。それは、山脈に住む飛行種のモンスター。

遠くからでも塊として認識できたその一団は、どれ程の数が集まっているというのか。。

ゴ、オオオオオオオオオオオオオオ……………ン……………

……………！

五度目の、鐘が鳴る。

恐ろしい速さで接近する黒雲は、既にそれを構成するモンスター達が認識できるほどで。



“災厄”が一頭、『破壊を司る黒竜』ベルティミルド。モルル山脈に眠っていた筈である存在が、青空の中を飛んでいる。

「 終りだあ！！ この都市は、終りだああああ！！ 」

ベルティミルド の顎が開き、キラ、と輝きを放った直後。

鐘の音とは違う轟音がラック達の元まで届き、鉄壁と言われた城壁が、紙の様に吹き飛んだ。

モルル山脈に近い都市タロツソル、その辺り周辺を俯瞰する事が出来たならば、彼等は目を疑う光景だっただろう。

何故なら、陸続きの台地である筈なのに、山脈から沸き出る黒い波が、タロツソルを呑み込んで行ったのだから。

そしてそれは、タロツソルだけで起きていた訳ではない。

それはリュシカ王国全土で、更には周りの三大大国の一部を含めて、一斉に起きていた。

もしもリュシカ王国を中心として、大陸を俯瞰する事が出来るならば、波を作ったモンスター達は、皆同じ場所に向かっていた事が分かっただろう。

行き着く先は、リュシカ王国首都バスラノの南部にあるトリューシャ平原 突如現れた、その巨大な門である。

No.0004 【楽園の謳香】

『消費P:全体pの1割

持続時間:「03:00:00」

効果

『憐憫謳歌』：【迷宮層】に存在しているモンスター全てが指定された階層にやって来ます。これは本来指定された階層に住んでいないモンスターや、ユニークモンスター、オンリーモンスターも含まれています。

『屍死濁濁』：このコマンドが発生している間、【迷宮層】に存在する者全ての者にエクストラステータス“猛進”“腐敗”“風化”が付加されます。コマンドが発生している限り解除はできません。『楽園の香』：このコマンドが発生すると同時、指定範囲内（変更不可）にいる地上からモンスター達を収集します。これは生後3ヶ月以上経過したモンスターに有効です。』

蹂躪はまだ、始まったばかり。



蹂躪「01」(急)(後書き)

ちょっとやりすぎたかな？

書いてて思いました。

あとがき

もう疲れたよー。量がどんどん増えていくよー。よせです。

ゴブリンの描写は、今回のコマンドの脅威を示すいい感じの例になつてくれとると書いた甲斐があります。

視点変更しまくりじゃねーかダボが！！とかいわれそうですが、ごめんなさい、よせにはこれが限界でした。

上手に蹂躪具合書けてますでしょうか？ けっこー不安です、はい。

ちなみに、これからが本番です。

ゆっくり最後まで抗って行ってね！！

以下予告。

多少のネタバレありますのでご注意を。

私情により、更新が暫くできないので、予定しているチャプター

を忘れない内に書いとこうかと思えます。  
という分けで以下そのチャプター。

『Welcome to Magia Load』

『これはゾンビですか？ はい、死霊術師です』

『異世界人二人のぶらり迷宮探索の旅』

『食肉達のパレード』

『近親姉弟と蛇竜の行方』

『ドキッ ゾンビ対ゾンビの迷宮戦争！ 迷宮黙示録 ラビリッ

ス・オブ・ザ・デット』

『おいしい昼ごはんは虐殺の後に』

『とある一人の兵士の結末』

『いつまでも変わらない青空の下で』

今回の話は多くてもあと二、三話で終わらせたいですね。混沌へ、  
ようこそ！

リユシカ王国、王都バスラノ。

その市民達が大通りには、いくつもの店が存在している。

その一角にある喫茶店<sup>ラッツェ</sup>。

深い香りと苦さが人気なティーノヤ、木苺ジャムのサンドイッチなどが人気なそこで、お盆を持ちながら、商品を受け取るカウンタ―と、客席の間を歩き来している少女がいた。

「ご注文、お待たせしましたー」

「おおユリネちゃん。ありがとう」

「いえいえ」

明るい、活発そうな声である。

褐色の肌に、茶色の髪。深い青色の瞳を持った彼女の額には、ぴよこんと盛り上がるように、二本の角が生えていた。

“魔族”の種族の一つ、鬼族。

ユリネ、と呼ばれた少女は、その一人であった。

《ラッツェ》の入口の扉が開き、鈴が鳴る。

入って来たのは、頭が光を反射している男性であった。

一瞬ちよつと眩しくて、ユリネは目をつむった。

「いらつしゃいませー。あ、店長」

「おーユリネちゃん。いつもご苦労様ー」

「いえいえそんな。奴隷という身分なのに、奥さんにはいつもよくしてもらってますし」

奴隷。

終結したとはいえ、未だ 大戦 の傷跡は深く残っており、ユリネも己の買い主 つまり店長“が魔族”のよき理解者であるからこそ、このような会話ができるのである。

「ユリネちゃん、ウチは奴隷として見てないって言ってるだろ  
うに」

「あ、はい、そうでした。ごめんなさい」

店長と呼ばれた男はうむ、と頷いて、あ、と思い出した様に声をあげた。

少し声色が低くなる。

「ところでユリネちゃん、あの男は今日も来るのか？」

「あの男？ああ、レベックの事でしょうか？彼ならまだですけど…」

…」

「そーかそーか、よしよしよし」

店長はどこか嬉しそうだ。それはそう、目に入れても痛くないほどの愛娘がまだ嫁に行かないと分かったような。

「ユリネは渡さん、絶対渡さん」

「なーに馬鹿なこと言ってるんだいアンタは」

どこから現れたのか、店長の妻がバーンとお盆で彼の頭を叩く。

「いてえー！！ 頭狙うな！ これ以上薄くなりたくいんだよー！！」

「もうないよ、幻覚見てるんじゃないよ。ったく」

がくり、店長は頭を抑えたまま崩れ落ちた。

店長の周りが、気持ち程度に暗くなる。しかし頭は輝いていた。

「はあ、まったくだらしがないねえ。ユリネ！ あの坊やはまだ見えないけどどこいったんだい？」

「は、はあ、えっと、レベックは軍の仕事らしくて……」

「軍ねえ。道理でそこらかしこに歩いてたバカガキ共がないのかい。」そして彼女はにやりと笑い「で、坊やへの返事はどうすんだい？」

「？」

「……まさか何も聞いてないと言っんじゃないよね」

「あ、はい。特に何も」

そういって店長の妻は額に手をあて大きくため息をついた。

「あの坊や、本当にヘタレなんだねえ」

「はあ……。あ、でもレベックは帰ってきたら私に何か言いたいことがあるそうでした」

「ん、ああそう、……行く前に言えば良いのにねえ」

「まあ、でもレベックですし、わたしは帰ってくるって信じてますから」

「そうかい、ならいいけどね」

店長の妻はやさしくユリネのことを見つめる。

そしていまだ崩れている店長の尻をかけた後、さあ、と声をだした。

「じゃあさっさと仕度を始めるよッ！ もうすぐ昼だ！ 気合入れなよー！！」

「はいっ」

そうしてユリネが明るい返事を返した直後。

……！

ゴ、オオオオオオオオオオオオオオオオオオ……ン……

地獄の到来を知らせる、鐘が、鳴った。

キャラクターとかの資料

ハルアキ君の【迷宮】質問コーナー

なんか色々まとめておきます。ネタバレとか矛盾とかあるかもし  
れないのでちょっと注意。

ハルアキ：本作主人公。両親と妹の4人暮らしだった地球生まれの日本人、名字は召喚された際にお亡くなりになりました、なむ。“異世界人”、スキル【迷宮創造】を持つ。

迷宮に住む人々

ジゼル・ライツァウルト：“魔族” “影狼族”。灰色の髪と耳と尻尾で蒼眼。“三番”だった子。ハルアキの事を主人と崇める。11歳男の娘。

ゼル・ガルドノテム：“魔族”。特徴は赤い髪、狼みたいな耳と尻尾。リーダー的、というよりはガキ大将に近い。14歳、つまり中二男子。

パド・ガルドノテム：“魔族”特徴はゼル同じ。幼い。ゼルの弟。ブラコンというよりは依存に近い。すぐ兄を頼る。虐待被害歴有り。10歳、少年。

エルティオネ・バーニ・ファムファタル：“四番”だった子。金髪蒼よりの瑠璃色の目。吸血鬼と悪魔系の魔族のハーフ。14歳。

フィオーナ・バーニ・ファムファタル：“五番”だった子。依存性あり。ストックホルム症候群的なあれで用心棒に惚れる、吊り橋効果でも可。金髪緋色の目。吸血鬼とエルフのハーフ。エルティオネの姉。16歳。

リユネ：白髪8歳三ツ眼幼女。《先祖還り》により“魔族”から“<sup>サトリ</sup>覚”へ。心が必要以上に読める。忌み子として売りに出された。

王家の奴隷：というよりも王子の奴隷。全員で8名、美女揃い。年齢が比較的高い（とはいっても一番上でも外見が20代程度）人



は、今の所子供たちの相手をしている。現在出てきているのは、二つのおさげを栗色の髪（トップ？）、ウェーブの金髪緑眼、茶髪青眼、吊り目の緑髪の女性、泣き黒子+やや垂れ目の女性。

迷宮の愉快（？）な仲間達。

『ユニークモンスター』：【迷宮創造】 モード：ファジーの副産物的な存在の総称。隠された《条件》を満たす事により出現する。

ゲルアトウル  
蛇竜蜥蜴 : 通称“蛇竜”。とがった鱗、分泌される毒、強酸の血、驚異的な回復力 e t c e t c ……。完璧に裏ボス的な存在です本当にありがとございました、ただどこいつ……………唯のマツプBOSSに近い存在なのよね。正に蛇足。

《New!!》  
向こう見ずな猪 : 巨大猪。オツコトヌシ様！ オツコトヌシ様！！

キリングマーチ  
洗練された小鬼達 : 軍隊。個人的に放つて置くと一番被害出るんじゃないかな？（ただし弱者の相手に限る）

ホームレス・ホーネット  
巢無し蜂 : 蜂。

バニー・バニー  
気狂い狡兔 : エヘヘヘヘ！！ 個人的に気に入ってます。  
鋼鉄劉隆 : マツチヨ。

洗々兜蟲 : 全12種類一（+1）の巨大甲虫型ユニークモンスターが1匹。ガシャポンとかでよくあるよね。

ジェノサイドワーム  
破壊土壤蟲 : そのまま。

ロウバ・ドワードルバアグ  
箱の中にいる者 : 寄生してます。  
サイコイーグル・エルベステイオ  
荒れ狂う昼の猛禽類 : 鷲。  
サイコオウル・ガートベステイオ  
荒れ狂う夜の猛禽類 : 梟。  
デイクオニエイズ・フェアライバレード  
狂喜する妖精の宴 : 気にしちゃ、だめ。  
ジェルゲルウースト・ラボツレツェ・ウーグ  
透き通った雨水 : 王水。  
ロード・オブ・オーク  
豚皇帝 : 豚皇帝さんマジパネエっす！  
アービルラリイ  
燐爛蝶蝶 : これは酷い。制空権一人勝ち。  
フェライガヘル  
獅子炎炎 : 近づくと熱いです。  
グラス・マントウラグラ  
爆薬火葬 : キュピ？

《New!!》

『オンリーモンスター』 : 【**迷宮創造**】 モード：ファジーの副産物的な存在の総称。隠された《条件》を満たす事により異世界から召喚される。相手は死ぬ。

スライッシュ・ミントウ  
肉を裂く者 : 次回。

《New!!》

“災厄” : 相手は死ぬ。“絶対に手を出してはいけない”。“魔王”、“勇者”を殺す程の強さを誇る。公式認定を受けたバグチー

ベルティミルド : 『破壊を司る黒竜』。超デカイ。全身を覆う漆黒の鱗。羽撃くたびに嵐を起こす三対の翼。遠くから見ても禍禍しいと断言出来る迫力を持つてる。バグチートの一角。

迷宮以外の国やその他のグループ。

アリユテミス：『禁断の境地』『混沌の巢窟』。大陸、【魔界】の最西端に潜在した国。知る人からは【地下国家】と呼ばれる。既に滅亡しました。

魔王：No Data

《イスリッション》：《大戦》終結後から約1年7ヶ月後に第1回目。半年置きにリシユカ王国で開催される巨大な奴隷競売。第1回と第2回の間は実はあんまり期間が空いてなかった。1回目、2回目共に人気を博し国王も参加。最大規模の第3回目に於て、この世界から消える。主催はゴコロブ。  
ファンタジア

ゴコロブ・バルネ・アガルゴニッシュ：おでぶさん。経営チート。金の亡者さんなのです、と言われている。色んなところにコネを持つ。《ガルド侯爵の転落》事件を引き起こした張本人。あくまで《イスリッション》は子会社のイベント的な存在。

ベルディック・パラニティア：『フェールバード赫炎の戦斧』。赤み掛った橙色、主に赤い人、警護。パラニティア姉弟の姉の方。【陽光魔道】の使

い手。超ブラコン。境なんて見えてない。

グリニア・パラニティア：『幻影』。細身の丸眼鏡、司会者。パラニティア姉弟の弟の方。【変幻魔道】の使い手。ウルトラスコン。境なんて気にしない。

“用心棒”：強かつたらしい。ギルドランクB+。特徴は横一文字に走る傷。二人の戦奴隷を護衛として側に置いている。ロリコンの可能性大。

戦奴隷A：仮面かぶった超筋肉君（左）。用心棒の戦奴隷。円月刀装備。

戦奴隷B：仮面かぶった超筋肉君（右）。用心棒の戦奴隷。円月刀装備。

バルベルト・カツッチアーニー：スキンヘッド。おそらくは本編第2話目で一番輝いていた人。よく頑張りました。

リュシカ王国：大陸の中央辺りに位置した小国。3つの大国に囲まれており、3国共に協定を結んでいる。奴隷制度導入国。

バーズルダイグ・グリッドバルム・ゲッテ・ライル・セルグリウツド：国王。

第1王子：豚さん、ブヒー。ダメが10回以上続かないと言い表せないほど駄目王子。国民から“馬鹿王子”と呼ばれている。

第1王女：No Data

第2王女：No Data

フェアブレア・ナツツイ・レッヒエンド：近衛師団隊長。アズスルーと知り合い。まともな神経してない。自分の命令を聞く兵士達が自分の命令で死んでいく事に快感を覚える人。無駄に殺すので

はなく、ちゃんと働かせるのが重要らしい。マジキチ。

海原海斗：スキル【転移術】の使い手。黒髪黒目の異世界人。4人いる副隊長の内の1人。

烏丸清人：スキル【魔力介入】の使い手。茶色が混じる黒髪、充血した目の異世界人。4人いる副隊長の内の1人。

ルクス・ハマーティア：男爵家の騎士団隊長。蛇竜ゲルアトウルに突っ込んでいただきますされました。

ウリアネール・ツエル・エスナスティンク：侯爵家令嬢。癩癩持ちの我俣娘。ヒステリックなので癩癩持ちのコンボがヒドイ。そこそこ美人。

アズスルー・ダン・ガズドウロノフ：侯爵家のお嬢様の御付き。『旋風エアロ・フォーマーの纏人』。特徴は紅いマントを肩につけてる銀の鎧。ドウS。多分両刃。あと足フェチ。

### 《New!!》

モルル山脈：都市タロツソルの北側にある、帝国との境界線の役割を兼ねている。ワイバーンロックタイラントや岩石巨人等のモンスターや山脈の麓に広がる森を住処にしているゴブリンやオーガ、オーク等のモンスター達が、種族ごとに分かれて大量に住んでいる。

### 《New!!》

ギルド：A、B、C、D、E、F、G、にそれぞれ+の位がついて14のランクに区別される。

一番多いランクはD+。Cランク以下の+は次のランクの昇格資格を得た者達。B以上の+は別格ですよ、とギルドの冒険者内の常識となっていたり。

冒険者：『ギルド』に加入している人々。

【灼熱の息吹】：Dクラス。4人組のパーティ。結成してから2年が経つ。

ラック・スミルソウ：リーダー。18歳。未来のエルナの夫（確定）。

エルナ：魔術師。17歳。未来のラックの妻（確定）。

バリー：神官系、かな。18歳。既に結婚している。

デリテュード：前衛。18歳。ちよつと馬鹿。

今の所その他に入る者たち：現在分類不可。設定が出てきたら分類される。

歌姫：No Data 清人が言うには金髪らしい。

巫女姫：No Data

闇の巫女：No Data 清人が言うには黒髪らしい。

## 分かりにくい用語集

《ファンタジア》：物語の舞台。ハルアキが暮らしていた地球とは違う別の世界。世界地図は未だ出来てないが、大陸の地図はそこそこ正確に出来ている。大陸は少し縦より横に長い。

《異界大戦》：《大戦》とか呼ばれている。長きに渡る二つの領土、通称【人間界】と【魔界】を賭けた世界戦争。

人間勢の新たな戦力“異世界人”の前に敗れ、《大戦》はアルラ歴704年に、【人間界】の勝利に終わる。

“激戦地”：大陸の【人間界】と【魔界】の境界線。戦争当初はそこにあつた国が莫大な被害を受けた。

【人間界】：昔は大陸の東側だった。

【魔界】：昔は大陸の西側だった。

“人間族”：《ファンタジア》に暮らしている人々の大多数の『分類/カテゴリ』がこれ。

“魔族”：《ファンタジア》に暮らしている亜人とか獣人達の大多数の『分類/カテゴリ』がこれ。

“異世界人”：ハルアキの様な《ファンタジア》とは違う世界から召喚された人達の『分類/カテゴリ』。【スキル】が使える。

《ルヴィクエスの丘》：大陸中に知られている長有名な御伽噺そ

の1。弧高の英雄のお話。

《イエングルダルティアの魔法使い》：大陸中に知られている長  
有名な御伽噺その2。狂ってしまった伝説の魔法使いのお話。

### その他知識

《New!!》

貨幣価値：全部で7種類。

100000錫貨≡10000銅貨≡100銀貨≡10金貨≡1  
白金貨。

銅貨には銅板、銀貨には銀板があります。

1錫貨：日本円にして10円。あんまり使われない。あんま本編  
で出番無い。

1銅貨：日本円にして約100円。（細かく言えば99.8円）

1銅板：日本円にして1000円。10銅貨≡1銅板。

1銀貨：日本円にして10000円。

1銀板：日本円にして50000円。5銀貨≡1銀貨。

1金貨：日本円にして100000円。

1白金貨：日本円にして1000000円。

基本的に物の値段は1銅貨から。錫貨単位での商品はあんまり無  
い、だって面倒なもの。

パンとかが1個1から2銅貨。錫貨で20枚払うと嫌がられます。  
1000円のを1円玉100枚で買うのと同じぐらい嫌がられま



す。

100万越えたとしても支払いは金貨が主流です。白金貨とか殆ど流通してません。錫貨が二番目に流通してません。

お金に関してはこんな感じで大丈夫かな？

というか400KB近く書いていまだ貨幣価値とかの詳細書いてないってこの小説……………。

## 魔道一覽

【嵐風魔道】。

時に春風、時には嵐。

それは気まぐれ一つで姿を変えて、強き意思にて形を変える。時に刃に、時には槌に。

嵐と共にする彼等は、その嵐の目と成ろう。

《New!!》

【爆炎魔道】。

油に焰。鉄に水。

甘い香りに囲まれて、貴方は蒼い火を灯す。

巻き上がる烟。弾け飛ぶ軀。

貴方はランプの灯し人。

## ハルアキ君の【迷宮】質問コーナー

2011年10月7日 開校しました。

わかんないとか疑問とかあったら感想欄にでもどうぞ！。

Q 迷宮はどれくらいの広さがあるの？

A 第1階層から第10階層までがだいたい東京ビックサイト2つ程（仮）です。そこから10階層毎に面積が広がっていきます。無理あると言われたら変更するかもしれませんが。

Q 1階層を攻略するのにどれくらい時間がかかりますか？

A 徒歩で最短距離（図の部分）を行くのであれば、大体20〜30分で次の階層には行き着きます。

【迷宮層】の構造は物凄いアバウトに言えば長方形の形（下図）になっています。階段は1階層につき1〜3つ。但しどれも行き着く先は同じだし、内部構造はアホみたいに違います。森の階層から石造りになったりとかします。

階段

階段

迷宮

階段

入口

Q 明かりとかどうなってるん？

A 閑話01で書いてある通り【住居層】は地下なのに昼と夜が

訪れます。

但し【迷宮層】は常時明かりが照らされっぱなし。高級品である腕時計とかを持ってこないと現在時刻が分かりません。

【迷宮層】が暗くなった時？その時は諦めましょう。

Q 『モンスターとかその辺、どうなっていますか？』

A 『そのほとんどが、自分の強さに合った階層に住み着きます。弱いと上層部に、強いと下層部に。但し、『ユニークモンスター』や『オンリーモンスター』等の例外も存在しますので、気を付けましょう。』

Q 『なんで迷宮内にいるモンスターは『原石』がでるの？』

A 『秘密です。とはいえずぐに分かりますが。』

Q 『『ユニークモンスター』に勝てません。』

A 『諦めてください、と言いたいところですが、何体かのユニークモンスターはやりようによっては勝てる存在がいます。』

故にそのモンスターがどのような特徴を持っているかを調べ、対策を練って戦いに挑みましょう。』

Q 『『オンリーモンスター』に勝てません。』

A 『諦めてください。』



## 蹂躪「02」(上) (前書き)

重要！！！

ここから先は、漫画で言う単行本派の人は読まないください。

また、雑誌派のように一週間分ずつ読んじゃうんだぜ！ という方はどうぞ。

要はこちらでは区切りのいいところで小出しにしていくということです。一話にまとめると20000越えとか普通になる予定なので。

この方法が不評だったらどうぞ遠慮なく仰ってください。すぐに止めますです。

絶望。

絶望とはなんだろうか。

それは、望みや期待が全く絶たれることだ。

それは、『死にいたる病』と著されたものだ。

それは、ある不在の善を獲得し、或いは現存する悪を排除する可能性が全くなくなった場合の精神状態だ。

このように示されている絶望とは、必ずしも不幸とは等号関係に当て嵌るとは限らない。

それは音楽家を目指す者が耳を失うことだ。

それは画家を目指す者が視力を失うことだ。

それは騎士を目指す者が両腕を失うことだ。

それは自身が最も愛する異性を失うことだ。

それは己の夢が叶えられないと悟ることだ。

それは絶対の自信が簡単に覆されることだ。

絶望とは、赤の他人にとっては“なんだ、そんな程度か”、と言

われてしまうものだ。

しかしそれは本人にとって、正に死を与えられる様な 否、もしくは死んだ方がましだと思えるものなのである。

そんなものこっちが知る訳ない、分かる訳がない、と誰かは言うだろう。

そう、そうなのだ。

そんなもの、同じ立場にいないければ分かる筈が無い。理解出来る筈が無い。

肯定しよう、それはそうだと肯定しよう。

きつと誰かは言うだろう、“お前より不幸な人はもつといる”。

肯定しよう、その通りだと肯定しよう。

だって知っているからだ。

だって分かっているからだ。

だって比べられてしまうものだからだ。

されど、きつと誰も言わないだろう、“お前より絶望してる人はもつといる”。

そうだ、それはそうだ。

だって誰もその絶望を、分かれる筈が無いのだから。

だって分からないんだから。

だって理解できる筈が無いんだから。

分からないものは、比べない。当たり前前の事だ。

だから、だからこれから語られるのは きっと誰にも理解されない、一人の絶望の話である。

どうしてみんな、死んじゃうの？

少女は独り、言いました。

リュシカ王国南部、トリユーシャ平原。

そこに突如出現した【迷宮】へと至る門の周囲には、リュシカ王国迷宮探索軍の内、約二千人と、近衛師団三百名が各自の天幕を張っていた。

門を囲むように張られた天幕は、地に立てた四本の支柱の上に、覆いを置いたという簡素なもの。大体三、四メートル程の高さの天幕が十程度トリユーシャ平原には張られており、自身の属する軍がいる天幕の周りで、兵士達はモンスターが近付いてこないかどうかとはいえこの周辺にはモンスター等は住んでいないのだが

多少の警戒をしながら、先に入っていた王国軍の報告を待っている。

そしてその中に、一際目立つ天幕があった。

支柱は四本ではなく倍の八本を使い、飾り気のない他の天幕の覆いとは違い、赤や黄色等の派手な彩色に染めた糸で刺繍がされている。入口には全身を鎧に包んだ二人の兵士が立ち塞がるように直立しており、片手に持った彼等の体格を隠せる程の巨大な盾は、その警備の嚴重さを物語る。

高さや広さ、全てが一回り程大きいその天幕は、リュシカ王国王族がための天幕だ。

中にはリュシカ王国第一にして唯一の王子の他に、近衛師団隊長であるフェアブレア・ナツツイ・レツヒエンド、烏丸清人、海原海斗と他二人を合わせた近衛師団副隊長と幾名かの近衛師団、地上にいる部隊の隊長、副隊長、参謀等達。そして王子直属の護衛達に



王子が己の周りに侍らせている六人の奴隷である。

リュシカ国第一王子は天幕の中で更に分けられた自室に籠っており、侍らせている六人の奴隷もその中に。フェアブレア達はその手前の部屋に集まり、各々が椅子に座ったり、雑談したりと比較的自由に時間を過していた。

「あー、くっそー……早くダンジョン行きてえよー」

椅子に座り太股に肘を寄せ、その手に顎をやりながら貧乏揺すりをしているのは、リュシカ王国に属する異世界人が一人、烏丸清人である。

口を尖らせながら愚痴る彼を、隣接した椅子に座る海斗がなだめる。

「落ち着け清人。焦っても何も変わんねえぞ」

「分かってるけどさあ……………」

むぐうー、と子供のように頬を膨らませる清人を見ながら、清人は片手に持つコップに注がれた水を飲む。

「…………ふはあ。まあ、早く行きたいという、その気持ちは分からんでもないけどな」

「だよなあ、なんでフェアブレアはこんな命令聞いたんだよ…………」

はああ、と大きいため息を吐いて、清人は恨めしそうに部屋の奥の方に座り、本を片手に部下に入れさせたティーノ　清人と海斗の認識では珈琲　を優々と飲んでいるフェアブレアを見た。

彼等が何故迷宮にもぐっていないかというと、単純明快　第一

王子の護衛役に就いているからだ。

勿論、既に王子の護衛役は別にあるのだが、万が一という事もある。故にその対策として近衛師団を王族の側に付けさせる。

そのような趣きの意見が王国軍の方から出て、それをフェアブリアが受諾したのであった。

フェアブリアが受諾したものは、迷宮に出撃する前に開いた会議の時状況から見れば、ただ近衛師団を王国軍から遠ざけたいがための意見だったとしか思えない。

それはつまり、迷宮の功績を全て王国軍の方が奪うという事で。そうなれば王国軍は自分達の手柄を棚にあげて、近衛師団は何もしていない、何も出来ていない等と風潮し、近衛師団の地位を下げようという流れになるのは明白であった。

故に何故そんなものを受けたのか、清人には分かりかねなかったのである。  
しかし。

まあ、大体想像はつくんだけど。

近衛師団に属する兵士に入れさせた水のお代わりを口にしながら、海斗は清人とは違い、己の上司であるフェアブリアの判断は間違っていないと考えている。

無論合っている確証はないし、海斗自身の考えが至らぬ所もあるが、承諾した目的は、恐らく当たっている筈である。

さりとて、これが清人に分かるかどうか。

何せ自分の望んだ答えでなければ耳を塞ぐ彼である。さてどうやって分らせるか、と考えて、まあ分かっても分からなくてもどちらでもいいか、と海斗は内心で一人ごちる。そして未だ貧乏揺すりをしてしながらぶつぶつと文句を垂らす清人に、彼は話し掛けた。

「なあ清人、フェアブレアは考えなしに『第一王子の護衛』（これ）を承諾したわけじゃないだろ、いい加減落ち着けて」  
「十分落ち着いてるよっ……………」というかまあそうだとは思っけどさあ、それとも何？ 海斗には分かんのか？」

少々語彙が荒い清人に、海斗は答える。

「……………まあ、自信は無いけど」  
「え、まじでっ？ 教えてプリーズ！」

がたり、と音をたてて椅子から半分ほど立ち上がり、海斗に詰め寄る清人。

その反応に海斗は気持程度に腰を引かせながら、簡潔に答えた。

「多分だけど、迷宮内部を知ることだと思っ」  
「へ？」  
「だから、内情視察だっ」

そう、内情視察。

迷宮の内部の情報を詳しく知ることだ。

しかし、その答えを聞いた清人は、納得がいかないようで、眉根を寄せて怪訝な表情をする。

「え、いやでもさっき斥候部隊から聞いてきたじゃん。迷宮の中のこと」

「斥候部隊からの情報は確かにそうだったけど、あれはむしろ確認部隊と言った方がいいだろ。門をくぐっても死にはしないっていう確認をするっつー役割を持った」

「んー……………まあ、なるほど。じゃあなんでフェアブレアは情報なんて集めてんのさ。どうせ行けば分かることなのに」

「……さあな、そこは自分で考えろ」

そう言い、海斗は口を閉じた。

これ以上清人に話しても、余り意味がないと思ったからだ。

勿論、とは言わないが、フェアブレアの迷宮に関する考えとその対応の意図は、海斗は幾つかは思い至っている。

恐らくはフェアブレアが、自分達 海斗と清人 が【迷宮】と称しているものが、本当に二人が認識している【迷宮】と同一のものと思っていないからである。

あの巨大な門に繋がっている先は、恐らくは自分達が認識している迷宮と大差ないはず、という考えはあり、だからこそ清人はここまで入るまでに警戒するフェアブレアが分からない、という思いになっってしまったている。

だがしかし、それは迷宮という概念を知っているからこそその認識だ。

清人や海斗のような“異世界人”が召喚されるこの世界。ファンタジア

そこには人間とは違う“魔族”という人型生命体や、俗に言うファンタジーな物語に属する生物、海斗や清人が居た世界では有り得ない概念である魔術等が蔓延る世界だったのだが、唯一目立つ要素がなかったとすれば、それはダンジョンの存在だ。

世界で初めて《ファンタジア》に現れたダンジョン、それがリュシカ王国の地に出現したという事は、海斗達が居た世界で言えば、自分が住んでいる土地に、異世界に繋がっているゲートが現れる事に等しい。故にフェアブレアのように慎重になるのは当たり前である。

その点で考えれば、清人や海斗の考えを見下しながらも信用というか自分達の都合のいい話しに解釈し、それを信じきっている貴族達の考えや行動が、如何に軽率だという事が分かり、そしてフ

エアブレアが王子の護衛という任務を受けた意図が見えてくる。

要は先に迷宮にもぐった彼等は当て馬だ。  
それも一万四千人という馬鹿気た数の。

彼等がドジを踏んでも良し、彼等が成功して成果をあげても良し。どちらにせよ、フェアブレアには迷宮の情報が入るのだから。海斗には、フェアブレアが情報を集めた後、どう行動するのかは分かっていないが、その前提までは分かっているのだから、清人と違って落ち着いているのである。

未だ眉を寄せて悩む清人を視界に収めながら、海斗は思う。  
ああ、清人は自分が強いと思っコイツているんだな、と。

今のやりとりからも十分察せられる程、清人は憶測というものをしていない。自身が強者だと確信しているからだ。確かに清人は強いだろう、だがしかし、その強さは頂点の分類に属する者達とは 自分達が下の部類に入る 一線を画している強さだ。

だからこそ、危うい。

海斗は思う、というよりも確信していると言っている。

何時か清人は何処かでミスを犯す。それも重大な、重要な所で。何せこちらの助言に耳を貸そうとしないのだ。これでは治せるものも治らないし、そもそも本人である清人が治す気どころか自覚すらない始末だ。海斗が何時か清人は失敗を起こすという考えに確信を持つのも頷けるだろう。

一度痛い目を見ないと何が悪かったのかすら分からない人物  
“異世界人” 烏丸清人には、それがぴたりと当て嵌る。

今回の迷宮探索でそれを学んでくれればいいが、と思う一方で、海斗は思う。

その失態が取り返しのつくものならばいいが、もしも、もしも取り返しのつかないような場合だったら、清人は恐らく。

「ま、そこまではいかないだろ」

海斗は思わずため息をつきながら、自身の考えを否定する。

顔に苦笑を浮かべた海斗の漏らした言葉に清人は律儀にも反応し、顔をあげる。

「？ 何が？」

「いや、何でもない。清人、ダンジョン内部で油断すんなよ。罠に引っ掛つたりとか」

「は、ないない、ありえないって。海斗こそどうなんだよ」

「……あー、そうだな、気を付けるよ。ま、俺はいざとなりや逃げるから」

「とか言っついてピンチになったら転移できませんでしたー、とか嘆きながら死にそうだな海斗」

「てめっ、言うじゃねーか。お前こそモンスターに」  
「そんなに俺は弱くないね。寧ろ海斗こそ」

清人と海斗は会話する。

清人は暇をまぎらわせる為に。

海斗は己の考えを覆ませる為に。

そう、ありえない。ありえる筈がない。

海斗と同じである異世界人の友達　烏丸清人が死ぬなんて事は、ありえていい筈がない。

異世界人である海斗は、心の奥底で揺らぐ事なく信じている事がある。

それは、自分が死なない、殺されないという事。

根拠なんてない、証拠なんてない。しかし海斗はそう信じている。

だって自分達はこの世界に召喚された重要人物　物語という名の人生の、主要人物なのだから。主要人物が死ぬ筈がない、死ぬ訳がない。

そう海斗は、考えていたのだ。

「カイト、キョト」

「ん？」

「あ、フェアブレア」

数分後、海斗と清人の会話の中に、フェアブレアの声が割って入る。

二人が後ろを向けば、フェアブレアが腕を組んで仁王立ちしており、その青く光る目で海斗と清人を見下ろしていた。

「王国軍に出していた部下から報告がきた。どうやら出番だそうだ、出るぞ」

「あいよ、了解」

「やっとか……ちなみに、どんな報告がきたのさ？」

出軍指令。

海斗は軽く会釈して椅子から立ち上がり、清人は矢張り気になるのかその答えを催促する。

腕を組み、はぁ、と息を溢すフェアブレアは二人が立ち上がるのを確認した後に踵を返し、天幕の奥へと歩いて行く。

そしてその振り向き際に。

「それは歩きながら話す。ついてこい」

フェアブレアはそう言った。

天幕の中を、異世界人である海斗と清人を引き連れながら、フェアブレアは先程の部下の言葉を掻い摘んで話し始めた。

その言葉に込められた感情は、どこか嬉しそうに聞こえる。

「　　どうやら、王国軍の上が失態を犯したみたいだな」

「へえ」

「失態？」

興味深そうに目を開く海斗と、迷宮の、しかも一階層如きで何かあったの、と眉をひそめて怪訝な表情になる清人。

フェアブレアは肩を震わせて、くっくつと笑いを押し殺したような声を漏らす。

「迷宮第一階層目　いや、まだ仮、だなこれは。まあいいが、一階層目は木々が生い茂っている場所だと斥候が言っていただろう？」

「ああ」

「言ってたね。で、それが？」

斥候部隊。先程海斗が確認部隊と称したそれだ。

フェアブレアを筆頭に、清人や海斗、他二名の近衛師団副隊長や分けた各々の参謀や軍隊長を合わせた彼等は、迷宮内部の情報と、どのようなモンスターが出てくるかの軽い調査の情報を、斥候部隊から聞いている。

その中の情報の一つが、迷宮内部の構造だ。

聞けば、天井は塞がっており、地下だと分かる其処には、まるで道を作るように木々が並んで生えていた、と。

その報告を聞いた彼等は皆、首を捻りながらそれは一体どうい



事だと到底信じられはしなかったのだが 例外として海斗や清人は元々ダンジョンとはそういうものだとして知っていたので、そこまで驚きはしていなかったが 斥候部隊の面々が同じ事を言うので、最終的に近衛師団や王国軍に受け入れられたその情報。

それが、一体なんだと言うのだろうか。

その疑問に刈られて、二人は相槌を打つ。

フェアブリアは海斗と清人の二人の前を歩いているので、その表情は伺えない。が、その声は確実に嘲笑を含んでいるものだった。

「 何、大した事ではない。どうにも森からモンスターはその森から出てくるらしくな、焼き払おうとしたらしい」

「……は？」

「え、ちょ、そんなのあり？」

フェアブリアの言葉に、海斗と清人は思わず呆けた声を漏らしてしまう。

迷宮内部を焼く、それは確かに二人が考えなかった発想だ。一体そんな発想がどこから浮かんできたのか疑問に思うし、またそんな手段は狡いのではないか、という感情が沸き出てしまう。

無論、森を焼くという手段は、迷宮を攻略するにあたり、有効かもしれないものである。だがそれは、半ばダンジョンという概念を知識として知っている異世界人にとっては、なんとも言えない感情になってしまう。

この感情の例を表すとするならば、学校側から出された宿題等を、答えを見ずに悩みながら問題を解いていく横で、解答を見ながら優々と問題を終わらせる者を見る感覚に近いだろうか。無論前者が海斗と清人の方法で、後者が王国軍の方法である。

しかし、海斗と清人の二人がこのような感情を抱いてしまうのも、無理はないかもしれない。何故ならば彼等が知っている迷宮探索ゲ

ームの内容は、どれももぐっているダンジョンを破壊しながら進むなど出来はしなかったのだから。

そのゲームの中では、ダンジョンこそが全てであり、絶対だったのだから。

「ありもなにも、駄目な方法なんて存在するのか？」

清人の疑問の声を聞いたフェアブレアは、ちらと後ろに目をやり、その問いに答えた。

一体、どこが悪いというのか、そう語っている目である。

「ん、まあ、いやー……」

質問に質問で返された清人は、フェアブレアからの問いに口を濁す。

というのも、迷宮に群生している木々を燃やしてモンスター達を殺すという方法は確かに悪手だとは思えないからである。

迷宮第一階層は、聞く限りでは緑が生い茂っている森らしく、中に人間等は住んではないと踏んでいるし、煙とかの問題も、天井が高いと聞いていたので、大丈夫だと思ったからだ。

何より換気機能がないと迷宮内部は酸欠状態になるだろうし。

返事に困り、しきりに頭を掻く清人。

そんな彼からの回答を聞くのを諦めたのか、フェアブレアは「何を感じたかは知らんが、まあいい。話を戻すが」と先程の話を続きを語り始めた。

「それが意外と燃え広がらなかったらしくてな、逆に隙だらけになった所を大型のモンスターの襲撃にあい、結構な被害を被ったそうだ」

静寂、三つの足音だけが周囲に響く。

一秒、二秒、……そしてたっぷり三秒後に、異世界人二人は彼の言葉の意味を汲み取った。

「はあ？」

「ど、どゆこと？」

森を焼いたら大型モンスターが出た？

そんなことは知らない、聞いたこともない。

海斗と清人は今漸く、自分達が挑もうとしているダンジョンが自身の想像しているものとは、少し違うということを実感する。

「……………あれかな、ダンジョン内に開いてる店の商品を金払わないで持ち出した時みたいだな」

暫くして唸るように清人が言ったそれは、彼等が元いた世界にあった迷宮探索ゲームによくあるルールの事だ。

迷宮探索ゲームには、主人公が潜る迷宮内に時たま様々なアイテム等売っている店というものが出現する。

迷宮内に出現するその店の商品は、マップ内に落ちているアイテムと同様に拾う事が可能であり、その商品を側にいるNPCに話し掛けて料金を支払う事で正式に取得出来るというものだ。

通常、ゲーム内では料金を払い、そのアイテムを買う、というのが一般的なルールであるのだが、このルールは迷宮内に出現する店では破ることが可能なのである。

その店の商品を拾った後、その代金を支払わないで出て行く要は持ち逃げ、万引きである。が可能という事なのだが、それを実行するとルール違反とみなされ、とある自称が発生するのだ。

それは例えば、店の店員が最強の敵としてプレイヤーに襲い掛かって来たり、続々と普通的手段では倒せないモンスターが沸き出できたりというものであり、近くに次の階層に進む階段等がなければ大抵は詰むというのが定番だ。

あながち間違いないかもしれない、清人の言葉を聞いてそう思った海斗は、異世界人ならでは　　というか異世界人じゃないと分からない　　ネタを口にする。

「ただじゃあおきませんツツ！！　て感じか。確かに的をいている様な気がする」

「え、何それ」

「何だと！？　清人お前知らないのか？！　ディアボロさんの大冒険エ……」

「いやだから誰それ」

「ば、バカな……」

まじかよ……、と呟きながら二三歩清人から離れる海斗。

そしてその反応にますます怪訝な表情になる清人が口を開こうとして。

「　　カイト、キョト、話はそこまでだ」

その動作を中断させられる。

海斗と清人の会話に再び割って入って来たのは、先と同じくフェアブレア。

いつもと変わらない口調だが、二人は敏感にその声に込められた苛立ちの感情に反応し、すぐに口を閉じる。フェアブレアの怒りは、身をもって知っているからだ。

ふう、と軽くため息をついた声が、二人の前を歩く人物から聞こえ、すぐにフェアブレアは落ち着いた声で話を始めた。

「ここからが本題なんだがな、どうも森から地上に出てくるモンスターの駆除を近衛師団に頼む予定だったらしい。が、さっき言ったようにモンスターの反撃で被害を被って、それどころじゃないそうだ」

「なんだそりゃ、他力本願もいいとこだな」

王国軍の考えに、思わず清人は文句を垂らす。

近衛師団に所属する騎士だって、海斗含めた異世界人だって人間なのだ。それをあたかも贖のように扱うと知れば、当然の反応だろう。

だが、海斗はそれについては何も言わなかった。清人と同じように、ふざけるな、という感情が沸いたが、先程自身が至った先に出撃した一万四千人を当て馬にするというフェアブレアの考え、果たしてそれは近衛師団にモンスターの退治を頼む事と何が違うのかと思ったからだ。

だから海斗は口元まで出ていた文句を飲み込んで、代わりに別の言葉を口にする。

「フェアブレア、モンスターが被害を出しているって言うけど、それでも何人かは地上に逃げてきたんだろ？ ならなんで援軍に行かない……………いや、もしかして行けないのか？」

「その通りだ」

フェアブレアは海斗の言葉を肯定する。

やっぱりか、と一人頷く海斗の隣で、その意味が分からなくて置いていかれる清人。

え、え、と戸惑い始めた彼に、二人はすぐに理由を語る。

「要点だけ言えば、貴族達は私達に助けを求めたくない、という事だキョト」

「え？ でもさっきはオレ達に頼むって」

「それは王国軍組が倒せるモンスターの場合で、今は違う」

「……………どゆこと？」

「カイト、頼む」

「あいよ つまりだ清人。例えばの話だが、一足す一は？」

「……………二だけど」

「じゃあ二足す三は？」

「五、それがどうかしたのか？」

このやりとりは何の意味があるのか、そう思いながら清人は海斗に怪訝な表情を向ける。

海斗は手をひらひらと扇ぐように振り、じゃあ、と言葉を続ける。

「じゃあだ清人、今みたいな問題を一万題一日で解け、とか言われたらどうする？ ちなみに拒否は不可能で、強制な」

「何それ、めんどくさっ。……………それ一人でやんなきゃダメなのか？」

「いや、他の人に頼むのもありだ」

「え、ありなの？ それじゃあ、誰かにやらせるかな」

意外な返事を聞いて、すぐに清人は即答した。

自分が解かなくてもいいなら誰だってそうするだろう、当然の結論の帰結である。

そして、清人の考えは望み通りのものだったのだろう。海斗はにやり、と意地の悪い笑みを顔に浮かべる。

「それじゃあだ清人」

「？」

「お前がどーしても解けない問題に直面した時、どんな行動をとる？」

「それも他人に解いてもらえるんだろ？ だったら教えて貰うなりなんなりするかなあ」

「その頼む奴が、ウザくて嫌味つたらしい 例えはお前が嫌いな貴族の様な奴でもか？」

「それは……………」

頼みたく、ないような。

清人は海斗の返事に詰まる。頼む者が貴族の様な人物である、と言うことならば話が変わってくるからだ。

異世界人である清人は、貴族の事が全体的に嫌いである。

それは小説から受けた影響が大きく占めており、更にはその小説に出てきたような典型的な嫌な貴族が彼の周囲にいた事、貴族に嫌味やら何やらを言われた事等が、清人の貴族嫌いを後押しし、今では貴族というだけでその人物に対して負の感情を抱ける程だ。

誰にでも解けて当たり前である簡単な問題を大量に解かせるではなく、自分も解けないような難しい問題を誰かに教えて貰う。そんなことを奴らに頼むというのは、弱味とも言えない弱味を掴まれる事と同義であり、嫌味を言われる事が受け合いである。

そしてなにより清人自身の矜プライド侍が、その行動を否定する。

あんな奴らに頼むくらいなら、自分自身で何とかする。

そこまで考えた時、清人は「あ」と呟いた。

つまり、その問題が。

「……………つまりあっち側のプライドの問題？」

「そーいうこと。だろ、フェアブレア」

「うむ、間違っではないいな。あとはまあ、被害を被っている状況

で近衛師団（私たち）に指令を出すのは助けを求めるのと同義と言  
い始めた奴がいるらしく、他の貴族達も意個地になって援軍を要請  
しようとしていない……というのが部下からの報告だ」

「なんだそれ。弱けりや逃げればいいのに、ザコらしく」

「だからそれを貴族達のプライドが許さないんだって。だけどそれ  
でも出撃するってフェアブレア、何かあったの？」

「ふむ、まあ貴族だと援軍を要請するのが手遅れになるからその前  
に来て欲しい、という部下からの報告があつてな。流石に動かなか  
れば不味いだろう？」

「成程」

というよりも、そこまでまずい状況なのか。

海斗はフェアブレアの返事に納得しつつもその後ろ側にある意味  
を察し、額に冷や汗が浮き始めた。

しかし、そんなことを気にするよりも前に、近衛師団には一つ、  
大きな壁があつた。

そして考えるように口に手を当てていた海斗が、その問題点を指  
摘する。

「でもよ、迷宮に行けんの？ だって俺等、今あの王子の護衛やつ  
てんじゃない」

そう、幾等近衛師団が王国軍の救出を目的に出撃しても、『王子  
の護衛』という任務の内容から大きく破る事となる。

そうなれば、矢張り貴族達に批判、糾弾される絶好の口実を与え  
てしまう事となり、何かしらの罰則は免れられないだろう。

このリュシカ王国がもつと仁情溢れる国だったならそんな心配は  
余りしなくともよいかもよくなかったが、残念ながらこの国はそう  
ではないのだ。だからこそ海斗はその事を心配したのだ。



しかしフェアブレアはその問題に対し、別段狼狽えることなく断言する。

「なに、問題ない」

「へえ、どうすんのさ」

「ふふ、簡単な事だ」

疑問を放つ海斗に、フェアブレアはにやりと笑い、足を止めた。着いたそこには布で簡易に仕切られた部屋の入口があり、なんとも言えない匂いが漏れ出している。

リュシカ王国が王族の為に張られたこの天幕、ならば当然特別な部屋にいる人物は。

「その問題を打破するためにこそ、ここに王子様がいるのだろ  
う?。」

リュシカ王国が第一王子、その人物がいる部屋の中に、フェアブレア達は足を一歩、踏み出した。

蹂躪「02」(上) (後書き)

はじめの絶望云々は軽く流して頂いてかまいません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6042x/>

---

迷宮経営マッチポンプ!!

2011年10月20日08時04分発行